

ビルド&プリキユア ～俺と私が創る未来～

菜轟@前サルン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

エボルトを倒した後、新世界で目を覚ました戦兎…。しかし、そこは以前の世界の要素が全くない異世界だった!?しかも、目の前には倒れている自分を心配する女の子“朝日奈みらい”がいた。

その出会いから桐生戦兎と朝日奈みらいの未来を創る物語が幕を開けるのだった…

← 第1話

<https://syosetu.org/novel/171950/1.html>

← 最新話

<https://syosetu.org/novel/171950/89.html>

→ 更新日は作者の都合・諸事情により変わる場合があります

## 目次

### 中学生編

1.	運命的な出会い！ようこそナシマハウ界へ！	1
2.	町へ行こう！久しぶりのあの3人！	5
3.	ライバル対決!?はーちゃんVS万丈の3番勝負！	8
4.	ワクワクもんだあ！桐生戦兔初登校！	12
5.	2人で遊園地！みらいと戦兔の初デート!?	18
6.	魔法界へGO！ハロウィンパーティの準備！	23
7.	ハッピーハロウィン！みらいが作る特別なスイーツ！	28
8.	テスト前勉強！戦兔とみらいの勉強会！	32
9.	遂にテスト！みらいの努力よ実れ！	35
10.	紅に染まる京都！ワクワクの旅！〜出発編〜	40
11.	紅に染まる京都！ワクワクの旅！〜1日目編〜	44
12.	紅に染まる京都！ワクワクの旅！〜2日目編〜	49
13.	紅に染まる京都！ワクワクの旅！〜最終日編〜	53
14.	リコの誕生日！皆からの最高のプレゼント！	57
15.	皆を守る為の覚悟!?戦兔が思う正義のヒーロー！	62
16.	私達がやらなきゃ誰がやる?3人の決断！	68
17.	冬が来た！クリスマスの準備！	74
18.	正義のヒーローの復活！	79
19.	繋がる想い！最ツ高のクリスマス！	85
20.	ビルドが創る新年（ニューイヤー）	91
21.	初夢の世界!?永夢とはるか現る！	96
22.	迫り来る混沌！オルーバとの戦い！	100
23.	Be The One!2人はベストマッチ!!	106

24. 未来（あした）を創る為の代償 | 113

高校生編く破壊と創造く

25. 再び始まる伝説！3人の新たなる旅路！！ | 118

26. 戦兎はどこへ…？ハーフボイルド探偵大奮闘！！ | 124

27. 破壊者を倒せ！天才と探偵はベストマッチ！ | 128

28. ワクワクのバレンタイン！俺と私の思い出！ | 133

29. 黄金のソルジャーと西のファントム！ | 136

30. 世界平和に向かってスキヤニングチャージ！ | 141

31. 宇宙キター！！潜入、仮面ライダー部！ | 149

32. 決意のベストマッチ | 154

33. 久しぶりの魔法界！ドーナツ好きの魔法使い！！ | 161

34. 世界を救う天才は希望か？絶望か？ | 166

35. 天才のオンステージ | 169

36. アナタと私が創る未来へ繋がる新たな風 | 173

37. 闇夜の月と十六夜の月 | 177

38. 月と太陽の指す地点 | 180

39. 筋肉細胞トップギア！？万丈とことはの冒険！ | 183

40. Best Match&Start Your Engine!  
| 187

41. 託されたホープ | 191

42. ワクワク！みらいの誕生日！ | 196

43. 新たなる鰐（ローグ）の目醒め | 200

44. 破壊神、降臨 | 206

45. 2人との再会 | 212

46. 月と太陽の真実 | 217

47.	世界の救世主 ハイラントビルド!	223
48.	ゲームの終盤	228
49.	決戦! デイクイドエボルVSビルド&プリキュア	233
50.	レンズ越しに写る黄昏の瞳	237
51.	Eternal creation	241
52.	紅炎のスピリット	245
53.	明日の空	249
	エピソード: ダーク	
	ダーククローズ編	255
	???編	259
	Cross World (大学生) 編: 第1章 エピソード オブ	
	モフルンく願いの石の輝きく	
54.	十六夜に煌めくベストマッチ	263
55.	クマタの贖罪	268
56.	俺はシャドウ	271
57.	オルテガの脅威	275
58.	シャドウの時間は終わらない	278
59.	俺と私の場所	283
60.	シャドウは攻め続ける	287
61.	非道のシャドウ	292
62.	奇跡の変身、再び!	296
63.	皆と共に	300
64.	始まりの終わり	304
	Cross World (大学生) 編: 第2章 月輪 (がちりん) の	
	龍 (クローズ)	

65.	俺たちのスタートライン	308
66.	悪の龍	312
67.	迫りくるアサシン	316
68.	対をなす龍	319
69.	月蝕と邪龍	325
70.	朝月夜(あさづくよ)の魔法つかい	330
71.	嫉妬から生まれし鬼石(きせき)	333
72.	世界のターニングポイント	338
73.	もう一つの物語を求める者	341
74.	黒龍、ここに極まれり	344
75.	龍の戦いゝ始	348
76.	龍の戦いゝ中	351
77.	龍の戦いゝ終	354
78.	月輪の龍(がちりん クローズ)	359
C r o s s   W o r l d (大学生) 編: 第3章   G R E A S E   R O		
G U E   &   F e l i c e		
79.	先の運命は分岐する	364
80.	消えた思い出のカケラは黒炎を滾らせる	368
81.	多岐する運命	371
82.	ミラクルは止まらない	377
83.	近くなる、遠くなる	385
84.	運命の分岐点(ターニングポイント) part1	391
85.	運命の分岐点(ターニングポイント) part2	398
86.	俺と私の未来	402
87.	ことはが手にした力 part1	407

## 中学生編

### 1. 運命的な出会い！ようこそナシマホウ界へ！

小鳥達のさえずりが聞こえる中、俺は目を覚ました。地に下顎をつけて目だけを動かして辺りに視線を向けてみる。どうやらここはどこかの芝生広場のようだ。

「あの…大丈夫ですか？」

暫く芝生の上でうつ伏せの状態でいたせいか、自分を心配する声が聞こえてきた。声は自分のすぐ上側から聞こえ、俺が首を持ち上げて顔を声のする方へ向けてみるとそこには濃い金髪のショートロングヘアの女の子がいた。

女の子は俺に手を差し伸べた。だが、俺は女の子の手を借りず自力で立ち上がり、改めて周辺を見渡してみた。

「スカイウォールがなくなってる…」

「スカイウォールって？」

俺がそう小声で呟くと、女の子は俺の言った”スカイウォール”という言葉不思議に思ったのかスカイウォールが何なのかを俺に聞いてきた。この世界は自分自身が創り上げたスカイウォールのない新世界なのでスカイウォールのことを聞いて首を傾げるのは当然の事だと思っていた。

「…じゃあ、俺はこの辺で」

「あっ、ちよつと!!」

女の子は先程まで倒れていた俺がまだ心配なのか俺に待つように言うが、俺は自分の父が望んだ平和な世界になっているかどうかを知る為に女の子を無視して街の方へ歩いていく。

町へ向かう道中、前の世界では見かけなかったMofuMofuBakeryという移動販売車があった。そこには”いちごメロンパン”というピンク色のメロンパンが売っていた。食欲をそえられる美味しそうな食べ物だったが無一文な俺には買えずただ見ていることしか出来なかった。

「はあ…腹減ったなあ」

エボルトとの戦いの前から今に至るまで何も食べていなかった俺は空腹だった。そんな空腹な俺が言いながら店の前を少し過ぎた時、誰かが俺の目の前にいちごメロンパンを差し出してきた。

空腹だった俺は遠慮をせずに取りあげようと軽く会釈しながらいちごメロンパンを受け取るといちごメロンパンを俺に差し出してきた人が微笑しながら俺のメロンパンに食いつく姿を見ていた。

俺は視線を斜め下60°に下げるとそこには先程、俺を心配していた女の子がいた。俺は鬱陶しいなと思いつつも空腹だった俺にいちごメロンパンをくれてありがとうという事を笑顔で浮かべて女の子に伝える。俺の笑顔を見て安心したのか女の子も笑顔で浮かべていた。腹も少し満たされたところで俺は再び町へ歩きだしていった。だが俺は町名が書いてある標識を見て驚いた。

「津成木町!?そんな町あったかな?」

俺が津成木町があったかどうかを思い出す為に頭を回転させていると後方から悲鳴が聞こえてきた。まさか…と思いつつも後ろを振り向くと女性が持つような黒い鞆を抱えて自分の横を走り去っていく男がいた。ひったくりだと思いついて追いかけていく。ひったくり犯を追いかけて走っている途中、空に何かの気配を感じてみるとそこには先程の女の子がほうきに乗ってひったくり犯を追いかけていた。俺はえっ!と目を見開いて驚いた。

ほうきに乗った女の子は俺よりも早くひったくり犯の元へ着き、鞆を取り返そうとするが相手が男のせいで力負けをし、逆に捕らえられてしまった。

「女の子を離せ!ロリコンひったくり犯!!」

「ロリコンって言うな!」

「…ひったくり犯ってのは認めるのね」

「ええい、こうなったら…!」

ひったくり犯の男は刃渡り5cmのナイフを服のポケットから取り出し、女の子の首元に当てる。女の子は半泣きしながら俺の方を見つめていた。俺はホークガトリングガンを右手に持ち、男の持つナイ



フにしつかり狙いを定めてトリガーを引いた。

弾はナイフの刃に当たり、男の持つていたナイフが吹っ飛んでいく。男に隙ができた間に俺は男に逮捕術というよく警察官が犯人を拘束するときとかに用いるような技を使い、犯人を抑えて鞆を取り返し、女の子の手を引きながらその場から離れていき、持ち主に鞆を返した。女の子は鞆の持ち主が去っていくのを見送った後、怖かったのを我慢していたのか泣きながら俺に抱きついてきた。

「(まずい……ここで抱きしめ返すと天才物理学者が変態物理学者になつてしまう！考えろ……考えろ桐生戦兎！)」

俺はそんな変な考えを持っていたが女の子の身になって考えてみるとナイフを首元に当てられるのは確かに怖い場面だったと思い、俺は女の子によく我慢したなど言いながら抱きしめ返してあげた。

しばらく抱きしめてあげた後、俺はこの女の子ならこの町について何か知っていると思い、町を案内してもらうためにまず名前を聞いてみた。

「君の名前は？」

「私、朝日奈みらい！中学2年生！」

「ちゅ、中学2年だと……!?さつきは勝手に抱きしめて悪かった！だから、俺を強制わいせつ罪で訴えないでくれ！」

「私、抱きしめてもらえて怖い気持ちもすっかりなくなつた！さつきの姿素敵でしたよ……／＼／＼」

みらいは頬を赤く染めてモジモジしながらそう言う。俺はその顔を見てこれは訴えられずに済むと思ひ、安堵の息をついた。しかし、俺にはまだ問題があった。それは、住む場所であった。前の世界では *nascita* に住ませてもらっていたがこの世界の津成木町という聞いたことのない町には当然、住む場所なんてある訳がない。住む場所を探す為にみらいにじやあなと言ひ、その場を離れようとしたその時、みらいが俺の左腕を掴んだ。

「ねえ！私の家に来てよ！」

「なんで？」

「お礼がしたいの！」

そう言われて俺はみらいに腕を引かれながら朝日奈家へ向かっていくのだった。

朝日奈家へつくともみらいは早速、自分の両親を俺の元呼んで俺の事を自分を助けてくれた恩人と紹介した。両親は俺に娘を助けてくれてありがとうと言った後、俺に家に上がるよう指示した。俺はお邪魔しますと言ってから家の中へ入っていく。家の中に入り、リビングに入るとそこには髪型が紫色のロングヘアで前髪はぱつっんの女の子と薄い桃色のロングヘアをした女の子がいた。

「あら、そちらの方は誰かしら？」

「この人は私の命の恩人の…誰だっけ？」

まだみらいに名前を教えていなかった為、みらいは俺の名前を言うことが出来なかった。

「俺の名前は桐生戦兎！天才物理学者だ！」

「天才物理学者って事は物凄く頭がいいのか！戦兎君が僕の家に住ってくればみらいの数学の成績も上がるんだろうなあ！」

「その、家についてなんです俺、帰る場所がなくて…」

「なら、しばらくの間、私の家に居候すれば？」

俺が帰る場所がないとみらいの父親に告げるとみらいが家に居候すれば？と俺に提案した。お父さんや他の皆もみらいの意見に賛成し、居候する事を勧めてきた。俺はお願いしますとみらいの両親に伝え、朝日奈家に居候する事になった。

俺が居候する事になってまもなく、みらいは俺を自分の部屋へ誘い、数学の問題集を取り出して俺に渡してきた。

「戦兎くん！ここ教えてよ！」

「はあ…あのなあ、これは自分で…」

俺は自力で解かせる為にみらいの頼みを断ろうとしたが俺を見つめるみらいのつぶらな瞳に負け、教える事にした。新世界と思いきやここは異世界。俺のこれから先の未来はどうなっていく事やら…

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 2. 町へ行こう！久しぶりのあの3人！

翌朝、目を覚ますと目の前に机の上で寝ているみらいの姿が目に入る。どうやら、俺とみらいは昨日の数学の勉強をしている途中、寝てしまったようだ。だが、机に置いてある問題集にはフニャフニャな筆記体だが全ての問題に答えが書かれていた。きっと、睡魔が襲う中、頑張つて問題集に答えを書いていたのだろう。

「…やれば出来るじゃん」

俺は小声で寝ているみらいに向かってそう言いながらみらいの頭を優しくさすつてあげた。頭をさすられたみらいは口元を綻ばせて笑みを浮かべていた。みらいの寝顔という眼福な場面を見れた俺は不思議と少し心が和んだ。

もう少し眺めていたかったが時計に目をやると時刻は7時30分。そろそろみらいを起こさなければならぬと思い、俺はみらいの肩を軽く揺すつて起こす。

「ふああ…」

俺に肩を揺すられたみらいは両目を擦りながら大きなあくびをする。そして、寝ぼけた顔をしながらゆっくりと壁掛け時計に目をやる。壁掛け時計を見た瞬間、みらいはハツとなり慌てて身支度を始めた。俺はみらいを手伝おうとクローゼットを開けて学生服をみらいに渡していく。

「戦兎くん…それ、私の下着…／＼／」

俺は顔を赤らめながらそう言うみらいに疑問を持ちながら自分が左手に持っている物に目をやるとそれはみらいのパンツだった。

「……うわあ!？」

「フフツ、戦兎くんはエッチなんだね…／＼／」

「いやいやいや！これは故意じゃなくて過失だから！」

俺はみらいに言われた事を必死に否定した。俺からの返答を聞いたみらいはクスッと軽く笑った。どうやら、俺をからかっていたようだ。このまま俺がからかわれ過ぎるとみらいがからかい上手の○○さんになってしまうと思い、俺は早くしないと登校時間に遅れるぞと

言って話を戻した。

10分後、リコとことはがみらいの部屋の入り口で待っている中、みらいはようやく身支度が終わり、2人と共に学校へ向かっていった。

3人を見送った俺はこの町に何かがあるかを把握する為に家朝日奈から出て町の中心部の方へ歩いていく。

歩き始めてから15分後、様々な店が立ち並ぶ道路沿いの通りを歩いているとnascitaという看板が目に入った。俺はもしかしたら：と少し期待しながら店の中へ入っていく。すると、そこには石動惣一と

石動美空がいた。だが、左胸あたりについている名札には全然違う名前が書かれていた。どうやら、そっくりさんのようだ。

「いらっしやいませ！何にしますか？」

「…コーヒーを一杯くれ」

俺はコーヒーを頼んだがコーヒーの味に不安を抱いていた。何故なら、前の世界で石動惣一が淹れていたコーヒーが不味かったからだ。

俺は渡されたコーヒーを恐る恐る飲んでいく。不味いかと思われたが味は前の世界と全然違って美味しかった。ここで俺はやはり、さすがは本物の石動惣一、地球外の奴が淹れるのとは違うなあと思っ

た。  
コーヒーを飲み終わった後、金を払い俺は店の外へ出る。すると、そこには見覚えのあるエビフライ頭の人物がいた。一瞬、またそっくりさんかと思っただがどうやら、その人物は本物のようだ。

「(万丈…！って待て！ここでビルドの主題歌を流すと感動的な再会みたいになり、戦万カップルとかいう変なフラグ立つから主題歌流すのだけはやめてくれ！)」

俺は誰かに向けてそう語りかけるが戦兎のその思いは届かず、辺りにビルドの主題歌が流れ始めた。

「戦兎！」

「変なフラグ立つからとつとどこか別の場所に行くぞ！」

変なフラグを立てられるのは嫌だと思い、万丈と共に朝日奈家へ向かった。戦兎と万丈の感動的な再会はただの再会となってしまった。

「あら、戦兎くん。その方は？」

「俺は万丈龍我だ!!」

「フフ：元気な方だねえ」

朝日奈家の入り口の近くにみらいの祖母である結希かの子がいた。結希かの子はその方は誰なのかと俺に聞くが、俺が返答するよりも早く万丈が自分の名前を結希かの子に言った。

「一つお願いがあるんですが…この筋肉バカも朝日奈家に居候させてもらえませんか？」

「私は良いわよ。家族が増えると賑やかになるからねえ…」

結希かの子の了承を得た万丈はありがとうございますとお礼を言ってから家の中へ入っていく。

そして、その夜、万丈は茶碗いっぱい盛られた白飯を誰よりも早く食べ、既に4杯もおかわりしていた。

「万丈、食い過ぎだぞ」

「そんなこと知らねえ！俺は美味しいものをただ食べまくってるだけだ！」

「はー！はーちゃんもエビフライみたいに沢山食べる！」

「誰がエビフライじゃ！」

ことはと万丈は食い争いをし、互いに白飯を7杯ぐらい食べたそうだ。2人の食いつぶりには俺も驚いた。

万丈が増えた事により、更に盛り上がりを増していく朝日奈家。明日はどんな事が待っているのだろうか…

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

### 3. ライバル対決!? はーちゃんVS万丈の3番勝負!

万丈が朝日奈家の一員に加わってから約1週間後の朝、花海ことはの部屋である屋根裏部屋からドタドタと2人が走り回る足音が聞こえてきた。少しは静かにしろと注意をする為に屋根裏部屋に繋がるハシゴを上っていくとそこには万丈とことはがいた。ことはは万丈に追いかけていた。どうせ、また万丈がことはにからかわれて激昂し、ことはを追いかけているのだろう。

「おーい、筋肉バカとことは、朝っぱらからうるさいぞ!」

「だってこの脳内お花畑野郎がわざわざ地下の俺の部屋まで来て耳元でエビフライ、エビフライ言いまくるんだもん!」

「脳内お花畑はあなたでしょ? あつ、違った脳内エビフライだったねー!」

「んだと、この野郎!!」

万丈にそう言われて少し怒ったことは頬を膨らませ、万丈に煽るように脳内エビフライと言り返す。またトムとジェリーみたいな追いかけてっかが始まり、これでは毎朝うるさくなると思った俺は深いため息をついた。

「2人共、3番勝負はどうかしら? 勝ち負けがつけば十分よね?」

屋根裏部屋にリコがやってきて2人に3番勝負で決着をつけるのはどうかと提案する。2人はそれはいいねと言い、早速、広い公園で2人の3番勝負が行われることになった。

「戦兔くん、おはよー!」

「やっと来たか、お前、休日だからといって起きるの遅すぎだぞ、今、何時だと思ってる?」

「まあまあ、そんなこと言わないで、はいこれ!」

「…さんきゅ」

みらいはMofuMofuBakeryといういつも公園の辺りで移動販売をしている店で俺にオレンジジュースを買ってきてくれ

た。俺はストローを口に当ててオレンジジュースを飲んでいく。

オレンジジュースを飲み始めてまもなく、横からストローでジュースを飲む音が聞こえた。その音の方をみるとみらいがストローを口に当ててジュースを飲んでた。ストローを辿っていくとそのストローは俺の飲んでいるオレンジジュースのカップに続いていた。

「…ぶっ!!何してんだよみらい!これじゃカップルに見えちゃうだろ!」

「カップルでいいでしょ!」

「…今日だけだからな」

みらいはそう言いながら俺の腕に抱きついてきた。みらいに抱きつかれた俺の心臓の脈はどんどん早くなっていく。少し興奮してしまった俺は興奮を満たす為に仕方なく、今日だけはカップルでいいとみらいに言った。俺にそう言われたみらいは喜びながら俺の手を引きリコと万丈とことはが待つ場所まで向かっていく。

「1つ目の勝負は自慢対決!」

俺とみらいが3人の元に着くと、既に勝負が始まりそうになっていた。1つ目の勝負は自慢対決らしい。俺はなんだそのくだらない対決は

と思っただが、2人に早く決着をつけてほしいと思い、口出しはしなかった。

「自慢対決か!なら俺の勝ちだな!俺はなあ…火星から来たエボルトとかいう蛇野郎の一部持ってたんだぜ!凄いだろ?」

「ううん、全然凄くない!だって、はーちゃんは魔法つかいだもん!」

俺は最初、ことはが万丈に自慢出来ることなんてあるのか?と思いい、これは万丈が勝ったなと思っただが、ことは万丈に自分は魔法つかいだと言った。

「この勝負は…はーちゃんの勝ちね!」

「何でだよ!?魔法つかいより火星の生物と人間のハーフの方が凄いだろ!」

「うるさいわね!とつとと二つ目の勝負に入るわよ!」

万丈はリコにうるさいと言われてしよんぼりとした。みらいはそ

んな万丈の元へ近づき万丈を必死に慰めていた。

「次の勝負は筋肉対決！今からここに出すベンチプレスで多く持ち上げられた人の勝ちよ！」

「よっしゃー！これは勝ったな！」

筋肉対決と聞いた瞬間、これは万丈が勝ったなど俺は確信した。予想通り、万丈が筋肉パワーを見せつけてことはに勝ち、これで勝負は1対1になった。

「3つ目は50m走対決よ！」

「今の俺は負ける気がしねえ……！」

「今の私は負ける気がしない……！」

万丈がそう言うのと、ことはそれを真似て自分流に言った。2人が言い終わると、リコは耳栓をして運動会で使うスターターピストルを上空へ掲げる。そして、勢いよく引き金を引いた。

「位置について……よい、どん！」

スターターピストルの音と共に2人はスタートした。だが、50mで止まる様子はなく、朝日奈家へ向かって走って行ってしまった。

「あつ、ちよつと2人ともー！」

リコは予想外の事態に焦りながら2人を追いかけていく。俺とみらいは公園に残された。

「ねえ、戦兎くん……私達はゆつくり帰ろうよ！」

「ああ、そうだな」

俺がそう答えると、みらいは俺の手を握りながら俺の顔を見てにこつと笑う。端麗な笑顔をしているみらいの顔を見て俺は顔を赤く染めていた。

「(みらい……ダメダメダメ、年下好きなんて第1話のひたくり野郎と同類になっちゃうじゃねえか！落ち着け戦兎！)」

「さつきからボーつとしてどうしたの？」

「……何でもない、とつとと帰るぞー！」

俺があまりにボーつとしていた為、みらいは心配して声をかけてくれた。みらいに声をかけてもらい、ハツと我に返った俺はみらいと手を繋ぎながらゆつくりと朝日奈家へ向かってゆつくりと歩いていく。



朝日奈家に着くと、さっきまで争っていた2人がいつの間にか仲良く談笑していた。2人が仲良く話す様子を見た俺は自然と心が温かくなった。

「喧嘩するほど仲が良いってわけね…」

俺がそう言うのと、俺の他に2人が仲良く話す様子を見ていたみらいとリコはフツツと笑いながら2人を温かい目で見守っていた。

勝ち負けはなく同点で終わった今回の三番勝負。明日も2人はトムとジェリーのように仲良く喧嘩をするのだろうか…

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

#### 4. ワクワクもんだあ！桐生戦兎初登校！

某平日の日の出から少し経った頃、朝日奈家の地下室で俺は自分の身なりを懸命に整えていた。

「くそっ…なんで俺だけでもう一回中学生になんきやいけないんだよ…」

「それはお前がバカだからだな」

「…お前にだけはバカと言われたくない」

万丈にバカと言われた俺は愚痴をこぼしながらも黙々と身支度を進めている。登校時間まではまだ1時間30分くらいあるが、俺はみらい達のように登校時間ギリギリまで寝ているというような危なっかしい事は出来ないと思い、タイマーを午前5時30分辺りにセットして午前5時40分には起きていた。

一方の万丈は、大きいびきをかきながら寝ていた。ここで俺は先程、バカと言われたのは自分の勘違いでただ万丈が寝言を言っていた事に気付いた。

「フツ、この筋肉バカが…!」

俺はフツとうっすら笑いながら寝ている万丈にそう言い、朝日奈家の一階に繋がる階段をゆっくり登っていく。

階段を上り終わり、リビングの部屋に行くと、既にキッチンで朝日奈今日子が朝飯を作っていた。

「あら、戦兎くん！早いわねえ！みらいも戦兎くんみたいに早起きになればなあ…」

「みらいなら早起きくらいできるようになりますよ!」

「ふふふ…出来るようになるといいわね」

俺と朝日奈今日子が話していると、二階から誰かが階段を降りてくる足音が聞こえた。リコが二階からゆっくりと階段を降りてくる。そして、階段を降りた後、リビングの扉を開けた。

「おはようございます!」

「リコちゃんおはよう!」

「あら、戦兎くん起きるの早いわね」

「ギリギリに起きると身支度が出来ないまま学校に行く羽目になるからな…」

俺は白飯をもぐもぐと咀嚼しながらリコにそう答える。それから約10分後、白飯を食べ終わり、皿を流して洗って水切りカゴに置いた。まだ登校までは時間がある為、みらいを起こしにいく事にした。

みらいの部屋の前に着き、扉をコンコンと何回かノックをしてから中へ入っていく。みらいは今日も相変わらずぐっすりと寝ている。俺は寝ているみらいの近くへ歩み寄った後、みらいの両頬を引っ張り無理やり起こした。

「いてて…戦兎くん痛いよお〜」

「お前が毎朝ギリギリまで寝てるから今日は時間に余裕を持てるように起こしてやったんだぞ〜」

「じゃあ、おんぶして私を一階のリビングに連れてって」

「はっ？自分で下に行きなさいよ!」

「だってまだ寝起きで動けないんだもん」

「はあ…しょうがねえな!ほら、背中に乗れ」

起こした方がいいが、みらいは寝起きということを理由に自力では動けないと言い、俺におんぶするよう頼んできた。俺は仕方なくみらいをおんぶする事にし、みらいが背中に乗れる位置までしゃがんでみらいが背中に乗ってくるのを待っていた。

「じゃあ、乗るよ〜」

「おう、早く乗れ」

みらいが背中に乗り、俺は下のリビングを目指して階段を降りていく。みらいは細身の為、背中に乗せても負荷はかからず軽かった。

「戦兎くん、おんぶのお礼してあげるね…」

「おんぶのお礼?」

俺はその瞬間、うなじ辺りに弾力のある柔らかいものが当たる感触がした。感触のした後、みらいがうふふと軽く笑っていた。

「うふふ…戦兎くんの首裏にキスしちゃった…／／／」

「えっ?おい、どういう事だ!?!」

俺は突然のことに驚き、みらいにこれはどういう事なのかを聞き返

したが返事はなかった。どうやら、再び眠りについてしまったらしい。

「今日子さん、みらいちゃん連れてきましたよ！」

「戦兎君！ありがとうございます！ソファに寝かせておけばそのうち起きると思うわ！」

俺はみらいをソファに寝かせて、自分が普段よく使っているトレンチコートを毛布がわりに掛けてあげた。そして俺は改めて入れ忘れていたものはないか鞆を探って確認する。入れ忘れがない事を確認した俺は地下の自分の部屋に戻り、三人が投稿する時間までソファでくつろぐ事にした。それから約30分後、登校するために階段を上って一階へ行くとそこには珍しくみらいの姿があった。

「おはよー！戦兎くん！早く学校いこー！」

「お、おう！んじゃ行くか」

玄関の扉を開けて外に出る俺と三人。三人は家の方へ振り返り、玄関先にいる朝日奈今日子に行ってきますと言う。俺も軽く会釈をした。

学校の正門までは普通に歩いていたが、正門をくぐり、登校する生徒が多くいるのが見えた瞬間、みらいは俺の腕に抱きついてきた。これにはリコも驚いていた。周りにいる生徒もコソコソと何かを話していた。

「おい、みらい！登校初日で変な噂立てられるの嫌だから離せ！」

「下駄箱まで離さないよー！」

「はあ…全くだなあ」

俺は離せとみらいに言ったがみらいに下駄箱まで離さないと言われたので仕方なく下駄箱までこのまま歩いていくことにした。

「おい、そこのお前！」

「…つたく、誰なんだよ」

俺がみらいとラブラブなカップルのように歩いていると後方から俺を呼ぶ声が聞こえたので振り向いてみるとそこにはみらいより少し背の高い少年がいた。

「お前は？」

「俺は大野壮太だ！お前、みらいとはどういう関係なんだよ！」

「…どういう関係って見りゃ分かるだろ」

俺はみらいとは友達である事が見れば分かるだろと壮太に伝えたつもりなのだが壮太は俺がみらいの彼氏だと思ってしまったらしく、顔がしかめっ面になっていた。壮太はしかめっ面を変えないまま俺とみらいより先に教室へ向かっていった。

俺は担任の先生のもとに立ち寄るため、三人には先に教室へ行さきように言っておいた。そして、朝のS H Rの時間、俺は担任の先生と共に教室へ入っていく。教室へ入ると、椅子に座る多くの生徒の目が一斉に俺の方へ向けられる。

「皆さん、今日は皆さんの新しい仲間を紹介します！」

「俺は桐生戦兎、よろしく！」

「えっと、桐生さんの席は…朝日奈さんの隣でいいかしら？」

「戦兎くんが隣!?ワクワクもんだあ！」

俺の座る席はみらいの隣になった。みらいは俺が横の席に来て嬉しいのか歓喜の声を上げていたが、流石にうるさいと思い、俺はみらいに静かにしろとジェスチャーで伝えた。

その後、朝のS H Rが終わり、遂に一時限目の授業が始まった。一時限目は数学、簡単な問題ばかりで暇だったので俺は暇つぶしに隣で鉛筆を一切動かさずに考え込んでいるみらいを手伝う事にした。

「…おい、どこが分からないんだ？」

「ここが分からないのお〜！」

みらいはそう言いながら教科書に載っている連立方程式の問題を指差す。俺は”公式を見れば分かる”と一言で済ませようとしたが、それではみらいはこの問題を理解できるわけがないと思い、みらいのノートに詳しいやり方を書いていく。

「すごい!!あつという間に出来ちゃった!流石は天才物理学者さんだね！」

「だろ…てええんさい物理学…」

俺はみらいに褒められて、つい大声を出してしまった。皆の視線は俺を向いている。みらいも俺の大声には少し驚いていた。

そして俺はその後、二時限目から六時限目をこなしていき、気づけばもう時刻は午後4時で下校時間になっていた。俺とみらいが横に並び仲良く話しながら帰っていると後ろから勝木かなと長瀬まゆみがやってきてみらいに何かを聞いている。

「ねえみらい！戦兎くんってみらいの…かれ…」

「かな、聞きたいことをはっきり言いなさいよ！ねえみらい、桐生くんってみらいの彼氏なの!？」

みらいが首を縦に振り、うん！と答えようとしていたので俺は慌ててみらいの口を手で塞いだ。

「やはり…焦っているという事は戦兎くんはみらいの彼氏なんだあゝ」

「い、い、いや！違う！俺は彼氏なんかじゃ…」

「今更、否定しても遅いよお…」

勝木かなと長瀬まゆみが俺に疑いの目を向けながら近くまで歩み寄ってきたので俺はみらいの手を引いて朝日奈家に向かって走っていった。

「はあ…はあ…やつと家に着いたか…」

「戦兎くん、なんで否定したの？もしかして…私のこと嫌い？」

「嫌いじゃない、むしろ好きだ！」

家に着き、朝日奈家の扉に寄りかかっていると、みらいが泣きそうな顔をしながら俺にそう聞いてきた。俺はみらいにあれば2人に知られては困るからと説明し、最後にみらいの目を見て、嫌いじゃないむしろ好きだとまるで告白のような感じでみらいに言って、朝日奈家の扉を開けてみらいより先に家の中へ入っていった。

「戦兎くん…言質取ったからね…／＼／」

みらいは左手で涙を拭い、頬を赤く染めて小声でそう呟いてから家の扉を開けて家の中へ入っていった。

今日も何もなく平和に過ごせた俺は本当にLOVE&PEACEの平和の世界は素晴らしいんだなあと思った。さて、明日はどんな事が俺を待っているのだろうか…

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.  
.  
.  
.  
.

## 5. 2人で遊園地！みらいと戦兔の初デート！?

初登校日の翌日、俺は休日でもいつもより遅くまでベッドで横になって寝ていた。すると、誰かが寝ている俺のお腹辺りにまたがっているような感覚がした。首を少し起こし、お腹の辺りを見てみるとみらいがいた。

「おはよー！戦兔くん！」

「うわあ！お前、なんで俺の部屋にいるんだよ!?!」

「えへへ…実は遊園地に行きたくて…」

みらいはそう言いながらポケットを探り、中から遊園地のチケツトらしき物を取り出して俺に見せてきた。

「…なぜ、2枚?」

「決まってるでしょ!」

「決まってる…とは?」

「…私と戦兔くんのデートなんだから…／／／」

普通、2枚だけではなくリコやことは、仕方なく万丈の分も入れて5枚なきや皆で遊園地は行けないだろうと遊園地のチケツトの枚数に疑問を持っていた俺の耳元でみらいは「私と戦兔くんのデートなんだから」と呟く。普通の人なら耳元でそう呟かれたら寒気しかしないと思うが、俺は何故か頬を赤らめ、みらいと手を繋いで仲良く遊園地を楽しんでいるような光景を思い浮かべてしまっていた。

「戦兔くん?ボーっとしてるけどどうかしたの?」

「いつ、いや別に何ともない!」

俺が光景を思い浮かべて色んな妄想をしている間、ずっとボーっとしていたらしくそんな俺を心配したみらいは声をかけてくれた。未だの声のおかげハツとなったが声をかけられずに放置されていたらずっとあのまま妄想を続けていた事であろう。

「じゃ、俺支度するからまた30分後くらいに玄関前で!」

「うん!」

俺はみらいにそう言い、着替えをしたり荷物の確認をし始めた。みらいもまだパジャマだったので私服に着替えに自分の部屋へ戻って



いった。

そして、それから30分後、身支度を終えた俺は地下から一階に繋がる階段を登り、玄関へ向かう。

「あつ、戦兎くんやつと来たね！じゃあ、行こう！」

玄関では既に支度を終えたみらいが待っていた。俺とみらいは早速、遊園地に向けて出発する。今回はバイクではなくバスに乗り、遊園地へ向かっていく。

「わあ……戦兎くんみてみて！東京クロバータワーが見えるよ！」

「……前の世界でいうスカイツリーみたいなものか、でも、あのタワー高すぎだろ!？」

みらいは東京クロバータワーという大貝町にある巨大な電波塔をバスの窓越しに指差しながら俺に東京クロバータワーがどういうものなのかを話してくれた。みらいが教えてくれた情報によると東京クロバータワーの高さは全高999mで世界一の高さを誇っているらしい。

「なあ、今回行く遊園地ってクロバーランドだよな？」

「うん、そうだよ！」

「何でこの町には名前に”クロバー”が付く建物が多いんだ？」

「それはこの町の建物は大体、四葉財閥が建てているからだよ！」

「四葉財閥ねえ……難波重工と同じ匂いがすんなあ……」

俺は”四葉財閥”という名を聞いて、前の世界にはあつた難波重工という大重工企業メーカーの名を思い出した。そして、俺が前の世界での出来事を回想しているうちにバスが遊園地に到着する。

「着いたあ〜！戦兎くん早く早く〜!!」

「おい、みらい！はしやぎ過ぎだぞ！」

「いいじゃん！ほら、行くよ！」

みらいはバスから降りると、早速はしやぎ出した。俺がはしやぎ過ぎと注意するも全く聞く耳を持たず、俺の手を引いて入場ゲートに向かって走っていく。そして、入場ゲートにいる遊園地のスタッフにチケットを渡してから遊園地の中へ入る。

「うわあ……ねえ、戦兎くん！どれから乗る？」

「みらいが乗りたいものでいいぞー！」

俺がそう言うともみらいは遊園地の左側50m先あたりにあるメリーゴーランドを指さした。俺ともみらいは早速、メリーゴーランドへ向かっていく。

「どれに乗ろうかなあ〜」

「俺はこの馬…っとうわあー！」

「戦兎くん！馬車に乗ろうよ！」

俺がみらいに馬に乗ると言おうとしたが、みらいが俺の腕を引っ張り、馬車に乗ろうというので仕方なく馬車に乗ることにした。

「何で馬車…？メリーゴーランドと言えば馬だろ！」

「だって…ここの遊園地1人乗り用の馬しかないから2人で乗れないじゃん…」

「あつ…だよな！お前の気持ちを分かってやれなくてごめんな」

みらいにそういうと、みらいは悲しい表情を浮かべながら俺に1人用の馬しかないから2人で乗れないと言う。俺は悲しい表情を浮かべているみらいに気持ちを分かってやれなくてごめんと謝ると共にみらいの目から顔を伝って流れ落ちる涙を拭いてあげた。

「さあ、メリーゴーランドを楽しもうか！最ッ高の1日にするぞー！」

「戦兎くん…」

みらいの目から涙が止まると共にメリーゴーランドが回り出した。俺ともみらいは互いの顔を見つめ合いニコツと笑顔を浮かべながらメリーゴーランドを堪能する。そして、約2分間回り続けた後、メリーゴーランドはゆっくりと停止していく。

「みらい、次はどこへ行くこうか？」

「うん…じゃあ、あれ！」

メリーゴーランドを降りた後、俺ともみらいは次に乗るアトラクションを決めていた。俺がみらいに何に乗るかを聞くとみらいは大型ジェットコースターを指差す。

「…まじか」

「うん、マジマジ…さあ、行くよー！」

絶叫系が苦手な俺は大型ジェットコースターの落ちる箇所を見て

身体がガタガタと震えていた。みらいは俺が震えていることに気づかず、俺の手を引いてジェットコースターの方へ向かっていく。

そして、ジェットコースターの待ち列を並ぶ事1時間、遂に乗り場に着てきた。ジェットコースターに乗った俺とみらいは安全バーを最大まで倒して出発の待っていた。数十秒後ジェットコースターは動き出した。

「楽しもうー」

「あわわわ……」

ジェットコースターに乗ってワクワクしているみらいに対し、俺はジェットコースターを見た時からこの時までずっとガタガタと身を震わせていた。背中に違和感を感じ、触ってみると何かがあった取り出してみるとそれは俺が変身するために必要なビルドドライバーだった。荷物置き場に置いてきたはずだったが何故か持ってきてしまっていた。どうやら、防衛本能働いてしまったようだ。

ジェットコースターの高さが遂に頂上へ達し落ちようしていた時、みらいの安全バーが乗り物のトラブルなのか緩んでいるのに気付き、俺は急いでドライバーを巻いて、ポケットに入っていたフルボトルからタカフルボトルとガトリングフルボトルを取り出し、ドライバー挿し込む。俺が安全バーのせいで回しにくくなっているドライバーのレバー回しに苦戦しているうちにジェットコースターは下へ落ちていく。

ジェットコースターが落ちる瞬間、みらいの安全バーが上がりきってしまい、みらいがジェットコースターの外に投げ出されてしまった。

「戦兎くん!!」

「みらい！今行くぞー……ってうわああ!？」

俺は未来を助ける為に必死にGに耐えながらドライバーのレバーを回していく。そして、何とか回しきりホークガトリングフォームへ変身した俺は自分の安全バーを上げて遊園地の地面に向かって落ちていくみらいに向かっていく。

みらいの元へ行き、抱きかかえながらゆっくりと遊園地の地面に

降りていく。俺が助けた時、既にみらいは気を失っていた。

「みらい！大丈夫か!？」

俺はすぐに遊園地のスタッフを呼び、気を失っているみらいを寝かせられる場所に移動する。

「…うーん、あれここは?。」

「気づいたか!みらい!心配したぞ!。」

みらいはジェットコースターで気を失ってから約6時間後に目を覚ました。辺りはすっかり夕焼け空に染まっており、みらいが目を開きました後、少しだけ遊園地を満喫してから帰りのバスに乗り込んだ。バスが岐路に向かって出発する時には既に俺は疲れ切っていて眠ってしまっていた。

「…ふっ、戦兔くんはやっぱ私の命の恩人だね!。」

みらいはそう言いながら俺の頬にゆっくりと顔を近づけていき、キスをする。キスをした後、みらいは顔を赤く染めながら小声でこう言った。

「…戦兔くん、大好きだよ!。」

こうして俺とみらいの遊園地での初デート?は終わりを告げた。さて、明日はどんな事が俺たちを待っているのだろうか…

t o b e c o n t i n u e d . . .

## 6. 魔法界へGO！ハロウィンパーティーの準備！

「せ……と……ん！せん……くん！せんとくん！」

どこらからか俺を呼ぶ声が聞こえてくる。俺は薄目を開けて自分の枕の左側に置いてあった時計を見る。まだ時刻は午前6:30、平日なら分かるが、休日なのにこんな朝早くに誰だろうと、声のする方向を見てみるとそこにはまたみらいがいた。だが、いつもと服装が違い、普通の女子というよりも”魔法少女”って感じの服を着ていた。「…またお前か、何しに来たんだ？そんな格好して」

「魔法界でハロウィンパーティーするらしいから戦兎くんも連れて行きたいなあ……って思ってた呼びに来たの！」

「ハロウィンパーティーねえ……え？魔法界ってなに!？」

魔法界と聞いて驚きのあまり、みらいに魔法界は何なのかを聞き返してしまう。

「魔法界はね、魔法のほうきで空を飛べるし、魔法の言葉を唱えればなんでも出来る楽しい所だよ！」

「ありえない……！そんな世界あるのか!？」

「とりあえず一つ魔法かけてあげる！」

みらいはそう言いながら服のポケットから先端にハートの宝石がついている細長い魔法のステッキみたいな棒を取り出し俺の方に向けた後、魔法の言葉を唱え始めた。

「キュアアップ・ラパパ！戦兎くんよ、私に惚れなさい！」

みらいが魔法の言葉を唱えた瞬間、俺の心臓の鼓動が段々と早くなっていく。みらいの顔を見ると更に早くドクドクと脈を打っていった。

「みらい！魔法はそんな事に使えないわ。早く元に戻しなさい！」

「しようがないなくキュアアップ・ラパパ！元に戻れ！」

いつの間にかリコも地下に来ていて、偶然見ていたのか、俺の部屋に入ってきて魔法の使い方を誤っているみらいを注意してくれた。リコに注意されたみらいは俺にかけられている魔法を解いた。その瞬間、俺の心臓の鼓動は普通の状態に戻った。

「さて、そろそろ魔法界に向かおうかしら！」

「うん！早く行こう！ほら、戦兎くんも早く早く!!」

リコがそう言うのみらいは魔法界に行けるのがよっぽど嬉しいのか目を輝かせながらその場でピョンピョンジャンプしていた。みらいに早く早くと急かさされた俺はすぐに準備をし、みらいと共に朝日奈家の玄関を開けて外に出る。

「筋肉海老フライめー！」

「誰が筋肉海老フライじゃ！俺は筋肉野郎だ！」

外に出ると何が原因かは分からないがまた万丈とことは言い争いをしていった。リコとみらいが仲裁に入ろうとしたが、俺はリコとみらいにあの2人は自然に仲直りするから放って置けと言った。

そして、言い争いをする2人を置いて俺とみらいとリコはカタツムリニアの乗車口に向かっていく。

「すげえ…！カタツムリが走ってきてる！」

俺は童心に返ったような顔をしながらカタツムリニアをジーツと見続けていた。

「フフツ…戦兎くんって可愛い一面もあるんだね！」

「うっ、うるせえ！ほら、電車来るぞ！」

そんな俺を見ていたみらいは軽く笑いながらそう言う。俺はみらいに少し馬鹿にされたと思って恥ずかしくなり、咄嗟に言い返して何とかごまかした。

俺はカタツムリニアに乗車した後、言い争いをしていた2人が来るか来ないかを電車の窓越しに見ていた。すると、車内でもうすぐ発車するというアナウンスが流れ始める。

「アイツら、何やってんだか…」

俺が2人の心配をしていると、ほうきにまたがって空を飛んでいる2人の姿が見えた。ほうきに乗ってもなお言い争っているようだ。

俺はまだギリギリ開いているカタツムリニアの扉から急げ！と2人に言う。俺の言葉を聞いた2人はハツとなったのかほうきの速さを全速力にしてカタツムリニアの乗車口へ向かってきた。あと数秒遅れていたら乗れていなかったというギリギリの時間で2人は何と

かカタツムリニアに乗り込んだ。2人は全速力で向かってきた為、乗車した後、車内の壁にぶつかり数メートルくらい吹っ飛んでいった。

「いててて…あれ、海老フライは？」

「お前の下だよ！早く立てー！」

「あつ、ごめんごめん！」

「…つたく、何でよりによってスカートなんだよ！お前がスカート履いてたせいで俺の顔がお前のパンツに触れちゃっただろうが!!」

「えっ…／＼／＼…もう！変態海老フライ!!」

「ぐはあ…！何で…ビンタすんだよ…」

ことはに乗っかられていた万丈は立った後、ことはに愚痴を言うがそれを聞いたことはは自分が万丈に恥辱的な行為を受けた事を知り、顔を赤くした後、万丈の頬を右手で思い切りビンタする。ことはのビンタをくらった万丈はその場に倒れてそのまま気を失ってしまった。

俺は自業自得だなと思いつながら気を失っている万丈を座席まで連れていき、横にさせておいた。

そして、カタツムリニアに乗車してから数十分後、魔法界に着いた。カタツムリニアから降車して魔法界の全体を見てみると空を飛び交う人々が沢山いた。

「なんなんだよ…これ」

「魔法界よ！私の故郷なの！」

「…って事はお前は魔法使いなのか？」

「魔法使いよー！」

「うおお！興奮してきたー！」

万丈は俺とリコとみらいとことはより少し遅れてカタツムリニアから降りてきてリコにこの世界は何なのかという事とリコが魔法使いなのかどうかを聞き、ここが魔法界である事、リコが魔法使いである事を聞いた瞬間、興奮し、俺たちより先にホームの階段を下りて魔法界の中心部に向かって走って行ってしまふ。ことはもほうきにまたがり、万丈を追いかけるように魔法界の中心部へと向かっていった。

「…2人は放っておいて、俺らは何をすればいいの？」

「みらいと戦兎くんにはハロウインの飾り付けの材料を買ってきて欲しいの！」

リコにこの後、どうすればいいのかを聞いた所、2人で飾り付けの材料を買ってきてと言われた。早速、俺とみらいは飾り付けの材料が売っている店へ向かおうとする。

「…俺は徒歩で向かう感じ？」

「私のほうきに乗って店まで行こうよ！」

「そうだな！」

最初は万丈のように歩きで向かっていくのかと思ったがみらいが魔法のほうきに乗せてくれる事になり、楽々と店へ向かっていった。

店の辺りへ行くと、沢山の若い男女が仲良く話しながら歩いていたり食事をしたりしていた。

「…ねえ、戦兎くん」

「ん？どうした？」

「…そういえば、ここって有名なデートスポットなんだよね」

みらいは顔を赤く染めてモジモジしながら俺にそう言う。俺は”デートスポット”という言葉聞いてみらいの言いたい事を大体、察した。

「つまり、こうすればいいんだろ？」

「うん…／＼／＼」

俺はみらい自分の左手でみらいの右手を握った。俺がこうすればいいんだろ？とみらいに聞くと、みらいは少し顔を上げて頷いた。俺とみらいはその後、手を繋いだまま店までの直線の道を歩いていく。すると、反対側からみらいと同じような服を着た女の子3人が歩いてきた。

「おっ、みらい！アンタ、彼氏いたの!？」

「ジュン！これはね！何というか、その…／＼／＼」

みらいはジュンに彼氏というワードを言われてまた顔を下げてしまふ。みらいの顔を見たジュンはニヤリと笑う。

「みらい、顔赤くなってるぞー！やっぱり、彼氏って事だな！」

「ジュン！みらいが恥ずかしがっているでしょ！それ以上大声で叫ば



ないで！」

「はいはい、わかったよ！じゃ、また今夜のハロウィンパーティーで会おうな！」

ジュンの隣にいたオレンジ寄りの茶色の髪色をした女の子がジュンに注意する。注意されたジュンは今夜のハロウィンパーティーでまた会おうと言って俺らが歩いてきた道の方向へ歩いて行ってしまった。

「ほら、いつまでも恥ずかしがってないで材料買いにいくぞ！」

俺はみらいにそう言い、手を繋いだまま再び店へと歩いていく。

そして、数分後店に着き、中へ入って材料を探していく。色んなハロウィングッズが置かれてる中、俺は選りすぐりな材料を選び、購入する。

そして、買い物が終わった後、来た道に戻るように行って魔法学校の付近の広場に向かっていく。空はすっかり夕焼けに染まっていた。

「夕日綺麗だね……」

「そうだね！」

「……さっきから今までずっと下を向いててごめんね……」

「大丈夫！下を向いてもお前はお前なんだから！俺のお前に対する気持ちは変わらねーよ」

「戦兎くん……！」

俺がみらいにそう言ってあげると、みらいの顔に笑顔が戻った。俺とみらいはその後、手を繋ぎ、仲良く話しながらリコ達のいるハロウィンパーティーの会場まで歩いていくのだった。

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 7・ハッピーハロウィン！みらいが作る特別なスイーツ！

俺とみらいが飾り付けの材料を買って来てから数時間が経ち、辺りはすっかり暗くなっていた。特設ステージとハロウィンパーティーの会場の近くにある街灯が真っ暗な空の下で光を照らす中、皆はハロウィンパーティーに向けて黙々と準備を進めていた。

「みらい？一人で何やってんだ？」

「わわっ！どこに飾り付けをしようか考えてただけだよ！」

俺がまだ準備中の会場を歩いていると、どこからか甘い匂いがしてきたので俺はその匂いを辿ってみた。匂いを辿っていくと、みらいのいる場所に着く。みらいは皆と離れて一人で何かをしている。俺が声を掛けると、みらいは突然自分の前に現れた俺に驚きながら何かを手で隠していた。何をしてたのかを聞いてみたが、みらいは適当な事を言っでごまかした。

「一人じゃ寂しいだろ？俺が隣にいてやるよ！」

「嬉しいけど、今は一人にして！」

「…そうか、分かった！何してるか分からないが一人で抱え込むなよ！たまには皆を頼れよ！」

「ふう…危ない、危ない…バレたら元も子もない」

みらいが一人にしてと言うので俺はみらいの元から離れてリコ達がいる方へ向かっていく。みらいは俺が去っていくのを見ていて、声も届かないような距離まで俺が離れていった瞬間、安堵のため息をついた。

みらいから離れてリコ達の元へ向かうとリコと万丈が仲良く話している様子が目に入った。二人がどういいう話をしているか気になった俺は耳を澄ませながら二人の様子を見ていた。

「万丈くん、ハロウィンパーティーの服装どんな感じがいい？」

「俺はドラキュラがいい！」

「分かったわ！キュアアップ・ラパパ、万丈くんの服よドラキュラの服に

変わりなさい！」

万丈がリコにハロウィンパーティーの服装はどんな感じがいかと聞かれ、ドラキュラの服装がいいと答えると、リコは万丈に魔法をかけてドラキュラの服を着させた。

「万丈くんかっこいい：／／／」

「ん？なんか言ったか？」

「いいえ、何でもないわ！飾り付けの続きするわよ！」

リコはドラキュラの服を着た万丈を見て、小声で万丈がかっこいいと言った。俺はあのバカのどこがかっこいいのだろうか？と思いつつもリコ達のもとに近づいていき、飾り付けの手伝いに加わっていく。

そして、30分後、沢山の人の協力があり、短い時間で会場全体の飾り付けが終わらせる事ができた。だが、みらいはまだ何かをしている様子。俺はみらいの元へ行こうとしたが、先程、みらいに一人にして欲しいと言われてた為、ここで行ってしまったと迷惑がかかると思い、行くのをやめた。

「万丈くん、ちよつといいかしら：／／／」

「なんだ？」

「ちよつとこつちにきてほしいの：／／／」

リコは顔を赤くしながら万丈を近くの木の陰に誘っていた。おそらく、自分のハロウィンパーティーのコスプレ姿を万丈にだけ先行で見せるつもりなのだろう。

ハロウィンパーティーまであと少しとなった頃、みらいはまだ何かをしている。俺は流石に待つてられずにみらいの元へ向かう。

「おい、何してる？ハロウィンパーティー始まつちやうぞ？」

「もう少し待つて！あと少しだから！」

「：早くしろよ。何しろ、俺のハロウィンパーティーはお前がいなきや始まらねえからな」

「戦兎くん：！分かった！なるべく早くそつちに向かうね！」

俺はみらいにハロウィンパーティーが始まってしまふ事を伝えるが、みらいはあと少しだから待つてと言う。みらいに俺のハロウィン

パーティはお前がいなきや始まらないと俺の本音を言った。その言葉を聞いたみらいはなるべく早く向かうと言ってくれた。俺はみらいの返答を聞き、再び会場へ戻っていった。そして数分後、遂にハロウィンパーティが始まった。俺のコスプレは万丈と同じくドラキュラだった。

「お待たせー！」

ハロウィンパーティが始まってから約10分後、遂にみらいがやってきた。みらいは両手に何かを持っている。

「…戦兔くん、はいこれ！」

みらいはそう言いながら何かが入っている箱を開ける。箱の中にはみらいが苦勞して作ったであろうカボチャのケーキが入っていた。みらいは俺にバレないようにずっと一人でカボチャのケーキを作っていたのだった。

「…みらい」

「ん？何？」

俺はみらいを小声で呼ぶと共に近くの壁を使い、壁ドンをする。壁ドンされたみらいの頬は段々と赤みを増していく。

「…戦…兔くん…／／／」

「…トリック・オア・トリック？」

「えっ…何それ、聞いた事ないよお…／／／」

俺はそう聞きながらも片方の手でみらいに顎クイをして自分の顔をみらいの顔へ近づけていく。

「2人とも、何してるの？」

あと数センチで唇が重なるという所まで来たその時、ことはが俺らの元へやってきた。俺は慌ててみらいと離れて何事もなかったのようにならざるに過ぎた。ことはが今の俺とみらいの行動を深追いしなかつたおかげで何とか皆にバレずに済んだが、俺はみらいと更に親密な関係になれる絶好のチャンス逃し少し落ち込んだ。一方のみらいは人に恥ずかしい所を見られたせいも赤く染まっている顔をずっと両手で隠していた。

ことはに恥ずかしい所を見られたが、俺とみらいはその後、2人で

年に一度のハロウィンパーティーを堪能する。そして、数時間後、ハロウィンパーティーが終わり、俺達はナシマハウ界に帰るためにカタツムリニアに乗っていた。

「みらい、お前が作ってくれたケーキ本当に美味しかったぞ！」  
「……………」

みらいからの返答がない為、どうしたのか？と、みらいの方を見てみるとみらいは既に寝てしまっていた。

「…まったく本当に可愛い奴だな」

俺はそう言いながらみらいの右頬に顔を近づけていき、キスをした。皆は少し離れた席に座っていたのでバレずに済んだ。俺にキスをされたみらいの顔はどこか幸せそうな笑顔を浮かべていた。

今日はみらいとさらに近づくことが出来た最高の1日になった。さて、明日はどんな楽しい事が俺達を待っている事やら…



「戦兎くん：／／もう少しだけこのままでいい？」

「ああ：ずつとこの状態でもいいぞ：／／」

俺とみらいはしばらくの間、手を繋ぎながらお互いを見つめ合っていた。みらいの顔は端麗な顔でずつと見ていても飽きる事はなかった。そんなみらいの頬を赤く染めた顔を見れている自分はなんて幸せなんだろうと俺は心の中でそう思った。

「おい！お花畑見なかったか!？」

みらいの部屋に突然、万丈が現れた。俺とみらいは手を繋ぎながら見つめ合っていたので突然の出来事にハツとなり、慌てて手を離す。「こ、ことはか？ここには来てねえぞ！」

「つていうか万丈くんも左手の薬指に指輪付けてるね！リコとはどういう関係なの？」

「う、うるせえ：／／見りや分かるだろ：」

万丈は珍しく顔を赤く染めながらそう言うのでおそらく、リコと万丈はそういう関係なのだろう。

「おい万丈！リコとはいつそういう関係になったんだ？」

「ハロウィンパーティーの時だよ！ほ、ほら！木の陰に誘われた時だ！」

「あれはただ自分のコスプレが似合ってるかどうか聞く為に呼んだんじゃないのか!？」

「いや、告白だった！」

なんと、万丈がハロウィンパーティーの時に木の陰に誘われたのは自分のコスプレを見せる為ではなく、告白をする為だったと判明した。

「：つたく、香澄さんという女性がいるのになあ：もしかして、浮気か!？」

「浮気も何もねえよ！リコみたいな意地っ張りな可愛い女が好きなんだよ！」

万丈はリコみたいな女の子がタイプだったらしく、今はもう香澄の事はあまり考えていないらしい。万丈がリコの事を言っていると、丁度その場にまたリコがやってきた。

「ぼっ、万丈くん!？」

「リコじゃねえか！どうしたんだ？」

「こんな所じや言えないわ：／／／」

「どうせ、俺に会いたくてきたんだろ？」

「う、うん：／／／」

万丈が自分に会いたくて来たんだろとリコに聞くと、リコは下を向いてモジモジしながら小声でそう答えた。

「んじや、お前の部屋でゆっくり話そうぜ！ほら、いくぞ！」

「わわっ！恥ずかしいわ：／／／」

万丈はそう言い、リコをお姫様抱っこしてリコの部屋まで連れて帰った。2人のラブラブっぷりを見せられた俺とみらいは恋人ってあんな感じなのか：と思うのであった。

「ねえ戦兎くん、ハグしてもいいかな：／／／」

「急にどうしたんだよ!？」

みらいはお姫様抱っここの影響を受けて少し興奮してしまったのか、いきなりハグしてもいいかどうかを聞いてきた。俺は断れる訳もなく、みらいにいいよと返答する。

「戦兎くん：／／／」

みらいが俺に抱きつくと、俺の身体にみらいの発達途中の柔らかい胸が当たってきた。みらいはひったくりに襲われた時よりも強く俺を抱きしめていた。

「戦兎くん、いつも数学教えてくれてありがとう：」

「お前の為になるならいくらでも教えてやるよ」

俺とみらいは抱き合いながらそんな会話をしていた。それをドアの隙間から覗いていたみらいの母の朝日奈今日子はフツツと微笑みながら、暖かい目で俺とみらいを見ているのだった。

サブタイトルとは少し離れた内容になってしまったが、俺はまたみらいとの距離を一步近づける事が出来た。明日のテスト、みらいは数学のテストで高得点を取れるのだろうか：

t o b e c o n t i n u e d . . . . .



## 9. 遂にテスト！みらいの努力よ実れ！

テスト前の勉強会をした翌日の朝、俺は後頭部に枕ではない何か柔らかいような硬いような物の感触を感じる。眠気を感じながらも目を開けてみると目の前にみらいの顔が見えた。

「戦兎くん、起きた？」

「…なあ、俺の後頭部を支えてる柔らかいような硬い物はなんだ？」

「それはね、私の膝だよ！」

「ええ！」

自分の後頭部を支えていたのがみらいの膝だと聞いた俺は驚きながら自分の後頭部を支えていた物を手で触ってみて確認をする。触ってみた結果、確かにそれはみらいの膝だった。

「戦兎くん、私の膝枕どうだった？」

「最高です…／／／」

「ふふっ…明日もしてあげるね！」

「結構です！それより、早く支度しなきゃ学校遅れるぞ？」

「ああ！そうだった！早く着替えなきゃ！」

みらいはそう言いながら、俺がいるのにも関わらずパジャマの上下を脱ぎ捨ててブラとパンツだけの状態になる。

「やっぱり戦兎くんはエッチなんだね…／／／」

「いやいやいや！お前いきなり人の前で脱いだんだろ！」

「…っというか戦兎くんも着替えないの？」

「あっそうか、俺も着替えないと！」

早くしないと学校に遅れるというのにみらいと無駄な会話をしていた俺は制服に着替えるのをすっかり忘れており、急いで地下の自分の部屋まで降りていく。そして、約2分で制服に着替えた後、一階に続く階段を急いで上り、玄関の扉を開けて三人の待つ朝日奈家の外に行く。

「戦兎くん早く〜！学校遅れちゃうよ〜！」

みらいは俺に手を振りながら早くしないと学校に遅れてしまうという事を伝えてくれた。俺は三人と合流した後、急ぎ足で学校に向か

い、何とか時間に間に合う事が出来た。

「はあ…はあ…戦兎くんが遅いから遅刻しそうになっちゃったじゃん」

「お前が膝枕してるからだろ！膝枕してる暇があるなら起こせよ！」

「…膝枕しちや…ダメ？」

「可愛いから許す…／＼／＼」

みらいに遅刻しそうになったのは戦兎くんのせいと言われた俺は少しかツとなり、みらいに厳しい事を言う。みらいは俺につぶらな瞳を向けながら膝枕してはダメなのかを聞いてきた。遅刻を俺のせいにした事を最初は許すつもりはなかったが、みらいの俺を見つめるつぶらな瞳が反則級に可愛いかったので俺はみらいをあつさり許してしまった。

「さて、もうすぐ時間だ！席に着いた方がいいんじゃないか？」

「そうだね！」

「お互い頑張ろうな！」

「うん！」

そして、俺達が席に着いてから数分後、テストの始まりを告げるチャイムが校内に鳴り響く。配られたテストの問題用紙を見たが、どの問題も俺には簡単過ぎた。隣の席のみらいを横目で見てみると、みらいは少し苦い表情を浮かべている。大丈夫かな？と少し心配になったが、努力してきたみらいならきっと大丈夫だと俺は信じていた。

そして、数十分後、数学のテストが終わり10分休憩になった時、俺はみらいにテストはどうだったかを聞いてみた。

「みらい、テストはどうだった？」

「…いまいちな」

「きつと大丈夫なはずだ！」

「何で？」

「天才物理学者の俺が教えただから！」

「戦兎くん…！」

その後、俺とみらいが会話していると大野壮太が俺とみらいの元に

やってきた。壮太は俺を睨んでいるが、俺は壮太に睨まれるような事をした覚えはない。

「おい、戦兔！ちよつと来い！」

俺は壮太に呼ばれて教室近くの男子便所へ向かった。壮太はそこで話し始めた。

「今回のテスト俺がお前に勝ったらみらいを俺に譲れ」

「は？負ける訳ねーよ！」

「そんな事は分からねえ！」

「まあ、結果が楽しみだな」

壮太は自分がテストで勝ったらみらいを自分に譲れと言うが、俺は天才物理学者の自分に敵う訳がないと心の中で呟きながら男子便所から出て行く。

そして放課後、数学のテストが俺らに返されていく。返された答案用紙に目を通す。俺は満点だった。当たり前前の結果だと思いながらみらいに結果はどうだったかを聞いてみる。

「みらい、結果はどうだった？」

みらいは下を向きながらブルブルと震えていた。まさか、悪い点を取ってしまったのかと俺は思った。

「やったー！86点だ!!」

みらいが下を向いて震えていたのは高得点を取れたからのようだ。無事に努力の成果が出て良かったなと俺は心の中でみらいに向けてそう言った。

「戦兔くんは？」

「俺は満点だ！」

「うわあ……！」

「どうだ！凄いだろ！」

「うんうん！流石は私の……」

みらいが俺に何かを言いかけたその時、俺とみらいの元にまた大野壮太がやってきた。壮太は相変わらず俺を睨んでいる。

「おい、答案用紙見せろ！」

壮太はそう言いながら俺の答案用紙を俺の手から奪って目を通し

ていく。壮太は点数を見て驚いていた。

「嘘だろ…!?ありえない!」

「俺は天才物理学者だ!このくらいのテストどうって事ない!」

「くっ…覚えとけよ!」

壮太は悔しそうな表情を浮かべながら俺とみらいの元から去っていった。俺とみらいは壮太が自分達の元から去っていくのを見送った後、持ち帰るものをカバンに詰めて下校していく。

「ねえ戦兔くん!耳貸して!」

みらいが俺に何か秘密な事を言いたいのだろうかと思ひ、俺はみらいの顔の高さまで背中を曲げて耳を貸す。すると、みらいは頬にキスをしてきた。最初からそうするつもりで耳を貸してと言ったそうだ。

「満点のご褒美だよ…//」

「テストある度にキスしてもらえるのか…最ツ高だな!」

「戦兔くんからは何かないの?」

「俺もキスで返してやる…//」

俺はそう言いながら自分の唇をみらいの左頬へ近づけていく。俺の唇がもう少しでみらいの頬に触れようとしたその時、みらいがいきなり俺の方を向いた。そのせいで俺の唇とみらいの唇が重なる。みらいは唇が重なる、俺の後頭部あたりに自分の腕を回し、自分の唇と俺の唇が離れないようにしていた。あまりにも長くキスしていた為、後からやってきたリコにキスしている現場を見られてしまった。俺とみらいがキスしているところを見たリコは悔しそうな顔をしていた。

「くうう…みらいに先を越されたわ!私も早く万丈くんとキスしなければ!」

リコはそう言いながら走って朝日奈家へ帰っていった。夕焼け空の下、俺とみらいはキスの後、仲良く手を繋ぎ、ゆっくりと朝日奈家へ帰っていくのだった。

みらいの努力はしっかりと実り、数学のテストで高得点を取ることが出来た。そして、俺とみらいは昨日よりも更に互いの距離を近づけ

ることが出来た。さて、明日はどんな楽しい事が俺達を待っている事やら…

## 10. 紅に染まる京都！ワクワクの旅行！〜出発編

テストが終わった次の日の夜、戦兎の元に大量の荷物が詰まっているであろうパンパンに膨れ上がっているボストンバッグを持ったみらいがやってきた。

「みらい!?なんだそのパンパンのバッグは！」

「だって明日、修学旅行でしょ？だから準備したの！」

「俺、そんなの聞いてないぞ！」

「それは、戦兎くんが先生の話をしつかり聞いてないからでしょ！ほら、早く準備するよ！」

俺はみらいに明日が修学旅行だと修学旅行前夜に言われて驚く。戦兎は今日、学年集会的なものが行われていたのを思い出し、あれが学年集会ではなく、団結式だったのかと今頃気づいた。

「でもあれ団結式だったのか？」

「団結式だったよ！きつと、戦兎くんは式の最中寝てたから団結式って分からなかったんだよ」

「はあ…肝心な時に無能になるなんて…」

俺は深いため息をついてから、自分の部屋のタンスの中を探っている、自分のボストンバッグに着替えや必要な物を詰めていく。そして約2時間後、どの荷物があるかないかなどの最終確認まで終わらせ、修学旅行の準備完了となった。

「よし！準備完了！あとは寝るだけだ！…っってもう夜中の1時かよ！」

修学旅行の準備を終わらせて、部屋の壁時計を見ると既に次の日になっており、俺は急いでベッドにダイブし、毛布を被って寝た。

そして翌日の早朝、リュックサックを背負いボストンバッグを右手に持ちながらバスがやって来る場所まで3人と共に向かう。戦兎はいつも起きる時間なのでスッキリ起きていたが、3人はいつもより1時間以上早く起きてるので生気の抜けたような表情を浮かべてい

た。恐らく、早い時間に起きることに慣れておらずまだ眠たいのだろう。

バスが来る場所まで歩いている途中、みらいの背負っているリュックサックの少し空いている部分からモフモフしたぬいぐるみのような手が出てきてチャックを開いているのが見えた。

「みらい、リュックサックの中見ていいか？」

「…いいよお〜」

みらいの了承を得てリュックサックの中を見るとそこにはクマのぬいぐるみがあった。このぬいぐるみがリュックサックを開けたのか？と一瞬思ったがぬいぐるみが動くなんてあり得ないと思い、みらいのリュックサックを締めて再び3人の前を歩いていく。

そして朝日奈家から歩く事、約15分、バスが来る場所に着いた。

既に勝木かなと長瀬まゆみの2人や大野壮太がいた。

「3人共、バスが来る場所に着いたぞ！いい加減おきろ！眠たそうな顔してるのはみつともないぞ！」

「だつて〜眠いんだもん…」

「私も珍しく眠いわ…」

「はーちゃんも…」

3人は皆がいるのにも関わらずまだ眠たそうな顔をしている。バスが来る場所にいる人の中で眠たそうな顔をしているのはみらい、リコ、ことはの3人だけであった。

バスが来る場所で待つ事10分、バスがやって来る。バス席は自由らしいので俺はみらいの横の席に座り、リコはことはの横に座る。

みらいは出発後、すぐに寝てしまった。俺も寝ようかなと思い、目を閉じようとしたその時、みらいのリュックサックから先程のクマのぬいぐるみが出てきた。俺はクマのぬいぐるみを掴んでまじまじと見る。クマのぬいぐるみは俺が瞬間、動くのをやめたが、動いているところを見られているので今更、動かないフリにしても無駄だ。

「おい、お前動いてるの見たぞ、動かないフリしてもダメだぞ」

クマのぬいぐるみの脇腹あたりを両手で掴みながらそう言うとかマのぬいぐるみがモフツという声と共に動き出した。

「皆にはモフルンが動く事は内緒してモフ」

「分かった！皆には言わないでおいとく！」

どうやら、このクマのぬいぐるみの名前はモフルンというらしい。モフルンは皆には自分が動く事を内緒にするよう、俺に言ってきた。俺はモフルンが動く事を皆に内緒にする事にした。

「ねえモフルン、俺、近いうちにコイツみらいに気持ちを伝えようと思うんだけどどうかな？」

「良いと思うモフ！みらいも毎晩戦兎くん、戦兎くんって呟いていたほどこから伝わると思うモフ！」

俺は窓側の方を向きながら寝ているみらいの右肩に手を置きながらモフルンにそう言くと、モフルンはみらいが毎晩、俺の名前を呟いていることを明かした。これを聞くと普通はゾツとするが、みらいだからなのか、俺はみらいがそんなに自分の事を思っていてくれたなんて…！と嬉しい気持ちになった。

「そっか、なら良かった！これで安心して気持ちを伝えられる！」

これは旅行後に分かった話だが、この時みらいは起きていて俺とモフルンの会話を聞いていたらしい。だが、俺が近いうちに気持ちを伝えると言ったので恥ずかしくなったので起きられず、寝たふりをしていたという。

「さて、そろそろ新幹線に乗り換えだな！起きろ、みらい！」

「…もう新幹線？」

「そうだよ！早くいくぞ！」

おれは寝起きのみらいの手を引いてバスから降りていく。そして一度全体で点呼を取ってから駅のホームへ行って新幹線が来るのを待つ。何分か待っていると新幹線がやってきた。俺らは周りの迷惑にならないよう素早く新幹線に乗り込んだ。

俺は勝木かなの隣に座り、座席を回して後ろの席と向かい合わせにした。俺の向かいの席にはみらいが座っている。みらいは俺が勝木かなの隣に座ったせいかな、勝木かなをジーンと見ていた。

「み、みらい…？私をジーンと見てどうしたの？」

「あつ、いや！何でもないよ！あははは…」



みらいはジーつと見てたのを笑ってごまかしたが、みらいのこの笑いには深い闇があるような気がした。

そして、新幹線が京都に向けて走り出してから間もなくの事、俺以外の5人はまた寝てしまっていた。暇だったので外の景色を眺めていると俺の左肩に何か触れる。顔だけを動かして確認してみるとそれは勝木かなの頭だった。俺はみらい一筋のはずなのに、何故かキュンとしてしまった。その後、俺も睡魔に襲われ、眠ってしまった。気づくと、いつのまにか京都駅に着いていた。俺は新幹線を降りてみらいと点呼を行う場所へ向かう。

「戦兎くん、最高の修学旅行にしようね！」

「おうー！」

点呼を取っている間にみらいとお互いにとって最高の修学旅行にしようとする約束をした。そして、点呼が終わった後、バス乗り場に行き、みらいと共にバスに乗り込んでいくのだった。

# 11. 紅に染まる京都！ワクワクの旅行！〜1日目編〜

京都駅を出た後、バス乗り場へ向かい、バスに乗り込んだ俺達は多くの着替えと入浴セットが詰まったボストンバッグを預けに今日、泊まるホテルに向かった。

バスに乗ってから数十分後、ホテルに着いた。ホテルのスタッフさんにパンパンの荷物を運んでもらった後、俺達は班別で自由行動になった。

「戦兔くん！まずは金閣寺に行くよ！」

みらいはそう言いながら、学校が呼んでおいてくれたタクシーに乗り込む。俺とリコとことはもみらいに続いてタクシーに乗車していく。ことはが助手席に乗り、俺とみらいとリコは後部座席に乗った。

タクシーで向かう事約15分、金閣寺に着いた。タクシーから降りて金閣寺の方へ歩いていくとそこには多くの観光客達がいた。時間が限られているので俺達は早速、金閣寺が見える場所まで移動する。

「わあ〜！金ピカだあ！」

「金閣寺は正式には鹿苑寺と言ってな、三階建てで、一階は寝殿造、二階は武家造、そして三階は唐様（禅宗様）！鹿苑寺は三つの建築様式を調和させた珍しい造りをしているんだぜ！」

「へえ〜！戦兔くん物知りだね！」

「本当は大人なんだからそれくらいは知ってて当たり前だ！」

「戦兔くん、銀閣寺で私と知識勝負しない？」

リコが次に行く銀閣寺でどっちが銀閣寺について知っているか勝負しようと言ってきたので俺はその勝負にのる事にした。金閣寺の周りを歩き、色んなお土産屋がある通りを少し見た後、タクシーに戻り、

次の目的地である銀閣寺へと向かった。

「銀閣寺……ワクワクもんだあ！」

「みらいはいつもワクワクしてるな……」

「だって毎日が楽しいんだもん！」

俺がそう聞くとみらいは毎日が楽しいからと答える。自分にとって苦しい日もあるはずなのに毎日が楽しいと思える、みらいのそんな前向きな気持ちが一番にもあればなあと俺は思った。

俺がそう思っているとタクシーはいつの間にか、銀閣寺の駐車場に着いていた。4人はタクシーを降りて銀閣寺に向かって歩いていく。

「さて、そろそろ勝負よ！銀閣寺の正式名称は？」

「おいおい、簡単すぎだろ！慈照寺だ！」

「やるじゃない…！次は戦兎くんの番よ！」

銀閣寺の正式名称を答えるだけの簡単な問題なのに俺が答えると、リコはやるじゃない…！と俺に言った。この程度、誰でも答えられると俺は思った。

「えっとじゃあ、足利義政の妻であり、日本史上屈指の悪女は？」

「そんなのわかるわけじゃないじゃない！」

俺はリコがナシマハウ界育ちではない事を利用して銀閣寺に関わる人物の配偶者についての問題を出す。当然、リコは答えが分からず、わかるわけがないと俺に返してきた。

「答えられないって事は俺の勝ちだな！」

「戦兎くんの勝ちでいいわよ…！」

いつもは意地を張っているリコが珍しく自分の負けを認めた。勝負が終わり、後ろを歩いていた2人に待たせてごめんと謝ろうと後方を見るがそこには誰もいなかった。みらいとこととは置いてかれた俺とリコは駆け足で銀閣寺の見学ルートを進んでいく。

みらいとことは向月台から少し離れた所で銀沙灘を見ていた。みらいとこととはを見つけた俺とリコは向月台辺りから2人に声をかける。

「みらいー！」

「はーちゃんー！」

「戦兎くんとリコー！いつの間にか私達の後ろに!?!」

みらいは自分達の前を歩いてきた戦兎とリコが知らぬ間に自分達の後ろにいて驚き、言葉の手を引き、急いで俺とリコの元へ向かってきた。

「戦兎くん、リコ！置いてってごめんね…」

「いいわよ、待たせた私達が悪いんだから」

「それより皆！清水寺に着く時間まで後少ししかないよ！急ごう！」

ことはに時間がないと言われた3人は銀閣寺を早歩きで見えていく。そして見終わった後、駆け足で駐車場に行き、タクシーに乗り込んだ。

タクシーで清水寺に向かう事約20分、清水寺の駐車場に着いた。4人はタクシーから降りた後、様々な八つ橋のお店や京扇子のお店が並ぶ清水寺への道を歩いていく。

そして、清水寺へ着いた4人はそのまま本堂舞台に行き、紅に染まっている下の景色を眺めていた。

「ねえリコ、はーちゃん！私、戦兎くんと行きたい場所あるんだけど行ってきていいかな？」

「いいけど、時間考えて行動しなさいよ！」

「時間過ぎたら置いてっちゃうからねー！」

2人の言葉を聞いた後、みらいは俺の手を引いてどこかへ向かっていく。

「着いたよー！」

「ここは…地主神社だな」

みらいが連れてきてくれた場所は石と石の間を目を瞑って通ることができれば恋が成就するという恋占いの石がある場所だった。

「私からやるね！」

みらいはそう言いながら、目を瞑って石と石の間を歩いていく。だが、段々と歩いている方向がずれてきていた為、俺はみらいの両肩を掴んで石のある方へ方向転換させた。俺の方向転換のおかげもあり、みらいは反対側の石を触ることができた。

「次は戦兎くんの番だよー！」

「俺もやるのか？まあ、いいやってやるか！」

俺は目を瞑り歩く方向がずれないように一歩ずつ丁寧に前へ進ん

でいく。もうすぐ反対側の石に触るところまで来た時、俺は何かにつまずいて倒れてしまった。しかも、誰かがつまずいた俺の下敷きになっている。目を開けて確認してみるとそれはみらいだった。

「せつ、戦兔くん…／＼／＼」

みらいは頬を赤く染めながら俺だけに聞こえるぐらいの小声でそう言う。みらいの赤く染まっている頬を見た俺は慌ててみらいとともに立ち上がり、リコ達が待っている本堂舞台へ向かおうとする。

「戦兔くん、待って！」

「どうした？」

「ゆっくり歩いて戻ろうよ…／＼／＼」

「…そうだな」

みらいはそう言いながら俺に左手を差し伸べてきた。俺は自分の右手でみらいの左手を軽く握る。みらいの細くて綺麗な手と繋げている俺は本当に幸せだなと思った。その後、俺とみらいはリコことはが待つ本堂舞台までゆつくりと手を繋ぎながら歩いていった。

「リコ、はーちゃん！戻ってきたよ！」

「みらい、戦兔くん遅かったじゃない！何してたの？」

「内緒！」

俺たち4人はその後、清水寺から出て各自お土産を買い、タクシーに乗ってホテルに向かう。

「今日は色んな事があったわねえ…」

「そうだな…」

俺たち4人はすでに疲れ切っていて、ウトウトしていた。みらいとことはは既に寝ていて起きているのは俺とリコだけだった。

そして気付くと、タクシーはホテル近くに止まっており、あとは降りるだけだった。俺はみらいとことはを起こして運転手にお礼を言ってからタクシーを降りた。

ホテルのロビーへ行くと、津奈木第一中の皆が整列していた。その列に加わり、ホテルのスタッフの話を聞いた後、各部屋に入っていく。みらいとは別の階の部屋の為、階段でみらいと少し話した後、部屋に入っていく。そして風呂に入り、歯磨きなどを済ませた後、消灯して

俺は目を瞑った。目を瞑っていると、今日のみらいと行った地主神社での思い出やリコとことはとの思い出が浮かび上がってきた。俺は今日も平和に過ごさせて良かったなあ…と思いつつ眠りについた。

修学旅行の1日目が終わった。2日目の明日はどんな楽しい事が待っている事やら…

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 12. 紅に染まる京都！ワクワクの旅行！〜2日目編〜

修学旅行2日目の朝、1日目の疲れのせいか珍しくまだ眠っていた俺は同室の奴に起こしてもらった。同室の皆は既に着替えを済ませており、リュックサックを背負って部屋を出ようとしている。それを見た俺は急いで着替えをしてリュックサックに必要なものを詰めて簡単に確認した後、少し遅れて部屋を出て行く。

クラスのバスに乗り、自分の席へ行くと、隣の席のみらいが寝ていた。俺は軽く身体を揺すって起こそうとしたが、起きる気配がない為、目的地に着くまで寝かせておく事にした。バスで目的地に向かっている途中、やることもなく暇だったのでみらいのリュックサックを開けて喋るクマのぬいぐるみを取り出し、クマのぬいぐるみと会話をする事にした。

「モフルン、お前ら俺に何か隠してるだろ？」

「モフツ!?そ、そんな事ないモフ…!」

「じゃあ何で動いてんだよ、普通クマのぬいぐるみが動くわけないだろ!」

「し、知らないモフ!」

「秘密にしてやるから言ってみろ…」

「間もなく目的地に着きますよ!降りる準備をしてください!」

俺はモフルンに隠し事の内容を聞こうとしたが、丁度聞いたその時、先生が間もなく目的地に着くから降りる準備をするようにと皆に声をかけたので聞くことが出来なかった。俺はモフルンを見らいいを起こす。

「…うん?もう着いたの?」

「着いたぞ、座禅体験の場所に」

みらいを起こした後、一緒にバスから降りて皆が整列している所に向かう。そして、整列が完了した後俺らは座禅する場所へと移動し、

早速、座禅体験が始まった。今回の座禅は短い口ウソクが溶けきるまでで何分やるのかは分からない。

座禅をし始めてから数分後、集中力が途切れ、みらいは姿勢を少し崩してしまふ。それを見た和尚は警策でみらいの肩に喝を入れた。みらいは痛がっていたが、みらいを心配してみらいの方向を見ると自分まで喝を入れられてしまふ為、俺は心の中で耐えろ！みらい！と思いつつ座禅を続けていた。

そして、約数十分後、長かったような短かったような座禅が終わった。最後に、喝を受けてみたい人はいるか？と和尚が言う。

「はいはい！戦兎くんが受けたいそうです！」

「ええっ!?俺そんな事言っていないぞ！」

和尚が受けたい人はいるか？と聞いた時、みらいが手を上げたのでまた受ける気なのか？と思ったがそれは違い、俺に喝を入れてもらう為、手を上げたらしい。みらいは俺の方を見ながら怪しい笑みを浮かべている。どうやら俺はみらいにハメられたらしい。俺の元に和尚がやって来て、警策で俺の肩に喝を入れる。

「いつてえ!!」

「ふふっ……戦兎くんの顔面白い……!!」

「みらいめ……」

喝を受けた後、俺は自分を小馬鹿にして笑っているみらいを睨みながらそう言った。そして、座禅体験が終わり、バスに乗り込んで次の目的地である映画村にバスで向かっていく。

そして、バスで向かう事数十分、映画村に到着した。バスから降りて映画村の入り口でまたクラス全体で点呼を取ってから映画村の中に入っていく。

中へ入ると、江戸時代の日本のような光景が広がっていた。班別行動でみらい、リコ、ことはの3人と映画村を見て回っていると、突然、忍しのびのような格好をした人が数人現れてみらい、リコ、ことはを捕らえる。

「急に何なのよ！やめなさい！」

「戦兎くん!!助けて！」



リコは忍の手を振り解こうと必死に抵抗するが、忍の方が力が強かった為、振り解けなかった。みらいに助けを求められた俺は3人の見てる前で初めてビルドの力を使う。

今回は相手が忍という事でニンジャフルボトルとコミックフルボトルを使う。二つのフルボトルをドライバーに挿して、ドライバーのレバーを回し、俺は仮面ライダービルド ニンニンコミックフォームに変身する。

「戦兎くんが変身した!?!」

「はー! かつこいいー!!」

「世界を守る為に戦う戦士がプリキュアの他にもいるとは…」

俺は四コマ忍法刀のトリガーを一回だけ引いて、分身の術を発動させて自分の分身を三体出す。そして、忍に攻撃をしようとしたその時、どこからか男性がやって来て忍に指示を出す。指示を出された忍はみらい達を離し、男性の元へいく。

「いや〜驚かせてごめんね!」

「どういう事?」

「これは僕たちの芝居だよ! さあ、映画村を案内するからついて来て!」

みらい達を捕らえていたのが芝居だと分かった俺は変身を解いて男性の後について行く。

その後、俺たちは男性に案内してもらい、映画村の全体を見て回った。映画村の全体を回り終わった。気づけば、集合10分前になっていた。俺たちは男性に礼をしてからクラスの集合場所へ向かった。

クラスの集合場所で担任の話を聞いた後、バスに乗って今日泊まる宿へ向かう。宿へ向かうバスの中、みらいが俺のリュックサックの中からビルドドライバーを取り出した。

「戦兎くんって私達のように変身するんだね!」

「ん? 私達のように?」

「あつ、今のはその…」

みらいは口を滑らせて自分達が俺のように変身出来ることを教えてくれた。みらいはごまかそうとしているが、みらいが口を滑らせて

言ってしまった言葉をしっかりと聞いていた俺にはごまかしは効かなかった。

「実は…私、プリ…」

「皆さん、もうすぐで宿に着きます！降りる準備をしてください！」

折角、みらいから何か情報を得ることが出来そうだったのに、先生が皆に降りる準備をするよう指示したせいで聞く事が出来なかった。

宿に着いた後、部屋に行き、運ばれて来た料理を食べて、大浴場に入った後、歯磨きを済ませてまた1日目と同じように布団に入る。

「(プリ…？何なのだろうか？明日、みらいに聞いてみるか)」

俺は言葉の続きを最終日の明日に聞く事にした。

「(戦兔くんの変身したあの姿、一体何なんだろう？明日、戦兔くんに聞いてみよっと！)」

一方のみらいも俺の変身した姿が気になっていたようで、最終日の明日、みらいも変身した姿について俺に聞く事にしたらしい。2人は今日の疲れのせいか同室の皆よりも早く眠りについた。

楽しい修学旅行も2日目が終わわり、明日は遂に最終日！2人にとって最高の修学旅行になるのだろうか…

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

### 13. 紅に染まる京都！ワクワクの旅行！〜最終日編〜

修学旅行最終日の朝、皆より早く起きた俺は着替えを済ませて必要な荷物をリュックサックの中に入れてしまう。そして色んなものが詰まっているポストンバッグの横に並べて、いつでも部屋を出れる状態にした後、集合時間近くになるまで待ち続けた。

約20分後、集合時間の近くになったので俺はリュックサックを背負い、ポストンバッグを右手に持ちながら同室の同級生と部屋を出ていく。集合して先生の話や宿のスタッフへのお礼をした後、バスに乗り込んでいく。

バスに乗り、自分の席へ行くときみらいがいた。みらいは目をキラキラ輝かせながら付箋が貼られまくった”京都の料理”という本を読んでいた。

「お前ってそんな食いしん坊キャラだったっけ？」

「食いしん坊じゃないけど、今日行く食べ放題にどんな料理があるのか想像しちゃって！」

「どうせまたワクワクもんだあ！とか言うんだろ？」

「ぶぶっ…！全然、似てない！」

俺はみらいが後に言うであろう言葉を予測し、高い声を出してみらいたいな感じにワクワクもんだあ！と言ったが、みらいは似てる！とは言わず、笑いながら俺に全然似てないと言った。

「ってか今日は修学旅行最終日だな、修学旅行どうだった？」

「まだ分からないよ！」

「何で？」

「だって、修学旅行終わってないもん！」

俺はみらいに修学旅行は楽しかったかどうかを聞くと、みらいはまだ分からないと言った。確かに、みらいの言った通り修学旅行が終わるまでは最高かどうかは評価できない。聞くのが少し早かったようだ。

それから少しの間、みらいと話しているとバスが食べ放題のお店に向けて走り出した。俺とみらいはバスが走り始めてすぐに寝てしまった。リコに体を揺すられて起きた時にはバスは既に食べ放題のお店に着いていた。俺とみらいはバスから降りて食べ放題のお店の中へ入っていった。中にはお土産屋や生八ツ橋製造工房などがあった。そして、三階へ上っていき、席に座った後、先生の合図とともに食べ始めた。

「戦兔くん生八ツ橋美味しいね〜！」

「お前ただけ生八ツ橋取ってきてんだよ…」

みらいのビュツフエプレートを見てみると大量の生八ツ橋が盛られていた。これでは偏った食事になってしまうと思った俺はご飯と味噌汁とサラダを持ってきてみらいの座っている場所の周りに置いた。

「サラダ!?ここまで来てサラダはちよつと…」

「ダメだ！サラダは食べとかないと！」

「…はあ〜い」

サラダをあまり食べたがらないみらいだったが、俺がサラダは食べなきゃダメだ！と言うと、暗い表情を浮かべながらはあ〜いと言い、サラダを食べ始めた。そして、皆がお腹いっぱいになった所で食べ放題終了となり、皆は食べ放題終了後、二階にあるお土産屋で家族や親戚にお土産を買っていた。

「リコ、万丈くんには何か買わないの?」

「彼のならとつくに買ってあるわ!」

リコは京ばあむや阿闍梨餅あじやりもちなど万丈に買ってくのはあまり似合わない物を見ていると思いい、みらいが万丈に買ったのかどうかを聞いた所、万丈宛のお土産はとつくに買ってあるとリコは言う。

一方の俺はみらいが修学旅行に参加しているのにも関わらず、みらいに何か買っていないかなと考えていた。

俺が手に取ったのは花かんざしだった。みらいが花かんざしを付けている所を想像して良いかも!と思った俺は花かんざしを買った。そして、みらいの両親と祖母に向けては定番である生八ツ橋を買っ

た。

お土産を買う時間が終わり、俺たちは土産袋を両手に持ちながらバスに乗り込んでいく。京都から津成木町まではバスで帰るらしく、何時間かかるか分からないので俺はバスに乗り、津成木町に向けて走り始めた頃に寝てしまった。みらいは俺が寝たのを確認すると、俺の右腕に自分の左腕を組んで俺の右肩に頭を寄りかかせながら眠りについた。

そんな二人の様子を見ていたりコは温かい目でその様子を見ながらフツツと微笑む。隣の席のことはもリコ同様に微笑んだ。

そして、それからしばらく経った時、俺が目を覚ますとバスは津成木町を走っており、もうすぐ到着場所に着きそうだった。俺はみらいを起こしてもうすぐ着くぞと伝える。

「…ふわああ」

「やつと起きたか!」

「…どうかしたの?」

「バスから降りたら修学旅行どうだったか聞かせてもらおうぜ!」

みらいは可愛いあくびをしながら起きた。まだ起きたばかりで寝ぼけていて現在の場所と状況の把握が出来ていなかった。それから約10分後、バスが到着場所に着き、俺とみらいはバスから降りた。

「みらい、修学旅行はどうだった?」

「最高だった!」

「旅行の中でも何が最高だった?」

「1日目の後半とバスかな!」

「意外な組み合わせだな…なんでそれが最高だったの?」

「戦兎くんの隣にいられたから最高だったの:~/」

俺はみらいに何が最高か聞いた所、みらいは1日目の後半とバスが最高だったと答える。何故、その二つが最高だったのかを聞くとそれは、俺の隣にいられたからだとみらいは言う。みらいのその答えを聞いた俺は頬が赤く染まり、しばらくの間、両手で顔を覆っていた。

「ふふつ…戦兎くんこれからもずっと一緒だよ…!」

みらいは俺の耳元でそう呟きながら、俺の赤く染まっている頬にキ

スをする。

そして帰り道、俺とみらいは手を繋ぎながら朝日奈家に向かって帰っていくのだった。

紅に染まる京都！ワクワクの旅！編

Fin.

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 14. リコの誕生日！皆からの最高のプレゼント！

11月12日、晴天に恵まれた今日はリコの誕生日。リコを除いた俺とみらいと万丈とことは朝日奈家の庭で誕生日会の準備をしていた。万丈は準備している途中、リコの部屋に行き、リコの様子を伺う。

「はあ…誕生日かあ…」

空いている扉の隙間から部屋を覗いてみると、リコがため息をつきながら少し暗い表情を浮かべていた。万丈はリコの部屋に入り、誕生日なのに何故、暗い表情を浮かべているのかを聞いた。

「だって恥ずかしいもん…」

「恥ずかしいって何が恥ずかしいんだ？」

「私の家族が無節操にご近所さんをパーティへ誘ったり、装飾を派手にしたりするから恥ずかしいの…」

「おまえの家族来てないぜ？そんな心配する必要ないんじゃないか？」

「今から来るわ…！」

ピンポーン！

リコがそう言うと共に朝日奈家のインターホンの音が家中に鳴り響く。インターホンの音を聞いたリコは来たのが誰か分かっているのか、しよんぼりと肩を落としたがら玄関前まで歩いていった。

リコの後に続いて玄関へ向かうとそこには多くの荷物を抱えたりコノ母親らしき人物が立っていた。

「リコ、ハッピーバースデー！」

「お、お母様…！」

「あら、そちらの方は？まさか、リコのボーイフレンド？」

リコの母は俺を見てリコにそう聞いた。母親にボーイフレンドかどうかを聞かれた瞬間、リコの頬は赤く染まった。だが、リコは母親にバレると家族の皆に万丈とそういう関係である事が広まってしまおうと思ひ、否定する。

「ち、違うしー！」

「フフツ…！顔赤いわよ！」

「き、気のせいよ……／＼」

リコはそう言って再び自分の部屋へ戻っていく。リコの母はその後、朝日奈家の庭に行き、誕生日会の会場の準備を手伝い始める。リコの母は派手な装飾をしていく。

「あんなに親に愛されててリコは幸せ者だなあ……俺なんて派手のはの字もないからな」

万丈は独り言でそう呟く。万丈はその後、会場準備を再び手伝い始め、準備を始めてから約30分後、会場の準備が完了する。みらいは誕生日会の主役であるリコを呼びに朝日奈家の中へ入っていく。そして、約2分後、みらいがリコの手を引いて家の中から出てくる。

「皆、主役の登場だよー！」

皆はリコの登場に合わせて盛大に拍手をする。リコが辺りを見ると、母だけでなく姉や父までいた。そして、リコが席に座ると共に皆はクラッカーの紐を引っ張り、一斉にアレを言う。

「リコ、お誕生日おめでとう！」

リコは目立ってて恥ずかしいのか、顔を赤く染めながら、下を向いていた。万丈はそんなリコにこう言う。

「こんな派手に祝ってもらえるのはなあ……愛されてるって証拠なんだ！だから、恥ずかしがる必要はねえ！」

「愛されてる……か」

リコは家族の方を見ながら今までの誕生日会の思い出を回想する。確かに、母は毎年、私が好きな本の読み聞かせをしてくれるし、父は珍しい鉱石という地味なプレゼントだが、よく探さなければ拾えるようなものではないし、姉は1万年使ってもインクが切れないペンというこれからの人生に役立つ物をくれた。

毎年、毎年誕生日会が派手で恥ずかしがっていたリコは自分が愛されてるからこそこういう誕生日会をしてきている事が分かり、自分は幸せ者だったんだと今、気づいた。

先程まで顔を赤くしながら下を向いて恥ずかしそうにしていたリコは顔を上げてテーブルの上に置いてある料理を食べようと手を伸ばす。そしてフォークで料理を取って口に運んでいたその時、ドンヨ



クバルという叫び声が聞こえてきた。俺とみらいと万丈とリコとことのはの5人は叫び声が聞こえた方へ向かっていった。

叫び声のする場所に着くと、そこにはタコと電球が混ざったような姿をした怪物がいた。

「オクトパスライト…ベストマッチじゃねえか…!」

「言われてみれば確かに、あの怪物ベストマッチだな!」

俺と万丈が話していると、怪物は俺と万丈の方へ身体を向けて、体についているタコ足で攻撃をしてきた。これは危険だと感じた俺と万丈はビルドドライバーを取り出して腰に装着する。そして、俺は二つのスロットにラビットフルボトルとタンクフルボトルを挿す。万丈はドラゴン型自立行動メカであるクローズドラゴンにドラゴンフルボトルを挿してからドライバーのスロットに挿す。

『ラビット!タンク!』

『best match!』

『wake up!Cross—Z dragon!』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、俺と万丈はビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『Are you ready?』

「変身!」

レバーを回すと、前方と後方にスナップライドビルダーが現れる。俺と万丈は変身!という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれて変身する。

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエーイ!』

『Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON!Yeah!』

変身した俺はドリルクラッシャーを持ち、万丈はビートクローザーを持ちながら怪物に向かっていく。万丈はビートクローザーのグリップエンドを一回引つ張り、刀身に蒼炎を纏わせて待機音を少し流した後、トリガーを引いて斬撃を放つ。

『ヒッパレー!スマッシュヒット!』

怪物は万丈からの攻撃を受けて怯んだ。それを見た俺はチャンス

だと思い、ドライバーのレバーを再び勢いよく回して必殺技を発動する。

『Ready go!』

『ボルテックフィニッシュ！イエーイー！』

ドライバーから音声が届いた後、俺は地面深く潜り隆起した地面から跳躍、x軸で怪物を拘束し、放物線の上を滑るように加速し途中のpointでさらに加速して怪物に向かっていく。

必殺技が決まり、怪物は爆発と共に消えていく。そして、怪物の元になっていたタコと電球はそれぞれ元の場所へと戻っていった。

俺と万丈は変身を解いてみらいとリコとことはの元へ向かう。3人は俺だけでなく、万丈まで変身した事に驚いていた。

「ぼっ、万丈くん!?あの力は何なの!」

「世界を守る為の力だ!」

「カッコいいなあ…!私にもそのアイテムちょうだい!」

「ダメだ!」

「…そっか」

みらいはフルボトルを欲しがったが、俺はみらいが正しい事だけではなく、難しい事までフルボトルに頼ってしまい、そうなる则ち自分の力で解決しなくなってしまう思い、フルボトルは渡せないとみらいに言った。

一方、リコと万丈は公園の木の陰に隠れて何かをしていた。

「お前に花を108本ほど買って置いたから部屋に戻って見といてくれ!」

「108本も!?何でそんなに?」

「…お前が好きだからだ!」

「万丈くん…!」

リコは万丈にそう言われて頬を赤く染める。その後、万丈は頬を赤く染めているリコの手を引いて俺たちと再び合流し、朝日奈家に帰って誕生日会を再開した。

誕生日会が終わった後、リコが自分の部屋に戻ると部屋には108本の薔薇が置かれていた。リコは薔薇108本に何の意味がある

のかをネットで調べる。

「万丈くん、最高のプレゼントをありがとう：／／／」

薔薇108本の意味を知ったりコは再び頬を赤くし、部屋に置かれた薔薇108本を見つめながらそう言うのだった。

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 15. 皆を守る為の覚悟!?! 戦兎が思う正義のヒーローー!

ある平日の朝、俺がビルドの武器であるドリルクラッシュヤーのメンテナンスをしていると、みらいがモフルンを抱えて地下にある俺の部屋にやってきた。

「ふああ…何してるの〜?」

「武器のメンテナンスをしてる!メンテナンスが終わったら何かで試したいからモフルン貸してくれないか?」

みらいは可愛いあくびをし、眠い目を擦りながら俺にそう聞いてきた。この時の俺はみらいにとってモフルンがどれだけ大事なものなのかを理解していなかった為、みらいからモフルンを借りてドリルクラッシュヤーのメンテナンス後の威力がどうなっているかの実験台にしようとしていた。

「モフルンに酷いことしないで!」

「そんな強く攻撃しないから!」

モフルンを実験台にすると聞いたみらいはさつきまで眠そうにしてたのが嘘のようなくらいにまで目を見開き、モフルンをギュツと抱きしめて俺の差し出した手からモフルンを遠ざける。

「…戦兎くんなんてもう知らない」

俺はモフルンを借りようとみらいにしつこく迫ってしまった。自分の大切な友達をそんな目で見られてショックを受けたみらいは下を向きながら俺の部屋を去っていく。俺の部屋から出て、ドアを閉める時、みらいは小さな声で俺にそう言った。

みらいにそう言われた俺はみらいに嫌われたと思い、目の前が真っ暗になり、自分の心が壊れていくのを感じた。心に傷を負った俺は再び布団に潜り、寝てしまった。結局、その二度寝のせいで遅刻ギリギリに起きてしまい、起きた後の着替えも中々進まず、遅刻してしまった。

「桐生、お前が遅刻なんて…一体、どうしたんだ?」

「…特に何も」

俺は先生にそう言い、暗い表情を浮かべた顔を下に向けながら自分の席へ行き、ゆつくりと席に座っていく。隣のみらいを見ると、みらいはリコ達と楽しく話しており、俺と目が合うと険しい表情を浮かべて、くるりと顔の向きを変える。

完全に嫌われた…と更に心に傷を負った俺は授業に集中する事が出来ずにいた。みらいの顔を見るたびに俺は今日の朝、みらいに言われた事を思い出してしまい、精神的に追い込まれていく。

「戦兎くんどうしたの？今日はいつもに比べて元気ないみたいだけど…」

「…大丈夫…さあ、次の授業の準備だ！」

俺が暗い表情を浮かべている事に気付いたリコはどうしたのか？を俺に聞いてきた。本当はリコの言う通り、いつもに比べて元気がないが、人前で弱いところは見せられない為、俺は大丈夫と答える。

一方のみらいは壮太と話していた。いつもなら休み時間になると俺の所に来るはずのみらいが今日は壮太の所にいた。俺はみらいと楽しそうに喋っている壮太が羨ましく思えた。俺もみらいと喋りたいのに…そう思いながら机に突っ伏していると、俺の元にみらいと話していた壮太がやって来て俺の耳元でこう呟く。

「今日から俺が”正義のヒーロー”だ！みらいから信頼を失ったお前なんて”正義のヒーロー”失格だ」

壮太にそう言われた俺はカチンときてしまい、鬼の形相で壮太の胸ぐらを掴んだ。それを見てたみらいは俺と壮太の元にやってくる。

「やめてよ!!壮太が可哀想だよ！」

「……………」

みらいは俺の手を引き離れた後、壮太の手を引いて廊下へと出て行ってしまふ。更に心に傷を負い、俺の心は半壊していた。

俺は自分がみらいの大切な友達にあんな事をしていなければ…と思いつつ再び机に突っ伏して悔し涙を流す。ことは涙を流す俺の頭をさすり、慰めてくれた。リコも大丈夫？と言って心配してくれた。

「なあ、みらい！学校終わったら公園に行かないか？」

「いいよー」

みらいは壮太の誘いに快く応えたものの、いつもと何かが違うような気がしていた。

そして放課後、壮太とみらいは帰りの支度を済ませた後、公園に向かって歩いていった。壮太は公園に向かって歩いていく途中、みらいにこう言う。

「みらい、今日から俺がお前の”正義のヒーロー”だからな！どんな状況でも必ずお前を守ってやる！」

「ふふっ…ありがとう！」

普通、守ってやる！と言われると、キュンとするはずなのだが、みらいの心はキュンとしなかった。カッコいい言葉なのに何でキュンとこないのだろうか？みらいがそう考えていると、みらいの頭の中に俺の姿が浮かび上がった。

「戦兎くん…」

「どうかしたのか？」

「ううん、何でもないよ！さあ、行こう！」

みらいは無意識のうちに流れた少量の涙を手で拭いてから再び公園に向かって歩いていった。

公園に着いた2人は近くのベンチに座って仲良く話している。だが、そんな2人の近くに突如、狼のような爪や姿をし、スマホのようなものを背中に付けている怪物が現れた。みらいは変身しようとしたが、壮太が隣にいるし、リコがいないという事から変身が出来なかった。

みらいがどうしようか戸惑っていると、怪物の狼のような鋭い爪がみらいに迫っていく。壮太はその場から逃げて木陰に隠れてしまう。みらいは逃げ遅れてしまい、怪物の攻撃を受けてしまうのを覚悟して目を瞑ったその時、誰かがみらいに抱きついてみらいの代わりに怪物の攻撃を受けた。

「ぐはあ…！」

「…戦兎…くん!?!」

みらいを守ったのは俺だった。俺は鋭い爪に背中を引っ搔かれたせいで背中が血だらけになっていた。

「私、戦兎くんにあんな冷たくしてたのに…何で守ったの!？」

「それは俺が正義のヒーローだからだ…!」

俺は怪物の攻撃にびびって木陰へ逃げてしまった壮太の方へフラつきながらも身体を向けて壮太にこう言う。

「皆を守る為に自分の身を投げ打つ覚悟がないお前に正義のヒーローを名乗る資格はない!」

「信頼がない正義のヒーローなんていないだろ!」

「確かにいない…だけど、最初から信頼がある正義のヒーローもいない!正義のヒーローは皆の安全を守り続ける事で信頼を得ていくんだ!」

「…それがお前が思う正義のヒーローか。正義のヒーロー失格なんて言って悪かった…戦兎、お前は真正銘正義のヒーローだ!」

「ああ!」

俺は笑顔を浮かべて壮太にそう返事をしながらドライバーを腰に装着する。そして、ドライバーの二つのスロットにニンジャフルボトルとコミックフルボトルを挿す。

『ニンジャ!コミック!』

『best match!』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、俺はビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『Are you ready?』

「変身!」

レバーを回すと、前方と後方にスナップライドビルダーが現れる。俺は変身!という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれて変身する。

『忍びのエンターテイナー!ニンニンコミック!イエーイ!』

変身後、俺は四コマ忍法刀を持ちながらスマホと狼が混ざったような容姿をした怪物に向かっていく。

『分身の術！』

俺は四コマ忍法刀のトリガーを一回引いて分身の術を発動させる。出現した分身三体と共に攻撃していく。

俺と一体の分身は怪物の身体を攻撃し、残りの分身二体は怪物の背中に付いているスマホを破壊していく。

『火遁の術！』

『風遁の術！』

二体の分身は火遁の術、風遁の術を発動させて「火炎斬り！」「竜巻斬り！」という音声が鳴った後、四コマ忍法刀に火炎を纏った斬撃と竜巻を纏った斬撃を繰り出す。背中のスマホが破壊され、怪物は弱体化していく。それを見た俺はドライバーのレバーを再度、勢いよく回して必殺技を発動させる。

『Ready go！』

『ボルテックフィニッシュ！イエーイー！』

俺は怪物の目の前に煙幕を張り、煙幕で油断した怪物の背後に回り込み紫色の巨大手裏剣を投げつけ、リアライズペインターで実体化させた漫画の擬音を敵にぶつけていく。

必殺技が決まり、怪物は爆発と共に消えていき、怪物の元となったスマホと狼はそれぞれ元の場所に戻っていった。

変身を解いた後、俺はみらいの元へ歩み寄っていく。

「お前の大切な友達を実験台にしようとしちゃってごめんな」

「私こそ冷たくしちゃってごめんね！」

俺はみらいの元へ歩み寄った後、朝、モフルンを実験台にしようとした事を謝った。俺が謝ると、みらいも俺に冷たくした事を謝ってくれた。

怪物の攻撃を受けた時にできた背中の中の傷をずっと耐えていた俺はみらいの許してもらった後、みらいの目の前で倒れた。

「戦兎くん!?!しっかりして!!戦…くん!…戦」

みらいが俺の心配をしてくれているが、俺の意識は段々と遠のいていき、みらいの声も聞こえなくなっていく。

倒れてから何時間経ったのだろうか？気づくと、窓から見える空は



既に真つ暗になっており、俺の寝ているベッドの周りにはみらいとみらいの両親と祖母、万丈、リコ、ことはがいた。

「…戦兎くん!」

「いてっ!今は抱きつくな!背中が痛い!」

俺が目冷ますと、みらいは大粒の涙を流しながら俺に抱きついてきた。みらいの手が俺の傷口に触れた為、背中に痛みが走った。俺はみらいに今抱きつくのはやめろと言ったが、みらいは俺が目覚ましてくれて本当に良かったのか、背中に回した腕をギュツと締めてしばらくの間、俺を抱きしめていた。

その後、皆は俺の病室を出ていく。みらいは皆が出ていった後、ベッドで横になっている俺にこう言う。

「私、戦兎くんにあんな酷い事言っちゃったけど、戦兎くんの事好きだからね:／／」

「フツ、俺もだ!」

みらいは顔を赤くしながら俺にそう言い、俺の病室から出ていった。俺はみらいが病室を出ていった後にそう返答した。

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 16. 私達がやらなきや誰がやる？3人の決断！

スマホと狼が混ざったような容姿をした怪物を倒した翌日の朝、みらいは俺の病室に訪れていた。

「折角の休みなのに俺の所に来て時間を費やすのはもったいないぞ？」

「私は戦兎くんの隣にいる時間が1番有意義な時間だと思ってる！」

みらいはそう言いながら、俺のベッドの空いているスペースに座り、半胎児型と呼ばれる寝相でベッドに横になっていている俺の左手を右手でぎゅっと握る。

「家族という時間は”有意義な時間”じゃないのか？」

「有意義な時間だよ！でも、1番は戦兎くんの隣にいる時間だよ！」

「そうか…」

と、俺とみらいが俺の病室で2人きりの時間を静かに過ごしているとき、突然、俺の病室の扉が開いた。俺とみらいはみらいの両親にこんなところを見られては困ると思い、急いで繋いでいる手を離す。

「戦兎！来てやったぞ！」

「なんだ万丈か…」

病室に入って来たのがみらいの両親ではなく、万丈だったので俺はホッと安堵の溜息をついた。

「見舞いに来てやったのにその反応かよ…」

「お前とはいつも一緒にいるからな」

「確かにそうだけだよお…」ボソッ

万丈は自分が見舞いに来て、俺がもつといい反応をしてくれる事を期待していたらしいが、微妙な反応だったのでどこか不満そうな顔をしている。だが、俺が何故、微妙な反応をしていたのかを万丈に説明すると、万丈は確かにそうだけだよお…と小声でそう言い、納得してくれた。

「つてかお前、当分の間は戦えないんだよな？」

「ああ、この怪我で戦うのは無理だ。だから、みらい達を頼んだぞ！」

「分かった！みらい達は俺が守る！」

万丈はそう言いながら、持っていた紙袋を俺の寝ているベッドの近くにある椅子の上に置いてから病室を出ていった。

万丈が病室から出ていった後、みらいに紙袋を取ってもらい中身を確認すると、紙袋の中には沢山のプロテインラーメン 昇龍が入っていた。

「この世界にもあったのか!？」

「最近このラーメンのCM流されてるよね!」

「そうなのか!？」

俺は前の世界で万丈が食べていたプロテインラーメン 昇龍がこの世界にもある事に驚いた。しかも最近、番組の合間のCMの時にこのラーメンのCMが流されているらしい。俺はこの世界に来てからテレビをあまり見ていなかったので今までこのラーメンのCMがある事に気付かなかった。

その後、みらいと話をしていると、いつの間にか時刻は13時になっていた。

「じゃあ私、そろそろ帰るね!」

「分かった!また来てくれよな!」

「うん!また来るね!」

みらいは自分の左手首につけている腕時計を見て、1番有意義な時間とはいえ流石に長く居すぎてしまったと思い、俺にそろそろ帰ると言い、病室を出て自分の家へ帰っていった。

みらいが帰ってから数分後、俺がやる事がなく暇だなど思いながら目を瞑って寝ていると、外からドシン!という崩壊音が聞こえてくる。カーテンをめくって窓の外を見ると、少し離れた場所に背中にヘリコプターのプロペラ付いていて全身が薔薇の棘のような物に覆われている怪物がいた。

「万丈!怪物が現れたぞ!」

「分かった!」

俺は万丈に電話を掛けて怪物が現れた事を教える。万丈は分かった!と言って電話を切り、ドライバーとドラゴン型自立行動メカのクローズドラゴンを持って、崩壊音を頼りに怪物がいる場所へ向かって

いく。

みらいとリコことはこの3人も崩壊音を聞いて、怪物が現れたと思  
い、万丈の後に続いて怪物がいる場所に向かっていった。

怪物がいる場所についた万丈は早速、ドライバーを腰に装着し、ド  
ラゴン型自立行動メカであるクローズドラゴンにドラゴンフルボト  
ルを挿してからドライバーのスロットに挿す。

『Wake up! Cross-Z dragon!』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、万丈はビルドドライバーの  
レバーを勢いよく回す。

『Are you ready?』

「変身!」

レバーを回すと、前方と後方にスナップライドビルダーが現れる。  
万丈は変身!という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれ  
て変身する。

『Wake up burning! Get CROSS-Z D  
RAGON! Yeah!』

変身した万丈は左手にビートクロウザーを持ちながら怪物に向  
かっていく。

ビートクロウザーで何回か斬りつけるが、怪物は全身の棘を上手く  
使って斬撃を防ぐ。普通の攻撃は効かないと思った万丈はビートク  
ローザーのグリップエンドを二回引く。万丈がビートクロウザーの  
グリップエンドを二回引くと、ビートクロウザーの刀身から波形状の  
エネルギー刃が伸びる。万丈はビートクロウザーを何回か振り下ろ  
し、怪物に衝撃波を飛ばしていく。

『ヒッパレー! ミリオンヒット!』

技が当たり、怪物は怯んだと思われたがあまり効いておらず、万丈  
は怪物が飛ばしてきた茨の鞭に縛られてしまい、身動きが取れなく  
なってしまう。怪物は背中のプロペラを身動きが取れない万丈に投  
げつける。高速回転しているプロペラが何回も万丈に命中し、攻撃を  
受けた万丈の変身が解けてしまう。

「万丈くん!?!」

「リコ、くるな…」

「アイツが戦えない今、俺が守らなきゃいけないんだよ…!! アイツが大切にしているこの世界の愛と平和を!」

リコは傷だらけの万丈の元に駆けつけるが、万丈はリコが来る前にフラフラしながら立ち上がり、危険行為である”再変身”をしようとしていた。

「みらい、はーちゃん! 皆にプリキュアだって事がバレちゃいけないとか気にしてる場合じゃないわ! 戦うわよ!」

「でも…」

戦えない人の意思を背負って戦っている万丈の姿を見ていたリコはプリキュアの正体が自分達である事がバレるのを気にせず戦おうとみらい達に言うが、みらいとことははまだ正体がバレる事を気にしており、変身する事を躊躇していた。

「私達がやらなきゃ誰がやるの? 戦兔くんが怪我で入院してて、万丈くんがやられてしまった今、私達にしかあの怪物を倒すことはできないわ!」

「リコ…! 分かった!」

リコの言葉を聞いたみらいとことは今、自分達にしかこの怪物を倒せないんだ! 躊躇している場合ではない! と思い、リコに分かった! と言い、正体がバレる事を気にせず、戦う事を決断する。

「キュアアップ・ラパパ! ダイヤー!」

みらいとリコがそう唱えると、リンクルストーン・ダイヤがモフルンの胸元部分に挿し込まれていく。

「ミラクル・マジカル・ジュエリー!」

モフルンにリンクルストーン・ダイヤが挿された状態でそう唱えると、2人の服装や髪型、背丈が変化していく。

「キュアアップ・ラパパ! エメラルド!」

ことはがそう唱えると、リンクルストーン・エメラルドがリンクルスマホンという変身アイテムに挿し込まれていく。その後、リンクルスマホンの画面にアルファベットのfを書くとき、F e l i c e という

文字が浮かび上がる。

「フェリーチェ・ファンファン・フラワーレ！」

ことはがそう唱えると、みらいとリコのように服装や髪型、背丈が変化していく。

「2人の奇跡！キュアミラクル！」

「2人の魔法！キュアマジカル！」

「あまねく命に祝福を！キュアフェリーチェ！」

「魔法つかいプリキュア!!」

万丈はいきなり自分の前で変身した3人に驚き、何かを言おうとしたが、声が出なかった。

「万丈くん！離れてて！」

3人が変身するというこの状況を理解出来ていない万丈は何をすればいいのか分からず、その場から動けずにいたが、マジカルに離れて！と言われると、素直に怪物から少し離れた場所に行き、怪物と戦う3人を見ていた。

怪物は先程、万丈に大ダメージを負わせた背中のプロペラを3人に向かって投げつけるが、フェリーチェがミラクルとマジカルの前に出てフラワーエコーワンドというフェリーチェ専用の武器にリンクルストーン・ピンクトルマリンをセットして魔法を発動させる。

「リンクル・ピンクトルマリン！」

フェリーチェがそう唱えると、フラワーエコーワンドの先端から花弁状のバリアフィールドが展開し、怪物のプロペラ攻撃を防いだ。その後の茨の鞭も全て弾いていく。

「ミラクル、マジカル！決めてください！」

「分かった！」

フェリーチェにそう言われたミラクルとマジカルはリンクルステッキを取り出し、リンクルストーン・ダイヤをリンクルステッキに挿して必殺技を発動させる。

「永遠の輝きよ、私達の手に！」

「フルフルリンクル！」

ミラクルとマジカルがそう唱えると、自分達の前方に魔法陣が現れ

る。そして、前方に描いた魔法陣から産み出したダイヤモンドの中に敵を閉じこめ、宇宙の果てまで飛ばしていく。

飛ばされていった怪物は花火のように爆発して浄化されていき、怪物の元となったヘリコプターと薔薇はそれぞれ元の場所に戻っていった。

3人は変身を解いた後、万丈の元に行つて肩を貸そうとするが、万丈はこれくらい大丈夫だと言い、フラつきながらも自力で歩き、3人と共に朝日奈家に帰っていった。

朝日奈家に帰つた後、みらいの両親と祖母が万丈の怪我の心配をして様々な処置を施してくれた。

その後、頑張つた万丈の為に料理を作つたりリコが料理を持って地下にある万丈の部屋に行つて扉を開けて中に入るが、万丈は既に寝てしまっていた。

「万丈くん、戦う姿とてもかっこよかったわよ……!」

リコは寝ている万丈の頭をさすりながらそう言い、料理を部屋のテーブルの上に置いてから万丈の部屋を出ていくのだった。

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 17. 冬が来た！クリスマスの準備！

次の日の朝、みらいはまた俺の病室を訪れていた。窓の外を見ると、雪が深々と降っている。みらいは左手を窓に付けて顔を下に向け、悲しげな表情を浮かべながら俺に話しかけてきた。

「…戦兔くん、いつ戻ってくるの？」

「あと少しで戻れると思う！だから、そんな悲しそうな顔するな！」

俺は悲しげな表情を浮かべているみらいの頬を両手で包み、笑顔を浮かべる。すると、先程まで暗く悲しげな表情を浮かべていたみらいの顔は次第に明るさを取り戻していき、いつものような笑顔を浮かべるまでになった。

「クリスマスまでには帰ってきてほしいな〜！」

「安心しろ！クリスマスまでには必ず帰ってくる！」

「分かった！私、待ってるね！」

みらいはそう言い、にこやかな笑顔を浮かべながら俺の病室を出ていく。

その頃、朝日奈家では部屋の模様替えが行われていた。万丈はみらいの父親である朝日奈大吉と共にクローゼットからこたつを出していた。

「いや〜万丈君がいてくれたおかげで楽にこたつを出せたよ！」

「居候させてもらってる身ですし他にも手伝うことあれば手伝いますよ！」

「よ！」

「おお！それは助かる！じゃあ、物置からストーブを持ってきて！」

「分かりました！」

万丈は朝日奈大吉に物置からストーブを持ってきてと頼まれ、玄関の扉を開けて朝日奈家の庭にある物置へ向かっていった。

一方のリコとこととはは掛け布団、敷き布団を夏用の物から冬用の物に変えたり、もうすぐクリスマスという事で部屋に飾り付けをしたりしていた。

「ふう…私達の部屋の飾り付けは大体終わったから次は万丈くと戦兔くんの部屋も飾り付けをしようかしら！」



「はー！いいねー！」

自分達の部屋の飾り付けを終わらせたリコとことは地下にある万丈と戦兎の部屋へ行き、飾り付けをし始めた。ことはが万丈の部屋に入ると、中にはランニングマシンやベンチプレスの器具があったりした。

「うわあ…毎日鍛えてるのか…って事は海老フライじゃなくて筋肉海老フライなのか」

ことはは近くにあったダンベルを持ってみたが、万丈が持つのに丁度いくらいの重りがセットされていた為、持ち上げることは出来たものの、すぐに床のマットの上に落としてしまった。

「あつ、部屋の飾り付けしなきゃー！」

万丈のトレーニングマシンに夢中になっていたことはは飾り付けをしにきた事を思い出し、部屋の扉にクリスマスリースを飾ったり、壁に飾り付けをしたりしていくのだった。

一方のリコは戦兎の部屋の扉を開けて中に入る。中は万丈のように個性的な部屋ではなく、ネットに載っているような典型的な部屋だった。机の上には1冊のノートがあり、周りに誰もいないかを確認してからノートを開く。すると、ノートには様々な物理法則が書かれていた。リコはまだ中学生の為、物理の事など全く知らなかった。

「凄すぎるわ…！お父様やお母様、お姉ちゃんしか分からないような事が書いてある」

リコが俺のノートを読んでいると、誰かが扉のドアノブを回し、中に入ってきた。リコが扉の方へ目をやるとそこにはみらいがいた。

「あら、みらい！戦兎くんの所から帰ってきたのね！戦兎くんクリスマスまで帰れそうかしら？」

「うん！クリスマスまでには必ず帰るって言ってた！」

「戦兎くん」告白「するんでしょ？」

「うん、まだちゃんと付き合っしてほしいって言ってないからね：／／」

リコがそう言うと、みらいは頬を赤く染め、顔を少し逸らしながらそう言う。

「…ってそんなこと話してる場合じゃなかったわね！部屋の飾り付けをするわよ！」

リコはそう言い、持ってきた箱の中から飾り付け用の物を取り出し、部屋に飾っていく。リコが飾り付けを始めてから少し経ってから、みらいも飾り付けを始めた。

飾り付けを始めてから暫くした頃、外からまた爆発音が聞こえてきた。怪物が現れたと思ったみらい達は飾り付けをやめて朝日奈家の外へ出る。すると、近くにカブトムシのようなツノを持ち、両手にカメラを装着した怪物がいた。

「みらい、はーちゃん！いくわよ！」

「うん！」

「キュアアップ・ラパパ！トパーズ！」

みらいとリコがそう唱えると、リンクルストーン・トパーズがモフルンの胸元部分に挿し込まれていく。

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！」

モフルンにリンクルストーン・トパーズが挿された状態でそう唱えると、2人の服装や髪型、背丈が変化していく。

「キュアアップ・ラパパ！エメラルド！」

ことはがそう唱えると、リンクルストーン・エメラルドがリンクルスマホンという変身アイテムに挿し込まれていく。その後、リンクルスマホンの画面にアルファベットのfを書くと、Felicieという文字が浮かび上がる。

「フェリーチェ・ファンファン・フラワーレ！」

ことはがそう唱えると、みらいとリコの様に服装や髪型、背丈が変化していく。

「2人の奇跡！キュアミラクル！」

「2人の魔法！キュアマジカル！」

「あまねく命に祝福を！キュアフェリーチェ！」

「魔法つかいプリキュア!!」

トパーズスタイルに変身したみらいとリコはハンマーを錬成し、怪物に向かっていく。だが、怪物は両手のカメラを使い、フラッシュを

発光焚いて自分に向かってくるみらい達の視界を遮る。そして怪物はシャッターの眩しきでみらい達が怯んでいる間に頭頂部にあるツノでみらい達を攻撃する。

「うわあ！」

みらい達は木々の方まで吹き飛ばされていく。一方、フェリーチエに変身したことはもリンクルストーン・ピンクトルマリンを使い、花卉状のバリアフィールドが展開させて攻撃を避けながら怪物の元へ向かっていくが、怪物の強靱なツノにバリアフィールドを破られる。そしてみらい達同様に吹き飛ばされていく。

「リコ、みらい、ことは！俺も戦うぜ！」

三人の元へ駆けつけてきた万丈は早速、ドライバーを腰に装着し、ドラゴン型自立行動メカであるクローズドラゴンにドラゴンフルボトルを挿してからドライバーのスロットに挿す。

『Wake up! Cross-Z dragon!』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、万丈はビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『Are you ready?』

「変身！」

レバーを回すと、前方と後方にスナップライドビルダーが現れる。万丈は変身！という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれて変身する。

『Wake up burning! Get CROSS-Z DRAGON! Yeah!』

クローズに変身した万丈は3人を立たせてから3人と共に怪物に向かっていく。怪物が両手のカメラを使ってフラッシュを焚いて相手を怯ませるといふ攻撃ばかりを使う為、攻撃が出来ずにいた。

「そうだ！万丈くん、私がリンクル・アメジストで怪物の背中に繋がるワープを作るから怪物の背中にいったら一気に決めて！」

「分かった！」

万丈はそう言い、ビートクローザーの鏢の中央にロックフルボトルを装填して必殺技を発動する準備をする。

『スペシャルチューン!』

万丈が必殺技を発動する準備をしている間にリコはリンクルス  
テッキにリンクルストーン・アメジストを挿し込んで技を発動する。  
「リンクル・アメジスト!」

リコがワープゲートを出すと共に万丈はワープゲートをくぐり、怪  
物の反対側へ回り込み、ビートクローザーのグリップエンドを一回引  
いた後、トリガーを引いて必殺技を発動する。

『ヒッパレー!スマッシュスラッシュ!』

ビートクローザーの刀身にカギの形のエネルギーを纏わせて何回  
も斬撃を繰り出し、怪物を斬っていく。必殺技を受けた怪物は爆発音  
と共に消えていった。怪物の元となったカブトムシとカメラはそれ  
ぞれ元の場所に戻っていた。

「さて、怪物もいなくなった事だし模様替えの続きやるか!」

万丈はそう言い、3人より先に朝日奈家に帰っていく。みらいとり  
コとこととはは万丈が帰ってから少し経った後に朝日奈家へ帰って  
いった。

みらいは家に帰った後、戦兎の部屋に寄り、花瓶に挿したシラーの  
花を置いていく。

「戦兎くん、寂しいよ…」

戦兎の部屋のベッドに座り、顔を下に向け、少量の涙を流しながら  
そう言うだった。

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 18. 正義のヒーローの復活!

昨日の様に雪が深々と降り積もる気温0。という寒い今日の夜、みらいは戦兔にプレゼントする物を買う為に街を歩いている。夜の街の木々にはイルミネーションが飾られており、いつもは店の灯りや電灯にしか照らされていない少し空虚な夜の街がこのクリスマスの時期だけは珍しく賑わっていた。

「戦兔くん、何をプレゼントすれば喜んでくれるかなあ…」

「みらいー!」

みらいが頭の中で何を渡せば戦兔が喜んでくれるのかを考えていると、後方からリコが手を振りながら、みらいの元へ走ってやって来る。

「こんな遅くに一人で街を歩くなんて…何か買いたいものでもあるの?」

「戦兔くんへのプレゼントを買いたんだけど、何を買えば喜んでくれるのか分からなくて…」

みらいはそう言いながら、下を向いて再び考え込む。考え込んでいるみらいを見たリコは微笑みながらみらいにこう言う。

「みらいから貰って嬉しくないものなんてないと思うわ!」

「だといいいんだけど…」

リコの言葉を聞いたみらいは少し安心感を得るが、私が良いと思っただものあげても喜んでくれるのか?と、心配に堪えないような顔をしている。

「…私も告白する時、万丈くんに何をあげたらいいのか考えてたの」

「告白の時かあ…えっ?今、告白の時って言いました!」

最初は普通に告白の時かあ…と適当に聞き流していたが、「告白した時」を聞いてリコが万丈に告白していたことに気づいたみらいは目を丸くし、リコの両肩に手を乗せ、揺さぶりながらリコにそういったかどうかを聞いた。

「ええ、言ったわよ」

「それで、告白したのはいつ?何をあげたの?クリスマスプレゼント

は決まってるの？」

先程とは打って変わって興奮気味のみらいはリコに質問攻めをする。リコは困ったような顔を一切せずのみらいの質問に答えていく。「ハロウィンパーティーの時よ！あの時は確か…星の形をしたペンダントをプレゼントしたわ！クリスマスは手作りのケーキをあげるつもりよ！」

「決めた！私、写真入りのネックレスをあげる！」

みらいは手作りのお菓子か首飾りかで悩んだ末、首飾りをプレゼントする事にした。

「写真入り」のネックレス！ちなみに、ネックレスには何の写真を入れるの？」

「私と戦兎くんのツーショットの写真を入れる！」

「いいわね！戦兎くん絶対喜んでくれるわ！」

そう話しながら2人はアクセサリー専門の店を目指して雪化粧した街の中を歩いていく。店を目指して歩いていると、雪が強さを増していく。本降りになる前に帰らなきゃ！と思った2人は新雪が積もっている地面を駆け足で進んでいく。

走ったおかげか、割と早く店に着いた。走った疲れからか2人は口からはあ…はあ…と、白息を何回も出す。2人は少し休んで呼吸を整えてから店の中へ入っていく。

「このネックレス買います！」

みらいはそう言いながら、欲しいネックレスを指さす。値段は高いが貯めてきたお小遣いで何とか欲しいネックレスを買う事ができた。

「よし、プレゼント買った！あとはクリスマスが来るのを待つだけ！」

みらいとリコが買い物済ませて店を出て朝日奈家へ帰り、中へ入ろうとしたその時、またいつものように怪物が現れた。今回の怪物は背中全体にハリネズミのような棘を持ち消防車のような両腕を持っている。

「みらい、はーちゃん！いくわよ！」

「うん！」

「キュアアップ・ラパパ！ルビー！」

みらいとリコがそう唱えると、リンクルストーン・ルビーがモフルンの胸元部分に挿し込まれていく。

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ！」

モフルンにリンクルストーン・ルビーが挿された状態でそう唱えると、2人の服は全体的に赤くなり、髪型がツインテールになる。そしてその後、背丈が変化していく。

「2人の奇跡！キュアマミラクル！」

「2人の魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア!!」

みらいとリコは怪物に向かっていく。怪物は消防車のような両腕から放水し、みらいとリコを吹き飛ばす。そして、背中の針を飛ばして追い討ちをかける。みらいとリコの身体に針が刺さりそうになったその時、仮面ライダークロースに変身した万丈とキュアフェリーチェに変身したことはがみらいとリコの前に立ち、技を放つ。

「ヒツパレー！スマッシュヒット！」

「リンクル・ピンクトルマリリン！」

万丈はビートクローザーのグリップエンドを一回引き、刀身に蒼炎を纏わせてから怪物が飛ばした針を斬る。ことははリンクルストーン・ピンクトルマリリンをフラワーエコーワンドにセットして呪文を唱え、フラワーエコーワンドの先端から花卉状のバリアフィールドを展開させて怪物の針を防いだ。

「針を防ぐのにも精一杯なのに放水攻撃まであるとかどうすりゃいいんだよ…」

「お困りのようだな！サブキャラ君！」

「俺はサブキャラじゃねえ！…って戦鬼!?お前、怪我は大丈夫なのか？」

「完治したわけではないが、もう戦えるくらいまでには回復してる！」  
「どうせまた、自意識過剰な正義のヒーローの復活だ！とか言うんだろ?」

「さあ、実験を始めようか…!」

「言わんのかい！」

万丈の前に現れたのは腰にビルドドライバーを装着し、両手にフルボトルを持つ戦兎だった。戦兎はフルボトルを上下に振ってドライバーに挿す。

『スコープオン！ゴールド！』

『bestmatch！』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、俺はビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『Are you ready？』

「変身！」

レバーを回すと、前方と後方にスナップライドビルダーが現れる。俺は変身！という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれて変身する。

『高貴なる毒針！ゴールドスコープオン！イエイ！』

ゴールドスコープオンフォームに変身した俺は怪物に向かっていく。

「おい！両腕のホースに気を付けろ！」

「放水してくる怪物が気温0°の今日の夜に現れてくれて良かったぜ！」

「どういうことなんだ？」

「見てろって！」

怪物は自分に近づいてきた俺に向けて放水する。俺はゴールドフルボトルの能力で怪物の放水に金をぶつける。すると、怪物が放水した水がどんどん固まり氷となった。俺は氷の塊を蹴って怪物にぶつけた。

「何で水が固まるんだよ！」

「それは奴が放つ水が純水だからさ」  
怪物

「どういうこと!?!」

「不純物を含まない純水という水は、不純物」という核が無い為、0°では凍るのが難しく液体として残る。だが、そこに金という0・01%でも不純物を含んだものをぶつければ不純物である金が核になって純水が純水でなくなる為、0°でも凍るようになるのさ」



「…全く理解できねえ」

俺は皆が理解できないような事を言いながら、怪物と戦い続ける。そして、怪物の針を避けながら怪物の目の前に行き、スコープオンフルボットの能力で怪物の額辺りに尻尾を突き刺して毒を注入する。毒を注入された怪物は苦しみ始めた。隙だらけの怪物を見た俺はドライバーのレバーを勢いよく回し、必殺技を発動する。

『Ready go!』

『ボルテックファイニッシュ！イエーイ！』

尻尾で怪物の全身を何回も刺した後、巨大な金塊を作り、怪物に向けて蹴り飛ばす。必殺技を受けた怪物は爆発と共に消えていく。怪物の元となった消防車とハリネズミはそれぞれ元の場所へ戻っていった。

変身を解いた俺がその場で立ち尽くしていると、後方からみらいが勢いよく走ってきて俺に抱きついた。

「戦兎くん！おかえり！」

「ただいま…」

俺はそう返事をしてみらいをぎゅつと抱きしめた。

「イチチャイチャするのは家帰ってからにしろ！」

万丈は俺に背中を向けながらそう言い、歩いて朝日奈家へ帰って行ってしまった。リコことはも万丈の後に続いていく。

「みらい、寒いモフ！」

「モフルン!?ごめんね！早く家に帰ろう！」

「モフー！戦兎も一緒に帰ろうモフ！」

「ああ！」

みらいは左手にモフルンを抱え、右手で俺の左手を握る。俺は冷たいみらいの手を包み込むように握った。

「戦兎くんの手温かいなあ…！」

「だろ！帰る時手を繋ぐと思つて事前に手を温めておいたんだ！お前の手を少しでも温められるようにな」

「フフツ…優しいね！」

「当たり前前的事了ただけだ…／／／」

俺は珍しく頬を赤くさせる。みらいに頬が赤くなっているのを見られないよう顔を合わせずに朝日奈家まで歩いていった。家に帰った後、何週間振りかの自分の部屋に懐かしさを感じると共にクリスマスノの装飾に驚いた。そして、机の上に何かが書いてある紙と花が挿してある花瓶があった。紙には戦兎くんおかえり！綺麗な花あげるね！というみらいからのメッセージが書いてある。俺はみらいがくれたシラーの花を見つめる。

「みらい、寂しい思いをさせてごめんな…」

シラーの花言葉が”寂しい”という事に気付いた俺は今寝てしまっているかお風呂に入っているだろうみらいに向けてそう言う。

「クリスマスに渡す2つのプレゼント喜んでくれるかな？」

俺はそう言いながら、一つ目のプレゼントである魔法つかいフルボトルを取り出す。

「みらいに渡せば何かが起こるはずだ…」

俺はそう言った後、フルボトルを再び箱に閉まい、二つ目のプレゼントが入っている引き出しの中にフルボトルの入った箱を閉まった。

## 19. 繋がる想い！最ツ高のクリスマス！

12月25日の今日は待ちに待ったクリスマス。今日、戦兎に告白するみらいはまだ告白する何時間も前なのに頬を赤く染めながら、心臓をバクバクとさせていた。そんなみらいの元にリコがやって来る。

「みらい、緊張しすぎよ…」

「告白はドキドキもんだよお…リコおゝ私の緊張ほぐす方法ないのおゝ？」

「ないわね」

「はあ…」

全然緊張が解けないみらいはうつ伏せでベッドに寝転がり、枕に顔をぴったりと付けて足をジタバタさせていた。

その頃俺は朝日奈今日子にクリスマスケーキを買おうよう頼まれ、町に来ていた。町は雪が舞った影響で辺り一面は雪に覆われており、歩く度にサクツ、サクツという足音がする。

「今日はホワイトクリスマスだね！」

「そうだね！」

俺が町を歩いていると、話しながら仲良く歩いている一組のカップルがいた。そのカップルを見た俺はみらいとこの雪道を歩いてみたいなあ…と思っていた。

それから数分後、町の洋菓子屋に着き、俺は6号サイズのケーキを一つとみらいの両親と祖母に居候のお礼としてブッシュ・ド・ノエル買い、洋菓子屋を出て行く。その後、俺は寄り道をする事なく真っ直ぐ朝日奈家に帰っていった。

朝日奈家に帰ると食卓にはいつもより豪華な料理が並んでいる。そんな豪華な食卓の上に更に買ってきたクリスマスケーキとブッシュ・ド・ノエルを置いて食卓は更に豪華になった。

「わあ…！美味しいそう〜！」

「だよなあ〜！早く食いてえ！」

「2人とも、先に食べる前の挨拶をするわよ！」

「いただきます！」

みらいと万丈はヨダレを垂らしそうな顔をしながらそう言う。今にも料理に食らいつきそうな2人を見たりコは先に食べる前の挨拶をすると2人に言う。いただきます！と食前の挨拶をした後、2人はローストチキンレッグに食らいつく。

料理を食べ終わった後、俺は自分の部屋に戻り、”ある物”を作っていた。その途中、自分の部屋の扉が開く音がした。その音を聞いた俺は慌てて作り途中の”ある物”を毛布の下に隠した。俺の部屋に来たのはみらいだった。

「ど、どうした？俺になんか用か？」

「戦兎くん、庭に来て！」

「分かった…けど何で庭に？」

「内緒！」

みらいに庭に来るよう言われた俺はみらいに着いて行き、玄関を出て庭に行く。俺は庭で2人きりならプレゼントを渡す絶好のチャンスだと思い、ポケットからフルボトルの入った箱を取り出してみらいに渡した。

「みらい、プレゼントだ！」

「…これは？」

「開ければ分かるさ」

俺にそう言われたみらいは箱の紐を解き、蓋をあける。箱の中に入っている魔法使いフルボトルを見たりみらいは喜びの表情を浮かべていた。

「わあ…！戦兎くんが持ってたやつだ！前はダメって言ったのになんでくれたの？」

「実はな、この世界で初めてお前に会った時、その”魔法使いフルボトル”が光ったんだ。最初は気のせいかと思ったが、三番勝負の時にことはが”自分は魔法使い”と言った事やみらい、リコ、ことはの三人に近づく度に魔法使いフルボトルが光るのを見て確信したんだ。お前らが魔法使いフルボトルを持っていれば何かが起こると…」

「触れば何かが起こるかも！」

フルボトルを渡した理由を聞いたみらいはそう言いながら魔法使

いフルボトルに触れる。すると、赤色だった魔法使いフルボトルの配色がピンク、紫、緑色に変わった。

「やっぱりな…」

「戦兎くんこんなワクワクなプレゼントありがとう！」

「もう一つプレゼントが…」

俺がもう一つプレゼントがあるとみらいに言おうとしたその時、上空にサンタクロースのような格好をし、背中にケーキを乗せている怪物が現れた。みらいはリコ達を呼びに家に戻り、俺はポケットから取り出したフルボトルを上下に振ってドライバーに挿す。

『サンタクロース！ケーキ！』

『best match!』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、俺はビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『Are you ready?』

「変身！」

レバーを回すと、前方と後方にスナップライドビルダーが現れる。俺は変身！という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれて変身する。

『聖なる使者！メリークリスマス！イエイ！』

メリークリスマスフォームに変身した俺はプレゼントボックスを片手に持ちながら怪物に向かっていく。

「聖夜を邪魔する悪い子にはお仕置きが必要みたいだな…！」

俺はそう言いながら、持っていたプレゼントボックスを怪物に投げつける。持っていたプレゼントボックスの中身が爆弾の為、怪物に当たった瞬間プレゼントボックスが爆発した。爆発に巻き込まれた怪物は上空から地に落ちていく。

俺が地に落ちた怪物に向かっていこうしたその時、遅れて変身した状態の万丈と三人が現れた。万丈はクロースの装甲の上からサンタのコスチュームを着ていた。

「…何だそれ？」

「ホッホッホ！俺はサンタクロースだ！」

「はい、つまらない」

「少しは笑えよ!」

俺は万丈を無視して地に落ちた怪物の元へ向かっていく。ルビースタイルのミラクルとマジカルは炎を纏わせた拳で怪物を思い切り殴る。

フェリーチエはミラクルとマジカルに殴り飛ばされた怪物を上空に向かつて蹴り飛ばした。

「戦兔くん、お願いします!」

「了解!」

フェリーチエに決めろと言われた俺はレバーを勢いよく回し、必殺技を発動する。

『Ready go!』

『ボルテックファイニッシュ! イェーイ!』

ドライバーから音声が鳴り響いた後、俺は地面深く潜り隆起した地面から跳躍、x軸で怪物を拘束し、クリスマス仕様にならされた放物線の上を滑るように加速し途中の点mでさらに加速して怪物に向かっていく。

必殺技が決まり、怪物は爆発と共に消えていく。そして、怪物の元になっていたサンタクロースとケーキはそれぞれ元の場所へと戻っていった。

変身を解いた後、リコと万丈とことは家の中に戻り、みらいと俺は庭に残った。

「戦兔くん、言いたい事があるの…」

俺はみらいに二個目のプレゼントを上げようとしたが、その前にみらいが俺に何か言いたい事があるらしい。

「私と…私と付き合ってください!」

「…!!」

みらいは頬を赤く染め、もじもじしながら俺にそう言った。俺は突然の告白に驚いたが答えは決まっている為、みらいに答えを言う。

「…そう言ってくれる日を待ってたぜ。答えは勿論、OKだ!」

「戦兔くん…!」

俺からの答えを聞いたみらいは涙を流しながらニコツと満面の笑みを浮かべる。俺はみらいに顎クイした後、自分の唇をみらいの唇へゆつくりと近づけていく。

俺とみらいはお互いの体を抱きしめながら数秒間唇を重ねる。そして唇を離れた後、俺はポケットから二つ目のプレゼントを取り出してみらいに渡す。

「二つもプレゼントくれるの!」

「ああ、二つ目はネックレスだ」

「あつ、これ私が戦兎くんにプレゼントする予定だったのと同じものだ!」

中身を見たみらいは自分が渡したかった物と同じと言う。みらいから貰ったプレゼントの箱を開けて確認すると確かに俺がみらいに渡したネックレスと同じネックレスが入っていた。

「ペアルックだね:／／／」

「そ、そうみたいだな:／／／」

俺とみらいは互いに頬を赤く染めながらそう言う。俺はみらいに恋人になったから自分の名前を呼び捨てで呼んでもいいと言った。

「なあ、恋人になったんだから呼び捨てでいいぞ」

「いいの?」

「いいよ!」

「じゃあ早速呼ばせてもらうね!戦兎!」

「何だ?」

「だーい好き!」

みらいはそう言いながら再び俺に抱きついてきた。俺は小さな声で俺も大好きだと言いながらみらいの身体を抱きしめた。

「2人とも、苦しいモフ」

2人の体に挟まれていたモフルンの声を聞いた俺とみらいはハグをやめる。モフルンはニコツと俺たちに笑顔を見せながらこう言った。

「戦兎、みらいおめでとうモフ!」

モフルンからお祝いのメッセージを貰った俺とみらいは手を繋ぎ

ながら家の中へ入っていった。

「戦兔？ニヤニヤしてどうしたんだ？いい事あったのか？」

「秘密だ！」

地下に戻った俺は万丈にそんなにニヤニヤしてどうしたのか？を聞かれたが秘密だ！と答えて自分の部屋に入っていく。

「クリスマスは最ツ高だな!!」

自分の部屋に入った後、俺は地下中に響くような大声でそう叫び、開発途中の”ある物”を再び作りはじめていくのだった…



## 20. ビルドが創る新年（ニューイヤー）

大晦日である12月31日、俺とみらいは年越しそばを作る為の材料を買いに近くのスーパーマーケットへ来ていた。

「戦兔、今年ももうすぐで終わりだね!」

「ああ、俺にとっては本当に大変な一年だったな…」

「そういえば、戦兔ってどこから来たの?」

「…今は言えない」

みらいは俺がどこから来たのかをまだ知らない。ここに前の世界の事を教えたいのは山々だが前の世界での辛い出来事を思い出すと精神的な理由で頭が痛くなるので話せなかった。俺が今は言えないと言った時の暗い表情を見たみらいは場を明るくしようと話を交える。

「あつ戦兔!リコが万丈くんから貰ったクリスマスプレゼント知ってる?」

「筋肉バカの事だからどうせプロテインやダンベルのような筋力アップする為の物だろ?」

「違うよ!腕時計だよ!」

「えっ!?!」

俺は万丈がプレゼントする物といえはプロテインやダンベルといった筋肉をつける為の物だと思っていたのでみらいから万丈がリコに渡したのは腕時計と聞いた時、凄く驚いた。

「しかも、有名ブランドの時計だって!」

「まじかよ…」

万丈が買った腕時計が有名ブランドのものと聞いた俺はさらに驚く。

その後みらいと話をしながら年越しそばの材料を買い物カゴに入れてレジで会計済ませる。そして買った材料を持ってきたマイバッグに入れてから店を出て行く。

そして朝日奈家へ帰り、時計を見ると時刻は午後の20時で年越しまであと数時間。俺が自分の部屋で”ある物”の製作の続きをして

いると、誰かが俺の部屋の扉を開ける。俺は慌てて製作途中の”ある物”を右手で掴み、自分の背中に隠した。

「戦兎！年越しまで一緒に過ごそうよ！」

「わわっ！急に入ってくんなよ！」

部屋に入って来たのはみらいだった。みらいは年越しまで俺と一緒に居たいようだ。

「リコやことはとかと一緒に過ごさないのか？」

「本当はリコやはーちゃんと過ごす予定だったけどリコとはーちゃんが万丈くんと過ごすって言うからさ……」

「なるほどねえ……分かった、年越しまで一緒に過ごそう！」

「やったー!!」

こうして俺とみらいは年越しまで一緒に過ごす事となった。過ごす事になったのはいいが、年越しまでやる事がなかった。

「何かやる事ないかな？」

「やる事ないなら先にお風呂でも入っちゃおうよ！」

「お風呂か……えっ、ええっ!!」

「うん！」

「……しようがねえな、入ってやるよ」

やる事がなく暇を持て余していると、みらいと一緒にお風呂に入ろうと提案してきた。俺はみらいの突然の提案に戸惑っていたが断ることが出来ず、一緒にお風呂に入る事となった。

「（大人が14歳の女の子とお風呂に入るとか許されるのか？まだ捕まりたくないぞ！）」

「戦兎？どうしたの？」

「いや、何でもない」

俺はお風呂に行くまでの道の途中、不安を募らせていた。ボーっとした俺の顔を見たまらいがどうしたの？と声をかけ来たので俺は何でもないと答える。そして心臓をバクバクとさせながら洗面所に入ろうとした時、外から何か巨大な怪物が歩いているような足音が聞こえてきた。

外に出てみると近くに亀のような硬い甲羅を持ち、両腕に腕時計を

巻いている怪物がいた。

俺はポケットからハザードトリガーとフルフルラビットタンクフルボトルラビットを取り出す。そして、ハザードトリガーを起動させ、フルフルラビットタンクフルボトルをラビットの方に合わせる。

『ハザードオン！』

『ラビット&ラビット！』

ハザードトリガーを起動し、フルフルラビットタンクフルボトルをラビットに合わせた後、ハザードトリガーとフルフルラビットタンクフルボトルをドライブに挿す。そしてハザードトリガーのスイッチをもう一度押してからドライブのレバーを勢いよく回す。

『マックスハザードオン！』

『ガタガタゴットンズツタンズタン！ガタガタゴットンズツタンズタン！』

『Are you ready?』

「変身！」

レバーを回すと、前方と後方にハザードフォーム用のスナップライドビルダーが現れる。俺は変身！という声を掛けた後、ハザードフォーム用のスナップライドビルダーに挟まれる。その後、ラビットラビットの装甲を身に纏い、変身完了する。

『オーバーフロー！』

『紅のスピーディージャンパー！ラビットラビット！ヤッベーイ！ハエーイ！』

ラビットラビットフォームに変身した俺はフルボトルバスターを片手に持ちながら怪物に向かっていく。

右手に持っているフルボトルバスターで斬撃をしようとした瞬間、怪物はウオッチフルボトルの能力で時を止める。時を止めている間に背中の中甲羅でタックルをしてきた。俺は硬い甲羅に吹っ飛ばされる。

「時間を止める能力か…」

「戦兔、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ」

俺が怪物の能力をどう攻略するかを考えていると万丈がやってきた。万丈は俺に一言かけた後、ドラゴンマグマフルボトルをクローズマグマナツクルに装填してからクローズマグマナツクルをドライバーに挿す。

『ボトルバーン！』

『クローズマグマ！』

待機音を少し流した後、ドライバーのレバーを勢いよく回す。そして、ナツクルに形状が似た坩堝型のマグマライドビルダーが背後に出現し、中で煮え滾る大量のヴァリアブルマグマを万丈の頭上からぶちまける。足元からヤマタノオロチのように八頭の龍が伸び上がり、冷めて全身に固着したマグマを後ろから押し割って変身が完了する。

『極熱筋肉！クローズマグマ！』

『アーチャチャチャアチャー！』

変身した万丈は怪物に向かっていくが、さっきの俺の様に時間を止められ、その間に硬い甲羅でタツクルされ、吹っ飛ばされる。

「戦兎、時間を止められるのをどうにか出来ねえのか？<sup>怪物</sup>奴がいる限り年越せねえぞ！」

「…時間停止は物理ではどうにもできない。ただ、奴を倒す方法ならある」

「倒す方法？」

「ああ、怪物は甲羅でタツクルをかました後、時間停止能力が解ける。だから、みらい達の魔法を使い、タツクルを避けた後、一気に決める！」

「戦兎、遅れてごめん！」

俺が万丈に怪物を倒す方法を教えていると、俺たちの元に変身したみらい達がやって来た。

「みらい！俺が怪物に向かっていくのと同時にアメジストの魔法を使ってくれ！」

「分かった！」

俺はみらいに魔法を使うよう頼んだ後、フルボトルバスターにラ

ビットフルボトルを装填し、怪物に向かっていく。

「リンクル・アメジスト！」

俺が向かうのと共にみらいはアメジストの魔法を使い、俺の前と俺の背後に魔法陣を張る。怪物は時間を止めて俺にタツクルをかますが、アメジストの魔法陣に当たり、俺の背後にあるアメジストの魔法陣へワープしていく。そして、時間が再び動くのと共に俺はフルボトルバスターのトリガーを引いて、必殺技を発動させる。

『ラビット！フルボトルブレイク!!』

タツクルが空ぶつたせいで隙ができた怪物は必殺技をくらい、爆発と共に消えていく。怪物の元となった亀と時計はそれぞれ元の場所に戻っていった。

「ふう…これで新年を迎えられるな！さあ、帰ろうか！」

変身を解いた後、俺は皆と共に朝日奈家へ帰っていった。

「ふわああ…疲れたから一足先に寝る」

「待って！私も寝る！」

「しようがねえな…」

色々な事をやり疲れてしまった俺は年を越す前にみらいと共にベッドに入り、眠りに着くのがだった。

## 2.1. 初夢の世界!? 永夢とはるか現る!

俺は目を覚まし、みらいの両親と祖母に新年の挨拶をしに行こうとしたが俺が目を覚ました場所は自分の部屋ではなく辺り一面真っ白な場所だった。隣で寝ているみらいの身体を揺すり、起きるよう呼びかける。

「みらい、起きろ!」

「…まだ眠いよお」

「ここはどこなんだ?」

「…何言ってるの?ここは私の家…じゃない!」

右手で目を擦りながら辺りをゆっくりと見渡すみらいは今、自分がいる場所が自分の家ではない事に気付き驚く。

「あれ、君は…?」

俺とみらいが無限に続く真っ白な空間を進んでいると、突然、どこからか声が聞こえてきた。声のする方を見てみるとそこには天才ゲーマーMの名を持つ宝生永夢がいた。

「何故ここに?」

「僕にも分からない…気が付いたらここにいたんだ」

永夢も俺たちと同じ様に気が付いたらここにいたようだ。俺と永夢が話をしていると永夢の後方から1人の女の子がやって来た。

「あれ、はるかちゃんじゃん!」

「みらいちゃん!」

「お前の知り合いか?」

「うん、はるかちゃんは私と同じでプリキュアなの!」

みらいは永夢の後方からやってきたはるかという女の子と知り合いらしい。

俺を含めた4人はその後、出口を探しにこの真っ白な空間を歩いていく。

歩き始めてから数十分後、ここに来たばかりの頃の俺たちと同じ様に真っ白な空間に倒れている人が三人いた。近くに行ってみるとその三人は万丈、リコ、ことはだった。

「いつまでも寝てんな！筋肉バカ！」

「なんだよ…まだ寝かせろよお…」

俺は倒れている万丈にそう言うが一向に起きる気配がしないので身体を強く揺すって無理やり起こす。その後、リコとことはも起こし、この空間にいる人は7人となった。

「そういうばここに来た時、白衣を着ていてゲーム機がお腹のあたりに埋め込まれている怪物を見た気がします…」

「ソイツはどこにいたんだ？」

「多分、僕の倒れていた場所の近くだと思います」

永夢は白衣を身に纏い、ゲーム機がお腹に埋め込まれている怪物を見たという。永夢は自分の倒れていた場所付近に怪物がいたと言う。永夢に大体の場所を聞いた俺たちは早速、永夢の倒れていた場所に向かう。

永夢の倒れていた場所に着き、近くに怪物がいるか付近を見渡していると怪物が突然現れた。

俺と万丈はビルドドライバーを取り出して腰に装着する。そして、俺は二つのスロットにラビットフルボトルとタンクフルボトルを挿す。万丈はドラゴン型自立行動メカであるクローズドラゴンにドラゴンフルボトルを挿してからドライバーのスロットに挿す。

『ラビット！タンク！』

『best match！』

『wake up！Cross—Z dragon！』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、俺と万丈はビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『Are you ready？』

『変身！』

レバーを回すと、前方と後方にスナップライドビルダーが現れる。俺と万丈は変身！という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれて変身する。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

『Wake up burning！ Get CROSS—Z D

「RAGON! Yeah!」

変身した俺はドリルクラッシュャーを右手に、万丈はビートクロウザーを左手に持つ。みらい達3人も俺たちと同時に変身し、俺たちと共に怪物へ向かっていく。俺たちが変身したのを見た永夢はドライバーを腰に装着し、マキシマムマイティXガシヤットをドライバーに挿し、ドライバーのレバーを倒す。

『レベルマックス!』

「ハイパー大変身!」

ハイパー大変身という掛け声と共にムテキガシヤットをマキシマムマイティXガシヤットの右側に挿し、マキシマムマイティXの飛び出ている部分とムテキガシヤットの天面のスイッチを押して変身する。

『パッカーン!ムーターキー!輝け!流星のごとく黄金の最強ゲーマー!ハイパームテキエグゼイド!』

ムテキゲーマーに変身した永夢は右手にガシヤコンキースラッシュャーを持ちながら怪物へ向かっていく。春野はるかも皆に遅れて変身アイテムを取り出す。

「プリキュア・プリンセスエンゲージ!」

はるかは変身セリフを言うと共にドレスアップキーをプリンセスパフュームに挿して捻り、変身する。

「咲きほこる花のプリンセス! キュアフローラ!」

変身したはるかは空高く跳び上がり、怪物に向かって急降下している。変身した俺たち7人は攻撃を避けながら怪物に攻撃する。

「舞え、花よ!プリキュア・フローラル・トルビヨン!」

「リンクル・アクアマリン!」

はるかが怪物に向けて無数の花びらを飛ばした後、リコがアクアマリンの魔法で無数の花びらを固まらせて無数の氷のつぶてに変える。無数の氷のつぶては怪物に当たる。氷のつぶてを受けた怪物は怯み、必殺技を打つ隙が出来た。俺と万丈はドライバーのレバーを回し、永夢はハイパームテキガシヤットのスイッチを二回押して必殺技を放つ。



『Ready go!』

『ボルテックファイニッシュ! イエーイ!』

『ドラゴニックファイニッシュ!』

『ハイパークリティカルスパークキング!』

3人は一斉に跳び上がり、怪物に向かって急降下していく。怪物は隙を突かれているため、防ぐ事が出来ず、必殺技を受けてしまう。

必殺技を受けた怪物は爆発と共に消えていく。怪物の元となったゲームと医者は真つ白な空間に眩い光を放つ。

「くっ…眩しい…!」

光に包まれた俺は真つ白な空間に来た時と同じようにどこかに倒れた状態で目を覚ます。だが、周りには俺の実験机やフルボトルなどが置いてあった。

「…夢だったのか?」

「ふわああ…戦兔、おはよう〜」

「みらい! 今見た夢は何だったんだ?」

「なんだったんだろうね…私にも分からない」

俺が起きると同時に隣で寝ていたみらいも目を覚ます。真つ白な空間での出来事は何だったのかを聞いたが、みらいもあの空間で起きた事がよく分からないようだ。

「それより、お雑煮食べようよ!」

「…そうだな」

その後、俺とみらいは真つ白な空間での出来事を気にすることなく元日を過ごした。後に気付いたのだが、俺の実験机には永夢に力を返し、消えたはずのドクターフルボトルとゲームフルボトルが置いてあった。二つのフルボトルを見た俺はもしかしたら、あの空間での出来事は夢のようで夢じゃなかったのかもしれないと思うのだった…

## 2.2. 迫り来る混沌！オルバーバとの戦い！

不思議な夢を見た次の日の朝、俺とみらいとリコと万丈とことは5人は初詣に行く。朝日奈家から少し歩き、神社に着いた俺たちは賽銭箱の前まで歩いていく。みらいは皆より一歩前に出て賽銭を入れ、鈴を鳴らしてから二度深くお辞儀をし、二回拍手をした後、もう一度深くお辞儀をして一歩下がる。

「こうして1年間のお願いや目標を目を閉じて心の中で言うの！」

「へえ〜！」

初詣を知らないリコとことはみらいにやり方を教わってから二礼二拍手一礼をする。

「ねえ、みらいはなんてお願いをしたの？」

「私は皆の笑顔を見るのが大好きだから、魔法界とこっちの世界の皆と一緒に笑顔になれますようにってお願いしたの！」

「良いお願いだな！」

「戦兎はなんてお願いするの？」

「俺はこの世界がこれから先ずっと平和でありますようにって願うつもり！」

「へえ〜！戦兎のお願いも良いお願いだね！」

俺はみらいに何を願うかを話してから万丈と共に一歩前に出て二礼二拍手一礼をする。俺は二拍手をしている時に頭に前の世界での様々な出来事を思い浮かべながら、この世界がずっと平和でありますように：とお願いをした。5人全員がお願いをして初詣を終えた俺たちが楽しく話していると突然、辺りが暗くなっていった。

「おい、辺りが暗くなってんぞ!？」

「日食：？いや、ただの日食じゃないみたいだな」

俺は太陽を覆っている目のついた黒い影と黒い影の前にいる怪物を見てこれがただの日食ではないと万丈やみらい達に言う。

日食を見続けていると、俺たちの前に眼鏡をかけている優男風の美青年のような外見をした敵が現れた。

「桐生戦兎と万丈龍我：君達は何故、ちゃんとした新世界ではなく、伝

説の魔法つかいが存在する異世界に来たか分かるかい？」

「伝説の魔法つかいが存在する異世界：やはり、ここは俺が創り上げた新世界じゃないのか!？」

「その通り……ここは君が創り上げた新世界ではない！プリキュアがアレキサンドライトの力を得た時、僕は偶然にも君達の過ごしていた前の世界が別の世界と融合するのを目撃した。この新世界創造エネルギーがあれば完全なる混沌の世界を作り上げる事ができると感じた僕は新世界創造エネルギーを奪い、君達の世界の融合を妨げた」

「その結果、世界の融合が不完全となり、行き場をなくした俺達はこの世界に飛ばされたってことか」

万丈は戦兔とオルーバの会話に入ろうとしたが、話が難しすぎて会話にはいれていなかった。

「何言ってるのか分からねえけどこれだけは分かる！お前は敵だ！」

万丈はオルーバを指差してそう言い、ビルドドライバーを腰に装着する。俺も万丈に続いて腰にドライバーを装着した。

俺はタンク状態のフルフルラビットタンクフルボトルを取り出し、万丈はドラゴンマグマフルボトルを挿してあるクローズマグマナックルを取り出す。そして同じタイミングでドライバーにセットし、ドライバーのレバーを勢いよく回す。

『マックスハザードオン!』

『ガタガタゴットンズツタンズタン！ガタガタゴットンズツタンズタン！』

『ボトルバーン!』

『クローズマグマ!』

『are you ready?』

レバーを回すと、俺の前方と後方にハザードフォーム用のスナックプライドビルダーが現れ、万丈の後方にナックルに形状が似た坩堝型のマグマライドビルダーが出現する。変身！という声を掛けた後、俺はハザードフォーム用のスナックプライドビルダーに挟まれる。その後、タンクの装甲を身に纏い、変身完了する。万丈は中で煮え滾る大量の

ヴアリアブルマグマを浴びて足元からヤマタノオロチのように八頭の龍が伸び上がり、冷めて全身に固着したマグマを後ろから押し割って変身完了する。

『オーバーフロー!』

『鋼鉄のブルーウォーリア!タンクタンク!ヤッペーイ!ツエーイ!』

『極熱筋肉!クローズマグマ!』

『アーチャチャチャアチャー!』

「リコ、はーちゃん!いくよ!」

「うん!」

「キュアアップ・ラパパ!サファイア!」

みらいとリコがそう唱えると、リンクルストーン・サファイアがモフルンの胸元部分に挿し込まれていく。

「ミラクル・マジカル・ジュエリー!」

モフルンにリンクルストーン・サファイアが挿された状態でそう唱えると、2人の服装や髪型、背丈が変化していく。

「キュアアップ・ラパパ!エメラルド!」

ことはがそう唱えると、リンクルストーン・エメラルドがリンクルスマホンという変身アイテムに挿し込まれていく。その後、リンクルスマホンの画面にアルファベットのfを書くと、Felicieという文字が浮かび上がる。

「フェリーチェ・ファンファン・フラワーレ!」

ことはがそう唱えると、みらいとリコの様に服装や髪型、背丈が変化していく。

「2人の奇跡!キュアミラクル!」

「2人の魔法!キュアマジカル!」

「あまねく命に祝福を!キュアフエリーチェ!」

「魔法つかいプリキュア!!」

変身した5人はオルーバへ向かっていく。俺はフルボトルバスターを大剣状態のバスターブレードモードにしてオルーバに斬り

かかるが、オルーバは片手でフルボトルバスターを弾き返す。

「リンクル・タンザナイト!」

みらいがタンザナイトの魔法を使い、オルーバの目を眩ましている間に万丈はオルーバの腹部を何回も殴る。万丈の攻撃が効いたのかオルーバは万丈に殴られた腹部を抑えながら俺達を睨みつけてきた。

「中々やるじゃないか…! 僕も本気でいくとしよう」

オルーバはそう言いながら自分の眼鏡を左手で握り潰し、髪を逆立てて背中に天使のような羽と悪魔のような羽を生やす。

「さあ、始めようか…!」

「先手必勝!!」

オルーバがさあ、始めようかと、戦いの始まりの合図をすると共に万丈が先手必勝!とオルーバに勢いよく向かっていった。だが、本気のオルーバには先程、効いていた攻撃が効かなくなっていた。

「何っ!?!」

「フッフッフ…さつきと同じ攻撃で本気の僕を倒せると思うかい?」

オルーバはそう言いながら万丈を遠方へ殴り飛ばす。リコは自分の大切な人を殴り飛ばしたオルーバに憤りを感じ、万丈と同じようにオルーバに勢いよく向かうが、みぞおち辺りに鋭い蹴り技をくらい、蹴り技を受けたみぞおち辺りを抑えながらその場に倒れてしまう。これで残ったのは俺とみらいとことのはの3人となった。

「みらい、ことは頼みがある」

「何?」

「<sup>オルーバ</sup>奴の動きを止めておいてくれ」

「止めるって…どうやって?」

「とにかく動きを止めておいてくれればいい」

俺は2人に小声でそう言う。2人は俺の説明不足のせいで作戦の意図をあまり理解出来ない様子だったが俺に言われた通り、攻撃に気をつけながらオルーバに向かっていく。

「腕を掴んで身動きを取れなくする作戦か…だが、いつまでも持つと思うなよ!」

オルーバは自分の腕を掴んでいるみらい達を吹き飛ばそうと身体

から衝撃波を出す。みらい達は衝撃波に押されながらも必死にオルーバの腕を掴み続ける。

「戦兔！今がチャンスだよ！」

「おう！勝利の法則は決まった！」

オルーバの衝撃波が収まった所でみらいは俺に合図を出す。合図を受けた俺はフルボトルバスターに四つのフルボトルを装填し、必殺技を発動させる。

『タンク！ジェット！ガトリング！ロケット！』

『アルティメットマッチデース！』

『アルティメットマッチブレイク！』

待機音を少し流した後、大砲状態のバスターキャノンモードのフルボトルバスターのトリガーを引き、巨大な青いエネルギー弾をオルーバに向けて放つ。みらいとこととはギリギリまでオルーバの動きを止め続け、オルーバから離れていく。みらいとこととはに動きを止められ、必殺技を防ぐことが出来なかったオルーバは巨大な青いエネルギー弾に吞まれていく。

「流石、天才物理学者、ぼくの負けだよ…だが、君達がこの世界に来た事で更に力を増したデウスマス様様の力で世界は完全なる混沌に陥るだろう…」

オルーバはそう言いながら、持っていた魔導書のような物に残された自分の力と俺達から奪った新世界創造エネルギーを注ぎ込んだ後、爆発と共に散っていったはずだったが、何処からか巨大な手が現れオルーバや眷属達を吸収していった。

「あれがデウスマス様なのか…!？」

俺達の見つめる先には活動を開始したデウスマス様がいた。デウスマス様が活動を開始してから起こった白い渦がどんどん巨大化していく。その渦の中に世界樹が現れ、ことは驚いていた。渦の表面にマザー・ラパーパが現れ、みらいとリコとことらのリンクルストーンが光り出す。リンクルストーンが光り出すのと共にみらいとリコとこととはは光の彼方に吸い込まれていく。

「みらい…!」

「戦兔!!」

俺はオルーバの攻撃を受けて変身が解けた状態で倒れている万丈を救出した後、光の彼方に吸い込まれていくみらいの手を掴み、助けようとするが俺の力より吸い込む力の方が強く、みらい達だけでなく俺と万丈までもが光の彼方へと吸い込まれていくのだった…

t o b e c o n t i n u e d . . . .

## 23. Be The One! 2人はベストマッチ !!

光に吸い込まれた後、目を覚ますとそこは自分の部屋だった。俺は万丈の部屋に行き、万丈を起こす。

「起きろ！お前、今日バイトだろ？」

「…うるせえな、もう少し寝かせろ」

起こしてあげようとしたのに万丈にもう少し寝かせろと言われてたので俺は仕方なく万丈をもう少し寝かせておく事にし、部屋着から普段着に着替える。

普段着に着替え終わり、俺が階段を上り上の階へ行こうとしたその時、みらい達が焦り顔をしながら上の階から勢いよく降りてきた。

「戦兎！私の部屋に来て!!」

「そんなに慌ててどうしたんだ？」

「いいから早く!!」

みらいは俺の手を引いて二階にある自分の部屋まで駆け上がっていく。俺は手を引かれたままみらいの部屋に入り、みらいに窓際まで連れられ、窓から外を見る。すると、そこにはとんでもない光景が広がっていた。

「これは…!」

町には箒に乗って空を飛ぶ人がいたり、魔法の練習をしている人達がいた。これを見た俺はさっきのみらい達のように慌てて地下の万丈の部屋と向かい、万丈の身体を激しく揺らして万丈を起こす。

「万丈!!起きろ!!」

「…寝かせろって言ってるんだろ」

「寝てる場合か！外を見てみろ！」

「はあ？外に何かあんのかよ？」

俺は寝ている万丈をベッドから起こしてみらいの部屋まで押しつけていき、窓際に立たせる。

「何だよ、空飛ぶ魔法使いと魔法使って遊ぶ子しかいねえじゃねーか



…ん!? こつちの世界に魔法使いだ?!? どういうことなんだよ!」

窓の外を見た万丈は夢だと思い、自分の頬を叩き、窓の外の景色を見直しているが景色が変わらない為、これが今、起きている事とようやく理解し、俺にこれはどういうことなのかを聞いてきた。

「…デウスマストが無理やり二つの世界を融合させたせいだ」

「デウス…マスト?」

「ああ、今まで戦ってきた怪物、敵の親玉だ」

俺は万丈にデウスマストの事とそのデウスマストがした事を簡単に説明する。

「おーい! みらい!」

俺たちが話していると魔法界の3人が箒にまゆみとカナを乗せてみらいの家の前までやって来た。

「今日、皆で遊ばないか?」

「えっ、あ、その…」

「みらい? どうかしたの?」

みらい達はジュンに遊ばないか? と誘われたがまゆみやかなといったこつちの世界の人間が魔法を見て驚いてない事を不思議に思う。

「ねえ、魔法見て驚かないの!」

「えっ?」

みらいはまゆみとかなにそう言うがまゆみとかなはえっ? 魔法で驚く? というような表情でみらいを見ていた。まゆみとかなの表情を見てみらいは俺の言った通り、これはデウスマストの仕業なのか? と考える。

「まっ、いいや! 私達、先に行ってるね!」

珍しく考え込むみらいの姿を見たまゆみはそう言いながら箒に乗って他のメンバーと共に公園のある方向へ向かっていった。

デウスマストにどう対抗するかを考える為に一旦、家に帰ろうとしたが、ことはが目を瞑りながら俺たちにこう言う。

「もうここまで押し寄せてる、混沌が…」

「どうやら、考えてる暇はないようだな」

ことはこの言葉を聞いた俺は皆にそう言い、魔法の樹の下に行き、デウスマストと戦う準備をする。そして魔法の樹が消え、空からデウスマストが現れた。

「皆、行くぞー！」

「うん！」

皆は俺の合図と共に変身する。俺と万丈はビルドドライバーを取り出して腰に装着する。そして、俺は二つのスロットにラビットフルボトルとタンクフルボトルを挿す。万丈はドラゴン型自立行動メカであるクローズドラゴンにドラゴンフルボトルを挿してからドライバーのスロットに挿す。

『ラビット！タンク！』

『best match！』

『wake up！Cross—Z dragon！』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、俺と万丈はビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『Are you ready？』

「変身！」

レバーを回すと、前方と後方にスナップライドビルダーが現れる。俺と万丈は変身！という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれて変身する。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

『Wake up burning！ Get CROSS—Z D

RAGON！Yeah！』

「キュアアップ・ラパパ！ダイヤ！」

みらいとリコがそう唱えると、リンクルストーン・ダイヤがモフルンの胸元部分に挿し込まれていく。

「ミラクル・マジカル・ジュエリー！」

モフルンにリンクルストーン・ダイヤが挿された状態でそう唱えると、2人の服装や髪型、背丈が変化していく。

「キュアアップ・ラパパ！エメラルド！」

ことはがそう唱えると、リンクルストーン・エメラルドがリンクルスマホンという変身アイテムに挿し込まれていく。その後、リンクルスマホンの画面にアルファベットのfを書くとき、F e l i c e という文字が浮かび上がる。

「フェリーチェ・ファンファン・フラワーレ！」

ことはがそう唱えると、みらいとリコのように服装や髪型、背丈が変化していく。

「2人の奇跡！キュアマミラクル！」

「2人の魔法！キュアマジカル！」

「あまねく命に祝福を！キュアフエリーチェ！」

「魔法つかいプリキュア!!」

変身した俺たちはデウスマストに向かっていく。俺たちが向かってきているのを見たデウスマストは無数の影を作り出し、その影に俺たちを攻撃するよう指示する。

「リンクル・アクアマリン！」

「リンクル・タンザナイト！」

「戦鬼、万丈くん！」

みらいとリコは二つの魔法を使い、影を凍らせたり、目を眩ませたりして攻撃する隙を作り、俺と万丈に合図を出す。

「任せろ！いくぞ、万丈!!」

「おうよ！」

俺はブレードモードのドリルクラッシュャーに海賊フルボトルを装填し、万丈はビートクローザーにロックフルボトルを装填してグリッブエンドを二回引いて必殺技を発動させる。

『Ready go!』

『スペシャルチューン！ヒッパレー！ヒッパレー！』

待機音を少し流した後、武器のトリガーを引いて水の刃と蒼炎の火炎弾を影に放っていく。

『ボルテックブレイク！』

『ミリオンストラッシュ！』

水の刃を受けた影は真つ二つに、蒼炎の火炎弾を受けた影は爆発と

共に消えていった。無数にいた影を倒し、俺たちが再びデウスマストに向かつて行こうとしたその時、行く手にブラックホールが現れた。「ぐわあ……お前、エボルトの力を吸収したのか!？」

「新世界創造エネルギーの一部である彼の力、中々使えるね……」

デウスマストはオルーバの声で俺にそう言う。ブラックホールに吸い込まれないよう必死にブラックホールと反対の方向へ逃げていることは俺たちの前に出てきた。

「リンクル・ピンクトルマリリン!」

ことは魔法を使い、花卉状の盾でブラックホールを防ぎ、俺たちを逃がしてくれた。ブラックホールの吸い込みに耐えきれずピンクトルマリリンの盾にヒビが入っていく。

「ミラクル、マジカル、戦兔くん、万丈くん!あとは頼みましたよ!」  
ことはがそう言った瞬間、ピンクトルマリリンの盾が破れ、ことははブラックホールの中へと吸い込まれていった。

「フェリーチェ!!」

みらい達はことはを失い、負けを意識してしまう。だが、俺と万丈は負けとは思っていなかった。

「フツハツハツハツハ!!これでマザーはいなくなった!お前達の負けだ!」

「リンクルストーンがある限り、マザーは……いや、ことははまだいる!」

「だが、マザーの力が使えない限り、我には勝てない!」

「それはどうかな?」

俺はそう言いながらみらいにビルドドライバーを投げつける。俺がビルドドライバーを投げるのと同時に12の精霊が魔方陣に組み込まれている状態のレインボーキャリッジがみらいとリコの元へやってくる。その瞬間、みらいの持っている魔法つかいフルボトルと2人のダイヤの原石と解放された魔方陣のエネルギーが混ざり合い、一つの変身アイテムが出来上がった。

「やっと完成したか!名前考えてなかったな……じゃあ、名前はキュアフューチャー缶で!」

「…変な名前だな！」

「黙れ、筋肉バカ」

俺はみらい達が創り出した新たな変身アイテムをキュアフューチャー缶と名付けた。

「私とマジカルならできる…！戦兎、使わせてもらおうね！」

みらいはそう言いながら、腰にビルドドライバーを巻き、キュアフューチャー缶を振り、プルタブを開けてからドライバーに装填し、レバーを勢いよく回す。

「み、みらい!? あなたの変身に私を巻き込んでるわよ! どういう事☒」

『キュアフューチャー!』

『are you ready?』

「あーもうっ!!できてるわよ！」

リコはみらいと一緒に前方、後方から迫ってきたスナップライドビルダーに挟まれていく。

『ミラクル!マジカル!』

『Be the One!キュアフューチャー!イエイ!イエーイ!』

「ミ、ミラクル?」

「マ、マジカル?」

「合体しちゃったー!!」

ミラクルとマジカルは合体し、キュアフューチャーとなった。キュアフューチャーにはピンクと紫のマントを背中に付いており、上半身はアレキサンドライトスタイルのマジカルの衣装がピンク色になった版で下半身はアレキサンドライトスタイルのミラクルの衣装が紫色になった版になっている。そして頭にはアレキサンドライトスタイルのハットを被り、髪は薄ピンク色、瞳は左目がピンク色、右目が紫色になっている。

「これが戦兎の秘策か?」

「ああ!これが秘策だ!」

俺は最初からこうなることを計算し、密かにみらい達用の新しいビ

ルドドライバーを作っていた。

「”奇跡”と”魔法”が創る未来！キュアフューチャー!!」

みらいとリコは名乗りを言ってからデウスマストに勢いよく向かっていくのだった…

t o b e c o n t i n u e d . . . .

## 24. 未来（あした）を創る為の代償

キュアフューチャー缶を使い、キュアフューチャーとなったみらいとトリコはデウスマストに向かっていく。

「そりゃあー！」

「はああー！」

息が合っていないせいかミラクルは殴り技を、マジカルは蹴り技を出してしまい、デウスマストに攻撃が当たらなかった。

「マジカル、息合わせてー！」

「あなたこそ合わせてちょうだい！」

「フッフッフ…喧嘩か？くだらない…」

「喧嘩なんかしてない!!」

デウスマストの煽り言葉を聞いた2人は声を合わせてそう言い、迫ってくるデウスマストに強烈な蹴り技をくらわせる。

「ぐっ…」

「ミラクル、行くわよ！」

「うんー！」

2人は声を掛け合い、再びデウスマストへ向かっていく。2人は右手の拳にプリズムカラーの炎を纏わせ、デウスマストを思いつきり殴る。殴られたデウスマストは宇宙空間へ飛ばされていく。

2人は飛ばされていったデウスマストを倒す為、宇宙空間へ向かっていく。俺と万丈もホークガトリングフォーム、クローズマグマにフォームチェンジしてから2人の後に続き、宇宙空間へ行く。

先に宇宙空間へ来ていた2人はドライバーのレバーに手を掛けていた。

「行くよ、マジカル！」

「分かったわ…ミラクル！」

2人で声を掛け合ってからドライバーのレバーを勢いよく回し、必殺技を発動させる。

『Ready Go!』

「ベストマッチ・フィニッシュ!!」

2人はそう言いながら、両拳に巨大な七色の気弾を作り、デウスマストに向けて放つ。デウスマストは必殺技を防ごうとするが2人の放った気弾が圧倒的な力を持つ為、押されていた。

「バカなッ!?新世界創造エネルギーを得たこの私が押されているだど!?!」

「これで終わりよ!デウスマスト!!」

「くっそお…!グワアアア!!」

2人の必殺技に呑まれたデウスマストは宇宙の果てで炸裂し、光渦となつて消えていった。デウスマストが消えると共に2人の合体と変身が解けた。2人が地球を見ると地球はオパール色に染まっていた。

「世界は今、元の形に戻ろうとしてるの…!」

「はーちゃん!?!」

2人が声の聞こえた方へ顔を向けるとそこには巨大化したことがいた。

「魔法界とナシマホウ界。今はそれが自然な形だから…でも、強く混ぜたてたせいでちよつと困つてるみたいなの。だから私、世界がうまく戻れるようにお手伝いしてくるね」

「強く混ぜりあつていた分、創造主デウスマストが消えた時の反動は大きいのか…」  
ことはこの言葉を聞いた俺は2つの世界が離れてしまう事を知り、顔を下に向けて悲しい表情を浮かべる。

「はーちゃん!私達も!」

「大丈夫。みんなのお陰で私、こんなに大きくなれた。どこからでもみんなのこと、見ていられるから…感じられるから…。私はみんなとずーっと一緒。繋がってるよ」

「はーちゃん…」

みらいはことはにそう言うがことはは首を横に振りながらみらい達には皆とずつと一緒だと伝える。

「あまねく命…世界に祝福を」

巨大ことはが祈りポーズをとると地球は蔦で覆われ、それは花へと変化し、そこから咲く様に地球が生まれる。一瞬2つの球体になり、



魔法界が地球から離れていく。

「皆…私も…」

「うん…」

リコは辛そうな顔をしながら俺と万丈とみらいとモフルンに向けてそう言う。みらいは少し間を置いてから悲しげな声でそう返した。リコは魔法の杖を取り出し、魔法をかける。

「キュアアップラパパ、私達は必ず、絶対！　また会える！…これでバツチリよね？」

リコは瞳から大粒の涙をポロポロと落とす声を詰まらせながら俺たちちこそ言う。

「ちよつと待てよー！」

万丈はそう言い、俺たちから段々と離れていくリコの元へ向かっていく。そして右手でリコの左手を掴んだ。

「リコ、俺はお前と離れたくねえ…！俺は…過去を労わってくれるような優しいお前と離れたくねえんだよ!!」

「万丈くん、これは一生のお別れじゃないわ…また会える…！これがその証拠よ…！」

リコはそう言いながらポケットから指輪を取り出して万丈と手をつないでいる左手の薬指に指輪をはめる。

「まさか、あなたが108本のバラの花束に指輪を隠してるとは思わなかったわ…」

「俺はこの世界の法律がよく分からんから結婚できると思ったんだよ」

「ふふっ…じゃあ、そろそろいくわね」

そう言いながらリコは万丈の手を離そうとしたが万丈がリコの手を強く握っていたせいで離す事が出来なかった。

「万丈くん…？」

「手を離せばお別れだ…最後は俺にやらせてくれ」

万丈はリコにそう言い、自分の手を開いてリコの手を離そうとするが何故か手が開かなかった。

「心配しないで…離れ離れになっても私は万丈くんの恋人であり続け

るから…!」

リコはそう言いながら自分の唇を万丈の唇へ重ねる。そしてキスをした後、万丈は涙を流しながらリコの手を離した。

「リコ、また会おうな…!」

「ええ、また会いましょう…!」

2人はそう掛け合った後、それぞれの世界の方向へ引つ張られていった。俺とみらいとモフルンと万丈は自分達の世界へ吸い込まれていった。意識がだんだんと遠のいていく…

気がつくと俺は家の自分の部屋で寝ていた。部屋の入り口にはみらいと万丈が立っている。

「戦兎、3人で朝日を浴びに行こうよ!」

「うん、行こう!」

みらいは俺と万丈を誘い、街が一望できる場所に行つて朝日を浴びようとしていた。俺はみらいの誘いに応じる。

「あつ!あと、リコとはーちゃんも…!つて2人はいないんだつた!」

みらいはリコとことはも誘おうとしたが2人が今、ここにいないことに気づき、悲しい表情を浮かべながらそう言う。

「2人共、朝日を浴びに行くぞ!」

俺は2人にそう言い、街が一望できるような場所へ向かった。みらいは別れた2人の事を想っていた。

「リコ、はーちゃん…!」

「みらい、未来を創る為の代償は軽い物ではなく重い物だ…友達という自分にとつてとても大切な代償を払って皆の未来を創つたお前達はヒーローだ…!」

「戦兎くん…!!」

俺はそう言いながらみらいの頭を優しく撫でる。俺の言葉を聞いたみらいは俺に抱きつき、泣き始めた。俺はみらいを優しく抱きしめながら近くにいる万丈の顔を見る。万丈は顔に喜色を浮かべながら瞳から小粒の涙を流していた。

「なあ、戦兎。またあの2人に出会えるよな?」

「出会えるに決まってるさ…!」

前の世界、そしてこの世界で様々な”奇跡”見てきた俺は万丈の間に自信を持ってそう返す。そして俺がスマホを見ると時間はいつも俺たちが学校へ行く支度をして朝食を食べるくらいの時間になっていた。

「さて、そろそろ朝ごはんの時間だし家に帰ろうか！」

「そうだな…」

「…うん」

俺は2人にそう言い、5人で過ごした楽しい日々の事を話しながら朝日奈家へ帰っていった…

俺たちが朝日奈家に帰ってから少したった頃の津成木町にある山の頂上にはある怪物がいた。

「フツハツハ…デウスマストよ、俺を利用した罰が下ったようだなあ…」

怪物は澄清の空を見上げながら自分の力を利用していたデウスマストにそう言うのだった…

Continued on the next chapter  
r.....

## 高校生編く破壊と創造く

### 25. 再び始まる伝説！3人の新たなる旅路!!

リコ、ことはの2人と別れてから二年後、みらいは高校生になった。背が少し高くなり顔は童顔から大人っぽい顔立ちへ変わり皆が羨む程の美人になっていた。

俺はみらいの両親に高校も行っておいた方がいいと言われ、高校に通う事になった。みらいとは今も付き合っており、同じクラスの友人からは“あんな美人が彼女でいいなあー!”とよく言われる。

「みらい、帰るぞ」

「…うん、分かったー」

俺とみらいは付き合ってから約2年経った今も手を繋いで下校している。リコとことはと別れる前まではみらいの笑顔を多く見れていたがリコとことはと別れた今は手を繋いで帰っていてもずっと下を向いて悲しげな表情を浮かべていて笑顔を見る機会が少なくなっていた。

俺は家へ帰り、自室のベッドに荷物を置いた後、みらいの部屋へ向かった。そしてゆっくり扉を開けるとそこにはプリクラで撮ったであろう皆との写真を見ているみらいがいた。

「みらい…」

「…あつ、戦鬼!!私の部屋に入る時は声かけてよ!」

「分かった、次からそうする。というか、まだ2人の事を考えてるのか?」

「…うん、リコとはーちゃんは私にとってそれほど大切な友達だったから2年経った今でも2人の事を考えちゃうんだよね…」

「そうか…分かった」

俺はそう言いながらみらいの部屋の扉の取っ手に手を掛ける。そして扉を開けてみらいの部屋を出て行こうとしたその時、みらいの部屋にゲームフルボトルとドクターフルボトルが入ってきた。そしてそれを追いかけるように万丈もみらいの部屋へ入ってきた。

「万丈？どうしたんだ？」

「はあ…はあ…このボトルが急に暴れだしたんだよ…！」

「何だと…!？」

俺はみらいの部屋の机の上に置かれたドクターフルボトルとゲムフルボトルを触る。すると、誰かが喋り出した。

「あなた達、もう一度十六夜リコと花海ことはに会いたいようだね」

「会えるの!!早く合わせて！」

みらいは少女のような声で喋る者の言葉を聞き、早く合わせて！と言いながら2つのフルボトルをぎゅつと掴む。

「今からこっちの世界の物であるこの2つのフルボトルの力を使ってあなた達を2人の世界に連れて行ってあげる！」

「このフルボトルにそんな力があるのか？」

「見ればわかるさ」

少女のような声で喋っている者がそう言った瞬間、2つのフルボトルがまばゆい光を放ち、俺たちを吸い込んでいった。

「せ…ん！せん…くん！せんとくん!!」

誰かが俺を呼んでいる。ゆっくり目を覚ますと、俺の目の前には2年前、別れたはずのリコがいた。そして辺りを見回すとそこはみらいの部屋ではなく魔法界だった。

「ようやく起きたみたいね…」

「リコ!？」

「もう…3人がいきなりその場に倒れたから私ビックリしたわよ！」

リコの隣にもことはがいる。どうやら俺たちは本当に2人の世界にワープしてきたようだ。ワープに使った2つのフルボトルを見てみると力を使い果たしたのか成分が入っていないエンプティボトルになっていた。

「さて、魔法界での用が済んだ事だし、みらいの家に帰りましょ！」

「お、おう…」

俺とみらいと万丈はここが本当に魔法界なのか分からないままりコについて行き、ナシマホウ界行きのカタツムリニアに乗り込んだ。そして席に座っていると突然、何者かが俺の心に直接語りかけてき

た。

「桐生戦兎、あなたにはこの世界を2人の破壊者から守るという使命があります」

何者かにそう言われた俺は自分以外の皆が寝ているのを確認してから声を出して何者かに破壊者とは誰なのかを聞いた。

「2人の破壊者…?」

「(ええ、門矢士とエボルトの事です)」

「エボルト…ってか門矢士って誰だ?」

「(仮面ライダーディケイド)」

エボルトは前の世界で散々戦っている相手なので分かっていたが門矢司については何も知らなかった。声の主曰く、門矢司は世界の破壊者・仮面ライダーディケイドらしい。

「世界を救うにはどうすればいいんだ?」

「(“平成二期の仮面ライダー”と呼ばれる者達の力を借り、2人の破壊者を倒すのです!)」

「平成二期とかよく分からんけどとりあえず力を借りればいいのね」

俺が世界をどうすれば救えるかを声の主に質問し、声の主の返答を聞いて返事した瞬間、カタツムリニアの車内アナウンスが鳴り響く。それと共に声も聞こえなくなった。

「ふああ…」

車内アナウンスと共に皆が起きた。ナシマハウ界の駅に着いた俺たちはみらいの家へと向かっていく。そしてみらいの家へ着き、家中へ入ってみらいの部屋へ行くとそこには力を失い、喋れなくなったはずのモフルンが立っていた。

「モフルン!?喋れなくなったんじゃないのか?」

「何言ってるモフ?モフルンはみらいがプリキュアになってからずっと喋り続けてるモフ!」

みらいも一瞬、喋れなくなったはずのモフルンが喋っている事に驚いていたが数秒後、笑みを浮かべながらモフルンをぎゅっと抱き締める。

「モフルン…!」

「みらい、苦しいモフ…」

「あつーごめんね！」

モフルンにそう言われたみらいはモフルンを離して自分のベッドの上に置いた。その後、俺はこの世界に疑問を抱いたままみらいの部屋から出ていく。

部屋に戻り、ベッドに寝転がって毛布を掛けて目を閉じた時、また声が聞こえてきた。だがそれはカタツムリニア乗車中に聞こえた声とは別の声だった。

「(あなた、この世界のこと気になってるでしょ?)」

「気になってるさ。ここは一体、どこなんだ？」

「(朝日奈みらいと十六夜リコ達が別れなかった世界線…B世界って言えば分かるかな?)」

「B世界だと…!?!」

「(うん、ビルドのレイマジ世界であり、魔法つかいプリキュアのB世界でもある!・B世界だから皆の性格や歩んだ道もA世界と違うの!)」

声の主は俺にこの世界はビルドのレイマジ世界であり、魔法つかいプリキュアのB世界であると説明し、皆の性格や歩んだ道がA世界と違う事も教えてくれた。

「もうちよつとだけこの世界について…」

俺は声の主にもう少しだけこの世界について教えてもらおうとしたが急に強烈な睡魔が襲ってきて俺は声の主にこの世界の事を聞く前に眠ってしまった。

翌朝、誰かが俺の身体を揺すっている。ベッドから起き上がり、右手で両目を擦ってから俺の身体を揺すった人物を見してみる。その人物はみらいだった。

「みらい…どうしたんだ？」

「今日、学校らしいの!だから急いで支度して！」

「マジか！」

今日、学校がある事をみらいに知らされた俺は本来俺たちがいるべきはずのA世界と変わらない本棚から全ての教科書を取り出して通

学カバンに詰める。俺の通学カバンは長期休み前最終日みたいにパンパンになった。

そして支度を済ませて軽く朝食を食べた後、俺はみらいとリコとことはと共に津成木高校へと向かっていった。

「はあ…はあ…遅れました〜!」

「朝日奈さん、十六夜さん、花海さん、桐生君!遅刻ギリギリよ!次からは気をつけなさい!」

「はい!」

そして席に着いた後、A世界の時と変わらずいつものように朝のショートホームルーム S H Rが始まる。担任の先生が出欠表にチェックを入れて挨拶をした後、話を始めた。どうせ、いつものように無駄話をするのだろうと思っていたが何だか今日は違うようだ。

「ここで皆の新しい仲間を紹介します!入ってきて!」

担任の先生がそう言うと共に2人の女の子が教室に入ってきた。

2人の女の子は先生に言われる前に黒板に名前を書いていく。

「私は朝田<sup>あさだ</sup>陽菜<sup>はるな</sup>、これからよろしくお願いします」

「私は魔閻<sup>まやみ</sup>月<sup>るな</sup>、よろしくね」

「えっと、朝田さんは朝日奈さんの隣、魔閻さんは桐生君の隣に座ってね!」

自己紹介を終えた2人は先生に言われた場所の席へ座る。俺の隣の席に座る事になった魔閻<sup>まやみ</sup>月<sup>るな</sup>の髪型は背中まである銀色のロングヘアをお嬢様結びにしたうえ、結った部分を長い三つ編みにして後頭部のあたりに紫色のリボンを付けて留めている感じだ。顔はクラス1可愛いみらいと良い勝負をするくらいの顔をしていた。

「あなた、桐生戦兎君?」

「そう…だけど何か?」

魔閻<sup>まやみ</sup>月<sup>るな</sup>は自分の席に座った瞬間、隣の席の俺に話しかけてきた。初対面なはずなのに俺の名前を知っているようだ。

「世界の救世主…!」

「へっ?」

「やっぱり、あなたが世界の救世主なんだ!桐生戦兎君、これからよろ



しくね！」

魔閻まやみ 月は俺が桐生戦兎と分かった瞬間、急に明るく話しかけてきた。魔閻まやみ 月はこれからよろしくね！と言いながら俺の左手を両手で握った。その様子を見たみらいは魔閻まやみ 月を睨んでいた。

「まっ、魔閻！もう授業始まるから話はまた後でな！」

俺はそう言つて魔閻の手を離し、授業に必要な物を取り出している。俺が教科書やノートを取り出しているとみらいが鬼の形相で俺に迫ってきた。

「戦兎、いくらあの子が可愛いからって浮気しないでよね!!」

「俺はお前一筋だから大丈夫だ」

俺はそう言いながら席から立ち上がり、みらいの頭を優しく撫でてあげた。みらいは満足そうな顔をしながら俺の肩に頭を乗せるのだった：

この時の俺たちは新しくクラスに入ってきた朝田 陽菜と魔閻 月が世界の運命を左右する鍵だとはまだ知る由もなかった：

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 26. 戦兎はどこへ…？ハーフボイルド探偵大奮闘！！

休日の早朝、みらいは目を覚まし、いつもの様に戦兎を起こす為に戦兎の部屋へと向かう。

「戦兎、おはよう…ってあれ、いない…」

みらいは扉を開けて戦兎の部屋の中へ入るが、部屋の中に戦兎の姿はなかった。困ったみらいは万丈の部屋へ行き、万丈に戦兎はどこにいるのかを聞いてみた。

「万丈君！戦兎はどこに…って2人共、何してるの？」

みらいは扉を開けて万丈の部屋に入る。するとそこにはイチャイチャしてる万丈とリコがいた。2人がイチャイチャしている光景を見たみらいは万丈の返事を聞かずに扉を閉め、真顔で二階の自分の部屋へと戻っていく。

「はあ…戦兎どこに行つたのかな」

「みらい、ここに相談するといいいモフ！」

はあ…と深いため息をつくみらいの前に何かの店の広告を手を持つモフルンがやって来た。モフルンは持ってきた広告をみらいの勉強机の上に広げる。広告の見出しには”鳴海探偵事務所”と書かれている。

「探偵さんなら戦兎を見つけてくれるかも！」

広告の見出しを見たみらいは人探しのプロである探偵なら戦兎を見つけてくれるかと思いき、鳴海探偵事務所へ向かった。

広告の簡易的な道案内を元に歩いたみらいはかもめビリヤード場と書かれてた建物の前に着いた。

「ビリヤード…？探偵事務所なのにビリヤード場って…」

みらいは探偵事務所を営んでいる建物に何故、ビリヤード場と書かれているのが気になったが今はそんな事を気にしている場合ではないかと思いき、扉を開けて探偵事務所と思われる建物の中へ入っていく。

中に入るとみらいの少し前方にはハネ毛の茶髪で黒いソフト帽を

被った戦兔と同じくらいの背の男性がいた。

「よお、お嬢さん！何か困った事でもあるのか？」

「実は…朝起きて部屋に行くといつもいるはずの恋人が今朝はいなかったんです！」

「人探して事だな…！分かった、やってやる！」

「ありがとうございます！」

みらいの頼みごとを聞いた男性は扉を開けて探偵事務所の外へ出ていき、町の中心部の方向へ走っていった。みらいも男性の後を追って町の中心部へ向かっていった。

「なあお嬢さん、探してる奴の特徴とか分かるか？」

「あなたと同じくらい背が高くて！イケメンで！仮面ライダーなの…！」

「…なるほど、って仮面ライダー!?」

「うん！戦兔は仮面ライダービルドなんだよ！」

みらいから戦兔が仮面ライダービルドである事を聞いた男性は驚いて目を大きく見開く。そしてくるりと身体を半回転させてみらいに背中を向け、顎に手を置きながら小声で独り言を言い出した。

「ビルドか…誰かが言ってた”破壊から世界を救う救世主”ってまさか…！」

男性はみらいの再び身体を半回転させてみらいの方を向く。そしてみらいの顔を見ながらこう言う。

「お嬢さん、救世主の恋人なんだな！俺も救世主とやりに会いたいから必ず見つけてやんよ！」

「ありがとうございます！あつ、お兄さん名前は…？」

「紹介遅れた！俺は左 翔太郎！ハードボイルド探偵だ！」

男性は左 翔太郎と名乗った。ハードボイルド探偵だ！と左 翔太郎が言った瞬間、みらいの後方からまた男性がやって来て左 翔太郎にこう言う。

「嘘はダメだよ翔太郎。君はまだまだ”煮え切らない半熟卵”ハードボイルドだろ？」

「フィリップ!!依頼人の前で俺の事をハードボイルドって言うな！依

頼人の間でハーフボイルド探偵つてあだ名が定着しちまうだろ！」

みらいの後方から来た男性の名はフィリップと言っらしい。フィリップは左 翔太郎をハーフボイルド探偵と言いかからかっていた。

その後、3人で話しながら街を歩いているとみらいの宿敵である魔闇 月が”誰か”と歩いていた。その”誰か”の顔を見てみるとそれは戦兎だった。

「嘘でしょ……戦兎が魔闇さんと一緒にいる……!?!」

魔闇 月と楽しそうに話しながら歩いている戦兎を見たみらいは酷く落ち込んだ。みらいの落ち込みっぷりを見た左 翔太郎は何も言わずに戦兎のいる方へ歩いていった。

「おいそこのお前、彼女いるのに他の女に浮気なんて男のやる事じゃねえぞ」

「はあ？俺は浮気なんかしてない！この子に町に何があるかとかを教えただけだ！」

「そ、そうなのか？」

「ああ。俺はみらい一筋だ！」

どうやら戦兎は魔闇 月に町の事を色々教える為に町と一緒に歩いてきたようだ。戦兎から”みらい一筋”という言葉聞いたみらいは頬を赤く染め、両手で顔を隠した。

「みらい……心配かけてごめんな」

戦兎はそう言いながらみらいの額の髪を少し捲る。そして露わになったおでこにキスをする。

「戦兎……/ /」

「……………」

戦兎がみらいにキスするところを見た魔闇 月はみらいを睨んでいた。睨まれている事に気付いたみらいも睨み返した。

「お前、罪な男だな」

「うるさい」

魔闇 月とみらいの睨み合いを見た左 翔太郎は隣にいた戦兎に小声でそう言う。戦兎は面倒くささを感じたのか少し苛立っているような表情を浮かべながら左 翔太郎にうるさいと返した。

そして暫くの間、その場に留まっていると戦兎達の前方から男性がやって来た。

「ここがビルドの世界か…」

魔閻 月はやって来た男性を見るなり、戦兎の後ろへ隠れて小声で破壊者が来た…破壊者がきた…と連呼している。

「仮面ライダーW、久しぶりだな…」

「門矢 士か！久しぶりだな！ってかここに何しに来たんだ？」

「世界を破壊しに来たのさ」

門矢 士はそう言いながらデイケイドのライダーカードを取り出し、白いバックルにライダーカードを挿しこむ。そしてバックルの両側のトリガー部分を閉じて変身する。

『カメンライド！デイケイド！』

仮面ライダーデイケイドに変身した門矢 士はソードモードのライドブツカーを左手に持ちながら戦兎達へと向かっていくのだった

…

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 27. 破壊者を倒せ！天才と探偵はベストマッチ！

デイケイドはソードモードのライドブツカーで俺に斬りかかってきた。俺は斬撃を避け、少し距離を取ってビルドドライバーを取り出す。そして腰に装着する。ドライバーを装着した後、二つのスロットにラビットフルボトルとタンクフルボトルを挿す。

『ラビット・タンク！』

『best match！』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、俺はビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『Are you ready?』

『変身！』

レバーを回すと、前方と後方にスナップライドビルダーが現れる。俺は変身！という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれて変身する。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

変身後、俺はラビットの力が宿る左足で何回も跳躍し、デイケイドを惑わせる。その後、デイケイドの目の前へ行き、タンクの力を宿したキヤタピラ模様の足でデイケイドの胸部を蹴る。

「おい、お前ら！なんで戦ってんだよ!?!同じ仮面ライダーだろ?」

「世界を破壊する為だ…コイツを片付けた後、お前らの相手をしてやるからそこで待ってる!」

左 翔太郎はライダー同士で戦っている事に疑問を抱き、なぜ戦っているのかを俺たちに聞いてきた。デイケイドは世界を破壊する為だと左 翔太郎に言う。

「デイケイド…世界の破壊はさせないぜ！行くぜ、フィリップ!」

「OK!翔太郎!」

左 翔太郎はそう言いながらドライバーを腰に装着し、ジョーカーメモリを取り出しながらフィリップに合図をする。そして左 翔太郎から合図を受け取ったフィリップもドライバーを腰に装着した後、サイクロンメモリを取り出す。

『サイクロン！』

『ジョーカー！』

ガイアメモリを起動させた後、フィリップが先にドライバーの右側のスロットにサイクロンメモリを装填する。フィリップの装填したメモリは左 翔太郎のドライバーの右側のスロットへと送られていく。フィリップはサイクロンメモリが送られていくのと共にその場に倒れた。そして左 翔太郎はフィリップから送られてきたサイクロンメモリを再び装填してから自分のジョーカーメモリをドライバーの左側のスロットに装填する。二つのメモリを装填した後、ドライバーの両側のレバーを外向き倒して変身する。

『サイクロン！ジョーカー！』

「さあ、お前の罪を数えろ！」

変身後、2人は決めゼリフを言ってからディケイドへと向かっていく。少し離れた場所に待機しているみらいは倒れているフィリップを安全な場所へと避難させた。

一方、ディケイドと戦っている俺はガンモードのドリルクラッシュャーを取り出し、ドリルクラッシュャーのフルボトル装填部にハリネズミフルボトルを装填し、必殺技を発動させる。

『Ready go！』

『ホルテックブレイク！』

待機音声を少し流してからドリルクラッシュャーのトリガーを引く。トリガーを引いた瞬間、ドリルクラッシュャーの銃口からは鋭い針が何本も放出されていった。ディケイドは必殺技を避けるためにイリュージョンのカードを取り出し、バツクルに挿し、バツクルのトリガーを引いてカードの効果を発動させる。

『アタックライド！イリュージョン！』

ディケイドがイリュージョンのカードを使った事によりドリルクラッシュャーから放たれた鋭い針はディケイド本体ではなくディケイドの分身に当たっていく。

「くっ…どうすれば奴に大ダメージを与えられる？考えろ…俺」

と、俺がどうすればデイクイドに大ダメージを与えられるかを考えていたその時、魔闇まやみの瞳まなの色が普段の青色から赤色へと変化する。そして瞳の色が変わった魔闇 月は二つのエンプティボトルを生成し、そのエンプティボトルで仮面ライダーWの成分を吸っていく。

「俺たちの変身が解けていく…!」

魔闇 月が成分を吸っていくのと共に仮面ライダーWの変身が解けていった。そして吸い終わると、二つのエンプティボトルは探偵フルボトルとUSBメモリフルボトルに変わっていた。変身が解けた左 翔太郎は少し離れた場所に行き、俺の戦いを見守っていた。「救世主、これを使って!」

魔闇 月はそう言いながら探偵フルボトルとUSBメモリフルボトルを俺に投げる。二つのフルボトルを受け取った俺は早速、ラビットとタンクフルボトルを抜き、探偵フルボトルとUSBメモリフルボトルをドライバーのスロットに挿す。

『探偵!USBメモリ!』

『best match!』

探偵フルボトルとUSBメモリフルボトルを挿した後、ドライバーのレバーを回してフォームチェンジする。

『Are you ready?』

『ダブル!〜♪』

ダブルと言った後、ダブル サイクロンジョーカーの変身音が流れる。それと共に俺のフォームチェンジが完了し、俺は仮面ライダービルド Wフォームへとフォームチェンジした。

フォームチェンジした俺はドライバーのレバーを勢いよく回して必殺技を発動させる。

『Ready Go!』

『ボルテックフィニッシュ!イェーイ!』

俺はデイクイドを巻きこみながら強い風と共に高い場所まで上昇していく。高くまで上昇した後、ライダーキックの態勢をとりながらさっきの強い風に巻き込まれ、上空に舞っているデイクイドに向かっ



て急降下していく。

俺の必殺技を受けたデイケイドは後方へ吹っ飛ばされていくが、受け身を取り俺の必殺技に何とか耐えた。

「流石に分が悪いな…桐生戦兎、また会おう」

「待て！」

デイケイドは俺にそう言いながら次元の壁（オーロラ）を使い、どこか去って行ってしまった。俺は変身を解き、魔閨 月の元へ行く。

「魔閨、お前は一体、何者なんだ？」

「ふふっ…内緒。それより今はこの2人の心配をした方がいいんじゃない？」

魔閨の見る方へ顔を向けるとそこには身体が半透明になっている左 翔太郎とフィリップがいた。

「2人が消えかかっている…！」

「2人が消えるのはあなたが仮面ライダーWの力を手に入れたからよ」

「力は返せないのか？」

「あなたが救世主となり、この世界を救うまでは力は返せない」

「まじかよ…」

仮面ライダーWの力を奪い、責任を感じている俺の元に左 翔太郎とフィリップが歩み寄ってきた。

「桐生戦兎、彼女を大切にしろよ！」

「当たり前だ。大事にするさ…」

「桐生戦兎、一人で世界を救おうとは思わず誰かと…いや、皆と力を合わせて世界を救ってくれ。それが救世主だ」

左 翔太郎は俺に彼女を大切に、フィリップは俺に一人ではなく皆と力を合わせて世界を救うのが本当の救世主だと言ってくれた。

「そろそろ時間みたいだな…じゃあな、桐生戦兎！」

左 翔太郎がそう言うと共に左 翔太郎とフィリップは小さな光の粒となって消えていった。

二人が消えた後、俺は二人の力がこもっている探偵フルボトルとUSBメモリフルボトルをぎゅっと握りしめる。

「それじゃ私、塾の時間だからそろそろ行くね」

魔闘 月は俺にそう言い、俺たちとは反対の方向へ歩いていった。そして残った俺とみらいも家に向かって真っ直ぐ帰っていく。

「戦兔、もうすぐでバレンタインだね…」

「そうだな…」

家へ帰っている途中、みらいは俺にあと少しでバレンタインである事を伝えてきた。俺はまだ力を仮面ライダーの力を失って消えていった二人の事を考えていたので小さい声でそうだな…と返事する事しか出来なかった。

「戦兔、二人が消えた事を――に考えちゃダメだよ！プラスに考えようよ！」

「プラスか…」

「うん！二人の力を手に入れた事で平和に近づいたって考えよ！」

「分かった。プラスに考えるよ」

「うんうん！ポジティブなのが一番だよ！」

みらいは俺の返事を聞いて俺がまだ2人の事を考えている事が分かっていたようで俺に――な考えはやめてポジティブにいきましょうと言ってきた。俺は確かに、――な考えを持ち続けると良い事はないし前にも進めないと思ひ、みらいに言われた通り、ポジティブにいく事にした。

「そろそろ夕飯の時間だから急ぐぞ！」

「うん！」

俺は自分の右手首についている腕時計を見てもうすぐで夕飯の間だと気づき、みらいに急ぐぞ！と言い2人で走って家へ帰っていった。

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 28. ワクワクのバレンタイン！俺と私の思い出！

デイケイドを退けた日から数日経った今日は2月14日、女性が男性にチョコレートを贈り、愛の告白をする日・バレンタインデーである。いつものようにみらい達と学校へ行き、靴から上履きへ履き替える為の下駄箱の扉を開けると下駄箱の中にはチョコレートが入っているとと思われる手紙付きの小箱が何個もあった。

「はあ…誰だよ、俺の下駄箱にチョコ入れた奴は…」

「桐生 戦兎君、私のは受け取ってくれた？」

「全く、面倒くさい事…」

俺の下駄箱に入っている数個のうちの1つは魔閨 月が入れたらしい。ホワイトデーにチョコレートのお返しをするのが面倒で嫌だったので魔閨 月に全く、面倒くさい事すんなよと言おうとしたその瞬間、魔閨 月が俺に勢いよく抱きついてきた。

「桐生 戦兎君！」

「ちよっ、ちよっと!!戦兎には私がいるんだから抱きつかないで!つか離れてよ!」

魔閨 月が俺に抱きつく所を見たまらいはしかめっ面になりながら戦兎から離れるよう指示する。だが、魔閨 月は一向に離れようとしなかった。

そばで少し悲しげな表情を浮かべているみらいを見た俺は魔閨月の両腕を引き離し、みらいの手を引いてそのまま教室へ駆け足で向かっていく。

「みらい、いつも言ってるけど俺にはお前だけだ!だから、心配すんな!」

「戦兎…!」

教室に着いた後、俺はみらいを安心させる為に俺にはお前だけだ!と言ってあげた。俺の言葉を聞いたみらいはいつものような明るさを取り戻し、他の友達と話す時も明るく話せるようになっていた。

それから数時間後、学校が終わり、下校の時間になる。リコは万丈にチョコを渡す為に早く帰ると言い、ことはもリコに付き添うと言っ

てリコと共に駆け足で家へ帰っていく。一方、残った俺とみらいはゆつくりと歩きながら家へ向かっていた。

「ねえ、戦兔…ちよつとここ寄っていかない？」

そう言うみらいが指差す先にあったのは2年前、俺とみらいが出会った公園であった。別世界とはいえ、元いた世界の公園と何ら違いはなかった。俺とみらいは公園内の芝生広場に隣り合わせで座り、出会った時の思い出などを話し始める。

「ここっておれとみらいが出会った場所だよな」

「うん、そして私が戦兔を好きになった場所でもあるんだよ！」

「お前、最初からおれのこと好きだったのか!？」

「当たり前。あの時の戦兔かつこよかったもん！」

みらいが最初から俺の事が好きだったという事を初めて知り、俺は驚く。そしてその他にも2年前の懐かしい思い出などを話していると芝生の上に置いていた俺の右手にみらいの左手が重なった。

「みらい…／＼／＼」

「戦兔、今日はバレンタイン…でしょ？だから、はいこれ！」

みらいはそう言いながら、空いている右手を通学バックの中に入れて通学バックから中くらいの大きさの箱を取り出し、俺に渡してきた。

「これは…！」

「手作りのチョコだよ！戦兔、これからもよろしくね！」

みらいはそう言いながら俺の右頬に顔を近づけていき、キスをする。キスをされた俺は自分の顔が次第に赤くなっていくのを感じた。

「さっ、もう辺りも暗くなりそうだし帰ろうか！」

「そうだなー！」

みらいは日が沈みかけて薄暗くなっている空を見ながら俺にそう言う。その後、俺とみらいはいつもの様に手を繋いで思い出話の続きを話しながら仲良く家へ帰っていった。

それから数時間後、俺は貰ったチョコの手紙を順番に読んでいく。どれも”前から好きでした”的な告白文が書かれていたが魔閨 月の手紙にはこんな事が書かれていた。

『桐生 戦兔君へあなたは近いうちに3枚のメダルで変身するレジエ  
ンドライダーと出会うでしょう。ですがその前に懐かしき2人があ  
なたの前に現れます。その名は…』

”その名は”の後の部分はなぜか破れていて読めなかった。手紙  
を取り魔闇 月の手作りのチョコが入っているとと思われる箱を開け  
てみるとそこにはロボットのような形のチョコと鱈わにのような形をし  
たチョコが入っていたのだった…

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 29. 黄金のソルジャーと西のファントム!

バレンタインから数日経った日の朝、インターホンの音が朝日奈家の全体に鳴り響く。俺は起きたばかりだったので玄関前に行けず、代わりにみらいが玄関前に行き、家の扉を開く。

「キヤー!!」

玄関前からみらいの悲鳴が聞こえてきた。俺はみらいに何かあったのかと思い、すぐに変身出来るようドライバーとフルボトル二本を持ってみらいのいる玄関前に行く。玄関の開いた扉の前には”久しぶり!”と書かれた服を着ている氷室幻徳と猿渡一海がいた。

「何だ、幻さんと一海か…」

「何だとは何だ!久しぶりの再会を喜べよ!」

2人と俺の会話を聞いたみらいはこの2人が俺の知り合いだと分かって、少し安心した表情を浮かべている。

「こんな可愛いお嬢さんと一緒に住んでるなんていいなあ…羨ましいぜ〜!」

猿渡一海はそう言いながらみらいの頭を撫でる。頭を撫でられるみらいは会って間もない猿渡一海に頭を撫でられてるせいなのかどこか不安そうな表情を浮かべていた。

「一海、そろそろ撫でるのやめなよ」

「わりいわりい、可愛いかったらつい撫でたくなっちゃった」

俺に注意された猿渡一海は撫でるのをやめ、手をバッグの中に入れてバッグの中から一枚の紙を取り出し、俺に渡してきた。

「これは?」

「謎のライダーについての記事だ。最近、赤と黄と緑のメダルで戦うライダーが街に現れてるらしい…」

俺は赤と黄と緑のメダルで戦うライダーと聞いてレジエンドライダーである”仮面ライダーオーズ”を思い出す。

「一海、情報ありがとう!街に行ってくる!」

2人に街に行くと言え、俺が街に向かって走り出したその時、目の前にエボルトが現れた。俺はいきなり現れたエボルトに驚き、何歩か

後退する。

「久しぶりだなあ！」

「エボルト……！」

「今日はお前のレジエンドライダーフルボトルを貰いに来たんだ！」

「悪いが、レジエンドライダーのフルボトルは渡せない！」

「だったら力づくで奪うまで！」

エボルトはそう言いながら既にコブラエボルトとライダーシステムエボルトの二本のフルボトルが装填されたエボルトドライバーのレバーに手をかけてレバーを勢いよく回して変身する。

『Are you ready?』

『コブラ！コブラ！エボルトコブラ!!フツハツハツハツハ！』

変身したエボルトは俺に向かってきた。俺は変身する為にドライバーを出そうとしたが猿渡一海と氷室幻徳が俺の前に立つ。

「戦兎、ここは俺たちに任せろ！行くぞ、ヒゲ！」

「ああ。行くぞポテト」

2人はそう言いながらスクラツシユドライバーを腰に装着し、猿渡一海はロボットスクラツシユゼリーを、氷室幻徳はクロコダイルクラックフルボトルをスクラツシユドライバーに装填し、ドライバーのレンチを下に倒して変身する。

『潰れる！流れる！溢れ出る！』

『割れる！壊れる！砕け散る！』

音声と共にビーカーが2人を包み込んでいき、潰したゼリーの液体が2人の入っているビーカーに溜まっていく。そしてビーカーの液体が溜まりきった所でビーカーがなくなり、溜まっていた液体が装甲として2人の身体に纏われていく。

『ロボット イン グリス！ブラア!!』

『クロコダイル イン ローグ！オーラア!!』

「戦兎、行け！」

変身した2人は俺にそう言ってからエボルトへ向かっていった。2人に行くよう言われた俺はみらいの手を引き、街の中心部の方へ走っていく。

「お前らに用はない」

「黙れえ!!」

猿渡一海はそう言いながらアタックモードのツインブレイカーでエボルトの胸部を攻撃をする。そして氷室幻徳も何回か蹴り技を入れてエボルトを少し先まで吹っ飛ばす。

「エボルト、これで終わりだ」

氷室幻徳はそう言いながらスクラッシュドライバーのレンチをもう一度下に倒して必殺技を発動させる。隣の猿渡一海も氷室幻徳と同じようにして必殺技を発動させる。

『スクラップファイニッシュ!』

『クラックアップファイニッシュ!』

必殺技を発動させた猿渡一海と氷室幻徳はその場で勢いよく跳び上がる。そして猿渡一海はグリスの背中から噴出されるヴァリアブルゼリーを使って加速し、ローグより一足先にエボルトに向かって急降下していく。グリスの必殺技が決まった後、氷室幻徳は両足を開き、エボルトの身体を鰐のように何回も噛んでからデスロールをする。

「くっ……ここまで強くなってるとは想定外だ……分かった、今日の所は見逃してやるよ! チャオ!」

エボルトは必殺技を受けた部分を手で抑え、苦しみながらも高速移動を使ってどこかへ去っていった。

2人は変身を解き、朝日奈家の玄関の方へ顔と体を向ける。すると、そこには2つの缶コーヒータを持った万丈と具なしの普通のおにぎりを何個か詰めた小箱を持つリコがいた。

「久しぶりだな、龍我」

「久しぶりだな! 幻さん、カズミン! おにぎりと缶コーヒータを持って来たから庭のベンチに座ってゆつくりしていけよ!」

万丈にそう言われた2人は朝日奈家の庭にあるベンチに座り、缶コーヒータを飲みながらおにぎりをゆつくりと食べていく。

「龍我、その紫色の髪の子は何なんだ?」

「コイツは十六夜リコ、俺のコレだ」彼女



万丈は彼女と言うのが恥ずかしくて言葉にできない為、ジエスチャーでリコが自分の彼女であると2人に伝える。

「へえ…充実してんじゃねえか」

猿渡一海がそう言っていると家の中から朝日奈今日子が出てきた。朝日奈今日子を見た氷室幻徳は胸がドキン!となり、朝日奈今日子に迫っていく。

「あ、あの!初めました!」

「初めました、私は朝日奈今日子!あなたの名前は?」

「氷室幻徳と言います!」

氷室幻徳は朝日奈今日子に名前を教えると共に黒い革ジャンのチャックを開けて”よろしくお願ひします!”と書かれたシャツを朝日奈今日子に見せる。

「フフツ、面白い方ね!」

「今日子さん、昼までこのベンチで話しましょう!」

「フフツ、いいわよ」

2人はそう言いながら猿渡一海の座るベンチとは別のベンチに座り、話し始めた。

一方、街の中心部へ走っていった俺とみらいは長い距離を走り、お腹が空いてしまった俺とみらいは近くにある多国籍料理店”Cous Cousserie”に入っていく。

店内に入るとそこにはチャイナ風のコスプレ衣装を着た店員さんが数名いた。そしてその数名の中に仮面ライダーオーズである火野映司がいた。

「アンタ、どうしてここに?」

「俺はここに住み込みでバイトしてるからいるんだよ!」

どうやら、こっちの世界の火野 映司はまだクスクシエに住み込みでバイトをしているらしい。タカメダルが割れてない事からアंकという泉 比奈の兄の身体を使うグリードもまだいるようだ。

俺は火野 映司と少し話した後、みらいと共に近くの席に座り、メニュー表を見る。メニュー表をパラパラとめくっていると、また誰かが俺の頭の中に囁いてきた。

「オーズのいる場所へ辿り着いたようね。そうすれば後はオーズの力を手に入れるだけよ」

頭の中にそう囁かれた俺はオーズの力を手にすれば火野 映司が左 翔太郎とフィリップのように消滅してしまうと思ひ、世界を守る為とはいえ、レジエンドライダーの力を奪う事はしたくないなど思っている。

「戦兎? どうしたの?」

「大丈夫、何でもない」

俺がずつとボーつとしたので心配になったみらいが俺に声を掛けてきた。俺はみらいを心配させないよう大丈夫、何でもないとみらいに言つて注文用のベルを鳴らす。

注文を終えて料理を待つ間、俺は”力を奪う”という嫌な事を忘れる為のみらいと話し始める。

「そういえば俺、まだみらいとLINEの友達になってないよな?」

「あつ! 私も戦兎を登録するの忘れてた! QRコード見せて!」

俺はスマホに自分のLINEアカウントのQRコードを表示させる。みらいは表示されているQRコードを読み取り、俺を友達登録した。みらいのカバー画像は一年前のクリスマススの時に撮った俺とのツーショットだった。

「良いカバー画像でしょ?」

「ああ! 最ツ高だ!」

「これからも良い思い出を作っていこうね: / / /」

「そうだな!」

みらいは顔を赤くし、俺の左手を右手でぎゅつと握りながらそう言う。俺はそうだな! と返答し、同じ様にぎゅつとみらいの右手を握る。そしてその後も俺とみらいが話しているとチャイナ風コスプレの店員さんが料理を持ってきて俺たちのテーブルの上に置く。俺とみらいは冷めないうちに食べようと、出来上がったばかりのアツアツの中華料理を食べ始めるのだった:

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

### 30. 世界平和に向かってスキヤニングチャージ!

” Cou<sup>ク</sup>s Cou<sup>ク</sup>ssi<sup>シ</sup>er<sup>エ</sup>” で中華料理を食べ終わった後、俺は近くの席に座っている火野 映司の元へ行く。そして火野 映司にアंकの居場所を聞く。

「アंकとかいうやつはどこにいるんだ？」

「アंकなら近くのシャ○レーゼでアイス買ってるんじゃないか？」

「なんでアイス!？」

「アイツ、アイスが大好きだからさく」

「へっ、へえ〜…」

俺はアイスが好物な怪物がこの世にいるとは思っていなかったの  
で火野 映司からアंकというグリードの好物はアイスだと聞いて驚く。本題のアंकの居場所を聞いた俺は会計を済ませた後、みらいと共に” Cou<sup>ク</sup>s Cou<sup>ク</sup>ssi<sup>シ</sup>er<sup>エ</sup>” の近くにあるというシャ○レーゼへ向かう。

シャ○レーゼに着き、店内に入るとそこには沢山のアイスが入ったアイスコーナーをじーっと見つめるアंकがいた。アंकはアイスに夢中のあまり今、来店した俺とみらいに気づいていない様子。

「お〜い、アイスに夢中なそのあなた〜！」

「ああん? お前ら、俺に何の用だ？」

「アಂತはエニグマ事件の時に復活したが再び消滅したはずだ。なの  
に何でここにいるんだ？」

「俺も知らねえよ。あの後、気付いたら皆、揃ってここにいたんだよ」  
「ここに来る直前に変なことはなかったか？」

「変な事ねえ…：そういうえば、誰かが俺の頭の中でこう言ってきたんだ  
…」 平和な世界を創る為の礎となれ」と

「平和な世界を創る為の礎ねえ…」

アंकにこの世界にいる理由を聞いた俺は謎の力でフルボトルを生成出来たり、俺の事を救世主と呼んだりする魔閻 月がアंकや火野 映司達をこの世界へワープさせてきたと考える。

「桐生 戦兎君。あなた今、私が仮面ライダー達をこの世界へワープ

させたんだと思ってたでしょ?」

「心が読めるとは流石だな…」

「確かに私は仮面ライダー達をこの世界へワープさせている。けど、仮面ライダー達をワープさせたのは私だけではない」

「何だと!?!」

「フフフ…仮面ライダー達をワープさせたもう1人の人物は意外と身近にいるかもね」

魔閻 月は仮面ライダー達をこの世界にワープさせた人物が自分ともう1人いると語った。そして最後に、仮面ライダー達をワープさせた人物は身近にいるとヒントを言ってからこの場を去っていった。

「今のはお前らの取り巻きか?」

「いや、ただの友達だ」

「そうか」

アंकに魔閻 月は取り巻きか?と聞かれたので俺はただの友達と答える。俺の返事を聞いていたみらいは最近魔閻 月から積極的なアタックを受けている俺が魔閻 月を”ただの友達”として認識している事を知り、ホッと安心する。

「俺はアイス買ったから先に帰ってるぞ」

「待て!俺たちも付いてく!」

「フン、好きにしろ」

俺はアंकにそう言い、みらいと共にアंकの後ろを歩く。アंकの歩くスピードは早く、俺たちの歩きはほぼ早歩きになっていた。

その頃、朝日奈家にいる万丈はリコと一緒に皿洗いや掃除などの家事をしていた。

「なあ、リコ」

「何?」

「指輪…付けてる?」

「指輪?付けてないわよ!まさか、私が他の男の人に告白されてないか心配してる?」

「いつ、いや!心配してねえよ!」

やはり、こっちの世界のリコは万丈が渡したはずの指輪を指にはめ

ていなかった。万丈に指輪を付けているかどうかを聞かれたリコはからかうような目をし、軽く笑いながら万丈に指輪をはめていない事を伝える。

その後、家事を終えた万丈は自分の部屋に戻り、今いるB世界について考える。

「この世界は俺が指輪を渡していない世界なのか…」

万丈がB世界について考えていると、誰かがドアノブを回して部屋の扉を開ける。扉の前にはリコがいた。

「なあ、リコ」

「ん？何かしら？」

「今いる俺が別世界から来たって言ったら信じるか？」

「…信じるわよ」

「えっ!?!何で？」

「だって、私知ってる万丈くんは積極的じゃないから…」

リコは自分の知っている万丈は今いる万丈よりも積極的ではないと言う。もう1人の自分がどういう感じなのかをリコの話を通して知った万丈はだから指輪を渡していないのか…と思った。

少しの沈黙が流れた後、リコは涙目になりながら万丈に抱きついた。万丈はリコがいきなり抱きついてきた事に驚いている。

「万丈くん…私をギュツと抱きしめてくれないかしら？」

「ああ、分かった」

ギュツと抱きしめるよう頼まれた万丈はリコの背中に両腕を回してリコをギュツと抱きしめた。万丈にギュツと抱きしめてもらえたリコはフツツと笑みを浮かべていた。だが、万丈はそれだけでは終わらず抱きしめている両腕を離れた後、リコを軽く押しして近くの壁に背中を密着させる。

「万丈くん？」

「リコ、今いる俺でしか出来ない事をしてやるよ！」

「え!?!えっ、ええ／＼／＼」

万丈はそう言いながらリコの顎に手を添えて軽くクイツと引き、顔を自分に向ける。そして自分の唇をリコの唇に近づけていく。

万丈とリコの唇の先が軽く触れ合い、完全なキスになろうとしたその時、部屋の扉が開いた。

「2人共…何やってるの?」

扉の前にはことはがいた。2人は慌てて離れる。万丈はいつもより数倍早く筋トレをし、リコは噛みながらもことはに話しかける。

「は、ははは、はーちゃん!ノック無しで人の部屋入るのはダメなのよ!」

「ごめん、次からはちゃんとノックするね!」

「全く、もう…/ /」

「で、万丈とリコに見せたい物があつてここに来たの!」

「見せたい物?」

ことははそう言うのと早速、自分のポケットから魔法界の物であろう新聞を取り出し、2人に見せる。

「これは…万丈くんの知り合いか何か?」

「仮面ライダー全てが知り合いって訳じゃねえ…コイツは俺が知らないライダーだ」

ことはが取り出した魔法界の新聞の記事の写真には仮面ライダーウィザードが写っていた。これを見た万丈は戦兔ならこの仮面ライダーを知ってると思い、戦兔の元へと向かった。

その頃、”Cous Cousier”<sup>ククス</sup>に戻って来ていた俺は火

野 映司にワープ前の状況を聞いていた。

「なあ、ワープ前の状況はどうだったか詳しく覚えてるか?」

「詳しくは覚えていない…だけど、ワープする時、橙色の髪をした子がいた気がするんだ」

「橙色の髪の子…?みらい、何か分かるか?」

「橙色の髪としか分からないとなると私にもそれを誰だか当てる事は出来ないな」

火野 映司からヒントを貰った俺たちだったが、魔闇 月の他に仮面ライダー達をこの世界にワープさせた人物はまだ分からなかった。橙色の髪をヒントに誰も喋らない静かな空間の中で俺が仮面ライダー達をワープさせた人物は誰なのか考えていると、外から崩壊音が

聞こえてきた。店の外に出てみるとそこには門矢士と恐竜グリードがいた。

「救世主さんに凶暴なやつをプレゼントしてやる。有り難く思え」

「破壊者・デイケイド……！思い通りにはさせない!!」

俺はポケットからハザードトリガーとフルフルラビットタンクフルボトルラビットを取り出す。そして、ハザードトリガーを起動させ、フルフルラビットタンクフルボトルをラビットの方に合わせる。

『ハザードオン!』

『ラビット&ラビット!』

ハザードトリガーを起動し、フルフルラビットタンクフルボトルをラビットに合わせた後、ハザードトリガーとフルフルラビットタンクフルボトルをドライバーに挿す。そしてハザードトリガーのスイッチをもう一度押してからドライバーのレバーを勢いよく回す。

『マックスハザードオン!』

『ガタガタゴットンズツタンズタン!ガタガタゴットンズツタンズタン!』

『Are you ready?』

「変身!」

レバーを回すと、前方と後方にハザードフォーム用のスナップライドビルダーが現れる。俺は変身!という声を掛けた後、ハザードフォーム用のスナップライドビルダーに挟まれる。その後、ラビットラビットの装甲を身に纏い、変身完了する。

『オーバーフロー!』

『紅のスピーディージャンパー!ラビットラビット!ヤッベーイ!ハエーイ!』

ラビットラビットフォームに変身した俺はラビットラビットフォームの特性である”凄い跳躍”を使いながら恐竜グリードに向かっていく。

「俺もやらなきや!」

「映司!!奴に任せとけ!」

「アंक、そう固い事言うなって！ライダーは助け合いでしょ？」

「くっ…お前が戦いたいなら俺はそれに従う。映司、これを使え！」

アंकはそう言いながらオーメダルホルダーからタカ、トラ、バツタの3つのコアメダルを取り出して火野 映司の方に向けて投げる。アंकから3つのコアメダルを受け取った火野 映司はバツクルの3箇所のメダル装填部に右からタカ、トラ、バツタという順で装填していく。そしてバツクルを斜めに傾けてオースキャナーで3つのメダルを読み込んで変身する。

『タカ！トラ！バツタ！』

『タ・ト・バー！タトバタ・ト・バ！』

仮面ライダーオーズに変身した火野 映司は俺と同じようにバツタの跳躍力を使い、恐竜グリードへ近づく。そしてある程度近づいた瞬間、トラクローを展開させて恐竜グリードを攻撃していく。

と、俺と火野 映司が恐竜グリードを窮地に追い込み、必殺技を決めようとしたその時、また魔閨 月が俺たちの元へ現れた。俺は魔閨 月を火野 映司に近づかせないよう魔閨 月の体を火野 映司とは反対の方へ押していく。

「魔閨、やめろ!!」

「私を火野 映司から離れたって無駄よ。あのグリードからも力は奪い取れるんだからね」

「何だ?!」

魔閨 月はそう言いながらアंकの方へ身体を向ける。どうやらアंकからも力を奪えるらしい。

俺が魔閨 月と話している間に火野 映司は恐竜グリードをメダジャリバーで斬り裂き、オースキャナーでもう一度3つのコアメダルを読み込んで必殺技を発動させていた。

『スキヤニングチャーザー!』

必殺技を発動させると共に火野 映司はその場で跳び上がり、恐竜グリードめがけて急降下していく。必殺技が決まり、恐竜グリードは倒れたかと思われたが必殺技が決まる瞬間に魔閨 月がエンプティボトル二本を生成し、アंकからタカの成分とメダルの成分を奪い、



フルボトルを生成した。

「救世主、あなたがやらなければ世界は救われない…だから、この力を使って下さい」

「くっ…」

俺は魔閻 月を止められなかった悔しさを抱えながらも2つのフルボトルをフルフルラビットタンクフルボトルと入れ替えてドライバーに装填する。そしてドライバーのレバーを回し、フォームチェンジする。

『are you ready?』

『オーズ！タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！』

オーズと言った後、オーズ タトバコンボの変身音が流れる。それと共に俺のフォームチェンジが完了し、俺は仮面ライダービルド オーズフォームへとフォームチェンジした。

俺は火野 映司が弱らせてくれた恐竜グリードを見て一気に決めるしかない！と思ひ、ドライバーのレバーを勢いよく回して必殺技を発動させた。

『Ready Go!』

『ボルテックファイニッシュ！イエーイ！』

俺は赤、黄、緑の3つの輪をくぐりながら恐竜グリードへ向かって急降下していく。必殺技を受けた恐竜グリードは爆発と共に消えていった。

「チツ、またしくじったか…」

門矢 士はそう言いながら次元の壁を使い、俺たちの元から去っていった。恐竜グリードを倒し、変身を解いた俺は消えかけている火野 映司達の元へいく。

「俺のせいでアンタが消える…」

「気にすんなって！こうして他のライダーと助け合いが出来ただけで俺は充分だ！」

「フン、俺はまだやり残したことがあるがな」

「まっ、皆と助け合って世界を守ってよ！ビルド！」

火野 映司はそう言いながらアंकと共に消えていった。俺はま

たライダーを消してしまったと酷い罪悪感に駆られるのだった…

### 3 1. 宇宙キター!! 潜入、仮面ライダー部!

仮面ライダーWの2人のように火野 映司とアングの2人が消えた翌日の早朝、酷い罪恶感を感じている俺は自分の部屋のベッドの上で体育座りをしてずっと顔を下に向けていた。

俺が長い時間、自分の部屋に籠っていると、俺の事が心配になったみらいが部屋にやって来た。

「戦兔どうしたの?」

「俺はまた2人の力を奪い、消滅させてしまった:俺は救世主なんかじゃない。破壊者だ」

「戦兔:」

自虐している俺の言葉を聞いたみらいは俺の方に顔を向けながら悲しい表情を浮かべていた。

「でも、戦兔が力を使わなければディケイドが連れてきた怪物に世界を壊されてたんだから戦兔は救世主だよ!」

みらいはそう言いながら落ち込んでいる俺の頭を優しく撫でてくれた。俺は少し顔を上げてみらいの顔を見る。俺が顔を見ると同時にみらいは笑顔を浮かべた。その顔に和まされた俺は少し元気を取り戻した。

「さて、戦兔が元気になった事だし2人で朝ごはん食べよつか!」

「まだ食べてないのか?」

「うん、戦兔の事が心配で食べられなかった:」

俺が元気を取り戻したのは起きてから数時間後の事だったので朝食の時間は過ぎているのだがみらいは食事より俺の事が心配だったらしく、まだ朝食を食べていなかった。

「んじゃ、俺が料理するからみらいは食卓に着いていてくれ!」

「いや、料理は私に任せてよ!」

料理をする為に階段を登ろうとした瞬間、みらいが俺の腕を掴みながら料理は私に任せてよ!と言ってきた。みらいの料理には自信がある!と言っているような自信満々な顔を見た俺は料理をみらいに任せて一足先に食卓に着いた。

食卓に着いてから数十分後、エプロンを巻いたみらいが持ってきた俺の分と自分の分の料理を食卓に並べる。そしてみらいは俺の隣の席へ座る。

「戦兔見てみて！オムライス作ったよ！」

「みらい、料理の腕も上がったんだな！」

俺はレストランに並ぶような綺麗なオムライスを見てみらいにそう言う。褒められたみらいは嬉しそうな表情を浮かべながらテーブルの上に置かれているケチャップを使い、俺のオムライスの上に何かを書いていく。

「L、O、V、E…ラブって事ね」

「そうだよ！私、戦兔の事大好きだからそう書いたの！」

「みらい…／／／」

オムライスの上にLOVEと書いた理由を聞いた俺は顔を赤く染める。そして俺はお返ししてみらいのオムライスの上にLOVEと書いた。

「戦兔も書いてくれたんだ！嬉しいなあ…／／／」

俺がお返ししてみらいのオムライスの上にLOVEと書くともみらいもさっきの俺のように顔を赤くする。顔が赤くなった俺ともみらいの胸鼓動は速さを増していく。それと共にお互いゆっくりと肩を寄せていく。肩を寄せた状態で顔を見合わせた俺ともみらいはその場の勢いで自分の唇を相手の唇に近づけていく。

もう少しで唇が重なるという所まで来たその時、家のインターホンが鳴った。俺ともみらいはハツとなり、お互い慌てて離れ、玄関へ向かっていく。

玄関前にいき、扉を開けるとそこには猿渡一海と氷室幻徳がいた。

2人は走ってこの家に来たようで息を切らしていた。

「なんかあったのか!？」

「はあ…はあ…じっ…事件だ、大事件！」

「何だ?!」

俺は猿渡一海から大事件が起こったと聞いて驚く。みらいは万丈達を呼ぼうとリコの部屋へ向かっていく。

「はあ…はあ…みーたんみたいな人が天ノ川学園高校の制服を着ていたんだよ！」

「何だよ、そんなの事件でも何でもないじゃんか！」

「はあ？みーたんみたいなのがいたんだぞ！こうなったら俺一人で行ってくる！」

一海はそう言いながら駆け足で天ノ川学園高校へと向かっていった。残された氷室幻徳は猿渡一海の付き添いで来た為、特に話す事がなく無言のまま立っていた。

俺は氷室幻徳が何もする事なくここを去ってしまおうと完全なる無駄足で可哀想と思ったのでビルドドライバーと作り直したプライムローグフルボトルを氷室幻徳に渡した。

「幻さん、今度は壊さないでね！」

「ありがとう！」

氷室幻徳はビルドドライバーとプライムローグフルボトルを貰って嬉しかったのかスキップしながら天ノ川学園高校の方へ向かっていった。2人を見送ったものの俺は前の世界の仲間である石動美空に似た人物が気になり、天ノ川学園高校へ向かう事にした。

「みらい、一緒に天ノ川学園高校に行かないか？」

「いいよ！」

俺はみらいを誘い、みらいと共に天ノ川学園高校へ向かっていく。万丈、リコ、ことはの3人も俺とみらいの後に続いて天ノ川学園高校へ向かっていった。

天ノ川学園高校へ行くと、正門付近にリーゼントヘアの男が立っていた。

「リーゼント…もしかして！」

俺は見覚えのあるリーゼントヘアの男に近づいていき声をかける。すると男は誰かが自分の元へ近づいてきているのに気づいたのか顔と身体をこちらへ向けてきた。

「如月弦太郎…だよな？」

「おう、確かに俺は如月弦太郎だ！久しぶりだなビルド！」

如月弦太郎は久しぶりだな！と俺に言いながら俺の手を掴み、固い

握手を交わした後、俺の拳をグーの形にしてから自分の手をグーの形にし、拳を何回か打ち合わせた。

「今のは何なんだ？」

「友情の証だ！」

「この行為は”友情の証”と言うらしい。如月弦太郎は友達になった相手とこの行為をしているようだ。

「俺に近づいてきたって事は仮面ライダー部に用があるんだよな？案内してやるから付いて来い！」

「あつ！ちよつ、待てよ……」

如月弦太郎は俺の話を聞かずに俺達を仮面ライダー部へ案内すると言い、部室のある方へと走っていった。

「ここが部室だ！」

俺達は如月弦太郎に案内された部室へ入っていく。すると、中には高校生時代の如月弦太郎が仲間と写っている写真や仮面ライダーフォーゼの写真があったりした。

俺が部室の中を見渡しているとまた誰かが俺の頭の中に囁いてきた。

「フォーゼの力も近いうちに手に入りそうね」

「何故、俺が平成二期のライダー達の力を奪わないといけないんだ？」

「あなたが奪わず、ディケイドが平成二期のライダーの力を奪ってしまおうと、ネオディケイドライダーという物が生成されるから」

「ネオディケイドライダー？」

「ええ、それが生成されてしまおうとこの世界は完全に破壊されてしまう……救世主・ビルドのいない世界線”ではディケイドはネオディケイドライダーを手にし、ジオウの世界へと渡ってる」

「何だと!？」

「だから、頼みましたよ！我が救世主！」

謎の人物の声はここで終わり、俺は謎の人物にディケイドの事をもっと詳しく聞けなかった。謎の人物と心で会話していた俺はまたボーっとしていたらしく、みらいが心配そうな顔で俺を見ていた。

「またボーっとしてるみたいだけど、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

俺は自分の事を心配してくれているみらいに一言、大丈夫だと告げた後、一旦、部室の外へ出てディケイドについて考えるのだった…

## 3.2. 決意のベストマッチ

俺は天ノ川学園高校仮面ライダー部の部室を出てすぐの場所でデイクイドについて考えていた。すると、いつものようにみらいがやって来た。

「みらい…お前は毎回、俺の近くに来てくれるんだな」

「当たり前でしょ…戦兎は私の大切な人なんだから」

みらいは俺と同じ様に悲しそうな表情を浮かべながら下を向いていた。その後、俺とみらいは何も喋らず、木々が風でざわめく音しか聞こえない様な沈黙が暫く続く。

「へえ〜！仮面ライダー部はすげえな！」

部室の扉が開き、中から万丈とリコとこととはが出てきた。3人は悲しい表情を浮かべながら顔を下に向けている俺とみらいを何があつたんだ？というような疑問の顔で見っていた。俺とみらいは数秒経つてから3人の存在に気付き、慌てて悲しげな顔を笑顔に変える。

「戦兎、何か悩みあるなら聞いてやる！だから、無理して笑うな！」

「みらいも同じよ」

「うんうん！」

「万丈、リコ、ことは…！」

3人は先程、俺とみらいの悲しげな顔を見ている為、俺とみらいが何か悩みを抱えてる事と咄嗟に浮かべた笑顔が作り笑顔だという事は分かっていたようだ。

「俺、救世主になるかならないか迷ってたんだ…」

「なればいいんじゃないやねえか？世界を救えるのが救世主様だけなら」

「ただでなれるならいいんだが、どうやら救世主になるにはライダー達の犠牲が必要なんだ」

「まじか…」

と、救世主になる為の条件を知らなかった万丈は俺から救世主になる為の条件を聞いて困惑顔をする。周りで話を聞いていたリコとこととはもなつたほうがいいか、なつちゃダメなのかの判断が出せず考えこんでいた。すると、部室から如月弦太郎が出てきて俺にこう言う。



「話は聞いたぞ！お前が救世主になって世界を救ってくれるんだよな？」

「いやなるかどうかはまだ…」

「なるかどうか考えるくらいならいつそなっちまえよ！」

「俺が救世主になればアンタは消える…アンタは消えるのが怖くないのか？」

「怖いも何も、誰かが世界を救う為に俺の力を必要としているなら俺はそいつに力を渡して消えても構わねえ！」

「如月弦太郎…」

「とにかく、俺の力をやるよ！」

如月弦太郎がそう言いながら両腕を精一杯広げていると、魔閻月がやって来た。

「フツツ…如月弦太郎、あなたは良い判断をしたわ！消えた後、名前くらいは覚えといてあげるわ…」

魔閻月はそう言いながら自分の体内からエンプティボトルを生成し、如月弦太郎から友情の成分とロケットの成分を奪っていく。

「救世主、次にデイケイドが現れたらこれをお使いください！それと、力を奪われたライダーは救世主であるあなたが奪った力を奪使うでは消えない…」

「なら、力を手に入れるだけで充分じゃないのか？」

「力は使わないと効力が出ない。だから、力は必ず使ってください」

魔閻月はそう言いながら俺の左手を掴み、掌の上に二つのフルボトルを置く。みらいは魔閻月が俺の手を触っている事に苛立ちを感じており、ずっと魔閻月を睨んでいた。一方の魔閻月は優越感に浸っているような顔をしながらみらいを見ていた。

「魔閻さんめえ…！」

「落ち着いて、みらい！」

リコは魔閻月に向かっていこうとするみらいを制止させる。リコに止められたみらいは溜まった怒りをグツと堪える。

「それではまたどこかでお会いしましょう！救世主！」

「お、おう…」

魔闇 月は最後に短い言葉で俺にそう言い、この場から去っていった。魔闇 月が去った後、みらいは両腕で俺の右腕をガシツと掴む。

「戦兎はあげないんだから……!」

「みらい、俺はアイツの事を何とも思っていないから安心しろ」

「ふう……よかった」

俺はみらいに魔闇 月の事を何とも思っていないと伝える。それを聞いたみらいはふう……と安堵のため息を漏らす。みらいが落ち着いた後、俺は石動美空らしき人物を探す為に如月弦太郎に石動美空の写真を見せる。

「なあ、こんな顔の奴はこの学校にいるか?」

「見た事ねえな……」

写真を見た如月弦太郎は自身の記憶を探り、生徒達の顔を思い出していくがその記憶の中に石動美空のような顔をした人物はいないようだ。

「見た事ないのか……じゃあ、一海が見たのは一体……」

と、俺が猿渡一海の見た人物について考えているとどこからか猿渡一海の声が聞こえてきた。

「みーたああん!待ってくれよー!!」

「嫌あ!誰か助けて!」

俺が声の聞こえる方へ顔を向けてみるとそこには猿渡一海から逃げる女子生徒と女子生徒を追いかける猿渡一海がいた。

「アイツの美空愛は変わらないようだな……」

俺はそう言いながら猿渡一海の所まで走って行き、女子生徒を追いかける猿渡一海を制止させる。

「俺がみーさんに辿り着くまであと少しだったんぞ!邪魔すんなよ!」

「はあ……一海、お前は”美空”まであと少しだったんじゃないぞ”犯罪”まであと少しだったんだぞ」

俺は呆れ顔で猿渡一海にそう言う。猿渡一海の後方には荒い息を吐きながらこちらに向かって走る氷室幻徳の姿が見えた。

「はあ……はあ……ポテト、早すぎだ。もつと遅く走れ」

「はあ？ヒゲが遅えおせんだろ！」

「一海、幻さん聞いてくれ！この学校には美空に似てる人物はいないんだ！」

「…って事はあの子は？」

「エボルトだ」

俺は2人に猿渡一海が追いかけていた女の子の正体を言う。それと共に猿渡一海に追いかけていた女の子は走るのをやめて不気味な笑みを浮かべながらこちらに顔と体を向けてきた。

「俺が顔と身体、そして声を変える能力を持っていた事を覚えているとはなあ…流石は天才物理学者だな」

「エボルト、今日こそ倒してやる…！」

俺はそう言いながらドライバーを巻いてフルボトルを装填しようとするが、なぜかフルボトルを持つ両手が震えてドライバーにフルボトルを装填できなかった。

「どうした、変身しないのか？」

「くっ…」

と、俺が変身出来ずにいると幻さんが俺の前にやって来て俺の父さんである葛城 忍の物であったビルドライバーを巻く。そして俺から貰ったプライムローグフルボトルを二つのフルボトルに分割させてからドライバーに装填する。

『プライムローグ！』

ドライバーにプライムローグフルボトルを装填した後、ドライバーのレバーを回して変身する。

『ガブツ！ガブツ！ガブツ！ガブツ！ガブツ！』

『Are you ready?』

「変身！」

『大義晩成！プライムローグ！』

『ドライアドリヤドリヤドリヤ！ドリヤー！』

氷室幻徳の変身を見たエボルトも既にコブラエボルトとライダーステムエボルトの二本のフルボトルが装填されたエボルト

ドライバーのレバーに手をかけてレバーを勢いよく回して変身する。

『Are you ready?』

『コブラ！コブラ！エボルコブラ!!フツハツハツハツハ！』

エボルトは変身後、すぐにプライムローグへ向かっていき、ローグの胸部を殴る。だが、プライムローグのアーマーがローグのアーマーより硬い為、あまり効いていなかった。エボルトはその後、何発も何発もプライムローグの胸部周辺に強烈なストレートを打つがプライムローグにはあまり効いていない様子。

「随分と抜かったようだな、エボルト」

「なら、これでどうだ!」

氷室幻徳がエボルトに向かってそう言うと、エボルトは能力である高速移動を使い、プライムローグの周りを回っていく。プライムローグには鷹の目のような相手の動きを見切る能力がない為、氷室幻徳はエボルトの高速移動に対応出来ずにいた。エボルトはプライムローグが自分の高速移動に対応出来ないのを見てドライバーのレバーを回し、必殺技を発動させる。

『Ready go!』

『エボルテックフィニッシュ!チャオ!』

必殺技を発動させたエボルトはプライムローグの周りを何周かしてからプライムローグに向かって蹴りを放つ。流石のプライムローグでも必殺技を受け流す事はできず、大ダメージをくらってしまふ。「ぐっ…」

「フツハツハツハ!さあ、邪魔はいなくなった!戦鬼、やろうじゃねえか!」

プライムローグを倒したエボルトは他のライダーの力を使うかわないか迷っている俺に近づきながらそう言う。

「くっ…どうすればいいんだ…!」

「戦う気がないのか…なら、終わりだ!」

エボルトはそう言いながら俺に向かってくる。だが、誰かが俺の前に入り、俺を守った。前を見てみるとそこにはみらいがいた。みらいは両腕を広げ俺を守るような体制をとった。

「戦兔を傷付けないで！戦兔は私の大切な人なの！」

「邪魔だ、どけ！」

エボルトはそう言いながらみらいの左腕を掴み、自分の数メートル横へ投げ飛ばす。投げ飛ばされたみらいはアスファルトの地面を転がっていき、止まった頃には全身傷だらけになっていた。

「:!!」

「邪魔ばかりでつまらないなあ…今度こそ終わりだああ!!」

「待て」

「何だ？戦う気になったか？」

「戦う気というか救う気になったんだよ…この世界を！」

「救うだと…？」

「ああ、俺は救世主になる…そして平和な世界を築いてみせる!!」

救世主になる事を決意した俺はドライバーの二つのスロットに友情フルボトルとロケットフルボトルを挿す。

『友情！ロケット！』

『best match!』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、ビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『救世主になる覚悟はあるか？』

『Are you ready?…』

ライダー達の意志を背負う覚悟はあるか？

Are you ready?』

レバーを回すと、前方と後方にスナッププライドビルダーが現れる。俺は変身！という声を掛けた後、スナッププライドビルダーに挟まれて変身する。今回の変身は決意の変身だった為、二回流されたドライバーの掛け声には救世主なる決意をした俺に対する特別な問いかけがあった。

「変身!!」

『フォーゼー〜♪』

フォーゼと言った後、フォーゼ ベースステイツの変身音が流れる。それと共に俺のフォームチェンジが完了し、俺は仮面ライダービルド フォーゼフォームへとフォームチェンジした。

俺はロケットフルボトルの力を使い、右腕にロケットモジュールを

出す。そしてロケットモジュールの力でエボルトの頭上をしばらく飛び回った後、エボルトの腹部に突撃する。

腹部にロケットモジュールの攻撃を受けたエボルトは怯み、隙が生まれた。その隙について俺は必殺技を発動させる。

『Ready Go!』

『ボルテックファイニッシュ！イエーイー！』

俺はロケットモジュールと必殺技発動時に左足に着いたドリルモジュールを使い、エボルトに向かっていく。

俺の必殺技を受けたエボルトだったが苦しみながらも立ち上がる。

「なかなかやるじゃないかあ…決着はまた今度だ。チャオ！」

エボルトはそう言い、去ってしまった。俺は傷だらけのみらいを抱えている如月弦太郎の元へ行く。

「如月弦太郎…ありがとう」

「彼女を大事にしろよ！そして皆と友達ダチになって世界を平和にしてくれよー！」

「平和にしてやるさー！」

如月弦太郎は俺に世界の平和を託して消えていった。俺は傷だらけのみらいを抱いたままりコ達と家へ帰っていった。

その頃、俺達がいた場所の近くの木陰では魔閻 月がニヤリと笑いながら去っていく俺達を見ていた。

「順調だあ…このまま行けば平和になる日は近い!!」

魔閻 月はそう言いながら笑い続けるのだった…

### 33. 久しぶりの魔法界！ドーナツ好きの魔法使い！?

ある日の朝、俺は自分の部屋ではなくどこかの神殿らしき建物の前で目を覚ます。目の前には右半分が白色、左半分が黒色の巨大な天秤が置かれている。右側の白色の方には少量の砂が乗っており、天秤は右側の白色の方に少し傾いていた。だが、その瞬間、左側の黒色の方に右側の白色の方の倍の量の砂が乗っかり、天秤は左側の黒色の方へ傾いた。その瞬間、誰か女性らしき人物が俺の頭に小さな声でこう呟く。

「近い将来、破壊を目論む2人が手を組み、貴方を倒しに来るでしょう…」

「2人が手を組むだと…？もう少し詳しく…」

「私からの警告は以上です」

俺は自分の頭に呟いてくる人物に破壊を目論む2人についてももう少し詳しい事を聞こうとしたが俺の頭に呟く人物は俺を無視し、警告は以上だと言つて俺の目の前を真っ暗闇に変える。

その後、俺は誰かが自分の身体を強く揺さぶっていることに気づき、目を覚ます。すると、そこは神殿ではなくいつもの自分の部屋だった。目の前には万丈がいた。

「戦兎、大丈夫か？結構うなされてたみたいだけど…」

「うなされてた…？って事はあれは夢だったのか」

俺は万丈から結構うなされていたと聞いて巨大な天秤があるような神殿にいた事、女性らしき声の人物から警告を聞いたのが夢の中の出来事であることに気づき、ホッと安堵のため息を吐く。

「なんでホッとしてんだよ…まさか、怖い夢でも見たのか？」

「なわけないだろ！」

万丈は煽り口調で俺に怖い夢でも見たのかな？と聞いてきたので俺は強い口調で万丈に返事する。

「あつ、そういえば魔法界の新聞の記事に仮面ライダーウィザードが

写ってたんだ」

「魔法界にも仮面ライダーが…!?」

「リコに魔法界連れてってもらおうか?」

「ああ、連れてってもらおう!俺には仮面ライダーの力が必要なんだ!」

俺は仮面ライダーウィザードの力を手に入れる為に魔法界へ行きたいという事をこの時間、居間にいるリコに言いに行く。

「リコ、いきなりなんだが魔法界に行かせてもらえないか?」

「いいけど…何で?」

「仮面ライダーウィザードの力を手に入れたいから…」

「分かったわ!今から行くならもう時間ないから早く準備してね!」

リコの承諾を得て魔法界に行ける事になった俺は万丈に今から魔法界へ行く事を伝えてから自分の部屋に戻り荷物の準備をする。そして準備を終えた後、少し重い荷物を持ちながら万丈と共にリコ達3人が待っている玄関へ向かう。

「戦兎くん、万丈くん遅いわよ!」

「待たせてゴメン!さあ、魔法界に行こう!」

俺は準備が少し遅くなった事をリコ達に謝ってから魔法界に繋がる津奈木駅へと向かっていった。駅へ向かう道中、前方には俺たちとは反対方向へ向かって歩いている猿渡一海と氷室幻徳がいた。2人は俺たちに気づき、話しかけてきた。

「おい、そんな荷物持ってどこ行くんだ?」

「別にどこでもいいだろ」

俺はどこへ行くのかを聞いてきた猿渡一海にそう言い、再び駅に向かって歩を進める。だが、2人は俺たちについてきて何度も声をかけてきた。

「戦兎く教えてくれよ!」

「リコ、どうする?」

「まっ、まあ特別な力を持つてる人なら連れてきても大丈夫かもしれないわ…」

リコは特別な力を持つ人間であれば魔法界へ連れて来たのを皆に



納得してもらえらるだろうと思ひ、猿渡一海と氷室幻徳に魔法界の存在を教えると共に俺たちと一緒に魔法界へ行く事を許可した。

「俺たちは今から魔法界に行くんだよ」

「魔法界だ?!魔法界にはどんな文字付きTシャツが売ってるのかな…」

「そこ?!魔法界と聞いたら魔法でしょうが…全く、幻さんは変わらないなあ…」

魔法界というワードを聞くと普通は魔法のことに關してを話し出すのだが氷室幻徳は魔法界にどんなTシャツが売っているのか氣になつてゐるらしく、魔法の事には一切目もくれない。

「カズミン、幻さん準備してる暇ないからこのまま来てよ!」

「分かつた」

猿渡一海と氷室幻徳の2人を加えた俺たちは津奈木駅の改札のところまでリコの後ろに一列で並んでいく。リコの7人分!という声と共に改札をくぐり抜ける。

「うお…でつけえカタツムリだなあ…」

「すげえ…親父の力を使つてもこんなカタツムリ見られないぞ…」

2人は初めて見るカタツムリニアに驚いていた。時間がない為、どんだん車内に乗り込んでいくが、何故か猿渡一海がカタツムリニアのカタツムリの近くにいた。

「おい、カタツムリ!こんな仕事辞めて自分の巨大な体を活かして人に食べられる仕事してみねえか?」

猿渡一海 of 言葉聞いたカタツムリニアは困惑していた。出発まであと少ししか時間がなかつたので俺は猿渡一海 of 腕を強く引き、車内まで引つ張つていった。

無事に車内に乗り込んだ俺たち7人は急行のカタツムリニアに揺られる事数十分、魔法界へと着いた。

「ここが…魔法界か…?」

「そうだ」

「すげええ!!おいヒゲ見ろよ、空に魔法使いがいるぞ!」

「俺、魔法使いはハ〇ー・ポ〇ターでしか見た事ないぞ…!」

「○リー・○ッターは映像だが、これはマジのヤツだからすげえ！」  
2人は魔法についてを話しながら興奮しているのか、俺たちを置いて街の方へ走って行ってしまった。俺はあの2人ならはぐれる事はないと思う、5人でゆっくりと町へ向かって歩いていく。

町へ行くと前来た時にはなかった移動式のドーナツの店があった。店の前には右手に指輪をはめた男が立っており、何かを頼んでいた。「プレーンシュガー！」

「いつもプレーンシュガーね。たまには期間限定のマヨネーズドーナツも…」

「マヨネーズドーナツとか食うの仁藤しかいないだろ！」

「失礼ね！マヨネーズドーナツは人気なのよ！」

「はあ…この世界の人物の味覚はどうなっているのやら」

男は店員から受け取ったドーナツ入りの袋を持って近くの席へ座る。男が気になった俺は男の元へ歩いていく。

「アンタ、仮面ライダーだろ？」

「そうだけど…ってお前誰？」

「俺は桐生戦兎。今、仮面ライダーの力を集めてるんだ…アンタの力、俺にくれ」

「会って間もないのにそんな事を言うとは…お前、ただ者じゃなそうだな。ちよつとばかし試させてもらおうぞ」

『ドライバーオン！』

男はそう言いながら右手を腰についている手形にかざす。すると、音声と共にドライバーが現れる。その後、赤い指輪を左手の中指にはめ、赤い指輪のバイザーを降ろした後、ドライバーの手形を反転させて赤い指輪をはめた左手をドライバーにかざす。

『シャバドウビタツチヘンシーン！シャバドウビタツチヘンシーン！』

『フレイム！プリーズ！』

『ヒー！ヒー！ヒーヒー！！』

「さあ、ショータイムだ！」

男は仮面ライダーウイザードに変身する。俺も仮面ライダーウイ

ザードと戦う為に俺はビルドドライバーを取り出して腰に装着する。そして、俺は二つのスロットにラビットフルボトルとタンクフルボトルを挿す。

『ラビット！タンク！』

『best match!』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、俺はビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『Are you ready?』

「変身！」

レバーを回すと、前方と後方にスナップライドビルダーが現れる。俺は変身！という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれて変身する。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

「行くぞ、ウィザード！」

それぞれ仮面ライダーに変身した俺と男は自分の武器を片手に互いにぶつかりあつていくのだった。

その頃、魔法界の目立たない場所ではエボルトと門矢 士が話していた。

「おい、地球外生命体。お前も世界の破壊を目論んでるんだよな？」

「ああ、そうだが何か？」

「手を組まないか？」

「フッフッフ…いいだろう」

エボルトと門矢 士は世界を破壊するという点で気が合ったのか手を組む事になったのだった…

t o b e c o n t i n u e d . . . .

### 34. 世界を救う天才は希望か？絶望か？

俺はドリルクラッシュャーを右手に持ちながらウィザードへ向かっていく。一方の操真晴人もソードモードのウィザードソードガンを左に持ちながら俺の方へ向かってくる。

二つの剣は何度もぶつかり合い、激しい攻防戦を繰り広げている。操真晴人は俺から少し離れた後、ウィザードソードガンをガンモードに切り替え、俺に向けて何発も光弾を放つ。俺はウィザードソードガンから放たれた光弾をドリルクラッシュャーで弾きながら再び操真晴人の元へ向かっていく。

「お前、中々やるな！なら、コイツはどうだ！」

「ルパッチマジックタッチゴー！ルパッチマジックタッチゴー！」

「バインドープリーズ！」

操真晴人がドライバーの手の形を反転させ、バインドの魔法の指輪をかざすと炎の鎖が出てきた。炎の鎖は俺の手足を縛り付けていく。

「ぐっ…！」

「これで終わりだ！」

と、操真晴人はそう言いながらキックストライクウィザードリングを右手の中指にはめてもう一度ドライバーを右手の形にしようとしたその時、いつの間にかクローズマグマに変身した万丈がウィザードの胸部のアーマーをクローズマグマナツクルで勢いよく殴る。

「ぐはあ…!!」

「プロテインの貴公子の事、忘れてんじゃねーぞ！」

万丈はその後もクローズマグマナツクルでウィザードの胸部や仮面などにストレートを何回も打っていく。そしてウィザードがよろけた所で下から勢いよくアッパーをかます。クローズマグマの圧倒的な力の攻撃を受けたウィザードは変身が解けかかっていた。万丈は必殺技を決めようと右手をビルドドライバーのレバーに当てていた。

だが、万丈が必殺技を打とうとした瞬間、誰かが万丈の後方から

やってきた。

「これ以上はやめなさい！力を奪えなくなってしまうわ」

「アンタ、誰だ？」

「私は朝田陽菜。桐生戦兎を救世主へ導く者」

「導く者？何だか分からねえが戦いの邪魔すんな！」

万丈はそう言いながら朝田陽菜に向かっていくが、朝田陽菜は白い炎を左手に纏い、万丈に向けて白い炎を飛ばす。白い炎を受けた万丈の時間が止まる。

「さあ、救世主！また一つ力を手にする時だ！」

「ああ、わかった」

バインドの魔法が解けて手足が自由になった俺は朝田陽菜が出した二つのエンプティボトルをウィザードに向けて力を吸い取る。

ウィザードから魔法使いフルボトルとダイヤモンドフルボトルが生成された。その瞬間、ウィザードの変身が解ける。このやり取りを見ていたみらいは俺が救世主になるという決意をしたとはいえ果たしてこんな後味が悪い力の継承の仕方をしてもいいのだろうか？と思っていた。

「力の継承は終わった。もうここに用はない」

朝田陽菜はそう言いながら自分の目の前に円形のワープホールを作り出し、その中へと入ってどこかへ行ってしまった。朝田陽菜が去ると同時に万丈の時は再び動き出した。

「おい、戦兎！大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ。無事に力も手に入った」

一方、俺に力を奪われ、変身が解けてしまった操真晴人の身体は消えかかっていた。

「消える前に一言言わせてもらおう…お前は救世主ではなく支配者への道を歩んでいる！俺の了承なく力を奪ったのが何よりの証拠だ！」

「救世主になる為にはどんな強引なやり方でもライダー達の力を手に入れるしかないんだ」

「…そういう所直せよ」

操真晴人はそう言い、光の粒子となって消えていった。操真晴人の

言葉通り、俺から救世主ではなく支配者の様なものを感じ取ったみらいは俺の近くまで来てこう言う。

「戦兎、こんな力の手に入れ方じゃ救世主になんかなれないよ!」

「全ての力を手に入れば救世主になれる。力の奪い方なんて関係ない」

「戦兎…」

俺は俺のやり方に否定的なみらいにそう言い、ナシマホウ界行きのカタツムリニアのいる駅まで1人で歩いていく。そんな俺の背中を見る皆は全ての二期ライダーの力を手に入れた俺が本当に救世主になれるのかどうか不安を抱いていた。

その中、俺たちの知らない所では魔閻 月と朝田陽菜による新たな計画が進められていた。

「今日手に入れた万丈龍我が所持するナツクル型のアイテムをもとに作り出した新たなアイテム。陽菜、アイテムの名前は?」

「このアイテムの名は”ビルドストームナツクル” 桐生戦兎というこの世界の”風”が今後、私達の未来をどう変えていつてくれるのか? 桐生戦兎が力を使うのが楽しみだ」

「んじゃ陽菜、アイテム渡すのは頼んだわよ!」

「了解!」

俺の知らない所で進む魔閻と朝田の秘密の計画。俺に救世主になってもらい、世界を救うのが魔閻と朝田の目的なのか?それとも本当の目的は別にあるのだろうか?次話の鎧武編に続く…

t o b e c o n t i n u e d . . . .

### 35. 天才のオンステージ

魔法界から帰ってきた俺たちは氷室幻徳、猿渡一海と別れた後、フルーツパーラーのドルーパーズという所にやって来ていた。

「おい、津奈木町にこんな店あったか？」

「新しくできた店なのかな？」

と、俺と万丈が魔法界へ行く前の津奈木町にはなかったこの店について少し話していると、店の奥から1人の男が出てきて俺たちの元に来た。

「おっ、見慣れない客だねえ！アンタ達名前は？」

「俺は桐生戦兔。そして隣が万丈、向かい側の3人は左から順にみらい、リコ、ことはだ」

「なるほどね…あ、ちなみに俺の名前は由良…いや、阪東清治郎だ！よろしくな！」

「あ、ああ…よろしく…」

男の名は由良吾郎…いや、阪東清治郎と言うらしい。阪東は既に分分のパフェを用意しているらしく、厨房から俺たちの座っているテーブル席へパフェを運んできてくれた。

「自慢のパフェだ！ささ、早く食べてみてよ！」

阪東にそう言われた俺は右手にスプーンを持ち、生クリームやイチゴを掬って食べようとするが、俺の向かい側にいたみらいが顔を赤くしながら生クリームとバナナが掬われたスプーンを俺の方に向けているのが見えた為、俺は自分のスプーンを置く。

「みらい？どうしたんだ？」

「戦兔、口開けて！ほら、あくん／＼／＼」

「ちよ、皆がいる前で！?積極的すぎだぞ…／＼／＼」

「青春だねえ」

「うるさいな！アンタは早く厨房に戻って他の客のパフェを作りなさい!!」

「は～い」

俺は阪東が厨房に戻ったのを確認した後、みらいが差し出してきた

スプーンにパクツと行き、スプーンの上に乗っている生クリームとバナナを自分の口に含んだ。

「どう…？私があげた。パフェ美味しい？」

「ああ、最ツ高だぜ…／＼／＼」

俺とみらいのラブラブっぷりを横で見っていたリコと万丈とことは空気を読んで自分達の分のお金を置いて店から出ていき、俺とみらいの2人の空間を作った。だがその時、近くに出来た空間の裂け目から怪物が何体か出てきて人々や街の建物を破壊し始めた。

「外が騒がしいな…みらい、行くぞ！」

「うん！」

俺はレジスター付近に万丈達の置いて行ったお金と自分とみらいの分のお金を置いて店の外へ出ていく。

「お金はー!?ってあれ、お金置かれてる…あ、お金を払わず出てくのは秘アイツだけだったか」

外に出た俺とみらいは怪物と戦う万丈を見ていつもより早くビルドドライバーを取り出して腰に装着する。そして、俺は二つのスロットにラビットフルボトルとタンクフルボトルを挿す。

『ラビット！タンク！』

『best match!』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、俺はビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『Are you ready?』

「変身！」

レバーを回すと、前方と後方にスナップライドビルダーが現れる。俺は変身！という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれて変身する。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

変身した俺は万丈に加勢し、怪物に向かっていく。怪物と戦っている俺と万丈の後方には1人の男が立っていた。男はドライバーを腰に装着し、表面にオレンジが描かれた錠前を解錠する。

『オレンジ！』



そして解錠した錠前をドライバーの中央部にある窪みに装填する。錠前が装填されるのと共にホラ貝を吹いたような待機音が流れる。空からはオレンジの鎧がゆっくりと降ってくる。

『Lock on!』

待機音を少し流した後、男はドライバーの右部分に付いている小刀で錠前の表面に描かれているオレンジを切り、空から降ってきたオレンジの鎧を身に纏い、変身する。

『オレンジアームズ 花道オン・ステージ!』

鎧武に変身した男は俺たちに加勢する。だが、鎧武を見た俺は鎧武の力を奪う為、標的を怪物から鎧武へ変えた。ドリルクラッシュャーで鎧武を何回か切り裂いていく。

「戦兎!? ダメだよ!! リコ、変身するよ!」

「うん!」

鎧武を攻撃する俺を見たみらいは俺を止める為にリコに声をかけて変身の準備に入る。

「キュアップ・ラパパ! ルビー!」

みらいとリコがそう唱えると、リンクルストーン・ルビーがモフルンの胸元部分に挿し込まれていく。

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ!」

モフルンにリンクルストーン・ルビーが挿された状態でそう唱えると、2人の服は全体的に赤くなり、髪型がツインテールになる。そしてその後、背丈が変化していく。

「2人の奇跡! キュアミラクル!」

「2人の魔法! キュアマジカル!」

「魔法つかいプリキュア!!」

変身したみらいは俺の方へ向かっていき、俺の腕を掴み、制止させようとしていた。

「みらい、邪魔をするな!」

「仲間を襲うなんて救世主がやることじゃないよ!」

「俺はどんな手を使ってでも救世主にならなきやいけないんだ!」

「なら、私がそれを力強くで止める!」

みらいはそう言いながら炎を纏った拳で俺の胸部を何回も殴り、  
ふつとばしていくのだった…

戦い始めてしまった戦兎とみらい…ふたりはどうなってしまおうの  
だろうか…？

### 36. アナタと私が創る未来へ繋がる新たな風

ルビースタイルへ変身したみらいは俺を止めるべく容赦なく攻撃を仕掛けてくる。2人の戦いを見ていたりコとことはは怪物と戦う万丈の元へ向かう。

「万丈くん、怪物は鎧武さんに任せて今は戦兔くんとみらいを止めた方がいいんじゃないの?」

「止めなくていい…」

「なんで!」

「みらいは口で言っても聞かなくなった戦兔に拳で伝えている。今、2人の戦いを止めてしまえば戦兔は確実に救世主ではなく支配者への道を辿る。だから、どんな事態が起ころうが絶対に2人の戦いを止めるなよ!」

「……」

「…分かりました」

万丈の言葉を聞いたリコは何も答えずに怪物と戦い始める。隣にいたことはも洩々了承する。

俺とみらいは互角の勝負を繰り広げていた。そんな俺たちの元に

朝田 陽菜がやってきた。

「救世主、これを!」

朝田 陽菜はそう言いながら俺に緑色の拳型の武器と兎と戦車の絵が描かれた緑色のフルボトルを渡してきた。

「これは…?」

「ビルドストームナックル!それを使って”破壊”ではなく”創世”への希望の風を吹かせて!」

「わかった」

俺はビルドストームナックルにビルドストームフルボトルを装填する。そしてビルドストームナックルをドライバーに挿す。

『ボトルビューン!』

『ビルドストーム!』

待機音を少し流した後、ドライバーのレバーを勢いよく回す。そし

て、ナツクルに形状が似た坩堝型のストームライドビルダーが背後に出現し、中で吹き荒れる大量ストームを俺の頭上からぶちまける。そして俺を覆っているストームをかき消して変身が完了する。

『風来天才！ビルドストーム！』

『ビュンビュンビュンビュンビュンビュン！』

ビルドストームへと変身した俺は右肩にラビットラビットのアーマーが付いており、左肩にはタンクタンクのアーマーが付いている。そして複眼も右目がタンクタンク、左目がラビットラビットになっていた。全身は緑基調の色となっている。

俺がビルドストームへ変身したのを見た朝田陽菜は近くの木陰へ行き、小さな声でこう呟く。

「…救世主さん。この力、どう使う？」

朝田陽菜はそう呟いた後、どこかへと姿を消していった。俺は右手に持ったビルドストームナツクルでみらいの腹部を一発殴る。腹部に強烈な殴りを受けたみらいは苦しい表情をし、腹部を抑えながらその場に四つん這いのような形になる。

「これで終わりだ…！」

俺はそう言いながらビルドストームナツクルの表面中央部に付いているボタンのような物を長押しする。そしてビルドストームナツクルに緑色のオーラを纏わせた状態で四つん這いになっているみらいにアップパーをかまそうとしていた。だがその瞬間、みらいが残った力で何とか立ち上がり、俺をぎゅっと抱きしめる。

「2年前、悪い人から私を救ってくれた救世主のような戦兎はどこへ行ったの…？」

「あれはただ助けたただけだ。救世主とかではないだろ？」

「戦兎からしたらそうかもね。でも、私からしたらあの時の戦兎は救世主に見えたよ！」

「なら、俺にどうしてほしいんだ？」

「救世主になってほしいの…ちゃんと他のライダーさん達と心を通わせられるような救世主に！今からでも遅くない。私と一緒に良い未来を創ろうよ！」

「みらい…」

俺はみらいの言葉を聞いてやはり、自分のやり方は間違っているのかもしれないと思い始めた。俺は右手に持っていたビルドストームナツクルを地面に落とす。

「俺はウイザードとは心を通わせずに力を奪っていった…確かにそんなんじや救世主どころか支配者になっちまう。だから、お前の言った通り、心を通わせてみる!」

「戦兔…!」

「良い未来へ繋がる新たな風を吹かせてやる!」

俺はみらいにそう言い、怪物の方へと向かっていく。残った力を使い果たしてしまったみらいはその場に倒れてしまう。

「みらい、俺の吹かせる風を見てくれ!」

俺は拾ったビルドストームナツクルを再びドライバーに装填する。そしてレバーをいつもより長く回して必殺技を発動させる。

『Ready Go!』

『タービュレンスファイニッシュ!ビュンビュンビュン!!』

俺は乱気流に乗って高く舞い上がった後、怪物に向かって勢いよく急降下していく。必殺技を受けた怪物は爆発と共に消え去っていくのだった。

「おお!やるじゃねえか!」

戦いが終わった後、鎧武は変身を解き、俺の元にやってきた。万丈は倒れているみらいを背負いながらリコ、ことはと一緒に近寄ってきた。

「ビルド、まだ名前聞いてなかったな!名前は何ていうんだ?」

「俺は桐生戦兔!アンタは?」

「俺は葛葉紘汰!」

と、葛葉紘汰はそう言いながら手を差し出してきた。俺は差し出された手を強く握り、固い握手を交わすのだった。その瞬間、葛葉紘汰の体内からオレンジフルボトルとロックフルボトルが出てきた。俺と鎧武は心を通わせられたようだ。

「ようやく元の世界に戻るのか…」

「ん？どういう意味だ？」

「この世界が本来いるべき世界ではないと最初から気づいてたんだ俺がこんな普通の姿で暮らしてんのは有り得ない」

「そういえば鎧武は神様だったか」

「ああ。だから、力を受け取って貰えて良かった！んじゃ、後は頼んだぜ！救世主さん！」

葛葉紘汰はそう言い、光の粒子となって澄み渡る青空へと消えていった。鎧武の力を受け取った俺たちは青空を数秒の間見つめた後、朝日奈家へ帰っていくのだった。

翌日、俺が町に出掛けようと支度をしているとみらいが俺の部屋へ来た。

「本来を戦兔らしさを取り戻してくれてよかった！」

「みらい!!お腹の怪我は大丈夫なのか!？」

「まだ少し痛いけど大丈夫！」

「あの時は本当にごめんな…」

「大丈夫だつて！ささ、町に行くんでしょ？私もついてくよ！」

「みらい……ありがとうな」

俺はみらいにいろんな意味を込めてありがとうと告げた後、支度をしてみらいと共に町へ出かけていくのだった…

### 37. 闇夜の月と十六夜の月

ある日の満月の夜、リコは前の戦兎と同じ、神殿の様な場所で目を覚ました。

「ここは…?」

「十六夜リコ…だったかしら?」

「まっ、魔闇さん!?何故ここに?」

「あなたを救世主の本当の付き人にする為だよ」

魔闇 月はリコを戦兎の付き人にする為にここへ呼んだようだ。話を聞いたりリコは不思議そうな顔をしながら魔闇 月にこう言う。

「私って充分付き人じゃないかしら?いつも戦兎くんの側にいるし…ってか”本当の付き人”って何!」

「側にいるだけなのは”ただの付き人”って言うんだ…救世主を守るのが”本当の付き人”。朝日奈みらいはこの前、”本当の付き人”となり、役職を得たぞ」

「役職…?みらいの役職は何なの?そして私は何の役職をしなければならぬの?」

「朝日奈みらいの役職は導者、あなたがしなければいけない役職は預言者だ」

みらいは戦兎を救世主と導く”導者”という役職らしい。リコは先の未来で起こる出来事を戦兎に伝える”預言者”という役職だった。

「時間がないわ。早速、未来を預言出来る力をあなたに授けるわ」

魔闇 月はそう言いながらリコの胸元に手を当てて手から白い光を放つ。その瞬間、リコの目の瞳の中に見た事のない姿をしたビルドとデイケイドが戦う光景が広がった。

「こ、これは…!」

「今見たのは救世主と破壊者が戦う”創壊の刻”いずれやって来る未来よ」

「創壊の刻…」

「ってな訳で救世主を守ってくださいいよ?預言者さん」

魔閨 月はそう言ってワープホールを作り出し、リコをワープホールの中へ押し込んだ。ワープホールに吸い込まれたリコは次の瞬間、自室のベッドで目を覚ます。

「ふう…夢だったみたいね…」

リコは窓から照らされる朝日と自分の今いる場所を見渡して安堵する。そしてベッドから出て部屋を出ようとドアノブに手をかけた時、目の前にみらいが階段から転げ落ちる光景が浮かんだ。

「まさか…ね…」

リコは自分が預言者になるという変な夢に影響されたせいで現実でも預言している気分になっているのだと思いながら一階に降りる階段へと向かう。階段付近へ行き、リコが階段を降りようとした時、猛ダツシユでみらいがやって来てドタドタと勢いよく階段を降りていく。数秒後、みらいは階段の中央辺りで足を踏み外し、一気に下へ転げ落ちていった。

「いててて…」

「みらい!?大丈夫?」

「勢いよく階段降りたから足を踏み外しちゃったみたい…」

「もう…階段降りる時は静かに降りなさい」

リコはみらいを軽く注意した後、居間に行って用意された朝食を食べて始める。居間の食卓の席に座っているのはリコとことはと戦兎の3人だった。

リコが普通に朝食を食べているとまた目の前にこれから起こるであろう事の光景が広がった。その光景はことはが食べ終わった皿を一気に片付けようとして床に持っている皿を全て落として割ってしまうという光景だった。

「はーちゃん、お皿は一枚一枚持っていった方がいいわよ」

と、リコはことはにそう言い、ことはが皿を割ってしまうという預言通りにならないようにした。事前に言えば事態は防げると思ったが、その時リコの頭に激痛が走る。

「うっ…!!」

「リコ!?大丈夫?」



ことはは洗い場に運ぼうとしていた皿を再び食卓に置き、戦兎と共にリコの元へ駆け寄る。

「リコ、今日は学校休んで家で安静にしてろ」

「…う、うん」

戦兎は激しい頭痛に苦しんでいるリコをリコの部屋まで背負いベッドに寝かせる。戦兎とことはが部屋を出ていった後、リコは夢が現実になったのを知ると共に預言能力について一つ知った事があった。「預言された事を変えようとすると頭が痛くなる…つまり、私は預言通りにするしかないのね…戦兎くんの身に悪い事が起こりませんよ  
うに…!」

こうして預言する力を手に入れたリコは救世主を支える付き人として覚醒した。だが、後にこの能力がリコの身と精神を苦しめていくのだった…

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

### 38. 月と太陽の指す地点

いつもの様に学校へ通う俺とみらいとリコことはこの4人。いつもなら正門に誰もいないが今日は珍しく正門に魔闇 月と朝田 陽菜がいた。みらいは戦兎を見ている魔闇 月に睨みを利かせる。

「みらいちゃん顔怖いよ〜?」

「戦兎は渡さないから!」

みらいに睨まれてる事に気付いた魔闇 月はみらいに煽るような口調で表情の事について言う。それに対してみらいは魔闇 月に戦兎は渡さないから!と強く言い、1人足早に校内へ向かっていく。

「おい、待てよ!」

「みらい! 私達を置いてってるわよ〜!」

俺とリコことは足早に校内へ向かって行ってしまったみらいを追いかけていく。みらいを追いかけていった俺たちを見送った魔闇 月と朝田 陽菜は俺たちが自分達の視界から消えた所で話を始める。

「月、この世界はちゃんと平和への道を歩んでるかしら?」

「勿論、歩んでるわ。だけど、この前私が少しこのゲームを面白くしてあげたわ」

「:ゲーム?これは遊びじゃないわよ? 私達の運命がかかってる大事なな...」

「決まった未来や運命は変えられない:変えようとすればそれ相応の代償が伴う。十六夜リコは”未来を見る力”という便利な力を得たが未来を変えようとすれば苦痛を味わうという不便な重りを背負った」

「月:計画に関係のない人間を巻き込んで何をするつもりなの?」

「平和の為には多少の犠牲は仕方がない:でしょ? 陽菜」

「まあね...」

2人は重苦しい話を少し話した後、校内へ入っていった。

それから数時間後、4時限目が終わり昼休みの時間に入る。俺とみらいとリコことは本を借りに図書室へ向かっていた。直線の廊

下を暫く歩き、曲がり角を曲がろうとした時、またリコの目の前に少し先の未来の光景が浮かぶ。それはみらいが曲がり角を曲がった先で反対側から勢いよく走って来た男子生徒と激突し、頭を怪我してしまふという未来だった。

「3人とも、止まりなさい!!」

「リコ?急にどうしたの?」

リコは未来を変える為に3人に声をかけて曲がり角を曲がるのを少し遅らせた。リコが3人に声をかけた数秒後、廊下を走る男子生徒が目の前を通り過ぎていった。

「ふう……!?ぐっ……」

「リコ!?大丈夫?」

「ぐっ……あれ、意識が……遠の……いてく……」

リコが未来を変えたおかげでみらいは怪我をせずに済んだがリコは未来を変えてしまったのでこの前の様な激痛を味わう。前は激痛に耐えられたが今回は耐えられずそのまま気絶してしまった。

「リコの奴……何か隠してるのか?」

「戦兎、リコが何か隠してるってどういう事?」

「最近、様子が変なんだよな。何かボツとしてるといふか……」

「確かに!私がお皿を片付けようとした時もボツとしてた!」

「そうなんだ……」

2人から最近リコがボツとしてっていると聞いたみらいは確かに、何かリコらしくないな……と思った。

その後、俺たち3人は5時限目以降の授業の先生達に事情を説明し、リコを保健室に連れていき、ベッドに寝かせてリコが目覚ますのを待つのだった。

数時間後、リコはゆっくりと目を覚ます。上体を起こすと自分の下半身側にはベッドの上上半身だけを乗せた戦兎とみらいとことがぐっすりと眠っていた。

「皆……心配かけてごめんね」

リコはそう呟きながら1人ずつ起こしていく。そして3人が起きた後、下校時間を過ぎていた為、校内から出て正門をくぐり帰路につ

くのだった。

その頃、某所では魔閻 月と朝田 陽菜が万丈（クローズ）とことは（フェリーチェ）の事について話していた。

「残るはクローズとフェリーチェだけ」

「月、また関係の無い人を巻き込むの？」

「平和の為に2人の力も必要なんだよね」

魔閻 月の返答を聞いた朝田陽菜は今いる場所から少し離れた場所へ移動し、小さな声でこう呟くのだった。

「預言者リコの誕生、想定外の事態だわ…月、あなたは一体、何をしようとしているの？」

### 39. 筋肉細胞トツプギア!? 万丈とことはの冒険!

休日の昼下がり、万丈とことははみらいの母親に買い出しを頼まれて津成木市の中心部にあるショッピングモールに来ていた。

「おい、何買えばいいかメモしてあるか?」

「勿論だよ! えつと、ちよつと待ってね…」

ことははそう言いながら自分の肩掛けカバンの中からメモを取り出して書いてある事を読み上げる。

「えつと…お肉、お野菜に飲み物!」

「なるほど…肉と野菜と飲み物を買えば…ってこんなメモじゃ何買えばいいか全く分からねえ! はあ…ダメだこりゃ」

万丈はそう言いながら腰に手を当て顔を下に向けてはあ…と大きなため息をつく。万丈の言葉を聞いて自分が頼りないと言われた感じがしたことははムツと頬を膨らませながら万丈にこう言う。

「…龍我よりはダメじゃないし」

「はあ? 俺ならお前の書いたメモよりもつとマシなメモ書いてたからな!」

「……」

「おい、どこ行くんだよ! ことは!!」

完全に万丈に見下されたと感じたことはは無言のまま万丈に背中を向けて万丈とは反対の方向へ走っていった。万丈は方向転換し、買い物カートを置いて走ることがはを追いかけていく。

2人は長く追いかけてつことを続けるうちに知らない町にたどり着いていた。近くの看板には黄昏町たそがれと書いてある。

「黄昏町…? 隣町ではないみたいだな…ってアイツは!?」

「……だよー」

万丈は追いかけていたことはを見失い慌てて辺りを見回す。少しの間見回していると近くにある公園の方からことはの声が聞こえてきた。万丈は公園のベンチに座ることはの元へ向かう。

「ことは、ことはどこなんだ?」

「分かる訳ないでしょ! ここがどこだか分かってたら龍我なんか待た

ずにもつと街中に行くから！」

「まったくそんな怒り口調で言うなよ……」

いつもは明るいことはに怒り口調で言葉を言われた万丈はしゆんとなつてしまった。と、2人が黙ったまま公園にずっと滞在していると辺りはいつの間にか近くの人が何なのかギリギリ判別出来ないくらい薄暗くなっていた。

「そこのあなた達、何しているのかしら？」

「アンタは？」

「私は時田 カレハ」

と、2人の前に突然、時田カレハと名乗る者が現れた。容姿は分からないが声の感じからしてみらい達と同じ年くらいの少女である事は分かった。

「俺たちに何か用があんのか？」

「今いる場所はあなた達が本来いるべき場所ではない」

「はあ？いきなり何言ってるんだよ！訳わかんねえ」

「とりあえず、私が元の世界に戻してあげる……あなた達より少し前にここへ来たある人みたいにならないよう……にね」

「あの人が誰なんだよ！」

万丈は時田カレハにそう聞くが時田カレハは万丈の問いに対して何も答えずに2人に向けて光を放つ。そして2人を元の世界へと戻していった。

2人が目を覚ますと辺りは先程の薄暗さが嘘のように明るく人が1人もいなく、沈黙に包まれていたはずの周囲が人々で賑わっていた。2人は看板に目を向ける。看板にはちゃんと隣町の名が書かれていた。ここで2人は元の世界へ戻って来たんだと確信した。

「なあ、……ことはさつきは言い方が悪くてお前を傷つけちゃったみたいだな……ごめんよ」

万丈はそう言いながら自分に背中を向けていることは左手を両手でぎゅっと握る。

「私も突然走って逃げたり、冷たい言い方しちゃったりしてごめんね……」

ことはは万丈の方に体と顔を向けて涙ぐみながら万丈に先程自分がしてしまった事を謝る。万丈はことはの目に溜まっている涙を自分の人差し指で拭きながらことはにこう言う。

「泣くなよ…お前らしくねえ」

万丈のその言葉を聞いたことはは胸が締め付けられてキュンとする。ことはは顔がみるみるうちに赤くなり、遂には万丈の事を見つめられなくなり顔を別の方向へ逸らした。

「おっ、おい！俺がまたお前の気に障る様な事したか!？」

「べっ、別に…／＼／＼」

と、2人が元の世界に戻って来てから少しの間話していると銃撃音が近辺から聞こえてきた。

「ことは!!!」

銃撃音が聞こえる前に銃撃をする者の存在に気づいた万丈ことはの前に入り、ことはを銃撃から守った。だが、自分は銃撃を受けて右脇腹を貫かれてしまう。

「ぐっ…」

「龍我!？」

万丈はその場に倒れてしまった。ことはが銃弾が飛んできた方向に目をやるとそこには既にデイケイドへと変身した門矢士がいた。

「チツ、万丈龍我め…今日に限って筋肉細胞がトツプギアだったか…」

「あなたは!？」

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ…ってか花海ことは、自分達の知らない町への冒険はどうだった?楽しかったか?」

「あんな静かで薄暗い場所楽しくなんかない!」

「静かで薄暗い…なるほどな」

「はい、話は終わり!私は龍我を傷付けたあなたを許さない!」

「はあ…」

戦う事が面倒くさいと感じていた士はことはの言葉を聞いてはあ…とデカイため息をつく。一方のことはは変身アイテムを取り出して変身する。

「キュアアップ・ラパパ!エメラルド!」

ことはがそう唱えると、リンクルストーン・エメラルドがリンクルスマホンという変身アイテムに挿し込まれていく。その後、リンクルスマホンの画面にアルファベットのfを書くとき、F e l i c eという文字が浮かび上がる。

「フェリーチェ・ファンファン・フラワーレ！」

ことはがそう唱えると、服装や髪型、背丈が変化していく。

「あまねく命に祝福を…キュアフェリーチェ!!」

「来いよ、キュアフェリーチェ！」

こうして万丈を傷付けられ、憤りを感じたことはと仮面ライダー  
ディケイド／門矢士の戦いが始まるのだった…



# 40. Best Match & Start You r Engine!

キュアフェリーチエに変身したことははいつもより速いスピードでデイケイドに向かつていき、殴りかかる。デイケイドはことはの右手から繰り出された渾身の力を込めた拳を左手のひらで受け止める。その後、ことはの右腕を掴んでことはを建物の壁に向けて投げ飛ばした。

「おいおい、もう終わりか？」

「まだ終わってない!!」

壁にめり込むほどの強さで投げ飛ばされたことはは傷つきながらも再びデイケイドへ向かつていく。

「まだ俺に向かつてこれるくらいの力は残ってるようだな…なら、これはどうかな？」

『カメンライド!カブト!』

「いくぜ」

『アタックライド!クロックアップ!』

デイケイドはカブトにカメンライドした後、クロックアップと書かれたライダーカードをバックルに装填し、技を発動させる。すると、デイケイドカブトの速さがことはの速さを圧倒的に上回り、ことははどうすればいいか分からなくなっていた。

「速すぎて動きが読めない…どうすれば!」

ことはがそう考えているうちにもデイケイドカブトは攻撃を仕掛けてきていて、ソードモードのライドブツカードでことはの身体を何回も何回も切り裂いていく。

「ぐはぁ…!!」

ことはの服はデイケイドカブトの斬撃のせいで所々破けていたり、鮮血に染まっていたりする。破けた部分から露出した肌からはまだ血が出続けていた。

「はぁ…はぁ…」

「戦うのは面倒なんだ…見逃してやるからその男を連れて家に帰れ！」

「…まだまだ!!」

「はあ…もういい、強制的に終わらせてやる」

と、デイケイドは基本フォームへと姿を戻した後、体中傷だらけでまともに戦えないのにまだ言葉で抵抗してくることはこの首を右手で掴み、ことはこの足がつかない所まで持ち上げる。

「うう…ぐっ…」

「終わりだ!」

そう言いながらデイケイドは左手に持っているライドブツカーをガンモードに変えてことはの腹部に銃口を突きつける。そしてトリガーを引こうとしたその時、遠くから誰かが走ってきた。

「やめろ!!」

「はーちゃん!!」

走ってきた人物、それは戦兎とみらいとリコだった。二人のおつかいの帰りが遅くて心配になり、街中を探し回って今、ようやく2人を見つけたようだ。

「…この世界は融合している。だからこそこの世界に融合してしまつた物を破壊しなければならぬ。そこで見ていろ、まず一つこの世界に融合してしまつた物が消える瞬間をな!」

「まさか、ことはを…!」

「やめてよ…はーちゃんを殺さないで!!」

「何を言おうが無駄だ…何たって俺は”破壊者”だからな」

デイケイドはそう言いながら再びことはの腹部に銃口を突きつける。そしてトリガーを引いて銃弾を放つ。

「…ことはああ!!」

「はーちやあああん!」

ガンモードのライドブツカーの銃弾はことは腹部を貫き、血しぶきと共に背中から出て遙か彼方まで飛んでいった。撃たれたことはの変身は解けた。

「フン、今日は…ここまでだ。また会おう」

デイケイドの変身を解いた門矢 士は腹部に銃弾を受けてぐったりしてしまったことはを投げ捨て、オーロラカーテンを使ってどこかへ去っていつてしまった。戦兎とみらいとリコの3人はまだ微かに息をしていることはの元へいく。

「おい、ことは！しっかりしろ!!今、救急車呼ぶからな！」

「はーちゃん!!お願い、死なないで！」

「はーちゃんは私達の大事な家族なの！絶対に失いたくないわ!!」

「はあ…！せん…とお、みらい…リ…コ…！」

ことはは焦る戦兎、大粒の涙を流すみらいとリコに微笑みながらそれぞれの名を呼ぶ。

「今、呼んでやったからな！あと少し耐えろ!!」

「…ごめんね、わたし、もう無理かも」

「やだやだやだやだあ!!」

「はーちゃん…」

ことはの意識は朦朧としており、救急車が来るまで耐えられるかどうか分からないくらいだった。ことはは自分の血で染まった赤い右手を伸ばす。戦兎とみらいとリコはことはが伸ばした手を自分の手で包み込んでいく。

「ははあ…皆、最期にいいかな？」

「最後とかやめろ！お前はまだ生きる…そう、生きるんだよ!!」

「そうだよ、はーちゃんはまだ生きるの!!」

「はーちゃんがいないと私やみらいや戦兎くんそして万丈くんが困るわ!!」

「ふふふ…皆、優しい…ね…！ああ…私ってほんとう…に…しあわせもの…だあ…」

ことはは残る力を振り絞って皆にそう言い、目を閉じて顔を横にぐったりとさせてしまった。

「ことは…？おい、ことはああ!!」

「はーちやあああん!!!」

「もう…嫌だ…」

戦兎とみらいはぐったりしていることはの身体を強く揺すってま

だ生きているかどうか懸命に声をかける。リコは静かに一言もう：嫌だ：と言った後、その場で泣き崩れる。

先程まで晴れていた空は雨雲に包まれて暗くなり、小粒の雨が勢いよく3人とことはそして気を失っている万丈に降り注ぐ。戦兔とみらいとリコは目の前が真つ暗になり、しばらくの間黙っていた。誰も喋ることなく辺りには通報を受けて駆けつけてきた救急車のサイレンが虚しく響き渡るのだった。

「くっ：フェリーチェを殺してしまうとは：おのれ、ディケイド！」  
遠くのビルの屋上から様子を見ていた魔闇 月はディケイドのせいで自らの計画が少し狂ってしまい、ディケイドへの憎しみが更に増したようだ。

絶望の淵に陥った3人の背後には救急車と同時期にパトカーで駆けつけてきた警察官の泊 進之介が3人に何も言葉をかけられずただ突っ立っているのだった。

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 41. 託されたホープ

ことはの亡き骸の周りで悲しみに暮れている3人を見た泊 進之介はそろそろ声をかけなければと、3人の元へ歩み寄っていく。

「君達、後の事は救急隊に任せて早く家に帰って」

「…分かった」

「でも、はーちゃんが…!」

「あとは任せよう…俺らにはことはの傷を治せるような力はない。だから、俺らは治せる力を持つ人達にことはを任せて早く家に帰ろう」

「…うん、分かった」

泊 進之介に早く家に帰るよう言われた戦兎達は倒れていることはを救急隊に任せ、戦兎が万丈を背負った後、ゆっくりと朝日奈家へ帰っていった。

「みらい、リコちゃんに戦兎くん…って万丈くん!」

朝日奈今日子は戦兎が床に降ろした傷だらけの万丈を見て驚き、慌てて119番へと通報した。万丈はその後、朝日奈家に駆けつけた救急車に乗せられ、病院へと搬送された。

残された戦兎とみらいとリコの三人は戦兎の部屋へ行き、部屋で床に三角形になって座っている。

「戦兎…私達、どうすればいいのかな…?」

「とにかくことはの為に今を生きる。そしていつかまたデイケイドが来たならその時は全力で倒しに行く!」

「デイケイド…私の大切な人を2人も傷つけるなんて…」

みらいは悲しい表情を浮かべながら今後の生活をどう過ごしていけばいいか不安になっていた。一方、万丈とことはをデイケイドに傷つけられたリコはデイケイドに対しての憎悪と怒りからか眉間にシワを寄せながら両手の拳をギュツと握りしめ、身体を小刻みに震わせていた。

「…とりあえず、今日はもう寝ようか」

「そうだね」

「うん」

戦兎はこのままことはや万丈、そしてデイケイドの事を考えても良い事はないと思い、みらいとリコに今日はもう寝ようと言う。2人はうんと言い自分の部屋へと戻っていった。2人に寝ようと言った戦兎はベッドに横にならずに2人が使える新しい武器を開発し始めるのだった。

翌日の朝、早く起きたみらいは戦兎の部屋へと向かう。戦兎の部屋の扉は少し開いており、扉の隙間から中を覗いてみるとそこには机に顔を突っ伏して寝ている戦兎がいた。机の上にはみらいが見た事のない武器が2つ置いてある。

「戦兎…」

「ふああ…ん？みらい、どうしたんだ？」

と、みらいが自然な感じで戦兎の名を言うと戦兎が起きた。戦兎は両目を擦り、あくびをしながらその場に立ち上がった。

「戦兎、その新しい武器は何？」

「ああ、これか。これはな、みらいとリコが使うその名もウイザーソード！」

「ちよつ、名前！名前がウイザーソードじゃウイザーソードの武器の劣化版みたいになっちゃおうよ!？」

「なら…」

「私が付ける！この武器の名前はリンクルソード！」

「リンクルソードか。なんかシンプルだな」

「シンプルが一番いいの！そう、シンプル イズ ベスト!!」

「お、おう…」

と、戦兎とみらいが話していると戦兎のビルドフォンが鳴る。万丈からのようだ。

「万丈、大丈夫か？」

「俺はなんとか…だけど、ことはは…」

「死んじまったんだよな？」

「ちよつと待ってる…アイツの部屋見てくる!」

万丈は電話を繋げたまま自分の病室からことはの病室へ歩いていく。電話の向こう側からは扉を開ける音が聞こえてくる。

「何だと…!？」

「万丈?」

「ことはがいねえ…」

「何っ!？」

万丈が見た所、昨日までいたはずのことはがいなくなっていたらしい。万丈はことはの病室のベッドに何かが置かれているのを見つめる。

「でも、ベッドに何か置いてあるぞ…」

「何が置かれてるんだ?」

「綺麗な緑色の石だ」

「なるほど、エメラルドの原石?かな」

「エメラルドとかよく分からんがまあ、とにかくそうみたいだ」

と、万丈がエメラルドの原石を持って自分の病室へ戻ろうとした時、誰かが万丈の近くにやって来た。

「ほお…エメラルドの原石か。融合したこの世界では強大な力を持っているようだなあ…俺に寄越せ」

「はあ? 渡す訳ねえだろ」

「万丈、誰と話してんだ?」

「門矢 士だ」

「今すぐ向かうから待つてろ!!」

戦兔が誰と話しているのかを万丈に聞いた所、万丈は門矢 士と話していた。戦兔は電話を切り、みらいの手を引いて朝日奈家の前に行く。そしてビルドフォンをバイクモードにした後、みらいを後部座席に乗せて万丈のいる病院へと向かっていった。

その頃、ビルドドライバーがなく、変身できない万丈は門矢 士から必死に逃げていた。門矢 士はドライバーを腰に巻いてバックルに変身用のカードをセットし、バックルの両側のレバーを押して変身する。

『カメンライダー…デイケイド!!』

デイケイドは病院の外へ出ていった万丈を追いかけていく。だが、病院の外には万丈以外にもう一人誰かがいた。

「デイケイド、何が目的なんだ？」

「お前は…仮面ライダードライブの泊 進之介か。俺は世界を破壊しに来たんだ」

「世界の破壊だど？そんな事は絶対させない！いくぞ、ベルトさんー！」  
「OK! Start Your Engine!」

泊 進之介はベルトさんからの合図をもらった後、腰に巻いているドライバーのエンジンキーを回してシフトブレスにシフトスピードを装填し、レバー操作をして変身する。

『DRIVE! type speed!』

変身した泊 進之介はハンドル剣を片手にデイケイドへ向かっていく。

「万丈！みらいとそこにいろ！」

「分かった」

万丈は丁度駆けつけてきた戦兎にみらいとそこにいろと言われ、ドライバーを腰に巻いてジーニアスフルボトルを装填し、ドライバーのレバーを回しながらドライブに加勢していく戦兎を任せたぞ！というような目で見送る。

『完全無欠のボトルヤロー！ビルド ジーニアス！スゲーイ！モノスゲーイ！』

戦兎はダイヤモンドの成分を両腕に纏わせ、鋼鉄の拳でデイケイドを殴っていく。

「デイケイド、俺はお前を許さない…！」

「お前はまた気づいていないようだな…誰が敵で誰が仲間なのかを」

「何だと？」

「全てを教えてやろう…！」

と、戦兎とデイケイドが話していると突然、デイケイドに黄色いオーラが降りかかり、デイケイドを消し去ってしまった。

「救世主の道を邪魔する者は退かした。さあ、魔闇 月よ。ドライブの力をそのボトルに吸収するのだ」

「はーん」

黄色いオーラを放ったのは時田カレハだった。時田カレハは魔闇



月にドライブの力を二本のエンパイボトルに吸収するよう指示する。魔闇 月はエンパイボトルを泊 進之介に向けてドライブの成分を奪っていく。

「何だこの光は……！」

成分を奪われた泊 進之介はドライブの変身が解けてしまった。変身が解けるのと共に自分自身も半透明な体になり、段々と光の粒子となって消えていく。

「アンタ、身体が……」

「はは……力を失った俺にはもうここに居る時間がないみたいだ。最後に一つ、大切な仲間の死を引きずる事なく前を向いて生きていくくれ！」

「分かったよ、警察官さん」

「じゃあ、またな！」

泊 進之介はそう言い、消滅してしまった。俺はその後、魔闇 月から受け取った2つのフルボトルをギユツと握りしめながら万丈とみらいが待つ場所に向かうのだった……

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 42. ワクワク！みらいの誕生日！

6月12日の今日はみらいの誕生日。皆が朝日奈家の居間や食卓の壁に装飾を飾っている中、戦兎は万丈の入院している病院から持ち帰って来たエメラルドの原石を調べていた。

「砕いても、燃やしても、撃つても傷一つつかない。何なんだこれは…」

と、戦兎がビルドの武器でエメラルドの原石に様々な衝撃を与える実験をしていると部屋にみらいがやってきた。

「戦兎！今日は何の日か分かる？」

みらいが戦兎にそう聞くと戦兎は立ち上がり、みらいの目の前まで歩いていく。そして自分の右手をゆくりとみらいの顎に添えてから顔をみらいに近づける。

「分かるに決まってるだろ。俺は愛してる奴の生まれた日くらいきちんと覚えてる」

「せつ、せんとおく…／＼／＼」

戦兎に予想通り以上の言葉を言われたみらいは頬を真っ赤に染め、戦兎に”これ以上ドキドキするような事は言わないで！”と表情で必死に訴えていた。

「…つたく、顔赤くしちゃって…俺の言葉そんな格好よかったか？」

「戦兎が言うような言葉でも格好良くなっちゃうの！」

「そ、そうか…」

戦兎はみらいに自分が言うような言葉でも格好良くなってしまうと言われ、顔を少し赤くしながらも冷静に受け答える。

「あつ、そういえばみらいはプレゼント何が欲しいんだ？」

「指輪かな…／＼／＼」

戦兎がみらいにプレゼントに何が欲しいかを聞くとみらいは戦兎の右腕に身体を寄せながら小声で指輪と答える。

「えっ、ちよつ、まだ早いわ！／＼／＼」

みらいに欲しいものを聞いた戦兎は予想外の要望に焦り、先程よりも顔を赤くしながらみらいに16歳での結婚は早すぎるとみらいに

伝える。

「ふふっ…冗談だよ！」

「…まったく、焦っちゃまっただろうが…／＼／＼」

戦兎はそう言いながら部屋を出て行き、家の玄関を出てどこかへ出かけていった。戦兎の部屋に1人残されたみらいは戦兎の部屋に何があるのかが気になり、部屋の様々な場所を漁り始める。

「難しい本ばかりだな…」

本棚やベッドの下の隙間に置かれてるものを見たが全て今のみらいには理解出来ない書物が置かれていた。最後は机の引き出しだが、どうせまた難しい本しか入っていないんだろうな…とみらいは引き出しの中身に期待せずに引き出しを引いていく。

「はあ…ノートしか入ってない。しかも、私分からない式ばかり……ん？引き出しの奥に何かある」

引き出しの中にはみらいには理解出来ない数式が書かれたノートが入っていた。だが、みらいが引き出しをさらに引くと引き出しの奥には一枚の写真が入っていた。

「ふふっ…懐かしい写真だなあ…確か、皆を置いて2人で遊園地に行ったんだっけ」

引き出しの奥に入っていた写真はみらいが中学生の頃に戦兎と2人で行った遊園地で撮った写真だった。みらいは立ち膝のまま暫くの間、写真を眺めていた。すると、そこへ外出から帰ってきた戦兎が来た。

「ずっととっておいたんだぜ、お前との大切な思い出の写真」

「戦兎!?いつの間にな？」

「確か、あの時はデートじゃない!…とか言ってたよな、俺」

「うん、あの時はまだお互いの気持ちに気づいてなかったからね。気づいていたらきつと、デートって思ってた」

みらいは座っている戦兎の横へ行き、自分も座る。そして床にしている戦兎の左手の上に自分の右手を重ねる。

「みらい…／＼／＼」

「戦兎…／＼／＼」

みらいが手を重ねた事によって戦兔の部屋が甘い雰囲気に含まれていく。戦兔は空いているもう片方の手をみらいの首に回し、自分の顔をみらいの顔へゆっくりと近づけていく。そして2人の唇が重なる。戦兔とみらいが数十秒間その状態でいると、部屋に誰かがやって来た。

「みくら…!?!」

部屋に来たのはリコだった。2人はリコに気づかずまだキスを続けている。ここで割り込むのは少し気まずいと感じたリコは静かに部屋の扉を閉めて自分の部屋へと戻っていく。

そして長いキスを終えた後、キスをしたせいで発情してしまった戦兔は中学生の時より膨らんだみらいの胸にてを当てようとするが、みらいに阻まれる。

「戦兔、まだ早いよお…／／／」

「しょうがないな…」

戦兔は渋々、胸を触ろうとしていた方の手を下ろし、みらいと共に立ち上がって一階の居間へ一緒に向かっていった。

2人が居間に行くと、さつき見た時よりも多く鮮やかな装飾が居間の全体に付いていた。どうやら、みらいの誕生日会の準備は2人が戦兔の部屋にいる間に済んだようだ。戦兔とみらいのキスを見てしまったリコは少し焦っているような表情を浮かべている。

「みつ、みらい！お、お、お誕生日おめでとう!!!」

「リコ？そんな焦って流ような顔してどうしたの？」

「なっ、何でもないわよ！ささ、ここに座って！」

リコはそう言いながらみらいを自分の横の席へ座らせる。戦兔はみらいの左隣の席に座った。戦兔は誕生日会が始まる前にみらいにプレゼントを渡す。

「みらい、俺からのプレゼントだ！」

「わあ…！何が入ってるんだろう？」

みらいは戦兔から渡された小箱を開ける。すると、中には結婚指輪ではないが、みらいが望んでいた指輪が入っていた。

「戦兔！これって…」

「指輪だよ。欲しがってただろ？まだ結婚はしないからとりあえず左手の小指にでも付けておいてくれ」

「戦兔、最高のプレゼントをありがとう！」

みらいはそう言いながら戦兔の右頬にキスをする。両親や祖母はいなかったものの、今度はリコ以外に万丈がいた為、戦兔とみらいはリコと万丈の2人にラブラブなどところを見られてしまう。

「まったく、イチヤイチャしゃがって…おい、リコ！俺らもアイツらに対抗するぞ！」

「恥ずかしいから対抗しないでいいわ！」

「しょうがねえな…ってあれ？戦兔、お前この綺麗な緑の石ころ自分の部屋に持っていったんじゃないかねえのか？」

「何言ってるんだよ万丈、エメラルドの原石をここに置き去りにするわけ…ってあれ、本当だ。何でここにあるんだ？」

「誕生日会終わったら部屋に持ってかえっておけよ」

「分かった」

戦兔はさつきまで自分が部屋で調べていたエメラルドの原石が何故、居間に移動していたのかが分からずにいたが、その後すぐに見らぬの誕生日会が始まった為、特に気にする事なく1日を過ごしていくのだった…

### 4.3. 新たな鱈（ローグ）の目醒め

ある日の早朝、起きて間もない戦兔が外に出て朝日を浴びようと玄関へ向かうと、インターホンのベルが鳴った。インターホンの音は何回も何回も連続して鳴り続ける。

「誰だよ、こんな朝早くから…」

戦兔がそう言いながら扉を開けるとそこには氷室幻徳がいた。氷室幻徳はずっとインターホンのスイッチをカチャカチャと押し続けている。

「幻さん、うるさい」

「あ、ああ…ごめんよ」

「…つてかこんな朝早くに何しに来たんだ？」

「強化アイテムが欲しいんだ」

「何言ってるんだよ、プライムローグで十分だろ？」

「あれではエボルトに勝てない！だから、頼む!!新しい強化アイテムを俺に作ってくれ!」

氷室幻徳はそう言いながら頭をしつかり地べたにつけて土下座をし、戦兔に新しい強化アイテムを作るよう頼み込む。

「…つたく、しようがないなくそこまで言うなら作ってやるよ」

「おお…!ありがとうございます」

「その代わり、今すぐ家に帰れ!帰らないとここの近所の人に怪しい髭男が朝日奈家の玄関にいるって通報されるぞ?」

「わかった、帰るよ」

最後、戦兔に軽く脅された氷室幻徳は自分の望み通り強化アイテムを作ってもらえる事になったのでその喜びを感じながら自分の家へと帰っていった。

「はあ…」

「せええんとお…今のだくれ〜?」

「うわあ!?!お前いつからここにいたんだ?」

と、戦兔が朝から人の家のチャイムを連打する迷惑な氷室幻徳を家に帰し、安堵のため息をついて靴を脱ぎ玄関に上がると目の前には起

きたばかりで寝癖が凄いみらいがいた。

「私は戦兔が玄関の扉を開けた時くらいからここにいたよお〜」

「そうか。なら、まだ起きるような時間じゃないから部屋に戻れ」

「ええ〜：：なら、抱っこして連れてってよお〜」

「えっ：：／／／」

「抱っこ、抱っこ〜!!」

「わ、分かったから!／／／」

みらいはまるで子供かのように戦兔に抱っこをするよう強請<sup>ねだ</sup>る。戦兔は顔を真っ赤に染め、誰かいないか廊下の隅々まで確認してからみらいを抱っこして足早に部屋へ連れて行く。

部屋へ行き、みらいをベッドに寝かせた後、戦兔は自分とみらいのイチヤイチャがこの家にいる誰かにばれなくてよかった：：と、安堵のため息をつく。

「ふう：：どうなるかと思っただぜ」

と、ここで戦兔は氷室幻徳に強化アイテムを作るよう頼まれていた事を思い出す。

「やっべえ：：早く幻さんの強化アイテムを作らなきゃ：：!」

戦兔はそう言って自分の部屋へと戻っていった。そしてそれから数時間後、みらいが目を覚ました。

「ふああ：：」

「おはようモフ!」

「おはよう、モフルン」

みらいは先に起きていたモフルンにおはようと伝え、普段着に着替えてからいつものように戦兔の部屋に行く。

「戦兔〜!おはよー!!」

「：：：：：」

「：：あれ?いつもならおはよう!って返してくれるのになあ：：」

みらいは部屋の前の扉で部屋の中にいる戦兔に向かっておはよう!と言うが中からは何も返ってこない。心配になったみらいが扉を開けて中へ入るとそこには工具を持ち、椅子に座ったまま顔を机に突っ伏して寝ている戦兔がいた。

「寝てたのか…なら、起こすしかない！おーい、戦兔〜！朝だよー!!」  
「…みらい、おはよう」

「おはよう!!ねえ戦兔、今日公園に行かない?」

「公園?公園に何か用でもあるのか?」

「2人でいちごメロンパン食べたいの!」

「分かった。なら、幻さんを公園に呼ぶから来るまでの間に2人でいちごメロンパンを食べよう!」

「やったー!!」

戦兔は起きて早々、みらいに公園へ行こうと誘われる。戦兔は氷室幻徳を公園に呼び、来るまでの待ち時間の間にいちごメロンパンを食べようとみらいに言った。戦兔の言葉を聞いたみらいは大喜びで外へ出ていく。

「早く早くー!!」

「ちよ、まてよ!!着替えはしたのか!」

「したよー!!」

「まじか!んじゃ、ちよつと待つてろ!」

戦兔は先に外に出たみらいに急かされながらも数分後、着替えや支度を済ませてみらいのいる場所へ行く。

そして歩く事約15分、2人はMofuMofuBakeryという移動販売車がいる公園に着いた。公園の噴水広場の近くにあるベンチに座った後、みらいはいちごメロンパンを買いにMofuMofuBakeryへと向かう。そして買ってきたいちごメロンパン二つのうちの一つを戦兔に渡そうとしたその時だった。

「戦兔、買ってきたよ!」

「さんきゅー!」

「よお…お前ら!」

「エボルト、何の用だ?」

「今日はお前らに二つ言うことがある」

「何…!?!」

「まず一つ目は俺と門矢 士が手を組んだ事、そして二つ目は…」

怪人態のエボルトはそう言いながら既にフルボトル2本が装填さ



れているエボルドライバーを腰に巻き、ドライバーのレバーに手をかける。

「お前らが持つエメラルドの原石を奪いに来た」

エボルトはそう言つてドライバーのレバーを回し、仮面ライダーエボルへと変身する。

『Are you ready?』

『コブラ!コブラ!エボルコブラ!!フツハツハツハツハ!』

「みらい、下がつてろ!ここは俺が…」

「いや、俺に任せろ」

戦兎はドライバーを腰に装着しようとしたが誰かが自分の右肩に手を置きながら俺に任せろと言うのでドライバーを装着するのをやめた。

「幻さん!?!」

「新しいアイテムはまたビルドドライバー専用なんだろ?ドライバーと新しいアイテム借りるぞ」

「ちよ、待てつて!そのアイテムまだ命名してない!」

「なら、俺が決める!このフルボトルはワイルドアウトレイジフルボトルだ」

「なんかパツとしない名前になつちやつた…」

戦兎に任せろと言つたのは氷室幻徳だった。氷室幻徳は戦兎からビルドドライバーとワイルドアウトレイジフルボトルを借りる。そしてビルドドライバーを腰に巻いてワイルドアウトレイジフルボトルをドライバーに装填する。

『ワイルドアウトレイジ!』

ドライバーにワイルドアウトレイジフルボトルを装填した後、ドライバーのレバーを回して変身する。

『ガブツ!ガブツ!ガブツ!ガブツ!ガブツ!』

『Are you ready?』

「変身!」

『威風堂々の髭野郎!!ローグワイルド!!カッケーイ!メチャカッケーイ!!』

ローグワイルドは複眼が水色から紅色に変化しており、両腕や両足の外側の側面には鰐の鋭い牙が付いている。肩アーマーも鰐の顔を彷彿させるものになっていて全体のカラーリングも紫色基調から藍色基調のカラーリングとなっている。

「大義の為の犠牲となれ！」

「こいよ、幻徳」

エボルトは人差し指をクイツと前後に動かし、氷室幻徳を挑発気味に呼ぶ。氷室幻徳はエボルトに殴りかかっている。

「うおお!!」

「ぐっ…この俺が押されているだと…!?!」

ローグワイルドのパワーと防御力はビルドの中で一番であり、例えばエボルトがブラックホールフォームになったとしてもローグワイルドのパワーと防御力には勝てないのだ。

氷室幻徳は腹部に何発も殴った後、エボルトの右腕を掴み、ハンマー投げのハンマーのように振り回してから近くの建物の壁へ吹っ飛ばしていく。

「くっ…なら、これはどうかな？」

エボルトはそう言いながら前回の対戦で氷室幻徳が対応できていなかった高速移動をする。エボルトは氷室幻徳の周りを高速で移動しながら徐々に氷室幻徳を追い詰めていく。

「お前がいくら早く動こうがパワーアップした俺の目からお前の姿は消えない」

氷室幻徳の瞳には高速移動してどこにいるか全然分からないはずのエボルトの姿がハッキリと写っていた。

「エボルト、これで終わりだ…!!」

氷室幻徳はそう言いながらドライバーのレバーを勢いよく回して必殺技を発動させる。

『ワイルドサイド!』

『アウトレイジサイド!』

『ワイルドアウトレイジサイド!!』

『Ready go!』

『ワイルドアウトレイジファイニッシュ!!』

必殺技を発動させた後、氷室幻徳は腕の外側の側面に生えた牙をエボルトに向けてタツクルし、突き飛ばす。そして空中に蹴り上げた後、エボルトの位置よりも高い場所まで跳び、そこからエボルトに向かって急降下していく。

「ぐっ…：またもや負けるとは…!!おのれ人間めええ!!」

必殺技を受けたエボルトは爆発と共に消え去っていった。エボルトが消えたのを見た氷室幻徳は変身を解く。ローグワイルドの力の代償は重く、氷室幻徳は変身を解いた後、すぐに倒れてしまった。戦兎とみらいは氷室幻徳の近くへ駆け寄る。そしてもう一人、氷室幻徳の元に駆け寄ってきた人物がいた。

「大丈夫!？」

「お前は…：！天空寺 タケル?」

「そう！あの時以来だね、戦兎!」

氷室幻徳の近くに駆け寄ってきたもう一人の人物、それは天空寺タケルだった。天空寺タケルは何をしにここへ来たのだろうか…？

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 4.4. 破壊神、降臨

「戦兔、今日は戦兔にある物をあげたいと思ってここへ来たんだ！」

天空寺タケルはニッコリ笑顔を浮かべながら戦兔に歩み寄っている。そしてズボンのポケットの中から二つのフルボトルを取り出し、戦兔に渡した。

「何故、お前がそれを…？」

「紫色の髪をした女の子に戦兔にこれを渡すよう言われたんだ。女の子の話によると、どうやら俺は突如現れた破壊神に存在を消されてしまいうらしい」

「破壊神に消される…？力を失ったら存在が消されるんじゃないかな？」

「うーん…俺にはこの世界のルールとやらが分からないからあまり理解は出来ないけど、この世界のルールが壊れてきているという事は戦兔のこの世界での最終決戦はそう遠くないのかもね」

「最終決戦…か。って事は俺が”救世主”とやらになるのはもっと近いのか」

と、戦兔が天空寺タケルと話していると、リコが焦った様子で戦兔の元に駆けつけてくる。

「戦兔くん!!あと少しで破壊神が来るわ!」

「破壊神…?どういう事だ?」

「とにかく、家に戻るわよ!ほら、あなたも!」

予知能力で今よりも先の未来を見たリコは予知通りにならないよう戦兔達と天空寺タケルを朝日奈家へ避難させる。

「はあ…はあ…」

「リコ、いきなり俺たちを家に帰って来させて…一体、何があったんだ?」

「私、見たの!あのまま公園に居続けた場合の戦兔くん達の未来を!」

「未来だと…!?!」

「ええ、その未来では手を組んだエボルトとデイケイドが新たなアイテムで融合し、破壊神になって戦兔くんと…ぐっ…うわああ!!」

「リコ!?!」

リコは喋っている途中に突然、頭を押さえながら倒れた。万丈はリコを背負ってリコの部屋へと向かっていった。万丈に背負われたリコは部屋に行く前に戦兎にこんな言葉を残していく。

「エボルトとデイケイド。あの2人には気をつけて!そして私はこの通り、予知した未来を変えようとする」と頭が痛むの…」

「リコ…そんな能力を持っていたのか…」

戦兎とみらいは不安な表情を浮かべながらリコを見送っていく。倒れたリコを見た天空寺タケルは立ち上がり、再びあの公園に向かうと家の外に出ようとしていた。

「お前、外は危ないぞ!」

「早く終わらせないと…!この世界での戦いが終わらなければ終わらないほどリコちゃんはずっと苦しみ続ける」

「どういう事だ?」

「俺、見たんだ。リコちゃんのこの世界での役割…」

「役割…?」

「うん、リコちゃんは占い師だった。未来を見る事が出来るが見た未来を変えようとした場合は自分に罰が下るらしい」

「この世界で何が起こっているんだ?」

「大型の人狼だよ」

「人狼だと…!?!」

天空寺タケルは自身に元から宿っている特殊な力でリコの役割を見たらしい。天空寺タケルからこの世界で大型の人狼が起こっていると教えられた戦兎は驚きを隠せずにいた。

「…リコの為にもこの世界の為にも早く戦いを終わらせなきゃいけない」

「そうと決まれば早速、破壊神の現れる場所に行くよ!」

「おう!」

リコの為、この世界の為にも早く戦いを終わらせる事を決意した戦兎は天空寺タケルと共に破壊神が現れそうな場所へ向かっていく。

「戦兎、待って!」

「みらい、お前は家で待ってろ！お前を危険な目には遭わせたくないんだ！」

「戦兔…」

戦兔はみらいに家で待ってろと言った後、玄関の扉を開けて外へ出ていった。

戦兔と天空寺タケルは先程来た公園に再び来た。と、来て早々何者かが2人の前に現れる。

「よお…戦兔、天空寺タケル」

「お前は門矢 士…？」

「戦兔、彼は門矢 士じゃない！」

「…エボルトか」

「正解!!って俺が来たんだからもっと盛り上がってくれよ」

「盛り上がるわけねえだろ。俺はお前を倒して世界を救う」

戦兔はそう言いながら腰にドライバーを装着し、ビルドストームナツクルにビルドストームフルボトルを装填する。そしてビルドストームナツクルをドライバーに挿す。

『ボトルビューン！』

『ビルドストーム！』

待機音を少し流した後、ドライバーのレバーを勢いよく回す。そして、ナツクルに形状が似た坩堝型のストームライドビルダーが背後に出現し、中で吹き荒れる大量のストームを戦兔の頭上からぶちまける。そして戦兔を覆っているストームをかき消して変身が完了する。

『風来天才！ビルドストーム！』

『ビュンビュンビュンビュンビューン！』

「これが救世主に近い姿か…ならば、こっちは完全なる破壊神の姿を見せてあげよう…！」

エボルト士（エボルトに乗っ取られている士）はエボルトドライバーを腰に装着し、ジーニアスフルボトルサイズの禍々しい紅色のフルボトルをドライバーに装填する。

『ワールド・エンド！』

ドライバーにワールドエンドボトルを装填した後、ドライバーのレ

バーを回して変身する。

『フハハハ！チャオ！フハハハ！チャオ！』

『Are you ready?』

「変身」

『鬼気森然の破壊野郎!!デイケイドエボル!!オツカネーイ！バリオツカネーイ!!』

デイケイドエボルの容姿は全体的にデイケイドだが、マスクが激情態のマスクだったり、カラーリングがエボルカラーで腰にはローブが装着されている。そして頭部の側面にはエボル ブラックホール、クローズエボルのツノのようなものが2本生えている。

「デイケイドエボル…これが破壊神の姿なのか…!」

「驚くのはまだ早いぞ、戦兔!」

「どういう事だ!」

「フツフツフ…」

デイケイドエボルは不敵な笑みを浮かべながらデイケイドか使うオーロラを何枚も使い、戦兔の周りをワープで自由に行き来する。

「くっ…動きが読めない…!」

と、戦兔が動けない間にデイケイドエボルは両手に禍々しいオーラを纏った気弾を何発分か生成し、戦兔に放つ。

「これを止められるかな?」

戦兔は放たれた気弾をビルドストームナツクルで弾こうとするが、気弾の方が圧倒的に威力があり、戦兔は吹っ飛ばされていく。

「ぐはあ!!」

戦兔は吹っ飛ばされた後、すぐに立ち上がり、ビルドストームナツクルで生成された巨大な風をデイケイドエボルに向けて放つ。

「フン、こんな風なんか指で弾けるわ」

デイケイドエボルはそう言いながら戦兔が放った巨大な風を人差し指で弾く。そして先ほどの数倍の大きさである気弾を作り出し、戦兔に向けて放つ。

「戦兔、これで終わりだ!」

「くっ…これまでか！」

戦兎がそう思ったその時、天空寺タケルが戦兎の前に入り、戦兎の代わりにディケイドエボルの攻撃を受けた。

「ぐっ…」

「クッ、邪魔が入ったか…」

「ぐはあ…!!」

攻撃を受けた天空寺タケルの身体は段々と黒い粒子になって空へ上っていく。

「お前!?なぜ俺を守った?」

「この攻撃に当たると当たった者全ての存在が消されてしまうという恐ろしい技。つまり、救世主になり世界を救う戦兎にはくらわせられない攻撃なんだ。だから、俺は戦兎を守った!」

「俺なんかより自分の存在を優先しろって…」

「いや、戦兎優先だ!世界を救えるのは戦兎だけだから…」

「……」

「そろそろお別れみたいだ。戦兎、この世界を救ってね!!」

天空寺タケルはそう言い、黒の粒子となって空へ消えていった。戦兎は天空寺タケルの想いを受け継ぎ、ディケイドエボルへ向かって行くとするが、ディケイドエボルが待て!の合図を出した為、その場で立ち止まる。

「今日はここまでだ…また戦える時を楽しみにしているよ…チャオ!」

「おい、待て!!」

ディケイドエボルはそう言い、どこかへ去って行ってしまった。戦兎は変身を解き、こう叫ぶ。

「エボルトオオ!!」

そんな戦兎の元へ先程の頭痛が治ったりリコがやって来て戦兎にこう言う。

「防げなかった…ごめんなさい、私のせいでタケル君が…」

「リコ、お前のせいなんかじゃない!アイツを消したのはエボルトなんだ。だから、リコが責任を負う必要はない」



「でも…」

「とりあえず、皆待つてるから家に帰ろうか！」

「ええ…そうね」

リコは予知した未来を防ぐことが出来ず責任を感じるのだった。そして戦兎は打倒エボルトを目指し、救世主への道を歩んでいくのだった…

## 45. 2人との再会

戦兎はゴーストの力を手に入れ、手に入れなければいけない力も残すはエグゼイドのみ。戦兎は宝生 永夢に会う為にみらいと共に聖都大学附属病院へと向かっていた。聖都大学附属病院に行くのに全く関係のないみらいが何故戦兎と一緒にいるかつて？それは戦兎がみらい大好き人間だからである。これがロリコン物理学…

「おい、ナレーター！それ以上俺に関する悪い噂広めたらタダではおかないぞ？」

「戦兎の向いてる方は空だけど戦兎は一体、誰と話してるの？」

「…独り言だ」

まだ行く場所も目的も知らないみらいを二人乗りバイクの後部座席に乗せてバイクを走らせる事数十分、聖都大学附属病院に着いた。

「戦兎、ここはどこ？」

「聖都大学附属病院。2年前、夢で会った宝生 永夢がいる場所だ」

「2年前…あつ、あの時の夢か！でも、それならはるかちゃんがいる可能性も…」

「それはない。宇宙の法則が偶然一致し、世界が融合したのはビルドと魔法つかいプリキュアだけだ」

「うくん…なんか難しい話だなあ…私にはよく分からないや」

と、戦兎とみらいが病院の入り口に向かって歩いていると、ディケイドエボルと戦うムテキゲーマーの仮面ライダーエグゼイドがいた。

宝生 永夢だけでは勝てないと感じた戦兎はビルドストームナックルとビルドストームフルボトルを取り出してから腰にドライバーを装着し、ビルドストームナックルにビルドストームフルボトルを装填する。そしてビルドストームナックルをドライバーに挿す。

『ボトルビューン！』

『ビルドストーム！』

待機音を少し流した後、ドライバーのレバーを勢いよく回す。そして、ナックルに形状が似た坩堝型のストームライドビルダーが背後に出現し、中で吹き荒れる大量のストームを戦兎の頭上からぶちまけ

る。そして戦兔を覆っているストームをかき消して変身が完了する。

『風来天才！ビルドストーム！』

『ビュンビュンビュンビュンビュン！』

「今いくぞー！」

「あつ！戦兔、私を置いてかないで!!」

戦兔に置き去りにされたみらいははあ…と軽いため息をついた後、バイクを降りる。みらいがバイクから降りた時、地面に何かが落ちた。

「あれ、エメラルドの原石…なんでこんな所に…?」

と、みらいが地面に落ちたエメラルドの原石を拾って見つめていると聞き覚えのある声がエメラルドの原石から聞こえてきた。

「…みらい、身体借りるよ」

と、エメラルドの原石からの声が聞こえた瞬間、みらいの瞳の色が緑色に変わる。そしてみらいはことが持っているはずのリンクルスマホンを取り出し、変身する。

「キュアアップ・ラパパ！ エメラルド！ ミラクル・ファンファン・フラワーレ！」

「奇跡が起こす命の鼓動 キュアミラクル エメラルド！」

みらいは聞いた事のない呪文で変身する事や自分がエメラルドを使っている事に驚いていた。みらいの身体は今、誰かが使っているが、意識は変わらずみらいのものだ。

「(ちよ…ちよつと…私の身体使わないでよ〜!)」

「大丈夫、身体の主導権は戦況に応じて交代するから！」

と、言いながらみらいが密かに持ってきていたリンクルソードを右手に持ち、戦兔と宝生 永夢に加勢していく。

「戦兔くん、久しぶりだね！」

「はあ？いつも会ってるだろ。ってか今は話す事より戦いに集中しろ！」

「(ちよつとあなた、久しぶりって何!?戦兔は私の彼なの!!)」

「分かってるって♪」

みらいの身体の主導権を持っている何かはそう言いながらリンク

ルソードでデイケイドエボルを斬っていく。

「みらい、お前なんかいつもより積極的な戦い方をするなあ…」

「積極的にかかないと勝てないからね!」

「積極的ねえ…んじゃ、俺もそうするか」

「じゃあ俺も!」

戦兎と宝生 永夢はみらい?のように慎重にではなく、積極的な戦い方をする事にした。ここでみらいの身体の主導権を持っている何かはみらいにこう言う。

「みらい!今度はみらいの番だよ!」

みらいの身体の主導権を持っている何かはそう言いながら身体の主導権をみらいに返した。身体の主導権がみらいに戻った事で瞳の色も紫色に戻った。

「戦兎、私が囷になる!だから、その間にデイケイドエボルの背後に回って攻撃して!!」

「分かった!」

みらいは戦兎達にそう言った後、デイケイドエボルの真上を何回も何回も行ったり来たりを繰り返していき、デイケイドエボルの意識を自分に向けさせる。

「ホラホラホラ、こつちだよ!」

「フツ、楽しませてくれるねえ…」

デイケイドエボルはそう言いながらみらいを追いかけていく。その間に戦兎と宝生 永夢はデイケイドエボルの背後に回り込む。そしてブレードモードのガシヤコンキースラッシャーとバスターブレードモードのフルボトルバスターをデイケイドエボルに振り下ろす。

「うおお!!」

「フツ、遅い!」

デイケイドエボルは自分に向けて振り下ろされたガシヤコンキースラッシャーとフルボトルバスターを受け止め、アーマーの内部から溢れ出てくる破壊のオーラで二つの武器を消滅させた。

「武器が…」

「くっ…」

「可愛いお嬢さんを囮にするとは…戦兎らしくないなあ…」

「黙れ！」

「まあいい、今日はもう疲れた。また会おう！」

「デイケイドエボルはそう言いながらオーロラを潜り、どこかへ去って行ってしまった。変身を解いた宝生 永夢は戦兎に近づいていく。

「君達、何故ここにいるの？」

「何故って…力を貸してもらいに来たのさ！」

「力を貸す…か。奇遇だね！僕達も丁度、君達に力を貸してもらいに来ようとしてたんだ！」

「僕”達”も？」

「うん、僕とはるかちゃん！」

と、宝生 永夢が名前を呼ぶと、物陰から春野はるかが出てきた。

春野はるかはみらいの近くへ駆け寄っていく。

「みらいちゃん！久しぶり!!」

「はるかちゃん！元気だった？」

「うん！元気、元気！」

みらいと春野はるかは久しぶりの再会を喜んでいて戦兎や宝生

永夢よりも話し込んでいた。それを見た宝生 永夢は戦兎と共に少し離れた場所に移動し、こんな事を話し出した。

「ねえ、オルテガの力って知ってる？」

「オルテガ？知らないな、何なんだそれは？」

「不死の力さ」

「不死の力…？」

「そう、さっきの怪物は見ての通り破壊の力を持っていたけど、他にも不死の力・オルテガというものも持っている」

「エボルトが…？まさか、そんな事…！」

「持つてるのさ。そしてそのオルテガの力を消さない限り僕達はB世界であるこの世界から出られない」

宝生 永夢はエボルトが不死の力・オルテガを持っていると言う。そしてオルテガの力を消さない限りこの世界から出る事は出来ない

と戦兔に伝える。

「なら、どうすればいいんだよ!」

「一つだけある。エボルトの中からオルテガを出す方法が!」

宝生 永夢は戦兔にエボルトの中からオルテガを出す方法が一つだけあると戦兔に言う。それを聞いた戦兔は教えてくれ!と言っているような勢いで宝生 永夢に顔を近づける。戦兔に教えてくれ!と表情で言われた気がした宝生 永夢はあたりに誰もいないことを確認してからオルテガを出す方法を静かに話し始めるのだった…

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 46. 月と太陽の真実

戦兎は宝生 永夢に不死の力・オルテガについて聞いて聞いていた。永夢はオルテガについて静かに話し始めた。

「君の仲間のことはちゃんのエメラルドの力。あの力を使えばオルテガは取り出せる。そして取り出した後、粉々に砕けばオルテガは消滅する」

「エメラルドの力を使うって事はことはどうなるんだ？」

「少し難しく言いすぎたね。簡単に言うと、ことはちゃんがあの怪物と戦えばいいって事！」

「難しく言いすぎたって…俺を誰だと思ってるんだよ!!まあ、オルテガについては分かったが怪物と戦うのに肝心なことはが…」

「どうやら、エメラルドの力を持つことはが戦えばエボルトの中からオルテガを取り出すことができるらしい。剥き出しになったオルテガは耐久性が無い為、粉々に砕けば消滅するらしい。だが、今は肝心なことはがない。」

「お困りのようね。救世主」

「朝田陽菜…！何故、ここに？」

「何故って…あなたに花海ことはがまだ死んでいない事を伝えにきたの」

「ことはが死んでいない…!？」

戦兎と宝生 永夢の前に突然現れた朝田陽菜は戦兎にことはがまだ死んでいない事を伝える。ことはがデイケイドのライドブツカーで腹部を撃ち抜かれて死んでいく光景を見た上でことはが死んでいないと知った戦兎は驚いていた。

「私は花海ことはがデイケイドに敗れる事を想定し、花海ことはに聖なる守りを与えた」

「じゃあ、ことはは今どこに？」

「花海ことはは朝日奈みらいが持つあのエメラルドの原石の中にいる。エメラルドの原石の中でゆっくりと元の力を取り戻すために回復していったる」

「ことはが完全に力を取り戻すまではどの位だ？」

「最大で3ヶ月。だけど、さっきの戦いで朝日奈みらいの身体を乗っ取ってディケイドエボルと戦っていたという事は花海ことはが元の力を取り戻す日はそう遠くないわ」

「なるほどな……あ、そうだ。朝田、前々から気になっていたがお前と魔閨って何者なんだ？」

「本当はこのゲームにおいて、自分の役職は言ってはならないが役目を終えた今、言うとしよう……私は聖職者。そして魔閨は……」

と、朝田陽菜が魔閨の役職を言おうとした時、上空から白く細い光線が降ってきた。白く細い光線は朝田の胸部を貫く。

「ぐっ……!!まつ、魔閨!!何故、私がここにいと分かった!?!」

「そんな事は関係ない。それより陽菜、用無しであろうが自分の役職を言うのはこのゲームにおいて一番やってはいけないこと。まあ、それだけなら警告で済んだけどあなたは今、私の役職までも言おうとした。これはもう殺すしかないよね」

「ぐっ……」

朝田陽菜は光線に貫かれ、自分の血で赤く染まった胸部を抑えながら戦兎のすぐ近くに向かう。

「きゅ……救世主!後は頼んだよ」

「朝田!!しっかりしろ!」

「朝田さんは僕が運びます!」

宝生 永夢は病院内から救急医を何人か呼び、緊急医療担架で意識を失った朝田 陽菜を院内へと運んでいった。遠くにいたみらいと春野はるか焦る戦兎の様子を見て戦兎の元へ来ていた。

「戦兎、どうしたの?」

「なっ、何でもない!とりあえず、お前達はどこか遠くにいてくれ!」

「えっ、何で?」

「いいから早く!」

「わ、分かったよ……」

戦兎は目を大きく開きながら2人に強い口調でそう言う。戦兎の



強い口調に押しきられた2人はどこか遠くへと向かっていった。

「魔闇、お前と朝田がここまで俺にこだわる理由はなんだ？ゲームつてなんだ？」

「救世主。私はね、A世界では既に交通事故で死んでいるの…」  
「…!!」

「だから残されてるのはこのB世界での体だけ。B世界を破壊者・デイケイドに消されてしまえば私は存在そのものが消える。だから、救世主の素質があるあなたを選んだ」

魔闇 月は自分がA世界では既に死んでいる事や戦兎こだわり続けた理由をここで初めて語った。

「だからって朝田を殺す必要はないだろ！」

「いや、殺す必要はあるんだよ。だってあの子、A世界ではまだ生きてるだもん。だから、B世界で命を失っても存在は消えない。私のようにいつ存在が消えてしまうのか分からない人ならゲームのルールに違反しても即殺すって事はなかったけど、あの子は私より心に余裕があつたからね…殺しても別に何ともない」

「ふざけんな!!命を何だと思ってるんだ！」

魔闇の話を聞いて魔闇に対して憤りを感じた戦兎は魔闇の胸ぐらを掴んで少し持ち上げた。

「女の子の胸に触るなんてエッチだなあ…救世主さんは」

「黙れ！俺はお前を絶対許さない！」

「ふふっ…なら、戦ってみる？」

戦兎に胸ぐらを強く掴まれている魔闇は不気味に微笑みながら戦兎に戦いを提案する。

「やってやる」

「ふふっ、それでこそ救世主さんだ！」

戦兎の言葉を聞いた魔闇はそう言いながら怪人態に変身する。魔闇 月の怪人態は両肩に内側を向いた三日月が付いており、顔は少しグロテスクな顔をしている。そして何よりの特徴は全身に纏っている紫色のオーラだ。紫色のオーラは全身を纏うと共に尻尾の役割も果たしている為、尻尾として相手に物理攻撃を与えることが可能であ

る。

怪人態に変身した魔閻 月を見た戦兎はポケットからハザードトリガーとフルフルラビットタンクフルボトルラビットを取り出す。そして、ハザードトリガーを起動させ、フルフルラビットタンクフルボトルをラビットの方に合わせる。

『ハザードオン!』

『ラビット&ラビット!』

ハザードトリガーを起動し、フルフルラビットタンクフルボトルをラビットに合わせた後、ハザードトリガーとフルフルラビットタンクフルボトルを腰に巻かれているビルドドライバーに挿す。そしてハザードトリガーのスイッチをもう一度押してからドライバーのレバーを勢いよく回す。

『マックスハザードオン!』

『ガタガタゴットンズタンズタン!ガタガタゴットンズタンズタンズタン!』

『Are you ready?』

『変身!』

レバーを回すと、前方と後方にハザードフォーム用のスナップライドビルダーが現れる。俺は変身!という声を掛けた後、ハザードフォーム用のスナップライドビルダーに挟まれる。その後、ラビットラビットの装甲を身に纏い、変身完了する。

『オーバーフロー!』

『紅のスピーデージャンパー!ラビットラビット!ヤッペーイ!ハエーイ!』

ラビットラビットフォームに変身した俺はバスターブレードモードのフルボトルバスターを片手に持ちながら魔閻に向かっていく。

『魔閻イイイ!!』

「ふふっ…ビルドストームでも超えられない私の戦闘力をラビットラビットで越えようとするなんて甘いわ!!」

魔閻はそう言いながら両肩についた三日月から数本の光線を放ち、戦兎を攻撃する。戦兎はラビットラビットの跳躍力を活かし、光線を

避けながら魔闇との距離を詰めていく。

「一気に決める!!」

戦兎はそう言い、バスターブレードモードのフルボトルバスターにラビットラビット状態のフルフルラビットタンクフルボトルを装填し、必殺技を発動させる。

『フルフルマッチデース!』

『フルフルマッチブレイク!』

「これで終わりだああ!!!」

戦兎がフルボトルバスターのトリガーを引き、フルボトルバスターから赤いオーラを纏った強力な斬撃を繰り出そうとしたその時、戦兎の背中に数発の光弾が放たれた。戦兎は光弾を受けた衝撃で必殺技をキャンセルしてしまう。

「ふふっ…隙だらけよ♪」

攻撃を受けて隙だらけの戦兎を見た魔闇は左足に紫色のオーラを纏わせて戦兎に渾身の蹴りを入れて吹っ飛ばす。

「ぐはあ!!」

戦兎は大ダメージを受けたが何とか強制的に変身状態を解かれる事なく再び立ち上がる。そして自分に光弾を撃った人物を見ようと後方に顔を向けるとそこには驚きの人物が立っていた。

「ごめんね、でも僕らにはこうするしか方法が残ってないんだ」

「お前…!何故、こんな事を!!」

「僕らB世界の人物の物語であるエグゼイド&プリキュアと僕と私が咲かす希望の花々を終わらせたくないからさ」

「嘘つけ。ここはビルドのリイマジ世界であり、魔法つかいプリキュアのB世界のはずだ!」

「それは魔闇ちゃんの嘘だよ。本当はエグゼイドとGo!プリンセスプリキュアのB世界。証拠にリイマジ世界の君はいない。しかも、君達の世界は君がエボルトとの戦いの時にA世界、B世界、魔法つかいプリキュアのA世界の3つの世界を融合させたせいでA世界でもB世界でも魔法つかいプリキュアのA世界でもない世界になった。簡単に言うとなら君達の世界は融合して一つとなった。だから、B世界なん

か存在するわけがないのさ」

「何だと…!?!」

「それじゃ終わらせる。じゃあね、桐生戦兎」

宝生 永夢はそう言いながらガシヤコンキースラツシヤーにマキシマムマイティXガシヤットを装填し、必殺技を発動させる。

『マキシマムガシヤット!!』

絶好のチャンスから絶対絶命のピンチにまで追い込まれた戦兎の運命はどうなってしまうのだろうか？

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 47. 世界の救世主 ハイラントビルド!

戦兎は絶対絶命のピンチを迎えていた。マキシマムマイティXガシャツをガンモードのガシャコンキースラッシャーにセットした宝生 永夢はトリガーを引こうとしている。

「ここまでか…」

「フフツ…私の勝ちね」

と、戦兎が死を覚悟し、魔闇 月が勝利を確信したその時、みらいと春野はるかが戦兎達の元に戻ってきた。春野はるかは状況を見るなり、宝生 永夢の元へ行き、ガシャコンキースラッシャーの銃口を上空へ向けてからトリガーを引く。春野はるかに邪魔をされた宝生 永夢は春野はるかを睨みつける。

「何で邪魔するの？アイツを倒せば全てが終わってたのに！」

「ええ、確かに戦兎くんを倒していれば世界が破壊されていたわ…」

「えっ…？」

「永夢くんはまだ知らないかもだけど戦兎くんはこの世界を救う救世主さんなの！だから、戦兎くんを倒さないで！」

「はるかちゃん…」

永夢はもう一度必殺技を放とうとしていたが、春野はるかの話を聞き、戦兎の重要さが分かったのかガシャコンキースラッシャーを下に降ろした。

「戦兎くん！これを受けとって!!」

宝生 永夢が武器を降ろしたのを見た春野はるかは二つのフルボトルを戦兎に向けて投げた。投げられてきたのはドクターフルボトルとゲームフルボトルだった。

「サンキューー！」

受け取った瞬間、集めてきたフルボトルが二つの黄金色のフルボトルになった。

「ついに完成した…！世界を救う最強のフルボトル!!」

「戦兎くん、私達の世界を頼んだよ！」

「分かった！さあ、新たなる実験を始めようか！」

救世主になり、春野はるかにこの世界の命運を任された戦兎はフルフルラビットタンクフルボトルを抜いて二つの黄金のフルボトルをドライバーに装填する。そしてハザードトリガーを一回取り外し、再度起動してからドライバー上部のくぼみに装填する。

『ハザードオン！』

『ハイラント!!』

ハザードトリガーのスイッチをもう一度押し、ドライバーのレバーを勢いよく回して変身する。

『マックスハザードオン！』

『ガタガタゴットンズツタンズタン！ガタガタゴットンズツタンズタン！』

『Are you ready?』

「変身！」

レバーを回すと、前方と後方にハザードフォーム用のスナップライドビルダーが現れる。俺は変身！という声を掛けた後、ハザードフォーム用のスナップライドビルダーに挟まれる。その後、Wからウイザードまでのライダーの装甲の一部分を左半身に、鎧武からエグゼイドまでのライダーの装甲の一部分を右半身に纏い、変身完了する。

『オーバーフロー！』

『救世のスーパースター！ハイラントビルド!!ヤッベ〜イ！超スゲーイ！』

「これが救世主のオーラ…！いいわねえ…楽しくなってきたわ!!」

魔闇 月はそう言いながら戦兎に迫っていく。魔闇 月の接近に気づいた戦兎は背中に仮面ライダーW ゴールドエクストリームが持つ羽を生やして素早く攻撃を避けていく。

「ゴールドエクストリームの力だと…まさか、救世の力は平成2期ライダーの究極フォームの力を司っているの!?!」

「ゴールドエクストリームだの究極フォームだのよく分からんが一気に決める！」

戦兎はメテオなでしこフュージョンステイツの白いロケットモ

ジュールを両手に装着して両手の白いロケットモジュールを魔闇月に向けて撃ち出した。

「うわああ!!」

二つの白いロケットモジュールは魔闇月に命中し、魔闇月にダメージを与える。必殺技を決める隙を作るために戦兎はスーパータトバコンボのトラクロード魔闇月を切り裂いていく。

「はあはあ……ぐっ……!」

「魔闇、これで終わりだ!!」

戦兎はそう言いながらドライバーのレバーに手をかけてレバーを勢いよく回して必殺技を発動させる。

『Ready go!』

『ハイラントフィニッシュ!!』

必殺技を発動させた戦兎は全ての2期ライダーを究極フォームで召喚し、魔闇月に必殺技を放たせていく。そして召喚した全ての2期ライダー達が必殺技を放ち終わった所で戦兎も跳び上がり、プリズムカラーのオーラを足に纏わせながら魔闇月に向かって急降下していく。

「フフツ……なかなかやるわね救世主……だが、私は人狼じゃない!狼憑きさ……」

魔闇月は最後にそう言い残し、戦兎のキックに貫かれた後、爆発と共に消えていった。

「今まで人狼だと思っていたアイツが人狼じゃない……なら、誰が人狼なんだ?」

と、戦兎は変身を解きながら魔闇月が人狼でないなら誰が人狼なんだろう?と考えていた。そんな戦兎の元にみらい、春野はるか、宝生永夢に加えて何人か見た事のない人物達がやってきた。

「知らない人ばかりで驚いたでしょ?この人達はね、私と永夢くんの友達だよ!」

「まあ、一人だけ少し頭のおかしい方がいますが……」

「桐生 戦兎オ!なぜ君が救世主になれたのか?何故変身後に神である私に会えたのか?その答えは一つ……アハアア……」

自称・神の言葉尺の都合上省略させていただきます。自称の・神の長い長い言葉を聞いた後、戦兔はみらいの近くに行く。(もう天才物理学者じゃなくてただのみらい好きじゃん…)

「おい、ナレーションだから心の声も漏れてんぞ！みらいが好きなのは認めるが俺はまだ現役の天才物理学者だ!!読者が誤解するような事を心の声で漏らすな！」

「せつ、戦兔…？また独り言？」

「ごめん、ちよつと人と話してた」

「戦兔が見てる方に人なんかいないけど…」

「この私、”ナレーター”の存在に気づいていないみらいは最近の戦兔の不思議な行動に少し引き始めていた。ざまあみろ、ロリコ…」

「よし、次回から新しいナレーターでいこう！」

戦兔はそう言いながら宝生 永夢達の方に戻っていく。戦兔が再度近づいてくるのを見た宝生 永夢は戦兔にこう言う。

「さっきはごめんね…まさか君が世界を救う人だったとは知らなくて…」

「別にいいよ。お前達が力をくれたおかげで俺も救世主になれたんだからさー！」

「そっか。ありがとう！じゃあ、戦兔、世界の事は君に頼んだよ！」

「分かった！俺が世界を救ってやる！」

戦兔は宝生 永夢、春野はるか達にそう言い、みらいと共に朝日奈家へ帰っていった…

その頃、某所、某時間ではデイケイドエボルが時田カレハと話していた。

「これで太陽と月が消え、黄昏の時が来た…」

「その前に俺がこの世界を壊してやんよ…」

「フツ、面白い方。なら、どっちが先に自分の目的を達成出来るか？勝負しましょう」

「いいぜエ…」



こうして、二十数話続いてきた高校生編は次回から最終章を迎える  
のだった…

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 48. ゲームの終盤

戦兔が救世主の力を手にしてから数日が経ったある日、誰かが朝早くに朝日奈家にやって来てインターホンのボタンを連打する。

「…つたく、うるさいな…誰だよ、こんな朝っぱらから家に来るのは…」

インターホンの音で起きた戦兔は訪問者に愚痴を吐きながら玄関に向かい、「扉を開ける。するとそこにはヒゲとポテト…いや、氷室幻徳と猿渡一海がいた。

「朝っぱらから人の家にくんなよ…」

「それどころじゃねえんだよ！あれ見ろよ！」

と、戦兔は2人を注意するが猿渡一海はそれどころではないと戦兔に言って町の中心部の方を指差す。戦兔が猿渡一海の指差した方を見るとそこには見た事のない虫の怪物や身体をステンドグラスで覆われている様な姿をした怪物とその他何種類もの怪物がいた。

「あれは…！」

「見たことない怪物だ。ってかこんな大きい崩壊音で何故、お前達は気づかなかったんだ？」

「寝てたから…」

氷室幻徳は大きい崩壊音で起きない、気づきもしない戦兔達を不思議に思っていた。戦兔は言い訳できるような理由がない為、素直に寝てたからと氷室幻徳に言う。

「とりあえず、皆を呼んでくる！」

「わかった！んじゃ、俺とヒゲは先に戦ってるわ！」

「了解！」

戦兔は猿渡一海にそう言い、急ぎ足で皆を起こしに行く。まずは万丈の部屋へ向かう。

「万丈！起きろ!!」

「…なんだよ」

「町に見た事のない敵がいるんだ！」

「冗談やめろよ…ってかもうちよい寝かせろよ…」

「早く起きろ!!」

戦兔は万丈をベッドから落として無理やり起こした。起きた事によりボケがなくなった万丈は戦兔の表情を見て察したのか、戦兔に先に行ってるぞ!と告げて猿渡一海と氷室幻徳同様、先に敵の元へと向かっていった。

「よし、次はリコだ!」

戦兔は次にリコの部屋向かった。リコの部屋の扉を開けて中に入ると、そこには上半身、下半身の両方が下着姿のリコがいた。

「あつ…」

「みつ、見ないでえ…／＼／＼」

「す、すいませんでした〜」

戦兔はそう言つてリコの部屋を出て行く。リコの部屋を出ると共にいつもはまだ起きるはずのないリコが今日に限つて起きて私服への着替えをしているのか不思議に思うのだった。

「最後はみらい!…だが、アイツ起きるかな?」

戦兔は最後にみらいの部屋に向かった。扉を開けて部屋の中に入ると案の定、みらいはまだぐっすりと眠っていた。

「みらい!起きろ!!」

「…まだ眠いよ〜」

「そんな事言ってる場合じゃないぞ!」

「だったら戦兔が私を着替えさせて…」

「あーもう、しょうがねえな!」

戦兔は自分で着替えようとしないうみらいをベッドから起こして上のパジャマを脱がしていく。ベッドから起こされて寝ぼけがなくなったみらいは自分の下着姿を戦兔に見られている事に気付く顔を赤く染める。

「ちよつと、戦兔!?!私の服を脱がせてどうするつもり!?!」

「どうするって…ただ着替えさせるだけだ!早く町に行つて怪物を止めなきゃこの世界が…!」

「町に怪物!?!」

「そうだ。ありとあらゆる怪物が町にいる!だから、俺らで怪物達を

倒さなきゃいけないんだ！」

「なら、急がないと！着替えは自分ですから戦兎も自分の支度をしてきて！」

「分かった！」

みらいに自分自身の支度をしてきて！と言われた戦兎は自分の部屋に戻り、私服に着替えてからドライバーとハイラントビルドのフルボトルを持って朝日奈家の庭に出る。そしてマシンビルダーを出した後、少し経ってから外に出てきたみらいを後部座席に乗せて町の中心部へと向かっていく。

町の中心部へ行くと、既に怪物と戦い始めているリコや万丈、氷室幻徳、猿渡一海がいた。

「皆、戦い始めてる…みらい、俺達もいくぞ！」

「うん！」

みらいが戦兎に返事をした瞬間、またエメラルドの原石が輝き出し、何者かがみらいに憑依していく。

戦兎は二つの黄金のフルボトルをドライバーに装填する。そしてそこに起動したハザードトリガーを挿す。

『ハザードオン！』

『ハイラント!!』

ハザードトリガーのスイッチをもう一度押し、ドライバーのレバーを勢いよく回して変身する。

『マックスハザードオン！』

『ガタガタゴットンズツタンズタン！ガタガタゴットンズツタンズタン！』

『Are you ready?』

『変身！』

レバーを回すと、前方と後方にハザードフォーム用のスナップライドビルダーが現れる。俺は変身！という声を掛けた後、ハザードフォーム用のスナップライドビルダーに挟まれる。その後、Wからウィザードまでのライダーの装甲の一部分を左半身に、鎧武からエグゼイドまでのライダーの装甲の一部分を右半身に纏い、変身完了す

る。

『オーバーフロー!』

『救世のスーパースター! ハイラントビルド!! ヤッペーイ! 超スゲイ!』

みらいの瞳の色が緑色に変わる。そしてみらいはことが持つているはずのリンクルスマホンをどこからともなく取り出して変身する。

「キュアアップ・ラパパ! エメラルド! ミラクル・ファンファン・フラワレー!」

「奇跡が起こす命の鼓動 キュアミラクル エメラルド!」

変身後、戦兔は灰色の怪物、みらいは妖怪のような姿をした怪物へ向かっていった。

「ここは二刀流でいくか」

戦兔はゴースト テンカトウイツ魂の力を使い、サングラスラッシュヤーとデイープスラッシュヤーを取り出し、サングラスラッシュヤーに赤い炎のようなオーラを、デイープスラッシュヤーに紫の禍々しいオーラを纏わせた後、灰色の怪物を斬っていく。

「はああ!!」

斬られた怪物はただの灰となって消えていく。灰色の怪物を倒した戦兔はみらいのえんごにこうとするが、何者かが行く手を阻む。

「おっと、お前の相手はこの俺だ」

「エボルト…!」

戦兔の行く手を阻んだのはディケイドエボルだった。ディケイドエボルはイリユージュヨンの力を使って多くの分身を作り戦兔を中心に円になって戦兔を逃げさせないようにする。

「くっ…本当に面倒な奴だな」

「それが俺なんぞね!」

「救世主の力見せてやる!」

戦兔はそう言いながらジオウを除いた2期主人公ライダー全ての究極フォームを召喚し、分身ディケイドエボルに向かわせる。

「究極フォームも召喚できるとは…流石だな」

「救世主は最強だからな」

「どこまでも面白い奴だなああ!!」

デイケイドエボルはそう言いながら戦兔に襲いかかっている。戦兔はタイプフォーミュラの速さを使い、自分に迫ってくるデイケイドエボルを避けていく。そして暫く走り回った後、背後から必殺技を発動させた状態のプリズムビツカーでデイケイドエボルに斬りかかる。「ふふっ、あまい」

必殺技は決まると思われたがデイケイドエボルが高速移動をしたせいで不発に終わった。必殺技を避けたデイケイドエボルは戦兔の背後に回り、ソードモードのライドブツカーで戦兔を斬り裂いていく。

「うわあ!」

攻撃をくらった戦兔は建物の壁まで吹っ飛ばされた。デイケイドエボルはまだ立ち上がっていない戦兔にこう言う。

「おっと、すまん、すまん。力の制御ができなかったようだ」

「くっ……」

「さあ、終わりにしよう……」

デイケイドエボルはそう言いながら、壁に背中をつけたまま立ち上がらない戦兔に向かっていくのだった…

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 49. 決戦！デイケイドエボルVSビルド&プリキユア

戦兎の前まで歩いてきたデイケイドエボルは武器を降ろして一度立ち止まる。

「救世主の力とやらは所詮、この程度か。こんなんじや俺には勝てない」

「ふふっ、それはどうかな」

戦兎はデイケイドエボルにそう言い、デイケイドエボルのドライブーに手を当てる。すると、戦兎の手がっらのような形をした鋭い鉄の塊に変化した。

「何っ!?!」

「フツ、ハイラントビルドは他のライダーの究極の姿を呼び出す他にも自分のイメージしたものを創造する事が出来るのさー」

「くっ…また厄介な力を手に入れたもんだなあ…」

戦兎にドライブーごと腹部をつららのような形をした鋭い鉄の塊で貫かれたデイケイドエボルは少し苦しんでいた。

「…だが、俺の身体には不死身の力・オルテガがある。ハイラントビルドではどうする事も出来ない!」

「悪いが、こっちには」オルテガ」キラーがいてな…」

と戦兎が言った瞬間、キユアミラクル エメラルドスタイルに変身しているみらいがリンクルソードを左手に持ちながらデイケイドエボルに勢いよく向かっていく。

「怪物さん、あなたは私が倒すよ!」

「オルテガ」キラーがこんな可愛いお嬢さんとはなあ…俺も随分と舐められたもんだなあ!!」

デイケイドエボルはソードモードのライドブツカーでみらいに斬りかかるが、リンクルソードに弾かれる。

「なっ、何故だ!?!何故、俺の斬撃がいつも簡単に弾かれる!?!」

「エメラルドの力がオルテガより強いからだ!」

「フン、調子に乗るなあ!!!」

と、自分の力がエメラルドより劣っていると言われたデイケイドエボルは憤りを感じ、フルパワーで再度、みらいに斬りかかるが、武器を持っている腕が突然動かなくなった。

「な、何だあ!!!体が動かかん!!!どうなってる!!!」

「(エボルト、お前はもう終わりだ)」

と、説教BGMが流れ出すと共にデイケイドとエボルトの合体が解けて中から門矢 土が出てきた。

「助かったぜ、救世主」

「デイケイドエボルだと厄介だからな。あと、戦いが終わった後、何でことは殺したかを教えてもらおうぞ」

「分かった」

戦兎と門矢 土はそう会話しながらエボルトと戦うみらいを見守っていた。みらいは強力なエメラルドの力を宿したリンクルソードでデイケイドの力が無くなり、一気にパワーダウンしたエボルトを何回も切り裂く。そしてリンクルストーン・エメラルドをリンクルソードに装填して必殺技を発動させる。

「プリキユア・エメラルド・リンクルスラッシュ!!!」

みらいはそう言いながら、攻撃を避ける体力も残っていないエボルトを一刀両断する。「おのれおのれおのれえ!!!人間共がアアアアアアアアア!!!」エボルトの断末魔と共に体内にあったオルテガは砕けてしまい、それと共にエボルトも光の粒子となって消えていった。

「やったね、みらい!」

みらいに憑依している誰かはそう言った後、みらいに身体の主導権を返した。

「さあ、教えてくれ。何でことは殺したんだ?」

「オルテガの力を破壊する為さ。人型の彼女に宿るエメラルドの力はオルテガに及ばないほど少なかった…どうすればエメラルドの力をオルテガに勝る程までに上げる事が出来るか考えた時、一回彼女を死なせて彼女をエメラルドの原石に還せばいいと思ったんだ」



「どういうことだ??簡単に言ってくれ」

「つまり、彼女の内部と外部を入れ替えたって事だ。死ぬ前、エメラルドの原石は彼女の身体の内部に眠っていた。殺す事で彼女の身体を内部にしまい、エメラルドの原石を外部に出してエメラルドの力をより一層強いものに変えたんだ。まあ、誰かの身体を使わなきゃ戦えないんだがな…」

「誰かの身体を使う…って事はまさか!」

「そう、さつき戦っていた奴とエメラルドの原石の正体は花海ことはだ」

と、門矢 士が言うことはがまたみらいに憑依し、戦兎に抱きついていく。

「戦兎ー!!今まで正体隠しててごめん!」

「(はーちゃん…!!)」

「もうこの世界にいないと思ってたからまだいて良かった!…ことは、元の姿には戻れそうか?」

「いや、戦いが終わるまでは戻れない…」

「戦いつて…今、終わったんじゃないのか?」

「いや、まだ終わってないよ!」

ことははそう言いながら万丈達が戦っている方を指さす。戦兎がことはの指さす方を見るとそこには変身が解け、服がボロボロになり、傷だらけの万丈達がいた。そしてその近くには時田 カレハがいた。

「魔闇が狼憑きとしてよく働いてくれてたわね…」

「どういうことだ?」

「魔闇は私の影武者だ」

「影武者…って事はまさか、お前が人狼!」

「そう、私の人狼だ。といってもただの人狼ではない。ゲームマスター兼人狼だ」

「ゲームマスター…!」

「私がこの世界の支配者!!この世界にいる限り私には逆らえないのだ!」

「くっ…」

「さあ、最後の勝負と行こうか!!救世主!!」

時田カレハは強い口調で戦兔にそう言い、ドラクエXの時元神キユロノスのような姿に変化し、戦兔に向かっていくのだった…

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 50. レンズ越しに写る黄昏の瞳

ハイラントビルド状態の戦兎は身体にウィザード インフィニティーの力を纏わせ、四肢、背中、胸部にオールドラゴンのドラゴンパーツを装着してから禍々しい姿をした時田 カレハへと向かっていく。

「フン、ウィザードの力など使っても無意味だ！」

「ウィザードのだけじゃなく、俺の力もある事を忘れるなよ」

時田 カレハは自分に向かってくる戦兎に対して炎系の攻撃魔法を出そうと素早い動きで魔法陣を描くが、戦兎がドラゴンクローで時田 カレハが作った魔法陣を壊した。

「くっ…なら、これでどうだ！」

時田 カレハは小さい魔法陣を自分の周りに何個も描き、魔法陣の中から戦兎に向けて鎖を発射する。鎖は戦兎の四肢を縛り、戦兎は身動きが取れなくなった。

「ぐっ…これはマズイ。早く抜け出さなければ…！」

「そうはいくかあ!!」

時田 カレハはそう言いながら、雷系の魔法で戦兎を攻撃する。電撃を受けた戦兎は近辺にある建物の壁へと吹っ飛ばされていく。

「フン、救世主も落ちたものだなあ…冥土の土産に教えてやろう。お前達をここへ呼んだ本当の理由を」

「本当の理由だと…？」

「そうだ」

時田 カレハは倒れた状態から起き上がろうとしている戦兎になぜここに戦兎たちを呼んだのかの”本当の理由”を話し始める。

「あの日、生きることの辛さに耐えられなかった私は首を縄にかけた。だけど、その数十秒後、誰かが私の前に現れてこんな事を言った…」

自分自身が作る世界で死ぬ事なく永久に過ごしてみないか?と。自分自身が世界を作れば生きる事の辛さなど何もないと感じた私は首を縦に振り不老不死のオルテガの力を受け取ろうとした。だが、しかし…」

「エボルトにオルテガの力を奪われて不老不死にはなれなかった」と

「だからこそ私は破壊に対抗する様々な創造の力を宿すお前達やレジエンド達を魔閻や朝田を使い、ここへ呼んだ。そして先程、お前達は見事にエボルトを倒した」

「魔閻や朝田、そして俺達や他の皆はエボルトを倒す為だけに使われ続けていたわけか」

「そうだ、お前らは所詮、私の計画の捨て石だったのだ。だが、魔閻や朝田といった無能人間達よりは良く働いてくれた…感謝する」

「無能だと…？魔閻と朝田は無能なんかじゃない!!魔閻と朝田は普通の人間だ!!普通に毎日を過ごし、立派に生きていた!そしてお前とは違って生きる事に幸せを感じていた!」

「フン、だが今はもう死んでいる。死人に口はないのだよ」

「2人は俺の心の中で熱い火種となって生きている!俺は皆の想いだけでなく2人の想いを背負ってこの世界を創造する!!」

戦兎は強い口調で時田 カレハにそう言いながら平成二期全ての主人公ライダー達を究極フォーム状態で召喚し、時田 カレハへと向かわせていく。

「究極フォーム勢揃いか…だが、もう遅い!私はエボルトが消滅した時に体内から流出したオルテガの力を手に入れた!今、この瞬間私は不老不死の支配者となる…!!」

時田 カレハはそう言いながら、あたりの地面に散らばるオルテガの力の欠片を吸い寄せて体内へ吸収していく。オルテガの力を手に入れた時田 カレハの姿は段々と禍々しいものへと変わっていく。

「これは…」

「戦兎、姿が変わりきる前に時田 カレハを倒すよ!」

「みらい…いや、ことは、いくぞー!」

戦兎とこととは声をかけ合い、同じタイミングで空高く飛び上がり、必殺技を発動させる。

『Ready go!』

『ハイラントフィニッシュ!!』

「プリキュア・エメラルド・リンクルスラッシュ!!!」

必殺技を発動させた2人は時田 カレハに攻撃するが、黒い手の様なオーラで簡単に弾かれた。

「ハイラントビルドとエメラルドでも敵わないとは…!」

「ビルド、よく見る。オルテガを手に入れ、自分の私利私欲を完全に満たしたアイツはもうアイツではない。というか、エボルトはどこに行っただかな〜」

「なら、アイツを何だと言うんだ?」

「ただの自己中の塊だ。<sup>カイツ</sup>それも地球を破壊しようとした厄介な物つきのな」

「エボルトは消滅したはずじゃ?」

「奴はお前達と戦って負けた後、液状化して地面に散らばるオルテガに自分の細胞を付着させていった」

「って事はエボルトはまだ生きているのか」

「そうだ」

と、門矢 士と話している間に時田 カレハは姿を完全な物へと変えた。エボル ブラックホールフォームのようなカラーリングで体全体は人間型のエレメント系モンスターまんまだった。

「禍々しい…エメラルドの力を最大限まで引き出せている私でさえも震えてしまうとは…」

ことははそう言いながら額から冷や汗を流す。その一方で戦兎は勇者の様に、時田 カレハに恐れることなく勇敢に向かって行こうとする。そして自分についてこない仲間達にこう言う。

「皆、最後の勝負だ。いくぞ」

戦兎は皆にそう言い、1人、先に時田 カレハへと向かっていったのだった……

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.

## 51. Eternal creation

時田 カレハに向かっていった戦兔はアックスモードのメダガブリューを生成して右手に持ち、時田 カレハに斬りかかる。

「今の私は最強の破壊神。貴様の武器など私には通用しない」  
「何っ!？」

だが、今の時田 カレハは破壊神。時田 カレハは貴様の武器は通用しないと戦兔に言いながら、破壊の力でメダガブリューを一瞬にして塵へと変えてしまう。そして戦兔の胸元を掴み、そのまま地面へと叩き付ける。

「ぐはあ……」

「どうした、もう終わりか？」

「ぐっ……」

時田 カレハは地面に叩きつけた戦兔を更に地面へ押しさえつけながら煽っている。戦兔は体に入らず、どうする事もできなかった。

「結局、お前は誰一人救えなかった。実に情けない男だ……」

「……そんな事ない!!」

時田 カレハが戦兔に情けない男と言う。だが、それを否定する人物がいた。

「戦兔は情けない!!戦兔は今までに自分達の世界だけではなく私達の世界も救ってきた!戦兔は情けないどころか皆の英雄……いや、救世主!!」

「みらい……」

時田 カレハに向かってそう言ったのはみらいだった。みらいは一度、ことはこの憑依状態を解き、戦兔が情けない男ではなく皆の救世主みたいな存在だと時田 カレハに言い放つ。

「本気で言ってるのか？」

「本気だよ!!」

「フツハハハハ!これだから人間は面白い!ならば、私に勝ってそれを証明してみせろ!!」

「はーちゃん、戦兎と一緒に戦って！」

「わかった！」

みらいがそう言うと、ことははハイラントビルドの姿の戦兎に憑依していく。ことはが憑依した瞬間、ハイラントビルドの身体から緑色のオーラが出始めた。複眼の色も通常の赤青の色から緑色へと変化していた。

「（ことは、気をつけろよ。コイツは一筋縄ではいかない…い）」

「大丈夫！ハイラントビルドの救世の力と私の力さえあれば絶対に勝てる!!」

ことはは戦兎にそう言い、右手にカリバーモードのアックスカリバー、左手に無双セイバーを持ち、時田 カレハへと向かっていく。

「何度来ても同じだ!!」

「それはどうかな！」

ことははそう言いながら、アックスカリバー、無双セイバーという順に武器を振り下ろし、時田 カレハを斬り裂いていく。攻撃は効かないと思われたが、ことはが憑依している事で武器にもエメラルドの力がこもっている為、攻撃は効いていた。

「くっ、なぜだ!!なぜ貴様の攻撃が効く!!まさか…エメラルドの力だとしてもいいのか!?!」

「そうだよ、あなたの”弱点”のね！」

「弱点だとお!!舐めやがってえ!!」

「決めるよ、戦兎！」

「(了解!）」

戦兎に憑依していることはは戦兎に一言かけてから戦兎の腰に巻いてあるドライバーのレバーに手をかけてレバーを勢いよく回して必殺技を発動させる。

『Ready go!』

『ハイラントファイニッシュ!!』

必殺技を発動させたことはは全ての2期ライダーを究極フォームで召喚し、それぞれのライダーにエメラルドの力を付与してから時田 カレハに武器を用いた必殺技を放たせていく。そして自分もエメ



ラルドの力がこもった巨大な気弾を両手に作り、時田 カレハに向け放つ。

「これで終わりだ！時田 カレハ!!」

「ぐっ…私は…私はまだ終わらんよ!!」

と、時田 カレハがライダー達の必殺技を必死に受け止めていると、どこからか声が聞こえてきた。

「フハハハ！お前が十分に弱ってくれたおかげで俺は破壊神の力を手に入れた状態で復活出来る！」

「なんだと…!?!」

「弱ったお前から身体の主導権を奪うのは簡単だ…今からお前は俺の操り人形だ！」

声の主はそう言うのと、時田 カレハの身体を乗っ取り、ライダー達の必殺技をはね返す。ことははね返ってきた自分の必殺技を間一髪のところまで避けたが、ライダー達ははね返ってきた自分の必殺技を受けてしまい、消えてしまった。

「(一体、何が起こったんだ?)」

「戦兎、なんかヤバイ気がする…!」

ことはの予感ほ当たり、煙の中からはエボルドライバーを腰に巻いた怪物が現れた。

「フハハハ!!あの程度の攻撃で俺を倒せると思ったかア…?戦兎オ!!」

「(エボルト!?)」

エボルドライバーを腰に巻いた怪物、それはエボルトだった。エボルトは以前よりも禍々しくなっており、その気の大きさにはエメラルドの力を持つことも震えていた。

「戦兎、ちよつと私と交代して！」

「(分かった)」

ことは恐怖からか戦兎に身体の主導権を返し、戦兎の身体の中に籠ってしまった。

「救世主、ここは退いた方がいいんじゃないのか？」

「俺は退かない！ここで決着を付ける！」

「言うと思っただぜ。んじゃ俺も手伝わさせてもらう」

「ありがとう、門矢 士」

戦兔に協力する事となった門矢 士は早速、ディケイドに変身してエボルトへ向かっていく。戦兔もエメラルドの力を纏いながらエボルトへと向かっていった。

「はああ！」

「世界の破壊者と世界の救世主のタッグで来るとはな…だが、俺の真の破壊には敵わない!!」

エボルトはそう言いながら、2人を蹴り飛ばす。蹴り飛ばされた2人は吹っ飛ばされていく。途中、2人はキュアミラクル ダイヤスタイル状態のみらいと猿渡一海、氷室幻徳に止められ、なんとか建物に身体をぶつける事なく済んだが、ダメージは大きく、立ち上がれそうになかった。

「2人が立ち上がれないならしょうがねえ…ヒゲ、みらいちゃん! いくぞ!」

「うん!」

猿渡一海はそう言いながら、氷室幻徳、みらいと共に立ち上がれない2人の代わりにエボルトへ向かっていくのだった…

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 52. 紅炎のスピリット

キュアミラクル ダイヤスタイル状態のみらいは既に变身済みなのでそのままエボルトへと向かっていく。そしてみらいと同じ様にエボルトに向かって走っている猿渡一海と氷室幻徳は走ると共に腰にビルドドライバーを装着し、猿渡一海は専用のフルボトルを装填したグリスブリザードナックルを、氷室幻徳はワイルドアウトレイジフルボトルをドライバーに装填する。

『グリスブリザード!』

『ワイルドアウトレイジ!』

そして装填後、2人はドライバーのレバーを回してグリスブリザード、ローグワイルドに変身する。

『Are you ready?』

「变身!!」

『激凍心火!グリスブリザード!』

『ガーキガキガキガツキーン!!』

『威風堂々の髭野郎!!ローグワイルド!!カッケーイ!メチャカッケーイ!!』

变身した2人は全力で走り、みらいより先にエボルトに近づいていき、攻撃を仕掛けていく。2人がエボルトと近接戦をすると知ったみらいはエボルトとの距離を少し遠めに取り、魔法を使って2人をサポートする。

「リンクル・アクアマリン!!」

「みらいちゃん!その力、借りるぞ!!」

猿渡一海はみらいにそう言い、みらいのリンクルステッキから放たれたアクアマリンの魔法を受けて、身に纏う。

「よっしゃあ!!パワーアップだああ!!」

「フン、その程度の氷が俺に効くと思うか?」

「黙れえ!いくぞ、ヒゲ!!」

「おう」

猿渡一海と氷室幻徳は右拳に力を溜めてからエボルトの胸部を思い切り殴る。

「うりゃああ!!」

「はあああ!!!」

だが、2人の渾身の一撃は簡単に弾かれてしまう。そしてエボルトに首元を掴まれて投げ飛ばされる。

「いくら力を合わせようが俺には敵わない…」

「ぐっ…!」

「ここで大人しく世界が壊れゆく様を見ているといい…」

エボルトがそう言い、猿渡一海と氷室幻徳に背を向けて去っていきうとした時、2人は立ち上がり、自分達に背を向けていて隙だらけのエボルトへと向かっていく。

「うおおお!!!」

「…ったく、面倒くさい奴らだなあ…消えろ!!!」

エボルトはそう言いながら自分に向かってくる2人に紫色の気弾を放つ。気弾を受けた2人はうわあ!!というような攻撃を受けた時に出す苦しむ声を出す間も無く、消滅してしまった。

「げっ、幻徳さん…かつ、一海さん…」

みらいは突然の出来事に驚き、普通の声が出せず小声で2人の名を言う。しばらく沈黙が続いた後、気を失っていた万丈とリコが目覚めます。万丈は生身だが、リコはみらいが変身していた関係で既にキュアマジカル状態となっていた。

「ぐっ…:…:…:まだまだ俺は戦う!!」

「私もよ!いきましよう、万丈君!」

「ああ!!」

万丈はいつもより早くクローズマグマに変身し、リコと共にエボルトへと向かっていった。

「(せつ…:戦兎…:私達もそろそろ行かないと…:!)」

「俺も行くこうとは思ってる!だけど、傷のせいで身体が動かないんだ…:!」

ことはは万丈達のようにエボルトに向かっていこうと戦兎に言う

が、戦兎はまだ身体が動かないとことは伝える。2人は皆がエボルトと戦うのをただ見てることしか出来なかった。

「はああ!!」

「お前達はさっきの2人よりも相手にならない…」

「まだまだあああ!!」

万丈は身に纏うマグマをさらに活性化させてもう片方の拳でエボルトを殴るが、エボルトはそれすらも簡単に弾いてしまう。

「何っ!?!」

「万丈、残念ながらお前達、常人の力では俺を倒せない…」

「黙りやがれえ!」

「さらばだ、万丈」

エボルトは諦めの悪い万丈を見て面倒くさいなあ…と感じ、さっきの2人に放ったような紫色の気弾を再び放ち、万丈を消滅させた。

「万丈君!?!」

「お嬢ちゃん、君も万丈と同じようにしてやろう…!」

エボルトはそう言いながら、紫色の気弾をリコの胸元めがけて放っていく。気弾を避けられなかったリコは万丈と同じように消滅していった。

「万丈おおお!!!」

「リコおおお!!!」

ほぼ同じタイミングに自分の相棒を消滅させられた戦兎とみらいは相棒の名を叫ぶ。

「フツハツハツハ!!人間を消すのがこんなにも楽しいとはな!!」

この言葉はエボルトが言った言葉だが、どこかエボルトらしくない言葉だった。

「救世主、奴は真の破壊神として目覚めたようだ」

「何だど?!」

「今、破壊神である奴は破壊を楽しんでいる。昔の奴ならここまで破壊を楽しみはしない」

門矢 士は今のエボルトが昔とは違い、真の破壊神に目覚めたと戦兎に言う。

「奴を倒すにはどうすれば…!!」

「さあな、自分で考えろ。俺は”通りすがり”だ。この世界を知るわけがない」

門矢 士にそう言われた戦兔はエボルトを倒す方法を必死に考えるのだった。その頃、みらいはエボルトに生きてきた中で最大の憤りを感じていた。

「皆を返せ!!!」

「ほお…これはこれは、威勢がいいお嬢ちゃんだあ…！大丈夫、俺がすぐにその”皆”の元へ誘<sup>いざな</sup>ってやるよ！」

「私は皆を助け出す!!…あなたを…倒して!!」

「来い、キュアミラクル!!!」

「はあああ!!!」

みらいはエボルトに皆を助け出す!!と言い放ってからエボルトへ勢いよく向かっていったのだった。

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

### 53. 明日の空

エボルトに向かっていったみらいはエボルトの腹部に強烈なパンチを繰り出す。だが、エボルトはみらいの拳を左手の平で受け止める。そしてそのままみらいの拳を掴み、みらいをハンマー投げのハンマーの様に振り回してから遠方へ投げ飛ばす。

「うわああ!!」

「みらい!!」

戦兎は投げ飛ばされていくみらいを見てそう叫ぶ。投げ飛ばされたみらいは建物の壁にぶつかり、そのまま地に落ちるが、すぐに立ち上がって再びエボルトへ向かっていく。

「この命ある限り…私は諦めない!!はるかちやんや永夢さん…そして皆と一緒にこの世界を平和な世界へと創り変えるんだああ!!」

「感動するような事言うじゃないか…だが、それは無理だ」

エボルトはそう言いながら、自分に勢いよく向かってきたみらいの首を両手で掴んで強く締め付ける。

「うっ……」

「なぜ無理かって?それはお前が皆を救えずにここで消えるからだ!!」

エボルトの言葉を聞いた戦兎は何かを察し、みらいの元へと全力疾走していく。

「(戦兎!?)」

「このままだと、みらいが消される…急ぐぞ!!」

「(分かった!)」

このままいくとエボルトがみらいをリコや万丈の様に消し去ってしまうと察した戦兎はことはエメラルドの力を借り、自分の力だけでの全力疾走よりも速く走ってみらいの元へ向かう。

「愛人のピンチには来るんだな、戦兎オ…」

「うるさい!みらいを離せ!!」

「離すのは無理だア…要望を受け入れられないお詫びにイイもん見せてやんよオ…!」

「まさか……！」

「消えろ、朝日奈みらい!!」

「やめろおおお!!」

「うっ……せんっ……と…………」

みらいはエボルトに消される直前に涙を流しながら戦兔の名を呼ぶ。みらいは戦兔の名を呼んだ後、光の塵となって消えていった。

「フツハハハ！こんなにも破壊が楽しいとはな!! 兄貴の気持ちが少し分かった気がするぜ」

「エボルト……」

「自分の数少ない心の支えを消された気持ちはどうだ?」

「エボルト……お前は絶対に許さない……!」

戦兔のエボルトに対する憤りはみらいを消された事により限界を突破した。戦兔の身体からは今までにないくらい眩いエメラルドの光が放たれていた。

「(戦兔……?)」

「ことは、後は俺に任せろ。エボルトにハイラントビルドの真の力を見せてやる」

「(分かった……!)」

戦兔はことはにそう言うと、周囲から土や鉄くず、草や花、生き物といったこの世界を成り立たせているものを自分の身体に引き寄せ、吸収していく。

「雑魚の力を借りて何が変わると言うんだ?」

「俺が今、身体に一時的に吸収したのは世界を創造するのに必要なもの……つまり、今の俺はこの世界の創造神だ」

「破壊神には創造神ねえ……よく考えたもんだア……だが、創造神になった所で俺には勝てない!!」

「どうかな?」

戦兔は鉄くずから戦車やガトリング砲を創造し、エボルトを攻撃していく。攻撃は効いており、エボルトはその場に片膝をつく。

「なっ……何故だ!?! 並みの攻撃ならば俺には効かないはずなのに……!」

「エメラルドの力だ。俺は一つ一つの攻撃にエメラルドの力を込めて



いる……だから、並の攻撃でもお前に通用するのさ」

「くそっ……だつたらこれならどうだアアア!!」

エボルトはまだ崩壊していない建物を破壊し、その瓦礫を戦兔に向けて飛ばしていく。戦兔は飛んできた瓦礫を一つにまとめていき、巨大な剣を創造する。

「何っ!？」

「お前が破壊を続けるのなら俺は創り続ける!」

「おのれ、桐生 戦兔オオオ!!!」

「これで終わりだ、エボルト!!」

戦兔はそう言いながら、持っていた巨大な剣をエボルトに向けて振り下ろした。

「ぐわあああ!!!」

真つ二つになったエボルトは爆発と共に消えていくのだった。戦いが終わった後、門矢 士が戦兔の元へ来た。

「戦いは終わったが、お前は这个世界をどうするつもりなんだ?」

「俺は这个世界を元の世界と融合させる」

「はあ? そんな事したらエグゼイドとビルドの世界がくっついてまた俺の仕事が増えちゃうだろう? ……まあこのエグゼイドの世界とビルドの世界をちゃんと一つの世界としてまとめてくれるならいいんだが」

「纏めるさ。エグゼイドの世界とビルドの世界……名付けて、クロスワールド!」

「フン、中々面白そうじゃないか。行ってみたいが、もう次に行く世界は決めてあるから行けそうにないな」

「そうか……」

「んじゃ、またな」

門矢 士は戦兔と少し話をしてからオーロラをくぐり、次なる世界へと旅立っていった。門矢 士が去った後、ことはは戦兔にこう言う。

「(戦兔、ハイラントビルドって消されたものを再生する力はある?)」

「あるけど……何をすればいいんだ?」

「(皆を元に戻すんだよ!)」

「そうか！ハイラントビルドの力を使えば皆が元に戻る!! ナイスだ、ことは！」

「(えへへ…)」

「んじゃ、いくぞ!!」

戦兎はそう言い、両手に気を貯める。そして貯めた気を地に向けて放つ。すると、崩壊していたはずの建物が元どおりになったり、暗雲に包まれていた空が晴れて青空になったりする。そして二人の目の前には皆が再び姿を現した。

「みらい…!」

「戦兎!!」

再会した二人は他の皆よりも早くに互いの元へ歩み寄っていき、互いに抱きしめあう。

「ただいま！戦兎!!」

「おかえり、みらい!!」

戦兎はみらいと再会して喜んでいる最中、背後に人の気配がしたので振り向いてみるとそこにはハイラントビルドの力で”花海ことば”としての体を取り戻したことがいた。

「はーちゃん!!」

リコや万丈、そして猿渡一海と氷室幻徳はことはに近づいていき、久しぶりの会話を楽しんでいた。

「皆、話している途中に悪いが、俺は世界を融合させようと思う！」

「融合？そんなのどうやってすんだよ」

「ハイラントビルドならできるんだよ」

ハイラントビルドの情報をあまり知らない万丈は世界を融合させるのはどうやってやるのか戦兎に問う。戦兎はハイラントビルドには世界を融合させる力があると万丈に伝える。

「でも、別世界の人間は俺とお前とみらいだけ…皆はどうすんだよ!」  
「大丈夫、皆は消えたりしない。ただ、俺たちに似た人間というのは現れてきたりしちゃうのかもしれないが」

「まじかよ」

「…まあとにかく、皆は大丈夫だ!」

「…心配になるなあ」

「万丈は放っておいて…皆、世界融合してもいいか？」

戦兔が皆に向けてそう言うと、皆は首を縦に振り、うん！と言った。皆を見た戦兔は笑顔を見せてから世界を融合させていく。世界融合を始めた瞬間、辺りが眩い光に包まれていく。そして世界融合が進むのと共に自分達の意識が段々と遠のいていき、数十秒後、戦兔は気を失った。

戦兔が目を覚ますと辺りはすっかり暗くなっていた。近くには万丈とみらいが倒れている。

「2人とも、起きろよ」

戦兔は2人を起こして月がよく見える公園へ行く。公園へいき、3人は噴水広場のベンチに座り、月を眺める。

「月といえばリコやことは…か」

「どうやら、この世界ではリコ達と再会出来ない事になってるみたいだね」

万丈が月を見てリコやことはを連想させると、みらいがこの世界ではまだリコと再会出来ない事になっているのに気づく。

「リコ達と別れたという要素はこの融合世界に引き継がれたみたいだな」

「うん…まあでも、私はどんなに月日が経とうが、リコやはーちゃんを待ち続ける！」

「よく言った！前向きでいれば近いうちに必ず会えるはずだ！」

みらいはこれからもリコ達を待ち続けるようだ。万丈もうんうんとリコ達にまた会えると信じて待ち続ける事には賛成のようだ。

みらいはその後、2人よりも月が見える場所へ行き、同じ夜空、同じ月を見ているであろうリコ達に向けてこう言う。

「リコ、はーちゃん！今日みたいに夜空に輝く十六夜の月の下でまた会おうね…！」

Continued on the next chapter

r  
⋮  
⋮  
⋮  
⋮

## エピソード：ダーク ダーククローズ編

ある日、戦兔が目を覚ますとそこは何もない真っ白な空間だった。「ここは？」

と、思った瞬間、辺りが暗闇に包まれていき、正方形のビジョンが戦兔の目の前に映し出される。暫くすると正方形のビジョンは何かを映し始めた。映し出されたのは椎名龍一だった。

「ダーククローズか…これを見れば椎名龍一がダーククローズになった理由が分かるかもしれない…！」

戦兔はそう思い、正方形のビジョンに映し出された映像をその場に座って見始めるのだった……

エピソード・ダークく暗々裏の生誕く

「(転校生か…どんな子なんだろう?)」

椎名龍一はそう思いながら教卓側にある教室の扉を見つめていた。数分後、扉が開いた。開いた扉からは紫色の髪をした美しい女の子が入ってきた。

「うわあ…美しいなあ…！」

転校生の姿を見た椎名龍一は隣の席の人にも聞こえないような小声でそう呟く。椎名龍一は黒板に描かれた十六夜リコという名前とリコの顔を交互に見る。そしてリコが自分の席に座るまでずっとリコを見ていた。

「(なんか今までに味わった事のない新鮮な感じ…まさか、恋?!)」

恋愛初心者の椎名龍一はここで初めて恋心というものに気づく。椎名龍一はバクバクと脈を打つ左胸を押さえながら放課後までの間のどこかの休みでリコに話しかける事を決心する。そして昼休み、椎名龍一は廊下でリコに会う。

「あ、えっと…確かお前、十六夜リコだよな？」

「そうだけど…何かしら？」

「おつ、俺は椎名龍一！よ、よろしくな！」

「ふふっ…声震えてるわよ！緊張してるの？」

「えっ!？」

「もつと気軽に接してくれていいわよ！こちらこそよろしくね！」

リコはそう言いながら微笑む。ここで椎名龍一の心はリコの色に染まった。一見、好きになる理由が簡単すぎるように見えるが思春期の恋の始まりというものは実際こういうものなのだ。

「リコ……」

「龍一君、リコがどうかしたの？」

「うお！朝日奈!?!いつの間に……」

「次の授業は移動教室だよ？早く行かないと遅れちゃうよ！」

「え、あつ、ああ…そうだな」

みらいにそう言われた椎名龍一はハツとなり、教科書とノートを持って次の授業の場所へと移動していくのだった…その後、椎名龍一は一日中リコの事ばかりを考えており、いつの間にかリコに夢中になっていた。だが、そこから数ヶ月経ったある日事件は起きた。その事件こそが椎名龍一をダーククローズにした原因だ。

ある日の朝、登校するといつものようにみらいとリコが話していた。椎名龍一はみらいとリコが何を話しているのかバレない程度まで近くに行き、盗み聞きする。

「リコ、右手首につけてるのは何？」

「これは万丈君から貰った星のマークが描かれたシユシユよ」

「いいなあ〜！流星はリコの彼氏だね！」

みらいのこの言葉を聞いた瞬間、椎名龍一の心は鋭い弾丸で撃ち抜かれた。鋭い弾丸（ただの言葉）であるが、椎名龍一にとってそれはただの言葉ではなかったようだ。

「えっ…十六夜って付き合ってるの!？」

「あつ、龍一君！ふふっ…そうよ！」

「そつ、そうなのか…！んじゃ、彼氏さんとお幸せにな」

「ありがとう！」

椎名龍一はリコにそう言い、教室から出ていった。教室から出た途端、椎名龍一の目の前が真っ暗になり、それと共に椎名龍一の中の何かが変わった。

「あは…あはははは…俺、好かれてないのか。いや、好かれてないじゃ無くて好かれなきやいけないんだ…彼女は俺が守らなきやいけないんだ」

「フン、<sup>エンド</sup>終焉に包まれた執着心、活かさないか？」  
「誰だ!？」

椎名龍一は謎の声を聞いて後ろに振り返る。だが、後ろには誰もいない。いや、誰もいないどころか本当に辺りが真っ暗になった。

「な、何だよ…これ!？」

「やあやあ、少年…我が名はダークビルド！」

「ダークビルド!?!誰だかわからないけどここから出してくれ！」

「出してやろう…この力を受け取ってくれたら」

「何の力だよ!リコを守る力か？」

「そうだ、十六夜リコを守る力だ。この力で十六夜リコに近づく悪しき戦士、仮面ライダークロースを排除せよ…」

「やってやる、早く力をくれ！」

「そう慌てるな…すでに力は宿っている。完全に覚醒しきるのはまだ先だが、覚醒した時の力はものすごいものになるだろう」

「あはっ…これで俺もリコを守る…!リコ、待っていてくれ！」

「フフツ、ではまた会おう」

ダークビルドは椎名龍一に力を渡した後、どこかへと消えてしまった。ダークビルドがいなくなるのと共に当たりの闇が晴れる。椎名龍一はさっきいた教室前の廊下に立っていた。

「フフツ…俺のシャドウがほとぼしるぜ…！」

椎名龍一はそう言いながら、ニヤリと怪しい笑みを浮かべた後、教室へ戻っていくのだった……

エピソード・ダークく暗々裏の生誕く END

ここで映像は終わった。戦兔は椎名龍一がダーククローズになった理由を詳しく知った。

「なるほど…椎名龍一は異常な愛を持ってしまったせいでダーククローズへと変貌したのか」

「フツ、どうやら一人の少年が我が駒へと成長する過程を見たようだな…」

「誰だ!？」

「我はダークの王にして最強の存在…いずれまた出会うだろう、桐生戦兔よ」

「何だと？」

「フツ、この先の無数に連なる旅路をどう選ぶのか楽しみにしてるぞ…」

謎の存在は戦兔にそう言い残して消えていった。と、謎の存在が消えると共にまたビジョンに何かが映し出された。

「今度は何だ…？」

戦兔は辺りを軽く見回した後、再びビジョンの方に顔を向けてビジョンに映し出された映像を見始めるのだった…



????  
編

ビジョンは高校生編辺りの戦兔達を映し出した。だが、映し出された世界は何か違った。

「街が崩壊してるだ?!」

ビジョンには街が崩壊した様子が映っており、戦兔の以外の人は皆、傷だらけで倒れていた。映像に映っている戦兔は倒れたみらいを背負ってどこかへ歩いていた。

????  
編　根源の悲劇

「待てよ、戦兔…どこ…いくんだ?」

「ごめん、万丈…俺、みらいのいない世界なんて考えられない…」

「チツ、こんな時に頭が冴えないとかダメなやつだ……」

万丈はそう言い、気を失ってしまった。戦兔は万丈の言葉を気にせず前へ前へと歩いていく。

「みらい、どうやらお前を治すのが俺の最後の実験になりそうだ」  
「……………」

みらいは何も返事をしない。それもそのはず、みらいは重傷を負っていて生死の境を彷徨っているから。だが、そんなみらい以上に重傷を負っていたのは戦兔だった。立っていられるのがやつとぐらいの怪我でみらいを安全な場所へ運び、そこから治療をしていくとなると戦兔の身体は持たず、確実に死んでしまうだろう。

歩き出してから約10分後、崩壊した朝日奈家に着いた。戦兔は唯一無事な地下にある自分の部屋へ行き、みらいを自分のベッドへ寝かせる。その後、実験机の前へ行き、ポケットから何かを取り出してそれをラビットフルボトルとタンクフルボトルに注入する。

「終焉の時にしか生まれない物質、エンドマテリアル……これに賭けるしかない……!」

戦兔がそう言いながら、ラビットフルボトルとタンクフルボトルに

エンドマテリアルが注入されていく様を見守っていると、どこからか声が聞こえてきた。

「惜しいなあ…その頭脳を無くすのは」

「だっ…誰だ!？」

「名乗るほどの者ではない…」

「何をしにきた…?」

「死にかけのお前を救済しにきたのさ!」

「救済だと?ふざけるな…!」

「おっと、救済を理解してないようだな?ならば俺が教えてやろう…!」

「何だと…?…うっ!？」

謎の声の主は戦兎を黒い霧で包み、何処かへとさらおうとする。戦兎は黒い霧に包まれながらも最後の力を振り絞り、みらいの腰に自分のドライバーを装着し、ドライバーのスロットにエンドマテリアルが含まれたラビットフルボトルとタンクフルボトルを装填する。

「みらい、この世界を…変えてくれ!!」

戦兎はそう言い残して、黒い霧が晴れるのと共に消えてしまった。それから数時間後、みらいは目を覚ました。

「うくん…あれ、ここは戦兎の部屋?…あっ!リコ達は!？」

みらいは戦兎の部屋を飛び出し外に出る。するとそこには生死を彷徨う前とは違う光景が広がっていた。町は跡形もなく崩壊しており、リコ達が50m以上先の地面に倒れているのが見えた。

「えっ…嘘でしょ!?!リコ!!」

みらいはリコの元へ駆け寄り、リコの状態を確認するが、既にリコは息絶えていた。リコがこういう状態という事は他の皆も助かかってないだろうと察し、酷く絶望する。

「うっ…うう…うわああああ!!」

と、みらいが泣き叫んだ瞬間、装着されたドライバーに装填されているラビットフルボトルとタンクフルボトルが怪しく光る。

「…あれ?私、こんなの巻いてたっけ?もしかして私、このドライバーに助けられたの?」

みらいは自分が泣き叫んだ瞬間に怪しく光ったフルボトルが装填されたドライバーに助けられたと思ひ込む。

「ははっ…私、戦兔になった感じがする…ねえ、モフルン？」  
「モフッ!」

「モフルン、隠れてないで出てきてよ…私、戦兔になったんだよ…」

みらいは酷い悲しみのあまり気が狂ったのか自分を戦兔だと思ひ込むようになってしまった。

「みらい…何かおかしいモフ」

「おかしくなんかないよ！私は今、戦兔の様に頭脳が冴えてる！今なら何でもできそうだ！あつ、いいこと考えた！」

みらいはそう言い、何処かへ歩いていこうとする。モフルンはそんなみらいの足を掴み、歩みを止めさせる。だが、みらいはモフルンを掴んで投げ飛ばし、再びどこかへ向かって歩いていくのだった…

????  
編く根源の悲劇　END

「まさかみらいがシャドウビルド!?そしてエンドマテリアルを生み出したのは俺だと?」

「フツ、ようやく分かったようだな…」

「今度は誰だ!」

「私は駒を操りし魔道士・マクリーチェ…！我が主よりも先に会おう事になるだろう…」

「どういう事だ…?」

「フツ、とにかく今はこの平和な世界を楽しんでおくがいい…この後の絶望に備えてな!」

マクリーチェはそう言い、戦兔に黒い霧を放つ。黒い霧に包まれた後、戦兔は目を覚ました。隣には何故かみらいがいた。みらいはまだ起きたばかりのような顔をしていた。

「戦兔、おはよう…!」

「みらい、今後は俺から離れなしてくれよ…!」

戦兔はそう言いながら、みらいを強く抱きしめる。みらいは突然の

ことに驚き、完全に目を覚ます。

「えっ…：今後はって何!?! ってか戦兔、大胆だよお…：／／／」

「とにかく、今日は大学休め! 一日中、俺と一緒に居てもらおうからな  
!」

「全く、過保護だなあ…：戦兔は」

「過保護が丁度いいんだ!」

結局みらいはその後大学の講義を休み、家の中のどこへ行くにも戦兔に見守られながら1日を過ごすのだった……

破壊神・エボルトとの戦いから数年…みらいは大学生になっていった。戦兔も一応、この世界では大学生という扱いである。授業のない平日の昼下がり、戦兔とみらいとモフルンは公園へ来ていた。

「お前もすっかり大人になったなあ…」

「時が経つのは早いよねえ…ってそういう戦兔は本当なら今、何歳なんだっけ？」

「ここへ来た時が26歳だったから…31歳だ。でも、体力は落ちてない気がするんだよな…」

「戦兔が運動してるからとかじゃないの？」

「俺は基本実験ばかりだ！戦い以外であまり動いたことはない」

「じゃあ、なんでだろう…？」

と、歳を重ねている筈なのに体力が衰えない事のは何故なのか考えていると2人の前に一海と幻徳がやって来た。みらいが2人に慣れた為、2人の名前の表記がフルネームから下の名だけに変わった。

「よお、戦兔！みーたん!!」

「みーたん?!一海、ここに美空はいないぞ？」

「何言ってるんだよ戦兔…みらいちゃんのことだよ！」

「一海、幾ら美空に会えてないからって勝手にみらいをみーたんって呼ぶのはやめてくれ…」

「しょうがねーなあ…」

戦兔はみらいの事をみーたんと呼ぶのはやめてくれと一海に言う。戦兔の隣にいたみらいは二人のやりとりを見てクスツと笑っていた。

「ふふっ…一海さんは面白いですね！あつ！そういうえば幻徳さん、前からモフルンみたいな喋るクマさんが欲しいって言ってましたよね？」

「しっ、静かに！ポテトにバレたらいじられちゃう…」

幻徳が少し前からモフルンの様な喋るクマが欲しいと頼んでいたという事をみらいが話すと、幻徳はみらいの近くへ行き、小声でみらいにこの事を大きい声で話さないよう注意する。

「あつ、ああ…すいません…」

みらいも小声で幻徳にそう返す。ヒソヒソ話をしている2人を見た戦兎と一海は幻徳がみらいをホテルに誘っているのではないかと疑っていた。

「お、お前ら…なんて顔でこっち見てんだよ。ホテルなんて誘ったりしてないからな？」

「怪しい…」

幻徳は普通な会話をホテル誘ったりしていると勘違いされては困ると必死に2人にホテルには誘ってないと伝える。だが、2人は幻徳をジ〜つと見ながら怪しい…と呟く。

「まつ、待ってよ！幻徳さんはただモフルンの様な喋るクマさんが欲しいだけだよ!?私をホテルになんか誘ったりはしてないよ！あつ……」

「みらいちゃああああん!!!」

みらいは幻徳がホテルの話なんかしていない事を戦兎と一海に言ったが、同時に幻徳がモフルンの様な喋るクマのぬいぐるみが欲しい事まで喋ってしまった。

「良い歳してクマのぬいぐるみかよ。ヒゲ…」

「うわあああ!!!」

「お前にはモフモフのクマよりモサモサのヒゲの方がお似合いだな」

「くつ…ポテトめえ…!」

幻徳は肩肘をつきながら自分に突き刺さる言葉ばかり吐いてくる一海にそう言う。

「みらい、帰るぞ」

「えっ…でも、幻徳さんと一海さんは…」

「アイツらなら大丈夫だ。さあ、焼き立てなうちに家でイチゴメロンパンを食べよう」

「う、うん…」

2人のやり取りが長いと感じた戦兎は2人を置いてみらいと朝日奈家へ帰っていくのだった。その帰り道、みらいは戦兎にこんな事を言う。

「ねえ、リコとはーちゃんにはいつ会えるのかな？」

「分からない。だけど、ベストマッチな奴らはいつかまた必ず再会するんだよなあ…俺と万丈の様に」

「戦兎も万丈君と離れ離れになった時があったんだね…」

「離れ離れとは言ってもほんの少しの間だけだな」

戦兎とみらいが話しながら歩いていると、いつの間にか家に着いていた。玄関の扉の前には両手にパンパンのスーパールの袋を持った万丈がいた。

「戦兎、早く開けてくれ…」

「万丈…！いつからそこに？」

「どんくらいかな…？1時間前くらいからだ！」

「マジかよ…流石は筋肉バカだ。ってかインターフォンあるんだから押して誰か呼べばよかつたんじゃないか？」

「あつ！その手があったのか!!」

「はあ…やっぱお前は”筋肉バカ”じゃなくて”ただのバカ”か…」

「おい、バカの前に筋肉つけろ！」

2人のやり取りを近くで見えていたみらいはこの2人も幻徳、一海と変わらないなあ…と思うのだった。

「せつ…戦兎、万丈君!!とりあえず家の中に入ろうよ！」

「おつ、そうだな」

2人のやり取りが長いと感じたみらいは2人に家の中に入ろう!と言う。みらいは鍵を取り出し、扉を開けて2人と共に家の中へ入る。

「腹減ったなー!みらい、俺の分のイチゴメロンパンあるか？」

「万丈君の分もあるよ!はい、どうぞ！」

みらいは腹が減っている万丈にさっき買ったイチゴメロンパン3つの内の1つを渡す。万丈は貰ったイチゴメロンパンを豪快にかぶりついていく。

「うんめえー!! やっぱ腹が減ったらイチゴメロンパンに限るよなあ!!」

「…まったく食べたら部屋に戻れよ、万丈」

「なんか辛辣すぎるな戦兔…まさか、みらいと2人きりで何かするつもりなのか!?!」

「ばっ…馬鹿野郎!! するわけねえだろ!」

万丈は前の世界の時から戦兔との付き合いがある為、戦兔の考えが何となく分かっていった。そしてイチゴメロンパンを食べ終わると、万丈は自分の部屋に戻っていった。

「なあ、みらい」

「何?」

「今日の夜、もう一度あの公園に行くぞ」

「何で?」

「リコやことはに会える気がするんだ」

「…分かった! 行こう!」

戦兔は何となく今日、リコやことはに会えるかもしれない思い、みらいに今日の夜にもう一度公園に行こうと言う。みらいはどうせ会えないんだろうな…と思いつつも公園に行く事にする。

そして十六夜の月が空に浮かぶ明るい夜、戦兔とみらいは公園へ向かっていく。

「着いたか…みらい、このボトルを持ってお前らがよく使ってた呪文を唱えてみてくれ!」

戦兔にそう言いながらみらいにダイヤモンド・フルボトルを渡す。戦兔からダイヤモンド・フルボトルを受け取ったみらいはダイヤモンド・フルボトルをぎゅっと握りしめ、もう片方の手に木の枝を持ちながら魔法の呪文を唱える。

「キュアアップ・ラパパ! 皆に会いたい!!」

みらいが魔法の呪文を唱えると、ダイヤモンド・フルボトルと木の枝がかすかに反応した。

「みらい、唱え続けろ!」

「キュアアップ・ラパパ! 皆に会いたい!!」



みらいが魔法の呪文を繰り返して唱えていると、今度はどこから自分と同じ様に呪文を唱えている声が聞こえてきた。

「キュアアップ・ラパパ！リコ、はーちゃんに会いたい!!」

「キュアアップ・ラパパ！みらい、はーちゃんに会いたい!!」

「この声は……!」

みらいは聞き覚えのある声が聞こえてくる方を見る。するとそこには魔法のほうきに乗ったリコがいた。

「みらい!!!」

「リコ!!!」

「やっと会えた……!寂しかったんだからね!!」

「私もよ……!」

と、みらいとリコが話していると2人の近くに今度はことがやって来た。

「はーちゃん!!」

「はー!みらい、リコ!久しぶりだね!」

そして3人揃った所でみらいとリコのダイヤのペンダントが光を放ち、モフルンもただのぬいぐるみから再び喋るぬいぐるみになった。

「久しぶりモフ!」

「モフルン!!」

久しぶりの再会を楽しむみらい達を遠くから見ている戦兎はみらい達に向けてこう言う。

「全く……お前らは最高のベストマッチだ!!」

十六夜の月が空に浮かぶ夜、みらい達……いや、ベストマッチな奴らは再び出会うのだった……

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 55. クマタの贖罪

休日の早朝、誰よりも早く起きたモフルンは勉強机に突っ伏したまま寝ているみらいの元へ向かう。勉強机の上には開かれたままのノートがあり、開かれているページの上側中央辺りには“クマタ”と書かれている。

「クマタって書いてあるって事はクマタにまた会えるかもモフ！」

「うくん…戦兔お…」

モフルンがクマタにまた会えるかもしれないという喜びでピョンピョンとジャンプしていると、すぐ近くで寝ているみらいが不安げな声で寝言を言う。おそらく、悪い夢でも見ているのだろう。

「みらい、大丈夫モフ？」

モフルンはみらいの肩を何回も揺すり、みらいを起こす。目覚めたみらいはあくびをし、両目をゆっくりと左手で優しく擦ってからモフルンに話しかける。

「…モフルン、おはよう」

「おはようモフ！みらい、クマタにまた会えるモフ？」

「何で急にクマタの事を…なるほど、私のノートを見たんだね。だけど違うの…これは幻徳さんにどういうクマさんのぬいぐるみ似合うかなーって思っ…ほっ、ほら、魔法さえかければモフルンまでにはいかなけど一応、喋るクマさんのぬいぐるみにはなるじゃん！？」

「じゃあ、クマタと会えるとかじゃないモフ？」

「うん…あ、でも今日、魔法界に行く予定があるんだ！だから、クマタに会えるかもよ！」

ノートに書かれていた“クマタ”という名前がまた会えるかどうかとは全く関係ない事を知って少し落ち込むがその後のみらいから今日、魔法界に行く予定があるから魔法界でまたクマタに会えるかも！という言葉聞いたモフルンは少し喜びを取り戻す。

それから数時間後、みらいとモフルンは家の外にいる皆の元へ向かう。そして皆と合流し、カタツムリニアに乗って魔法界へ行くのだっ

た。

カタツムリニアに乗る事約数十分後、カタツムリニアは魔法界に着いた。カタツムリニアから降りた後、モフルンはクマタを探しに行こう！とみらいに提案する。

「みらい、クマタを探しに行くモフ！」

「ごめんね、モフルン！今日はリコに似合うウエディングドレスを探す為に魔法界へ来たの！だから、探すのは後でいいかな？」

「……なら、はーちゃんと一緒に行くモフ！」

モフルンはみらいに今日はリコのウエディングドレスを探しに魔法界に来た為、クマタを探すのはその後だと言われた。それでも先にクマタを探したいモフルンはことはを誘ってみる。

「はーちゃん、クマタを探しに行くモフ！」

「はー！いいね!!行こう、行こう！」

ことははモフルンの誘いにOKを出す。ことはを加えたモフルンはみらい達に一言言った後早速、森へと向かっていくのだった。

「クマタどこにいるモフ？」

「モフルン、クマタは森のどこにいたの？」

「クマタはこの森のクマさんがたくさんいる場所にいたモフ！」

「クマさんがたくさんいる場所……クマさんがたくさん出る場所なんてあるのかな……あっ!!いた!!」

ことははモフルンからあまりクマタを見つけられるカギとなりそんなことを聞けずあきらめかけていたが、ことはが左横を向くと、複数の茂みから可愛いクマ達がひよこひよこ顔を出しているのが見えた。

「クマさんモフ!!クマさん達、ここにクマタはいるモフ？」

モフルンはクマ語でクマ達と話をし、クマタが黒いトレンチコートを着た男と一緒に森を更に奥へ進んだ所にある洞窟へ向かっていったという情報を手に入れる。

「情報ありがとうモフ！はーちゃん、洞窟に行くモフ！」

「洞窟かあ……なんか危ない予感がするけど……まあ、いつか！」

ことははこれから行く所が洞窟というひと気の少ない場所で少し

不安を募らせるが、モフルンもいるから大丈夫だと考え、そのままモフルンと共に洞窟へ向かっていく。

モフルンとことはが洞窟前まで来ると、洞窟の中からはクマタともう一人、誰かの声が聞こえてくる。モフルンは洞窟前でクマタを呼んでみる。

「クマター！洞窟から出てきてモフー!!」

と、クマタはモフルンの要望に応じたのか、洞窟の中からモフルンとこととはのいる洞窟前まで歩いてきた。だが、クマタはどこか元気がなく、今にも倒れてしまいそうだった。そしてそんな中、クマタはモフルンにこう言う。

「モフルン、あと少しで願いの石は復活する……俺の贖罪は果た……された……」

クマタはそう言ってその場に倒れ、気を失ってしまった。モフルンは気を失っているクマタにこう言う。

「……クマタは何も悪い事はしてないモフ……贖罪なんか背負っていないはずモフ」

「とにかく、街にいる皆にこの事を伝えなきゃ!」

「モフー!」

モフルンはことはの言葉に首を縦に振り、気を失っているクマタと共にことはのホウキに乗って街にいるみらい達の元へと向かう。

その頃、クマタと途中まで一緒にいた例の黒いトレンチコートを着た男は願いの石を復活させ、その手に持っていた。

「後は石に選ばれし者が願いを叶えるだけ……私の計画も第1段階から第2段階へと進めそうだあ……!」

黒いトレンチコートを着た男はそう言いながら、一人で不気味に微笑み続けるのだった……

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 56. 俺はシャドウ

魔法のホウキに乗る事約数十分、3人はみらい達の所へ着いた。魔法のホウキから降りた後、ことはみらい達に気を失っている状態のクマタを見せると共に何があったのかを説明する。

「みらい、クマタが……！」

「傷だらけ……一体、誰がこんな事を……！」

「分からない……だけどクマタは気を失う直前に”俺の贖罪は果たされた”って言った」

「贖罪……？クマタは何も悪い事なんてしてないはず！」

「どちらにせよ、裏で何者かが動いている事には違いない！」

それを聞いたみらいはリコのウエディングドレスを探すのも大事だが、裏で動く何者かを放っておく事は出来ないと思い、裏で動いている者の正体を暴く事を優先する。

「リコ、万丈くん！ごめん！私、はーちゃん達とクマタにこんな傷を負わせた犯人捕まえてくる！」

「大丈夫よ。というか、私達も行くわよ？」

「いや、こんな大事な時にリコや万丈くんに怪我を負わせてたくないからリコと万丈くんは待つて！」

みらいは近いうちに結婚する予定の2人に怪我をされては困ると、2人を置いていく事にした。その後、戦兎にこう言う。

「戦兎、2人を頼んだよ！」

「分かった。だが相手はどんな力を持っているか分からない……みらい、お前も気をつけろよ」

「うん、分かったよ」

みらいは戦兎の言葉を聞いてから気を失っているクマタを抱えることは、モフルンと共に先程の洞窟へ向かっていった。残された三人はクマタを傷だらけにした犯人に気を付けながらウエディングドレスを見ていく。

「どれも素敵だわ……！」

「あのおりこさん？見てる途中に悪いんだけど……いつ、プロポーズし

たの!？」

「したんじゃないなくてされたのよ!でもまさか、万丈君があんな形で指輪をくれるとはねえ…」

リコと万丈がいつ結婚するまでに至ったのかが気になった戦兎はリコにいつプロポーズしたのかを聞く。リコは万丈からプロポーズしてきたと言う。

「そっ、そうなんだ…で、式はどこで挙げるんだ?」

「ナシマホウ界の予定よ!ナシマホウ界でやる方が皆、来れるし!」

「…つたく、羨ましいな…」

「戦兎くんもそろそろみらいにプロポーズしたらどう?」

「えっ…／／／」

「ふふっ、顔赤くなってるわよ!」

戦兎はリコにいきなり、プロポーズしたらどう?と提案され、顔を赤くする。リコは戦兎の顔を見てふふっ…と軽く笑っていた。と、リコと戦兎が話していると突然、前方に黒いトレンチコートを着た男が現れた。

「見つけたぞ…桐生 戦兎」

「お前は?」

「俺はシャドウ…!お前に宿るオルテガの力を奪いに来た者だ」

「俺にオルテガの力が宿っているだど?よく分からないが、良い奴ではなさそうだな…」

戦兎はそう言いながらビルドドライバーを取り出して腰に装着する。そして二つのスロットにラビットフルボトルとタンクフルボトルを挿す。

『ラビット!タンク!』

『bestmatch!』

ドライバーからの音声で鳴り響いた後、戦兎はビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『Are you ready?』

「変身!」

レバーを回すと、前方と後方にスナッププライドビルダーが現れる。

戦兎は変身！という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれて変身する。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

「全く、見た目だけで人を判断するとはねえ…いいだろう、そつちがその気なら戦ってあげよう…」

黒いトレンチコートを着た男はビルドドライバーを取り出し、腰に装着した後、ハザードトリガーを取り出して起動する。

『ハザードオン！』

起動したハザードトリガーをドライバー上部に挿し、空いている2つのフルボトルスロットに黒いラビットフルボトルを2本装填する。

『ラビット！ラビット！』

そして少し待機音を流してからドライバーのレバーを回して変身する。

『ガダガダゴットン！ズツタンズタン！ガダガダゴットン！ズツタンズタン！』

『Are you ready?』

「変身…」

黒いトレンチコートを着た男の前方と後方にハザードライドビルダーが現れる。黒いトレンチコートの男は変身…という声を掛けた後、ハザードライドビルダーに挟まれて変身する。

『アンコントロールスイッチ！ブラックハザード！』

『ヤベーイ！』

「ビルドが2人だと…!?!」

「仮面ライダーシャドウビルド。俺のもう1つの姿だ」

戦兎はもう1人のビルドが現れたことに驚いている。シャドウビルドは左手に持つ、黒いフルボトルバスターをバスターブレードモードにし、戦兎に襲いかかっていくのだった。

その頃みらい達は先程、クマタが中で誰かと話していた洞窟の前ま

で来た。みらいのホウキから降りたモフルンは辺りをクンクンと嗅ぎ始めた。

「クンクン、洞窟の中から甘い匂いがするモフ！」

「モフルン、匂いを辿ってみて！」

モフルンの言葉を聞いたみらい達は洞窟へ入り、モフルンの嗅覚を頼りに真っ暗な洞窟の中を進んでいく。それから暫く進んだある時、モフルンが立ち止まった。立ち止まったモフルンの周りを見ると、そこにはいくつものエメラルドの欠片が落ちていた。

「これは、エメラルド……！」

「エメラルドの力は私が宿しているはずなのに……」

と、みらい達がエメラルドの力について話しているとみらいの携帯が鳴る。みらいがボタンを押し、電話に出ると、向こう側からは焦っているリコの声が聞こえてくる。

「はあ……はあ……みらい!! 私達の所にクマタを傷つけたであろう人物が現れたわ!」

「えっ!? そっちは大丈夫?」

「今は戦兎くんが守ってくれてるから大丈夫! でも、戦兎くんも少し押されてるから悪いこと言うようだけど、時間の問題だわ!」

「分かった。リコ、万丈くん! 私達がそっちに行くまで逃げて!!」

みらいはそう言つて通話を切り、クマタを抱いてからことは、モフルンと共にホウキに乗り、リコ達の元へと向かうのだった……

t o b e c o n t i n u e d . . . . .



## 57. オルテガの脅威

シャドウビルドと戦っている戦兎はドリルクラツシャーでシャドウビルドに斬りかかるが、シャドウビルドは戦兎が斬りかかってくるのを予想しており、黒いフルボトルバスターをバスターキャノンモードにチェンジさせて自分に向かってくる戦兎に向けて光弾を放つ。

「ぐわああ!!」

攻撃を受けた戦兎は少し吹っ飛ばされる。シャドウビルドは戦兎が吹っ飛ばされている間にも戦兎へ近づき、バスターブレードモードにチェンジした黒いフルボトルバスターで追い打ちをかける。

「これで終わりだ!!」

「終わるわけにはいかない……これならどうだ!」

戦兎は斬撃を受ける前にラビットタンクフルボトルをニンジャとコミックフルボトルと入れ替え、ドライバーのレバーを回してフォームチェンジする。

『ニンジャ!コミック!』

『best match!』

『Are you ready?』

『ビルドアップ!』

『忍びのエンターテイナー!ニンニンコミック!イエーイ!』

ニンニンコミックフォームにフォームチェンジした戦兎は四コマ忍法刀を取り出し、トリガーを一回引いて自らの分身を3人出す。

「はああ!」

『火炎斬り!!』

「フン、四コマ忍法刀程度の武器では俺にかすり傷すら入らんど」

「何っ!?!」

戦兎は四コマ忍法刀のトリガーを二回引いて火遁の術を繰り出すが、シャドウビルドが放った謎の黒いオーラに弾かれて不発に終わる。

「不完全ながらもオルテガの力を使いこなしている俺に勝てるわけな

い」

「オルテガを使いこなす…?」

「オルテガは使いこなせればありとあらゆる世界線を通べる最強の力となるーそれはハイラントビルドをも超えるー!」

「ハイラントビルドを超える…!?!」

「まあ一度、必殺技でもくらえばその力が分かるだろう…」

シャドウビルドはそう言いながらハザードトリガーのスイッチを押し、ドライバーのレバーを回して必殺技を発動させる。

『マックスハザードオン!!』

『ガダガダゴットン! ズツタンズタン! ガダガダゴットン! ズツタンズタン!』

『Ready Go!』

『ハザードフィニッシュ!!』

必殺技を発動させたシャドウビルドはその場に高く跳び上がり、戦兔に向かって急降下していく。

「うわああ!!」

シャドウビルドの必殺技を受けた戦兔は魔法界から世界の壁を超えてナシマホウ界のどこかへと飛ばされていった。

「戦兔!!」

「俺とした事が…オルテガの力を奪うはずが、ターゲットを吹っ飛ばしちまったなあ…まあいい、願いの石が生み出す力を入れれば第1段階は完了する」

「おい! お前、何者だ!!」

「誰かと思ったら万丈か…俺は影に潜む者だ。以後、お見知りおきを」  
シャドウビルドは万丈にそう言い、どこかへと去っていった。それと共にみらい達が駆けつけてきた。

「リコ、万丈君! 大丈夫?…って戦兔は!?!」

「戦兔くんは攻撃を受けてどこか遠くに飛ばされていっちゃった…」

「えっ!?! ちよつと私、戦兔を探しに行ってくる!!」

戦兔が攻撃を受けてどこかへ飛ばされていったと聞いたみらいは焦り顔をしながら戦兔を探しに1人、ナシマホウ界へと向かっていく

のだった。

「で、リコ達はあの黒いトレンチコートを着た男についての情報を掴めた？」

「うーん…あつ、そういうえば願いの石をどうたらこうたら言っていたような…」

「願いの石!? あれは100年に1度しか目覚めないのでは？」

「分からない…とにかく、魔法界に何か起こりそうだから私達は魔法界にいきましょう！」

「うん！」

リコとこととは魔法界に何か起きた時にすぐに対応出来るよう、魔法界に残る事にした。2人の会話を聞いた万丈とモフルンもうん！と首を縦に振る。

「モフルンはクマタを魔法病院に連れて行くモフ！」

「ちよつと、モフルンだけで行くの？」

「うーん…じゃあ、龍我と一緒に行くモフ！」

モフルンはリコにそう言われ、万丈と一緒に魔法病院に行く事にした。一方のリコとこととは引き続き黒いトレンチコートの男について調べるのだった……

## 58. シヤドウの時間は終わらない

クマタとモフルンは万丈に抱えてもらい、魔法病院へと向かっていった。その向かう道の途中、クマタが目覚めます。

「うつ……ここは……？」

「クマタ！目が覚めたモフ!!」

「あれ、お前が何故ここに？」

「リコのウエディングドレスを探しにきたモフ……あつ、クマタ、黒いトレンチコートを着た男に何をされたとか覚えてるモフ？」

「あまり覚えてはない……だけど、奴の狙うモノなら……」

「奴の狙うモノモフ!」

クマタは黒いトレンチコートを着た男の狙っているモノが分かるらしい。

「おい、黒いクマ！アイツの弱点とか知ってるか？」

「あまり分からない……だが、願いの石は文字通り何の願いでも叶えてくれるモノ。奴を倒したいという願いを込めれば奴の弱点となるモノを出してくれるはずだ」

「それなら願いを叶えるしかねえな」

「だけど、奴は願いの石に願いが込められた瞬間に出る願いのエネルギーを狙ってくるはずだ」

「じゃあ、どうすれば……」

「願いの石を叶えるか叶えないかのどちらかを選ぶんだ」

万丈は黒いトレンチコートを着た男の狙っているモノと弱点になるであろうモノを聞く。クマタが言うには、願いを叶えるか叶えないかのどちらしかないようだ。願いを叶えれば黒いトレンチコートを着た男の思惑通り、叶えなければ黒いトレンチコートを着た男にずっと襲われる。どちらにせよ、自分達にメリットはない。

「魔法病院に着いたぞ。受付は速攻で済ませるから、早く治療してもらえよ、黒いクマ」

「分かった」

願いの石の事や黒いトレンチコートを着た男の事を話している間

に万丈達は魔法病院へ着いた。万丈はクマタが早く治療してもらえよう魔法病院に着いてからあまり経たないうちに受付を済ませ、呼ばれるのを待つ。

呼ばれるのを待ち続ける事数十分、ようやくクマタの名前が呼ばれた。万丈はクマタとモフルンを抱えて扉に1というワツペンが貼られている部屋に入っていく。

万丈達が部屋に入った瞬間、病院の入り口の方から銃撃音が聞こえてくる。

「外で何か起こってるのか?!?モフルンと青いクマはそこにいろ!あと、先生は気にせずクマタの治療をしてくれ!!」

万丈はそう言い、銃撃音のした病院の入り口へと向かっていった。病院の入り口へ行くと、そこにはシャドウビルドがいた。

「またお前か:何しに来たんだよ」

「願いの石の力を奪いに来たのさ:人工的に再生された願いの石の前に願いの石に選ばれた者の元へ帰ってくる。つまり、あの茶色いクマのぬいぐるみの近くにいれば願いの石は必然的に俺の近くに寄ってくるんだ!!」

「だけど、モフルンが願いを言わない以上お前に願いの石の渡らない!!」

「であれば、傷つけて無理やりでも願いを言わせるまでだ:」

「そうはさせねえ!!」

万丈はそう言いながらビルドドライバーを腰に装着し、ドラゴンマガフルボトルが装填されたクローズマガマナツクルをドライバーに挿す。

『ボトルバーン!』

『クローズマガマ!』

待機音を少し流した後、ドライバーのレバーを勢いよく回す。そして、ナツクルに形状が似た坩堝型のマガマライドビルダーが背後に出現し、中で煮え滾る大量のヴァリアブルマガマを万丈の頭上からぶちまける。足元からヤマタノオロチのように八頭の龍が伸び上がり、冷めて全身に固着したマガマを後ろから押し割って変身が完了する。

『極熱筋肉！クローズマグマ！』

『アーチャチャチャアチャー！』

「懐かしいなあ…お前のその姿を見るのはいつぶりだろうか？」

「はあ？会ったこともなくせにそんな事言うんじゃねえ!!」

「…分かるわけないか。この世界のお前には」

「さつきから何言ってるんだか全く分かんねえ…とりあえず、お前を倒す!!」

シャドウビルドは深い意味がありそうな事を言うが、万丈はシャドウビルドの言葉を追及しようとはせず、とにかく今はシャドウビルドを倒す事だけに集中する。

「おらああ!!」

「お前の攻撃パターンは読んでいる！」

「なら、これでどうだ!!」

万丈の行動はシャドウビルドに全て読まれており、攻撃が当たるところかかすりもしない。そこで万丈はクローズマグマナツクルをドライバーから外して左手に持ち、クローズマグマナツクルの装填部に前から戦兎に貸してもらっていたライオンフルボトルを装填する。

『ボトルバーン!』

ライオンフルボトル装填後、クローズマグマナツクルの中央部を長押しして攻撃技を発動させる。

『ボルケニツクナツクル!!』

音声と共に炎のツメがクローズマグマナツクルの先端に生える。万丈は炎のツメでシャドウビルドを切り裂いていき、最後の一発はアップラーをかましてシャドウビルドを自分の真上の空へと飛ばしていく。

「よっしやあ!!」

「フン、甘いな…万丈」

「何っ!？」

万丈は放った技が決まり、シャドウビルドを追い詰めたと思っていたが、今の攻撃はシャドウビルドにはあまり効いていなかった。シャドウビルドは上空に飛ばされた事を利用し、ハザードトリガーのス

イッチを押ししてからドライバーのレバーを回して必殺技を発動させる。

『マックスハザードオン!!』

『ガダガダゴットン！ズツタンズタン！ガダガダゴットン！ズツタンズタン！』

『Ready Go!』

『ハザードフィニッシュ!!』

必殺技を発動させたシャドウビルドは全身に紫色のオーラを纏い、ビルド ラビットラビットフォームのような速さで万丈に向かって急降下していく。

「うわああ!!」

必殺技を受けた万丈は変身が解けた後、その場で倒れてしまった。それを見たシャドウビルドは暫くは立ち上がる事ないだろう…と、そのまま歩いていき、病院の中へと入っていかうとする。

「怪しい匂いの正体はコイツかあ…」

「お前の鼻は犬みたいだな…いつその事、あだ名も犬に変えてやろうか?」

「おい、ヒゲ！こんなシリアスそうな場面の時にふざけんなって!」  
「すまない…」

病院の中へ入ろうとするシャドウビルドの前に一海と幻徳が現れた。どうやら2人は魔法界から怪しい匂いがして駆けつけてきたらしい。

「ほお…怪しい匂いねえ…」

「本当の事を言うと、戦兎たちを探しに魔法界へ来たらたまたまどこかから何かが崩壊する音が聞こえてきたから駆けつけてきたんだ」

「チツ…飛んだ邪魔が入ったものだなあ…まあいい、相手をしてやるよ」

「その上から口調、何か気に入らねえなあ…いくぞ、ヒゲ!」  
「おう」

2人はそう言いながらスクラッシュドライバーを腰に装着し、一海はロボットスクラッシュゼリーを、幻徳はクロコダイルクラックフル

ボトルをスクラツシユドライバーに装填し、ドライバーのレンチを下に倒して変身する。

『潰れる！流れる！溢れ出る！』

『割れる！壊れる！砕け散る！』

音声と共にビーカーが2人を包み込んでいき、潰したゼリーの液体が2人の入っているビーカーに溜まっていく。そしてビーカーの液体が溜まりきった所でビーカーがなくなり、溜まっていた液体が装甲として2人の身体に纏われていく。

『ロボット イン グリス！ブラア!!』

『クロコダイル イン ローグ！オーラア!!』

変身した一海はアタックモードのツインブレイカー、幻徳はネビュラスチームガンを持ってシャドウビルドへ向かっていくのだった…



## 59. 俺と私の場所

一海はアタックモードのツインブレイカーを、幻徳はネビュラスチームガンを使いシャドウビルドを攻撃していくが、シャドウビルドは両足がウサギの成分に包まれている事を活かし、ピョンピョンと何回も何回も飛び跳ねて2人の攻撃を避けていく。

「チツ、中々当たらねえな…」

「その程度の速さでは俺にかすり傷すらくらわせられないぞ」

「なめてんのか?…俺たちの本気見せてやるよ!!行くぞ、ヒゲ!」  
「おう」

一海は幻徳にそう言い、ドライバーのレンチを倒し、必殺技待機状態にいる幻徳と共に必殺技を発動させる。

『スクラップファイニッシュ!』

『クラックアップファイニッシュ!』

必殺技を発動させた一海と幻徳はその場で勢いよく跳び上がる。そして猿渡一海はグリスの背中から噴出されるヴァリアブルゼリーを使って加速し、シャドウビルドに向かって急降下していく。幻徳は両足を開き、シャドウビルドの身体を荒ぶる鰐のように噛み付いていく。

「これでどうだああ!!」

「中々やるじゃないか…だが、まだ力不足のようだな」

シャドウビルドは2人にそう言うと、必殺技を発動している2人の足を両手で掴み、そのまま病院の壁へ投げつける。2人は病院の壁へぶつかった後、地へ落ちていく。そして変身が解ける。

「ぐっ…俺…たちの必殺技を弾く…だと…!?!」

「お前達と戦っていたせいでターゲットがどこかへ逃げてしまったよ  
うだ…次は邪魔するなよ」

シャドウビルドはそう言いながら、病院の真上の空を見る。空にはホウキに乗っていることはトリコの操るホウキに乗ったモフルン、クマタがいた。

その頃、みらいはナシマハウ界で戦兔を探していた。山の中や商店街、そして自分の家の周りを探すが見つからない。

「はあ…どこにいるんだろう…」

みらいはため息をつきながらも、戦兔を見つげるために公園の芝生広場へ向かう。公園の芝生広場へ行くと、そこには1人の男性が倒れていた。

「あの…大丈夫ですか？」

みらいはうつ伏せで倒れている男性を放つてはおけず、声をかける。するとうつ伏せで倒れている男性は顔をみらいの方へ上げた。

「こ、ここは…？」

「せつ、戦兔!？」

倒れている男性の正体は戦兔だった。みらいはまさかこんな場所に戦兔がいるとは思わず、驚く。

「みらい…！俺は何故、ここに？」

「シャドウビルドに倒されたから…」

「やはり、そうだったか…俺は負けたのか」

「…そんな事よりさ、戦兔はこの場所で何か思い出さない？」

みらいはシャドウビルドに負けた事を引きずりそうになっている戦兔を見てこのままでは雰囲気が悪くなってしまうと思い、話題を変える。

「この景色は見たことあるんだが、いつの事だったかまでは…」

「…ここはね、数年前に私と戦兔が初めて出会った場所だよ」

みらいはこの場所での事をあまり覚えてない戦兔の左手を自分の左手でギュツと握りながら出会った頃の話をしていく。

「あの時、私は変な人に捕まって危ない目に遭いそうだったよね…そこを戦兔が助けてくれた。そう、”正義のヒーロー”みたいに」

「みらい…」

「今だから言える…助けられた時から私は戦兔に惚れてた…！」

みらいは助けられたあの時から戦兔に惚れていた事を話す。戦兔はその事を今、初めて知り、少し驚いていた。

「みらい、俺も…！」

と、戦兎がみらいに何か言おうとした時、誰かが近辺のどこからか歩いて来た。

「よお、2人とも…随分と仲がよろしいようで？」

「あなたは…椎名 龍一君!？」

「よく覚えてくれてたなあ…みらい。だが今回、用があるのは桐生戦兎だ」

「戦兎は今、怪我してるの!だから用事なら後にして!」

「…つたくなら、力づくでお前をどかさしかないようだな…!」

椎名 龍一はみらいにそう言うと、ビルドドライバーを腰に装着する。そして自分の近くに飛んできた黒いクロスドラゴンを掴み、クロスドラゴンのボトル装填部に黒いドラゴンフルボトルを装填する。そしてドライバーにクロスドラゴンを挿す。

『wake up!Dark Cross—Z dragon!』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、椎名龍一はビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『Are you ready?』

「変身」

レバーを回すと、前方と後方にスナップライドビルダーが現れる。椎名龍一は変身という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれて変身する。

『Wake up burning! Get DARK CROSS—Z DRAGON!Yeah!』

椎名 龍一は仮面ライダーダーククロスへと変身した。ダーククロースはハザードフォームの様に全身が黒いが、複眼は黄色くなっている。

「何故、お前がクロスドラゴンを…?」

「そんなの今は関係ないだろ?」

戦兎は椎名 龍一がビルドドライバーを持っている事にも驚いたが、何よりも驚いたのは万丈以外の人がクロスドラゴンを持っている事だった。

「桐生戦兎も朝日奈みらいもここで消えてもらう…!」

椎名 龍一はそう言いながら、2人に向かっていくのだった…

## 60. シヤドウは攻め続ける

「戦兔に近寄らないで!!」

「フン、ならまずはお前からだ!!」

「はああ!!」

「生身で勝てると思うか?」

みらいは自分の元に来たダーククローズの腹部を右足で蹴ろうとするが、蹴りが腹部に当たると寸前でダーククローズに右足を掴まれてしまい、そのまま近くの木に投げ飛ばされる。

「うわああ!!」

「みらい!!」

みらいは木に頭を強く打ち付けたせいで気を失ってしまった。戦兔は自分の大切な人を投げ飛ばしたダーククローズに憤りを感じ、フラつきながらもその場に立ち上がり、ビルドドライバーを腰に装着する。そしてビルドストームナツクルを取り出し、ナツクルにビルドストームフルボトルを装填する。そしてボトルを装填したビルドストームナツクルをドライバーに挿す。

『ボトルビューン!』

『ビルドストーム!』

待機音を少し流した後、戦兔はドライバーのレバーを勢いよく回す。戦兔の背後にナツクルに形状が似た塔型ストームライドビルダーが出現し、ストームライドビルダーの中で吹き荒れる大量のストームを戦兔の頭上にぶちまける。戦兔は自分を覆っているストームをかき消して変身を完了させる。

『風来天才!ビルドストーム!』

『ビューンビューンビューンビューン!』

ビルドストームに変身した戦兔はナツクルをドライバーから外して右手に装着する。そしてナツクルの中央部にあるボタンを軽く押して技を発動させる。

『タービューレンスナツクル!!』

『ビューン!!』

技を発動させた戦兎はナツクルから出てきた乱気流をダーククローズに向けて放つ。

「これでどうだ!!」

「フン、効かんなあ…」

「何っ!?!」

「んじゃ、次は俺の番だ…!」

戦兎の放った乱気流はいとも容易く弾かれてしまう。そしてダーククローズは次は俺の番と戦兎に言い、ダークビートクローザーを左手に持ちながら戦兎へ向かう。

「ダークビートクローザーだど!?!」

「そうか、こっちの世界の人間は知らないのか…:丁度いい。お前を俺の必殺技の実験台にしてやるよ」

ダーククローズはそう言いながらダークビートクローザーの鏢の中央にロックフルボトルをセットし、グリッPEndを2回引く。

『スペシャルチューン!』

『ヒツパレー!ミリオンスラッシュ!』

必殺技を発動させたダーククローズはダークビートクローザーの刀身から蒼炎の火炎弾を戦兎へ飛ばす。戦兎は火炎弾を避けながらダーククローズとの距離を詰めていく。

「流石は風の力…スピーデイに動いて俺の必殺技を避けている。だが、これならどうだ?避けられるかな?」

ダーククローズはそう言いながら自分のすぐ近くにまで迫って来ている戦兎に対してダークビートクローザーの刀身から龍のオーラを飛ばす。放たれた龍のオーラは戦兎の胸部に当たり、必殺技が決まる。戦兎は必殺技を受けて身体がボロボロなのにも関わらずダーククローズに近づいていき、ダーククローズの身体にエンブティボトルを当ててダーククローズの成分を抜き取る。

「成分が抜かれて変身が解けていくだと…!?!」

「こ、これが…俺の…狙い…だ」

戦兎はダーククローズの成分を抜き取った直後にその場へ倒れてしまう。成分を抜かれて変身が解けてしまった椎名 龍一は軽く舌

打ちしてどこかへ去っていく。

その頃、魔法病院から逃げたモフルン達は魔法病院から少し離れた山の山頂辺りに避難していた。

「リコ、はーちゃん助けてくれてありがとうモフ！」

「どういたしまして。でも、まだ気を緩めてはいけないわ！いつどこからシャドウビルドが現れるから分からないから…」

と、モフルンとリコが話していると突然、モフルンの頭上で何かが輝きだした。

「モフツ!?この光は何モフ?」

「こ、これは…!願いの石!」

「願いの石モフ!」

「と、とにかく願いを…!!」

リコが願いの石に願いを言おうとした瞬間、リコ達の前にシャドウビルドが現れる。

「所有権が無い者の願いは受け入れないぞ。十六夜リコ」

「あなた、何度も何度もしつこいわよ！」

「俺は計画の為ならしつこい人間にだってなるんだ」

シャドウビルドはそう言いながらダークドリルクラッシュャーを右手に持ち、生身のリコ達に襲いかかってくる。

「リコ、モフルンとクマタを連れてナシマホウ界へ行つて!!」

「…でも、はーちゃんは!」

「私がシャドウビルドと戦う!だって今、変身して戦えるのは私しかないもん!!」

「はーちゃん…」

「さあ、はやく!!みらい達の元に！」

「…分かったわ！」

ことははこの状況下で変身してシャドウビルドと戦うことが出来るのは自分しかいないと思い、リコ達を逃がす。そしてことはは変身アイテムを取り出して変身する。

「キュアアップ・ラパパ!エメラルド！」

ことはがそう唱えると、リンクルストーン・エメラルドがリンクルスマホンという変身アイテムに挿し込まれていく。その後、リンクルスマホンの画面にアルファベットのfを書くとき、F e l i c e という文字が浮かび上がる。

「フェリーチェ・ファンファン・フラワーレ！」

ことはがそう唱えると、服装や髪型、背丈が変化していく。

「あまねく命に祝福を…キュアフェリーチェ!!」

変身したことははシャドウビルドに飛び蹴りをくらわす。シャドウビルドは飛び蹴りをうけて少し飛ばされていくがすぐに態勢を整えてことはへ向かっていく。

「花海ことは、お前の持つエメラルドは良い輝きをしてるなあ…そのエメラルド、俺が挟り取ってやるよ」

「そうはさせない！」

ことははそう言いながらフラワーエコーワンドを取り出し、リンクルストーン・ピンクトルマリンをフラワーエコーワンドに装填し、魔法を発動させる。一方のシャドウビルドはドリルクラツシャーにハリネズミフルボトルを装填して必殺技を発動させる。

「リンクル・ピンクトルマリン!!」

『Ready Go!』

『ダークボルテックブレイク!』

シャドウビルドはドリルの部分にハリネズミの針を纏わせてからことはのピンクトルマリンシールドに必殺技を当てていく。シャドウビルドの必殺技の方が一枚上手だったのか、ピンクトルマリンシールドにヒビが入っていく。

「このままでは…!」

「終わりだ、花海ことはああ!!!」

シャドウビルドはそう言いながらダークドリルクラツシャーの威力を最大まで上げ、ピンクトルマリンシールドを破るだけでなくことはも斬っていく。

「リ…リ、ごめ…ん…なさい」



変身が解けたことははその場に倒れてしまい、そのまま気を失ってしまった。

「フン、輝きの割には大した事ないのか…エメラルドは。こんなつまらん奴を相手にした俺がバカだった!!!」

シャドウビルドは倒れて気を失っていることはにそう言いどこかへ去ってってしまうのだった。

皆、シャドウビルドに倒されてしまい、現状戦える者は誰一人いない。はたして戦兎達はこのピンチをどう切り抜けるのだろうか？

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 61. 非道のシャドウ

カタツムリニアを使い、ナシマホウ界に逃げてきたリコ達は人気がない場所で箒に乗って上空まで飛び上がり、空の上から地上を見下ろす感じでみらい達を探す。

「みらい達どこにいるモフ？」

「分からない…だけど、箒で空を飛んでいないって事は既に戦兔くんを見つけているはずよ！」

「でも、魔法界に戻ってきてないモフ」

「家で戦兔くんを休ませているかもしくは…」

「リコ…？」

「何でもないわ…とにかく、みらい達を探すわよ！」

リコはみらいが既に戦兔を見つけている前提で2人がどこにいるかを考えた時、少し嫌な予想が頭に浮かぶが、敢えてモフルンにはその予想を言わなかった。

「あつーおい、2人ともあそこを見ろ！」

クマタは何かを発見し、その場所に指をさす。リコとモフルンがクマタの指さす方を見てみるとそこには倒れているみらいと戦兔がいた。リコは箒のスピードを上げて2人の元へ向かう。

「みらい、戦兔くん!!大丈夫!!」

リコの嫌な予想というのはシャドウビルドにやられた戦兔だけでなく、戦兔を助けに行つたみらいも怪我しているというもので1番当たってほしくない時にこの嫌な予想が当たってしまったのだ。

「うう…あれ、リコ…？」

「みらい!!大丈夫!?何があつたの？」

「椎名龍一君がダーククローズに変身して私や戦兔に襲いかかってきたの…」

「(龍一君…真面目なあなたがなんで人を襲うの…?)」

リコは2人を襲った人物が椎名龍一である事を知り、驚くと共に心の中で真面目なあなたがなんで人を襲うの…?と呟く。

「みらい!!とりあえず、どこか他の場所へ行きましょう!ここに居続け

るのは危険だわ！」

「うん！あつ、でもその前に戦兎をベッドに寝かせないと…！」

「なら、津成木大学の近くで待ってるわ！」

「分かった、出来るだけ早く向かうようにする！」

みらいとリコ達は津成木大学の近くで待ち合わせる事にする。みらいは出来るだけ早く向かうようにするとリコに言い、自分のホウキに戦兎を乗せて自宅まで向かっていった。

家に着いたみらいは戦兎を地下にある戦兎の部屋のベッドに寝かせる。リコとの待ち合わせ場所に向かう前に戦兎にこう言う。

「あと数時間後には年が明けるね…今年の終わりは一緒に過ごせないかもしれないけど、来年の終わりは一緒に過ごそうね！」

みらいはそう言うて家を出て行き、リコの待つ津成木大学へと向かった。みらいが家を出てから少し経ったくらいに目を覚ました戦兎はダーククローズから抜き取った成分について詳しく調べ始めた。

「エンドマテリアルだど？…俺の知らない未知の成分か。この成分には狂暴化と引き換えに人間の成長の限界を引き上げてくれる能力があるのか…！狂暴化を無くせるよう改善するか」

戦兎はダーククローズの成分からエンドマテリアルという新たな成分を発見した。エンドマテリアルの狂暴化という副作用を無くす為に戦兎は早速、エンドマテリアルの研究に取り掛かるのだった。

その頃、みらいは津成木大学に着いてリコ達と合流していた。リコとみらいがいつシャドウビルドが来てもいいように身構えている中、モフルンは浮かない顔をしていた。

「モフルン？どうしたの？」

「みらい…シャドウビルドの狙いは願いの石の力モフ。だけど、その力を手に入れる為の”願い”をモフルンが言わないから皆、傷ついてきたモフ…」

「だからって願いは言っちゃダメ！言ったらシャドウビルドの思い通りになっちゃうんだから!!」

「モフ…」

「大丈夫、私達がモフルンやクマタを守ってあげるから！」

「みらい……！」

モフルンは自分がとつと願いを言っていれば皆が傷つく事はなかったと自分を攻める。みらいはモフルンに”願い”を言えばシャドウビルドの思い通りになってしまおうと言う。モフルンはそれを聞いて皆がシャドウビルドの計画を阻止するために”願い”を言わせないようにしてると知り、”願い”を言おうという気持ちが少し無くなった。

と、みらい達が魔法界に行くために箒で津成木駅に向かってしていると、シャドウビルドが津成木駅の入り口に立っていた。

「待っていたぞ……魔法使い!!」

「私達が再び魔法界に向かおうとしたのが分かってたようね……仕方ない。みらい、いくわよ！」

「うん！」

みらいとリコは箒で地面まで降りてから変身する。

「キュアアップ・ラパパ!ダイヤ!」

みらいとリコがそう唱えると、リンクルストーン・ダイヤがモフルンの胸元部分に挿し込まれていく。

「ミラクル・マジカル・ジュエリー!」

モフルンにリンクルストーン・ダイヤが挿された状態でそう唱えると、2人の服装や髪型、背丈が変化していく。

「2人の奇跡!キュアミラクル!」

「2人の魔法!キュアマジカル!」

「魔法つかいプリキュア!!」

変身した2人はシャドウビルドに向かっていく。みらいとリコはシャドウビルドに蹴りをくらわせようとするが、全て弾かれてしまう。

「フン、甘いな……!!」

シャドウビルドはそう言いながらリコの片腕を掴み、地面へと思

切り叩き付ける。

「うっ…」

「マジカル!!」

「みっ…ミラクル!」

「今助ける!」

みらいはリコをシャドウビルドから離そうとシャドウビルドへ向かうが、いつの間にかシャドウビルドの周りには紫色の結界が張られており、シャドウビルドとシャドウビルドに肩腕を掴まれているリコには近づけないようになっていた。

「朝日奈みらい、悪いが俺はお前とは戦えない」

「何で!?!」

「お前は俺にとつての…おっと、危ない。危うく言ってしまう所だった…まあとにかくお前とは戦えない」

「なら、マジカルを離して!!」

「それは無理だ。コイツにはある程度怪我してもらわないといけないからなあ…」

シャドウビルドはそう言いながらリコを何度も何度も地面へと叩き付ける。リコは何度か叩きつけられた時に吐血する。そしてその吐血と共にリコの変身が解けた。

「そのモフ…いや、クマ! 願い”を言わないのか? お前が”願いを言わなければ俺は死ぬまでコイツを地面に叩きつけるぞ?」

「それは…それだけはやめるモフ!!」

「なら、願いを言え!!」

「分かったモフ…モフルンの願いは…!」

モフルンはこれ以上リコを傷つけない事と引き換えに自分の願いを言うことにするのだった…

## 62. 奇跡の変身、再び!

モフルンは自分の近くを漂う願いの石に向かって願いを言おうと  
していた。

「叶えられるなら”アレ”をもう一度モフ…!」

「何度も言わせるな、早く願いを言え!!」

「分かったモフ」

シヤドウビルドに急かされたモフルンは願いの石にさらに近づき、  
願いを言う。

「モフルンの願いは……」

「待て!モフルン!!」

モフルンが願いを言おうとした瞬間、自分の部屋で休んでいたはず  
の戦兔が来てモフルンが願い事を言おうとするのを止める。

「戦兔、何モフ?」

「モフルンの願いつて”プリキュアになりたい”だろ?俺が開発した  
この”ジェネシスマテリアル”を使えばモフルンは願いを言わずと  
もまたプリキュアに変身出来るぞ!」

「戦兔…!」

「さあ、使ってみて!」

「分かったモフ!」

戦兔はそう言い、モフルンにジェネシスマテリアルを渡そうとする  
が、シヤドウビルドが2人の間に入り、受け渡しの邪魔をする。

「桐生 戦兔!!”ジェネシスマテリアル”とやらをこの場で廃棄しろ!!!  
廃棄しないのならお前を消す!!!」

「消せるもんなら消してみろよ!」

戦兔はそう言いながらメツキカラーのラビットフルボトルとタン  
クフルボトルをビルドドライバーに装填する。

『ラビット Mk—II!—タンク Mk—II!—』

『best match!』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、戦兔はビルドドライバーの  
レバーを勢いよく回す。

『Are you ready?』

「変身！」

レバーを回すと、前方と後方にスナップライドビルダーが現れる。戦兎は変身！という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれて変身する。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！ ビルド Mk—II!!』

「これが俺の創った新しいビルド！ビルド Mk—IIだ!!」

「フン、所詮はMk—IIになっただけ…俺のシャドウビルドに勝てるわけがない！」

「それはどうかな」

戦兎はビルド Mk—IIの力を舐めているシャドウビルドにそう言いつて、ビルド Mk—IIの力を使う。

「まずはこれだ！」

戦兎はそう言いながら、大砲や硬い装甲といったタンク要素を全身に纏い、シャドウビルドを攻撃していく。

「ぐっ…これはタンクタンクの力か」

「確かにタンクタンクに似てはいるが攻撃、防御はタンクタンクの5倍だ！」

「…チツ、なら俺はコイツで…いや、まだやめておこう」

「よし、シャドウビルド奴が何かブツブツ言ってる隙にモフルン、これを!!」

戦兎はシャドウビルドが小声で何かを言っている隙にモフルンにジエネシスマテリアルを渡す。

「チツ、俺が戸惑っている隙に渡されたか…」

「この力でシャドウビルドを倒すモフ！」

モフルンはシャドウビルドにそう言い、ジエネシスマテリアルをぎゅつと握る。ジエネシスマテリアルを握った瞬間、モフルンの身体があのと時のように人間化していき、プリキュアの姿へと変化した。

「モフモフモフルン！キュアモフルン!!」

「モフルン、シャドウビルドはお前に任せました！俺はみらいと共に皆を助けに行く！」

「分かったモフー！」

戦兎はモフルンにそう言い、みらいと共にリコや魔法界にいる仲間達を助けに向かう。

「お前が相手か…さつきよりは苦戦しないで済むから都合だ」

「モフルンはシャドウビルドを倒して皆の仇を取るモフー！」

「やってみろよ、クマ野郎!!!」

シャドウビルドはそう言いながらモフルンに物凄い速さで向かっていく。モフルンは物凄い速さで向かってくるシャドウビルドを見てルビースタイルにフォームチェンジする。そして自分の全身に炎を纏わせてからシャドウビルドに向かっていく。

「モフー!!!」

「うおお!!!」

シャドウビルドとモフルンは激しくぶつかり合う。優勢になったのはシャドウビルドだった。シャドウビルドはモフルンを押し切るうとしている。

「所詮はクマ野郎!!!惨たらしく死ねええ!!!」

「まだまだ…まだ終わらないモフー!!!」

モフルンがピンチになった瞬間、モフルンの身体から不思議な光が溢れ出し、モフルンの攻撃力や防御力を上げていく。モフルンは身体から出てきた不思議な光の力でシャドウビルドを劣勢に追い込んでいく。

「ぐわああ!!!なぜだ、なぜこの俺が押されている!!!たかがMk—II—II—IIが、クマ野郎ごときが、シャドウビルドのシステムを超えるなど!!!」

「これで終わりモフー！」

モフルンはそう言いながら、必殺技待機状態に入る。シャドウビルドは攻撃を受けて怯んでしまい、必殺技を避ける隙がない。

「プリキュア・ルビー・パッショナーレ!!!」

必殺技を発動したモフルンは両手から巨大な炎の塊を発生させてシャドウビルドに向けて巨大な炎の塊を投げつける。

「クマ野郎がああああああ!!!ぐあああああ!!!」

「モフツ!!!」



シャドウビルドを倒したモフルンは変身を解いてクマタと一緒に先に家へ帰る。そして戦兎とみらいが皆を連れて家に帰って来るのをクマタと待つのだった……

### 63. 皆と共に

戦兎とみらいは傷だらけのリコを連れて魔法界にきた。魔法界でやる事は2つあり、1つはリコを魔法病院に連れて行く事、もう一つはまだ倒れているであろう仲間達を助ける事だ。

「みらい、リコを頼んだ！俺は万丈達の元へ向かう！」

「分かった！…けど、万丈くん達の居場所分かるの？」

「分からない！…だけど、皆とは長い付き合いだ。きつと見つけれられるはず！」

「うん、そうだよね！じゃあ私、リコを連れて魔法病院に行くね！」

「分かった！」

みらいは戦兎にそう言い、ホウキで魔法病院のある方へ向かっていった。戦兎はライドビルダーに乗って皆を探しに行く。

「(シャドウビルド…さっき俺と戦った時の言動からしてまだ力を隠しているはず。帰ったら何かしら対策しなければ…！)」

戦兎が心の中でそう呟きながらライドビルダーを走らせていると突然、携帯が鳴った。

「誰だ…？」

戦兎が電話に出てみると、携帯からは聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「おい、戦兎!!俺たちは無事だぞ！」

「その声は…万丈!!」

「ああ、プロテインの貴公子 万丈龍我だ！」

「そんな様子じゃ大した怪我もしてなさそうだな」

「まあな、俺は奴に気絶させられただけだし…」

「で、お前はどこにいるんだ？」

「魔法病院だ。まだ目を覚ましてないけど幻さんとカズミンの2人もいる」

「ことはは？」

「分からねえ…ただ、この魔法界からは出てないと思うぜ！」

「分かった。とりあえず万丈の所にはみらい達が来るはずだ！万丈は

みらい達が来るまでにカズミンと幻さんを人の邪魔にならないような所まで動かしておいてくれ！」

「分かった」

戦兎は万丈にそう伝えて通話を切り、ことはを探しに魔法界の中心部へと向かうのだった。

「ことは…」

魔法界の中心部へ向かう途中、戦兎はある物を見つけた。それはことはの物と思しきカチューシャだ。

「これは…」

戦兎はバイクから降りて落ちていることはのカチューシャに近づく。ことはのカチューシャは禍々しいオーラに覆われており、触れた瞬間、戦兎の全身に強烈な憎悪や険悪というようなネガティブなイメージの感情が走る。すぐにカチューシャを手放した為、戦兎はネガティブな感情に体を蝕まれることはなかったが、このままカチューシャを持ち続けていたらネガティブな感情に体を蝕まれ、心と身体が悪に染まっていたであろう。

「ことはのカチューシャとはいえ、こんな恐ろしいオーラが纏われている状態では拾えないな…」

と、戦兎が再びバイクに乗り、バイクを走らせようとした時、ことはから電話がかかってきた。

「ことは!!!お前、大丈夫なのか!?!」

「せつ…戦兎…私は魔法病院から少し離れた場所にある山の頂上にいるよ…!なるべく早く…来て!!」

「分かった!…:…:…:ことは山にいるのか。なら、ホークガトリングで飛んで向かった方が早いな」

ことはは戦兎にそう言い、通話を切る。ことはの居場所が山だと分かった戦兎はホークガトリングフォームに変身し、空高くへと飛び、ことはのいる場所まで向かっていくのだった。

そして数分後、戦兎はことはのいる山の頂上に着いた。ことはは傷だらけで倒れており、服が破けて肌が露出した部分からは血が流れている。

「おい、ことは!!」

「せんと…来てくれたんだね…!」

「酷い傷だ……とりあえず、お前も魔法病院に行くぞ!!早く治してもらわなきゃ!!」

「だ、大丈夫…大丈夫だからみらいの家に戻る?」

「ダメだ。家へ帰るよりお前の傷を治す方が先決だ!!」

「せんと…」

「んじや、行くぞ!!しっかり掴まれよ!」

戦兎はそう言いながら、ことはを抱きかかえて再び空高くへと飛び上がる。そして魔法病院へ向かうのだった。

空を飛ぶ事約数分、魔法病院に着いた。戦兎はことはを魔法病院のスタッフに任せ、万丈達の元へ行く。

「万丈!」

「戦兎、やつと来たか!あ、カズミンと幻さんはお前が来る少し前に目覚めたぞ!!」

「…で、2人はどこにいるんだ??」

「先にナシマハウ界に帰った。特訓するんだってよ」

「…ったく、今度の敵は特訓すれば勝てるような敵じゃないのになあ…」

「あつ、そういうえば、お前は知ってるか?」

「??」

「リコがシャドウビルドとの戦いで重傷を負った事」

「まじかよ!?!急いでリコを連れて病院の中へ入るみらいを見て何かしら怪我してるんだろうな…とは思ったが、重傷だとは思いませんかつた!!戦兎、先にナシマハウ界に帰ってる!!」

「いや、俺は皆と帰りたい!だから、待ってる」

「…:…わかったよ。んじや俺はリコの所に行くってくる」

万丈はそう言い、魔法病院の中へと入っていく。リコ達が治療をしてもらっている間、戦兎は近くのベンチに座り、携帯の画像アルバムを開く。そして笑顔のみらいが写っている写真を見る。

「やっぱりあいつは可愛いなあ…:大学卒業して早く…」

「早くって何？」

戦兔はみらいの画像を見ながら何かを言おうとしたが、誰かが来たせいで言いたかった事を言いきれなかった。

「み、みらい!!ど、ど、ど、どうしてここに!?!」

「万丈君がリコを見るって言うから何もする事なくなっちゃってさ…ここに来ちゃった!」

「いつからいたんだ!?!」

「戦兔が私の画像を見ながら私の事を可愛いって言ってくれた辺りから!!」

「まじかよ」

「可愛いって言ってくれたのすごい嬉しかった!可愛いって言ってくれたお礼あげる!」

みらいはそう言いながら戦兔の右頬に軽くキスをする。キスをされた戦兔の顔は真っ赤に染まり、今にも倒れそうなくらいになった。

「あ、ありがとよ…//」

「ふふっ…どういたしまして!」

みらいは戦兔の隣に座り、戦兔に寄りかかる。戦兔は心臓の鼓動をバクバクにさせながらもみらいの右手を握る。

「なあ、みらい。皆と一緒に笑顔でナシマホウ界に帰ろうな!」

「うん!!」

戦兔とみらいはその後、ベンチに座ったまま眠りについた。2人が寝ている間に2人の前を通りかかった人達は皆、2人の事をベストマッチなカップルだと思ったのだった…

## 64. 始まりの終わり

戦兎とみらいがベンチに座って眠ってしまっただのくらい時間が経ったのだろうか。いつの間にか空は橙色に染まっており、眠っている2人の目の前には万丈、リコ、ことはがいた。

「みらい、戦兎君！いつまで寝てるの？」

「ふわあ…よく寝たあ…！ってリコ!!怪我は大丈夫なの!？」

「歯が数本折れる程度で済んだわ。プリキュアに変身してたおかげかもしれない。あと、はーちゃんも軽傷で済んだみたい」

「2人とも大丈夫そうなら良かった…！私、すごく心配したんだからね!？」

「ふふっ…心配してくれてありがとう、みらい！」

「じゃあ、皆でナシマホウ界に帰ろっか!!」

「ええ、そうしましょうー!」

皆が合流した所で戦兎達一行はカタツムリニアに乗り、ナシマホウ界へと帰るのだった。ナシマホウ界に帰った後、リコと万丈は戦兎とみらいを先に家に帰らせて2人で夕暮れの公園へ行き、ベンチに座る。

「万丈君、式はいつにするの?」

「うーん…まずは俺とリコの親戚や友人を誘わないとならないから…大体、数週間後かな」

「数週間後ねえ…何かドキドキしてきたわ」

「何で?」

「だって私、万丈君の”彼女”から”妻”になるんだもの…しかも、苗字も万丈になるし…／／／」

「…俺もリコの”夫”になるのか。あーそう考えたら俺までドキドキしてきた!!」

「そしていつかは子供も…」

「おい、早すぎだぞ!!」

「ふふっ…」

リコは随分と先の段階の事まで考えており、少し遠回しに子供が欲

しい事を万丈に伝えるが、万丈は少し焦りながらまだ早すぎる!!とリコに言った。

「万丈とリコは気が早すぎるな…」

「えっ…?」

「いや、万丈の服にこっさり付けた盗聴器から2人の話し声が聞こえてな…」

「2人は何を話していたの?」

「それはな…ゴニョゴニョ」

戦兎は2人が自分達の子供について話していた事をみらいの耳元で本当に周りに聞こえないくらいの小声で話す。

「ええー!!それは早すぎる!」

「まあでも、結婚前から子供を授かってる人もいるからあまり言えないが…」

「……ねえ」

「ん?」

みらいはリコと万丈が自分達の子供の事について話していた聞いて少しあっち側のスイッチが入ったのか、いきなり頬を赤らめて戦兎の左手を自分の右手でぎゅっと握る。

「みらい!?どうしたんだ、急に!!」

「ねえ、戦兎…私も戦兎との子供、早く欲しいなあ…」

「だっ、ダメだ!俺らはまだ大学生だぞ!?万丈達よりも早すぎる!」

「ふうん…今ならOKするんだけどなあ…」

「と、とにかく!!家に帰ろうか!モフルンも待ってるから!!」

戦兎はみらいの誘惑にギリギリの所で打ち勝ち、みらいの手を引いてそのまま朝日奈家に向かっていく。走り疲れた戦兎は玄関前に寝転がる。

「はあ…はあ…疲れた…」

「”疲れた”んだね?」

「当たり前だろ!変なスイッチ入ってるみらいを喋らせない様になんかまで走ったんだから!!」

「疲れたのなら私が部屋で…いや、部屋にはモフルンいるからお風

呂で癒してあげる！さあ、一緒に入ろう！」

「へっ!?風呂…?ちよ、ちよつと待て！」

「…私、戦兔になら身体を見られても大丈夫だよ…?／＼／＼」

「お、おい！みらい、数秒間だけ待ってくれ!!」

「待てないや…:ほら、行くよ！」

みらいはそう言いながら寝転がっている戦兔の腕を掴み、お風呂場まで引きずっていく。その後、2人がお風呂場に入ってから数時間ぐらいはお風呂場の扉が開く事はなかった…

そして夜、帰ってきた万丈が自分の部屋に向かおうと地下への階段を下ると、階段を下ったすぐの場所に手で腰を抑えている戦兔がいた。

「いててて…:」

「戦兔、どうしたんだ？」

「見りや分かるだろ…:腰が痛いんだよ」

「…:ったく、なら今日はもう寝ろ！早く寝て明日に備えろ！」

「ああ、そうするよ」

戦兔は手で腰を抑えながら自分の部屋へと入っていく。万丈も戦兔を見送った後、自分の部屋に入っていくのだった…

こうして、キュアモフルンへの再覚醒、シャドウビルドとの激闘を描いた大学生編の第1章は幕を閉じた。

その頃、ある場所では誰かがある計画の第2段階へ入る準備をしていた。

「準備は出来てるか？」

「はい、シャドウ様」

「よし、ならば今度はヤツの息の根を止めよ…:その黒き龍の力でな！」

「分かりました…:」



C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
t  
o  
C  
h  
a  
p  
t  
e  
r  
2  
:  
:  
:  
:

## 65. 俺たちのスタートライン

第一章の後、結婚した万丈とリコは朝日奈家の近くにあるマンションの203号室の部屋を借り、そこで2人仲良く暮らしていた。

「そういえばナシマハウ界は結婚したら苗字が変わるのね…」

「そうか…お前の苗字はもう十六夜じゃなくて万丈…か」

「まあ十六夜は仮の苗字だったからナシマハウ界でこうして正式な苗字を貰ったのは初めてだわ」

「万丈リコ！苗字が万丈で後悔とかはしてないのか？」

「後悔する訳ないわよ！むしろ貴方と同じ苗字になれて良かったかな」

「リコ…!」

「ぎっ、今日はもう遅いから寝ましょう!」

「……………」

「万丈君？」

リコが寝よう!と声をかけるが、万丈は黙ったままだ。不思議に思ったリコが万丈の方に優しく触れると、万丈はリコの手をぎゅっと掴み、手を引っ張ってリコの身体を自分の体に引き寄せる。

「ちよっ!?!万丈君…!／＼」

「今夜は寝かせないぞ」

「もうっ!!分かったわよ…!／＼」

万丈に誘惑(?)されたリコはすっかりその気になってしまい、何も抵抗する事なく万丈の部屋へと連れて行かれる。その後、2人が寝たのは朝の6時だったらしい…

「ふわあ…………今、何時だ?」

「えくつと…………午後の6時よ」

「えっ?今、何時って言った?」

「午後の6時よ…」

「午後の6時!? やつべえ!! 午後3時に戦兔のところへ行く予定だったのに三時間も過ぎてやがる!!」

「戦兔君の所に行く予定あったの!? 私、聞いてないわ!!」

「と、とりあえず!! 俺、行ってくる!」

「分かったわ!」

万丈は203号室を飛び出して陽が沈みかけている中、朝日奈家へ全力疾走で向かっていく。

そして走る事約10分後、万丈は朝日奈家に着いた。玄関の扉を開けるとそこにはどこかへ出掛けようと靴を履く戦兔とみらいがいた。

「ごめん、戦兔! 遅れちまった!!」

「遅れちまったって……約束の時間から3時間も経ってんだぞ!」

「ほんとごめん!」

「……まったく、万丈が来ないかもしれないから久しぶりにみらいとデートしようと思ってたのに……しょうがない。万丈、俺の部屋に來い」

「戦兔……!」

遅れた事を詫びて戦兔の許しを得た万丈は戦兔の部屋に向かう。部屋に入ると部屋の机の上に何か置いてあった。

「戦兔、机の上にあるのは何だ?」

「これが今日、お前に渡す物……その名もアルテミストリガー」

「アルテミストリガー?」

「俺が発見した新成分・ジエネシスマテリアルから作った物だ!」

「すげえ……! これを使えば俺も!」

「……パワーアップは出来る。だが、このトリガーには“善”と“悪”の力が宿っているんだ。もし、悪の力が働いてしまえば、万丈はビルド ハザードの様に敵味方関係なく襲ってしまう……」

「暴走ねえ……でも、俺はやるぜ! I o v e & P e a c e の為にな!」

「お前ならそう言うと思った」

戦兔はそう言いながら、万丈にアルテミストリガーを渡す。アルテミストリガーを受け取った万丈は暫くの間、アルテミストリガーを見続けるのだった。

「んじゃ、俺はみらいとデートしてくる！」

戦兎は万丈にそう言い、みらいとどこかへ出掛けて行ってしまった。1人残された万丈も自分の住むマンションへと帰っていく。

自分の部屋に帰ると、リコが夕食を作っていた。今日の夕食はカレーらしい。

「ただいま」

「あら、おかえりなさい！2人は元気だったかしら？」

「元氣過ぎて逆に心配になる…こんな時間からデート行くらしいし…」

「えっ！こんな時間から!?さてはあの2人…」

「さてはあの2人…って？」

「い、いえ、何でもない!!さ、さあカレー出来たから食べて！」

「お、おう」

リコは2人がこの時間帯のデートでどこへ行くかが分かっていたが、内容的に安易に教えられるものではなかったので万丈には一言も教えなかった。

「そういえば今日、津成木町の商店街で黒い仮面ライダーが現れたらしいわ…」

「黒い仮面ライダー？」

「うん、それでその黒い仮面ライダーが商店街の建物の至る所にこんなマークを付けていったらしいの…」

リコはそう言いながら、万丈に黒い仮面ライダーが付けていったというマークが写った画像を見せる。それを見た万丈は驚く。

「お、おい…それって」

「？」

「俺の…いや、”仮面ライダークローズ”のライダークレストじゃん」  
「えっ…って事は万丈君が狙われてる!？」

「チツ、黒い仮面ライダーめ…会ったらぶっ倒してやる!!」

万丈はそう言い色んな筋トレ器具の置かれた部屋へ行き、黒い仮面ライダーと戦うときに備えてウェイトトレーニングをするのだった

t  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d.  
:  
:  
:

## 66. 悪の龍

前回から数日後の朝、万丈がリコと商店街を歩いていると、前の方から椎名龍一と思われる人物が歩いてくる。

「久しぶりだな、十六夜リコ」

「りゅ、龍一君…!? 私達に何の用かしら?」

「フン、何の用か分かっている癖に…」

リコはその言葉を聞いた瞬間、身構えた。万丈は椎名龍一が誰なのか分からない為、何故、身構えているのかよく分からなかった。

「おいおい…2人はどういう関係なんだ?」

「万丈君、この人こそが万丈君を狙っているであろう張本人よ!」

「ま、まじかよ…」

椎名龍一は2人に向けてニヤリと不気味な笑みを浮かべながらビルドドライバーを腰に装着し、ダーククローズドラゴンをドライバーに装填する。

「闇の力をお前万丈に見せてあげよう…」

『Wake up! Dark Cross—Z dragon!』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、椎名龍一はビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『Are you ready?』

「変身」

レバーを回すと、前方と後方にスナツプライドビルダーが現れる。椎名龍一は変身という声を掛けた後、スナツプライドビルダーに挟まれて変身する。

『Wake up burning! Get DARK CROSS—Z DRAGON! Yeah!』

「黒いクローズ…!」

「そう、この姿こそダーククローズ!!」

「そつちが戦うつもりなら戦ってやんよ!!」

万丈はそう言いながらビルドドライバーを取り出し、腰に装着す

る。そしてドラゴンフルボトルを挿したクローズドラゴンをドライバーのスロットに装填する。

『wake up!Cross-Z dragon!』

ドライバーからの音声で鳴り響いた後、万丈はビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『Are you ready?』

「変身!」

レバーを回すと、前方と後方にスナップライドビルダーが現れる。万丈は変身!という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれて変身する。

『Wake up burning! Get CROSS-Z D

RAGON!Yeah!』

「フツ、これが本家様…殺し甲斐がありそうだ…!」

「何ふざけた事言ってるんだ?勝つのは俺だ!!!」

万丈は自分をナメているダーククローズにそう言い、ビートクロザーを左手に持ってダーククローズへ向かっていく。

「おりゃああ!!!」

「フン、甘い!」

万丈はダーククローズに向けてビートクロザーを振り下ろすが、ダーククローズはビートクロザーを弾き、黒いオーラを纏った拳で万丈の胸部を殴り、数メートル先へ吹っ飛ばす。

「チツ、少しはやるじゃねえか…!」

「俺が強いんじゃない。お前が弱いだけだ」

「ナメやがって…!」

ダーククローズの言葉に憤りを感じた万丈はドライバーのレバーを回して必殺技を発動する。

「これで終わりだああ!!!」

『Ready go!』

『ドラゴニックフィニッシュ!』

「終わるのはお前だ」

ダーククローズはそう言いながら、自分に向けて急降下してくる万

丈めがけて黒い龍の化身を放つ。黒い龍の化身は万丈に勢いよく向かっていき、万丈のライダーキックと衝突する。

「うわぁ!!」

万丈は黒い龍の化身に押し負けてしまい、地面へと叩き落とされていく。ダーククローズは倒れている万丈へ近づき、万丈の身体を思い切り蹴飛ばす。

「ぐはぁ…!!」

「弱い…弱すぎる…！これが本家様か…」

「チツ、だったら新しい力見せてやんよ！」

万丈はそう言いながら、アルテミストリガーを取り出し、起動してからトリガーをドライバーの上部にある装填部に装填する。

『アルテミスオン！』

『アルテミスクローズドラゴン』

万丈はドライバーの音が鳴り、アルテミスライドビルダーが前後方に出るのと共にドライバーのレバーを回して変身する。

『ムーンライトレベリング！エビル アルテミス!! dangerous s!Very dangerous!!』

万丈はアルテミスクローズに変身した。だが、何か様子がおかしい。その様子はまるで暴走した時のハザードのようだ。

「ほお…少しは力が増したようだな…だが、俺には勝てない」

「……………」

万丈は無言のままダーククローズに向かっていく。万丈が一步前へ歩く度に背中から数体の龍が出現する。出てきた龍たちはダーククローズに向かっていき、身体のうちこちを噛み付いていく。

「ぐっ…この力はまさか!?!」

「……………」

万丈は龍たちに噛み付かれ、動けないダーククローズの胸部を蹴る。蹴った瞬間、ダーククローズの胸部に強い衝撃が伝わり、ダーククローズの胸部のアーマーにヒビが入った。

「その力、実に興味深い…！今日だけは特別に最後まで戦ってあげよ



う

「ダーククローズは自分に噛みつく龍たちを振り払った後、ダーク  
ビートクローザーを右手に持ち、万丈へ向かっていくのだった…」

## 67. 迫りくるアサシン

ダーククローズはダークビートクロージャーを万丈の右肩目掛けて振り下ろすが、万丈は瞬間移動を使ってダーククローズの攻撃を避けていく。そしてアルテミスクローズの怪しげな黄色い複眼を強く光らせるのと共にダーククローズの四方八方を目にも止まらぬ速さで駆けていく。

「くっ…動きが速すぎて見えない」

「……………」

万丈はダーククローズが動きを捉えられず、好きだらけの間に身体のあらゆる所にダメージを与えていく。万丈が身体のあるところを思い切り殴るのと共にダーククローズのアーマーにヒビが入ってきた、最終的には割れてしまった。

「ぐはぁ…!!」

流石のダーククローズでも今回の万丈の攻撃には耐えられなかったようだ。万丈はアーマーが剥がれたダーククローズの胸部にトドめの一撃を喰らわせようと右拳に紫色の禍々しいオーラを纏わせる。

「万丈君、それ以上はまずいわ!!」

「……………」

「こうなったら…最終手段!」

万丈が暴走していることに気付いたリコは万丈のドライバーに装填されているアルテミストリガーとクローズドラゴンをドライバーから外す。リコが万丈の変身アイテムを外した瞬間、万丈は強制的に変身を解除させられた。

「…………あれ、俺は何してんだ…?」

「あなた、いくら強くなつたからって力の制御くらい出来ないのかしら?! 椎名龍一君を殺しかけてたわよ!!」

「まじかよ…アルテミストリガーこんな物にそんな力があるのか…」

「えっ…あなた、自分が何したか覚えてないの?」

「ああ…全く覚えてねえ」

万丈は自分がダーククローズに深手を負わせた事を覚えていない

らしい。

「でも、あの力が無ければ万丈くんや私は確実に倒されてたわ……万丈くん、私を守ってくれてありがとう！」

「ありがとうなんて要らないぞ」

「えっ…どうして!?!」

「それはな、お前が俺の嫁だからだ…自分の嫁は守って当然だろ？」

「万丈くん…／＼／＼」

万丈にカッコいい事を言われたリコは頬を赤くしながら万丈の身体に自分の身を寄せる。

「んじゃ、帰ろうぜ！」

「うん、帰りましょ！」

ダーククローズとの戦いを終えたりコと万丈は商店街で買い物せずに自分の家へと帰っていった。2人が帰った後、近くの店の中から戦兎とこととはが出て来た。

「アルテミスの暴走状態はハザードの暴走状態に勝る……か。暴走させたら厄介だ…早く改善したいが改善策がない…どうすればいいんだ？」

「名前の通り、きつと月の力が必要なんだよ！まあ月の力の正体は何なのかは分からないけど…」

「とりあえず、また万丈とダーククローズとの戦いが起きたら見に来るぞー！」

「うん、分かった！」

戦兎とこととははそう話しながら店を後にし、朝日奈家へと帰って行くのだった…

その頃、ダーククローズこと椎名龍一はシャドウビルドの元へと戻っていた。

「まさか、あの程度のヤツに手こずるとはな…」

「すみません、私とした事が…ヤツを侮っていました」

「フン、万丈龍我もパワーアップして来たか…ならば、お前もこの人物の力を借りてパワーアップするといい」

と、シャドウビルドはそう言いながら”誰か”を指パツチンで自分の元へ呼び寄せる。

「私を呼ぶという事は何かしら大きなプロジェクトがあるのかな？」

「特にはない。だが、お前達が持つ技術が必要だ。頼んだぞ」

「フン、私達の技術にかかれば万丈龍我を倒せる確率は1000%だ」

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 68. 対をなす龍

ダーククローズとの戦いから数日後の朝、万丈はアルテミスクローズの暴走を抑える為に一人で特訓していた。

「暴走を抑えるならひたすら特訓するしかねえ!!」

「…万丈くん、アルテミスの暴走は物理的な何かを受けて起こったわけではないから特訓しても意味がないと思うわよ?」

「無意味だとしても俺は絶対に暴走を克服してみせる!この特訓でな!!」

「特訓するより戦兔くんにアルテミスの暴走を抑える研究をしても良かった方が早いと思うけど…」

リコは万丈の特訓を横で見ながらズボンのポケットからスマホを取り出し、戦兔へ電話をかける。

「リコ、どうしたんだ?」

「戦兔くん、アルテミストリガーの暴走を止める方法とかないの?」

「…無いわけではないが、今の段階ではまだ未完成なんだ」

「未完成…ね。どのくらいの時間がかかりそうなの?」

「それは…<sup>万丈</sup>アイツ次第だ」

「万丈くん次第それってどういう…」

「あつ、悪い。この後、ある会社に行かなきゃならないんだ!んじや、切るぞー!」

「ちよつ、ちよつと!戦兔くん!?!」

戦兔は用事があることを思い出し、電話を切った。リコは深いため息をつきながら万丈の特訓を終わるまで見守り続けるのだった。

その頃、ダーククローズこと椎名龍一はとある会社を訪ねていた。そして今、椎名龍一の目の前には全身が白色に包まれているこの会社の社長と思しき男がいる。

「ヤツから話は聞いています。力を貸してあげよう…」

「助かるぜ…社長さんよお」

「ただ、今すぐに貸すのは無理だ」

「何故だ？」

「君の持つダーククロードラゴンとドライバーの性能を上げているからだ」

「なるほど。じゃあドライバーが無い間、俺は何を使って戦えばいいんだ？」

「ザイアスペックとこの”フォー斯拉イザー&スラッシングドラゴンプログライズキーを使いなさい」

「プログライズキー？聞いた事ないな」

椎名龍一は初めて見るプログライズキーに少々興味を示す。そして数秒間見つめた後、プログライズキーをズボンのポケットへしまふ。

「んじゃ、社長さん。俺はこれで失礼する」

「分かった、ではまた…」

椎名龍一が去った後、社長の男は指を鳴らして誰かに合図を送る。合図を聞いた”誰か”は部屋のウォークインクローゼットの中から出てくる。

「君がヤツと同じドライバーを持つてるとはね。しかも、そのドライバーの資料までくれるとは…」

「アンタの研究の役に立ててよかった…なるべく早くドライバーを完成させてくれ」

「そう慌てるな…近いうちに完成する」

「任せたぞ」

部屋に隠れていた”誰か”は社長の男にそう言って足早に社長室を出ていき、部屋の外で仲間電話をかける。

「もしもし、俺だ」

「どう？そっちは順調そう？」

「ああ、今のところは順調だ。後はヤツらがどう動くかだ…万が一の時のために準備だけはしておけよ？」

「分かった！」

”誰か”は仲間にそう言い、電話を切る。そして会社を出ていくのだった。

そしてそれと同時に、某所ではダークビルドが妻であろう女性と自分が写った写真を見ていた。写ったとはいえ、写真の自分の顔の部分は破れている。

「……もう少しだ。それまで待つていてくれ」

マスクで素顔は隠されているものの写真を見ているダークビルドからは悲しげな感情が読み取れた。余程写真の女性に特別な想いがあるのだろう。

「ダークビルド様、今帰りました!」

「どうだった?上質な力は貰えたか?」

「いえ、上質な力はまだ未完成だそうで…今回は本家クローズやビルドが知らない様な力を貰いました!」

「なるほど…ならば、クローズを相手にしてその力を試してみろ」

「試すのはいいのですが、今の私では本家クローズに勝つのは難しいのでは…?」

「勝ち負けはどうでもいい…試せばいいのさ。あとついでにこれも渡しておこう」

「これは?」

「これはエンドマテリアルとリンクルストーンを融合して作ったエクリップス・リンクルストーンだ。これを十六夜リコの胸元にかざせ…面白いことが起きる」

ダークビルドは椎名龍一にエクリップス・リンクルストーンを渡す。

エクリップス・リンクルストーンからは禍々しい気を感じる。

「わっ、分かりました…!今度の戦いで十六夜リコ奴に使ってみます」

「よろしい…」

椎名龍一の言葉を聞いたダークビルドはマスクの内でニヤリと不気味な笑みを浮かべるのだった…

その後、椎名龍一はアジトから出て万丈とリコがよくいる商店街へ向かう。商店街へ向かうとそこには本屋で何かの雑誌を見ているリコと本屋の隣にあるスポーツショップでウェイト関係の商品を見て

いる万丈がいた。

「ばつ、万丈くん!!またアイツが…」

最初に椎名龍一の出現に気付いたのはリコだった。リコから椎名龍一が現れたと聞いた万丈はいつでも戦えるよう準備していたのか既にドライバーが腰に装着されていた。万丈は素早くクローズマグマツクルをドライバーに装填し、ドライバーのレバーを回して変身する。

『Are you ready?』

「変身!」

『極熱筋肉!クローズマグマ!』

『アーチャチャチャアチャー!』

クローズマグマに変身した万丈はまだ変身していない椎名龍一へ向かっていく。椎名龍一はクローズマグマツクルの一撃を避け、フォースライザーを腰に装着する。そしてスラッシングドラゴンプログライズキーを起動させる。

『スラッシュー!』

起動させた後、スラッシングドラゴンプログライズキーをフォースライザーに装填し、ドライバー後方のレバーを引いて変身する。

『フォースライズ…!』

『スラッシングドラゴン…!Break Down…』

椎名龍一は仮面ライダー<sup>せい</sup>星に変身した。龍なのに何故、星という名前になったのかは不明だ。

「なつ…何だと!?ダーククローズじゃない…」

「フン、これは仮初めの姿さ…近いうちに新たな力を得たダーククローズを見せれると思うから今日は我慢してくれ」

「我慢だど?我慢も何もパワーアップされる前にお前をぶっ倒してやる!!」

万丈は椎名龍一にそう言い、ドライバーのレバーを回そうとしたが、近くにいたはずのリコの姿が見当たらず辺りを見渡す。すると椎名龍一のいる方からリコの悲鳴が聞こえてきた。悲鳴が聞こえた方を見てみるとそこには椎名龍一に捕まったりリコがいた。



「リコ!! 椎名龍一……てめえ!!」

「おっと、そこから一步でも動いてみる…コイツがどうなるか分からんぞ?」

「ちっ……」

万丈はリコを捕まえている椎名龍一に攻撃を仕掛けようとしたが、椎名龍一はリコの首を強く絞めて万丈にその場から動かないよう命じた。

「お前はリコを捕まえて何がしたいんだ?」

「ある実験さ……」

椎名龍一はそう言いながら何処からかエクリップス・リンクルストーンを取り出し、リコの胸元にかぎす。するとエクリップス・リンクルストーンは妖しく輝き出してリコを精神を蝕んでいく。

「うわあああ!!!」

「リコー!!!」

リコの瞳は次第に黄色へと変わっていき、髪型もいつものハーフアップヘアからサイドダウンヘアへと変わる。

「フハハハ!! んじや後は頼んだぞ…試作品第一号」

「あつ、おい待て!!」

椎名龍一はリコに試作品第一号と言った後、どこかへと行ってしまった。万丈は下を向きながら不安定な姿勢で立つリコのもとへ行く。

「リコ、大丈夫か!」

「……」

「おい、大丈夫なのか聞いてんだろ!!」

「容易く触るな。クソ野郎が」

「はあ?」

「容易く触るなど言っているんだ…それとも私に殺されたいのか?」  
「どうしちゃったんだよ!?! いつもと何か違うぞ!」

「フン、どうやら殺されたいようだな…いいだろう、望み通り私が殺してやる…」

リコは自分から一向に離れようとしないう万丈にそう言い、エクリップ

ス・リンクルストーンの力で変身する。

「はああ!!!」

リコは身体に邪悪な黒いオーラを纏う。黒いオーラはキュアマジカルの衣装へと姿を変え、リコを包んでいく。黒いオーラに包まれたリコは黒いキュアマジカルへと変身した。

「さあ、戦いましょう」

「リコ……」

リコは自分の背より高い巨大な鎌を持ちゆつくりと万丈の方へ歩いていく。一方の万丈は洗脳されているリコを前に一步も動けない状態にいるのだった…

## 69. 月蝕と邪龍

リコは巨大な鎌を振り回し、万丈を攻撃する。普通であれば万丈は攻撃を防いで相手の出方を伺うのだが、この時の万丈はリコの突然の異変に驚き、身体が動かなかつた。

「ぐはあ……」

リコの攻撃を避けようとしなかつた万丈は左肩から右腰にかけてリコの大鎌による斬撃を受けてしまう。だが、万丈はこの一撃で身体  
の自由を取り戻し、直ぐに反撃に転じる。

「目を覚ませええ!!」

万丈はクローズマグマナツクルでリコの腹部を殴る。が、その拳には勢いが無く、リコには全く効いていなかった。

「……できねえ。自分の大切な人を殴るなんてできねえよ……」

「フン、甘い……!!」

万丈は気が抜けてしまい、リコに攻撃の隙を与えてしまう。リコはその隙を突いて万丈の腹部を大鎌を持ってない右手の拳で殴る。

「ぐはあ……!!」

万丈は殴られた腹部を抑えながらその場に膝をつく。そして痛み  
に苦しみながらもリコにこう言う。

「はあ……はあ……今のお前を止めるにはこれしかないみたいだな……」

万丈はアルテミストリガーを取り出し、ドライバー上部にトリガー  
を挿す。その後、クローズマグマナツクルと入れ替えでクローズドラ  
ゴンをドライバーに装填し、ドライバーのレバーを回してアルテミス  
クローズへと変身する。

『ムーンライトレベリング! エビル アルテミス!! dangerous!!』  
s! Very dangerous!!』

「……………」

アルテミスクローズに変身した万丈は前回と同様に無言で敵リコ  
へと向かっていく。

「フン、急に大人しくなったという事は負けを認めるって事かしら?  
それならこの一撃で終わらせるわ!!」

リコは大鎌にエクリップス・リンクルストーンの力を纏わせてから万丈に向けて大鎌を振り下ろす構えに入る。

「これで終わりよ!!!」

と、リコが万丈に向けて大鎌を振り下ろした瞬間、万丈がリコの背後に瞬間移動をする。攻撃が空振ったリコは隙を与えてしまう。万丈はその隙を突いてリコの右の脇腹を思い切り蹴る。

「ぐっ……ぐはあ……!!」

万丈の攻撃を受けたリコは蹴られた右の脇腹を抑えながらその場に倒れ、うずくま蹲る。万丈は蹲っているリコの左腕を掴み、近くの建物の壁へ投げつける。

「うぐっ……!」

「……………」

万丈は壁に食い込んだリコを見た後、ドライバーのレバーを回して必殺技待機状態へ入る。

『Ready go!』

『アルテミスフィンッシュ!』

万丈は8体の黒龍を片足に纏いながらリコに向かって急降下していく。そしてリコは万丈の必殺技を浴びる。必殺技を浴びた瞬間、リコのプリキュアの衣装は大部分が破れてしまい、全身の7割の肌が露出していた。露出しているとはいえ、肌からは血が流れ出ている。リコは変身が解けると共に地面に倒れてしまった。リコの目は白目をむいていて早く適切な治療をしなければ助からない様子。

「嘘……でしょ……?」

凄惨な現場にまず現れたのはみらいだった。みらいは血だらけのリコを見て唾然とする。だが、このままではまずいとすぐに救急車を呼ぶ。この時、みらいはリコのことを気にかけて過ぎて自分の元にアルテミスクローズが迫っている事に全く気付いていなかった。

「……………」

みらいに近づいた万丈がみらいを殴ろうとしたその時、ビルド Mk-IIIに変身した戦兔が現れ、万丈の拳を受け止める。

「まさかこんな事になるとは……!だが、こうすればこっちのмонだ!」

戦兎は押されながらも万丈のドライバーからアルテミストリガーとクローズドラゴンを抜いて強制的に変身を解除させる。

「おわあ！……ってまた暴走したのか、俺……」

「万丈、この力を克服する方法が無いうちは悪いヤツとの戦い以外でアルテミストリガーを使うな！」

「お、おう……ってかそんな慌てた口調でどうしたんだ？」

「リコを見……やっぱり何でもない。とりあえず、今日は朝日奈家に泊まっていけよ」

戦兎は万丈に今のリコの姿を見せてしまうと万丈が自分を責めてしまうと思い、リコの姿を見せずにそのまま万丈を朝日奈家へと連れて行くのだった……

そして朝日奈家に戻った戦兎は万丈に缶コーヒーを渡し、自分の部屋にあるパイプ椅子に座らせる。

「おい、何かみらいとのツーショット写真多くないか？」

「別にいいだろ……彼女なんだし……」

「まあそうだけだよ」

万丈は缶コーヒーのステイオンタブを開けて缶コーヒーを飲みながら戦兎と話し始める。

「なあ戦兎、この力をどうにか制御できないのか？」

「今の段階では無理だ。ただ、さっき万丈がいた近くに落ちてたコレがカギになりそうな気がするんだ……」

戦兎はそう言いながらヒビの入ったエクリプス・リンクルストーンを着ているトレンチコートのポケットから取り出す。

「それって椎名龍一が持ってたヤツ!!」

「そう、コレは椎名龍一が持っていたヤツだ。おそらくダークビルドから渡された物だろう……」

「そうなのか……ってかなんでお前が俺と椎名龍一が戦ってた事知ってるんだ？」

「えっ……いや、それは……ってかダークビルドの持つエンドマテリアルは必ず暴走を引き起こす……アルテミストリガーやエクリプス・リン

クルストーンの様にな」

「エンドマテリアルが暴走を引き起こすって……待てよ、ならアルテミストリガーは何なんだ？ ジェネシスマテリアルから作った物じゃないのか？」

「ジェネシスマテリアルで作ったとはいえ、ジェネシスマテリアルは見つけたばかりの新物質だ。完成形でもない限りは暴走を引き起こす可能性がある。だから俺は万丈にアルテミストリガーを渡した時、善の力と悪の力が宿ってるって言ったんだ」

「未完成なら渡すなよ……」

「クローズマグマで勝てそうならアルテミストリガーを渡すのはもつと後にして……けど、クローズマグマとほぼ同スペックのビルドストームで苦戦したんだ。スペックを上回れて戦いを有利に出来るのなら渡す以外に選択肢はないだろ……」

「チツ、なら」カギ」とやらの研究を早く完成させてアルテミストリガーの副作用を無くしてくれ!!」

「分かった、なるべく早く完成させる。……だからお前もアルテミストリガーの使い所には気を付けろ」

「ああ、気を付ける」

万丈は戦兔にそう言い、自分の部屋へ戻っていく。戦兔はエクリップス・リンクルストーンを机の上に置いてエクリップス・リンクルストーンを調べる始めるのだった。

その頃、みらいはリコの病室にいた。適切な処置は施されたもののリコが目覚ます気配は全くない。

「リコ……」

みらいは目から大粒の涙をポロポロと流していた。リコが傷だらけで倒れているのを見た時は万丈に対してこれまでに無いほど憤りを感じていたが、戦兔から事情を聞いて万丈は悪くないという事を知ってからは万丈に向けたはずの矛先をどこへ向けたらいいのか分からず、微妙な感じになっていた。

「私のこの怒りはどこにぶつければ……」

その後、みらいが暫くの間ボーっとしていて、ことはが病室に入ってきた。ことははボーっとしているみらいの肩を軽く数回叩いてから声をかける。

「みらいー……みらい？どうしたの、ボーっとして」

「あつ、はーちゃん！ううん、何でもないよ！ちよつと考え事してただけ！」

「なら良いんだけど……」

ことははそう言いながらみらいとは反対の窓側の方のベッドの近くの椅子へ座る。

その頃、リコは空が薄暗く自分の近くに小さな川が流れている不思議な世界を彷徨っていた。

「ここは？つていうかこの世界は何!?!」

突如として目の前に現れた見慣れない世界を見たリコは謎の焦りからか立ち止まってはいられず、小さな川の方へと歩み出すのだった

：

## 70. 朝月夜（あさづくよ）の魔法つかい

リコが川を歩いていると、背後から複数人の声が聞こえる。聞き覚えのある声だ。

「えっ、誰なの？誰が私を呼んでいるの!？」

聞き覚えのある声のだが、何故か誰の声を思い出せない。なのにリコの目からは自然と涙が流れていた。

「な、なんで涙が…」

涙を流しているリコは声の主を見る為に声の主がいる後方へ身体ごと振り向く。するとそこにはみらいとことはがいた。

「みらい…」

リコは姿を見てやっとこの声が誰のものなのかが分かった。みらいの声と知り、リコは早速みらいとことはの方へ向かう。

「リコ、こっちだよ！皆が待ってるよ!!」

「リコ〜！早く、早く〜!!」

「うふふ…みらい、はーちゃん足速いわよ！もう少しゆっくり…」

リコは何も無い所へ走っていくみらいについて行く。そしてある程度走った時、突如周りの景色が暗転して落ちる感覚に襲われる。

「はっ!!さっきのは夢…なの?」

リコが目を覚ますと、そこは病室だった。自分の寝るベッドの左側にはみらい、右側にはことはがいた。

「2人とも、心配かけてごめんなさい…あともう少しだけ休ませて欲しいわ」

リコは自分の身体の傷の位置を見ながら寝ている2人にそう言う。そして開いたカーテンの開いた窓から外を見ると、外は既に朝月夜になっている。リコはそんな朝月夜に包まれた外の景色を少し眺めた後、再び眠りについた。

それから数時間後の朝日奈家では戦兎が自分の部屋でエクリプス・リンクルストーンを調べている。戦兎は調査が予想より早く終わりそうなのでついでに研究までしていた。



「よし、あと少しでエクリップス・リンクルストーンからエンドマテリアルが抜けるぞ……」

エンドマテリアルが抜けたエクリップス・リンクルストーンは色が紫色から黄金色に変わっていく。

「これでリコは暴走せずに済むな……となると、あとはアルテミストリガーか」

戦兔がそう考えていると部屋の扉が開いた。開いた扉の外には万丈がいた。

「何やってんだ？」

「エクリップス・リンクルストーンからエンドマテリアルを抜いてるんだ」

「なるほどな……ってか今に至るまで忘れてたけど、リコはどうしたんだ？ 普段なら帰ってこなければ連絡くれるのに何故か今回は連絡くれないし……」

「口では言えない……リコのいる場所に行くから俺のバイクに乗れ！」

「何だよ、言えばいいのに……まあいいや、分かった！ 乗るわ！」

万丈は口で言おうとしない戦兔に少し疑問を抱きながらもバイクの後部座席に乗りこみ、リコのいる場所へと向かうのだった……

病院へ着いた2人は院内へ入っていく。万丈は病院に着いた時点で自分がリコに怪我を負わせた事に気づく。万丈の先程のような普通の表情も段々と真剣な表情へと変わっていく。

「見舞いが遅れてすまない……あれ、ことはも来てたのか」

「当たり前だよ！ リコは大切な家族（仲間）だもん!!」

戦兔がことはと話す中、万丈は入ってすぐの所で一人寂しく体育座りで座っていた。まるで呪怨のとしおのようだ。

「万丈君、こっち来て……」

「……………」

「過去をいつまでも引きずるなんて情けないわよ」

「リコ……!」

万丈はリコの元へ歩んでいく。リコの負傷具合を見て改めて戦兔が言った“アルテミストリガーの使い所”に気をつける事にする。

「全ては俺が弱いせいだ…本当にごめんな」

「謝らなくていいわ。相手に隙を見せた私も悪いし…」

「リコ……」

「……万丈君、見ての通り私は暫くは戦えないわ。だから、今度ダーククローズと戦う時は私と一心同体となって戦いましょう！離れていても2人の心は一つの体にある！」

「そうだな、俺とお前の絆で絶対ダーククローズを倒そうな！」

万丈はそう言いながら、リコに向けてサムズアップする。リコも同じタイミングに万丈へ向けてサムズアップするのだった。

「んじゃ、俺は用事があるからここらへんで失礼する…行くぞ、ことは」

「うん！」

戦兔は用事があると言いことはを連れて病室を出て行く。みらいは2人が病室を出ていく姿を怪しむような顔で見ている。

「みらい？どうしたの？」

「最近、戦兔とはーちゃんが一緒に出かけるの……」

「はーちゃんは私達や戦兔くんにとって子供みたいな存在だし、どこかへ連れて行きたがるのも無理ないわ」

「で、でも……」

「とにかく、2人にそんな“特別な感情”はないわ！」

「だといけど……」

リコはみらいをフォローするが、みらいの不安な顔は変わる事はなかったのだった……

## 71. 嫉妬から生まれし鬼石（きせき）

戦兎とことはは次の万丈とダーククローズの戦いを見るための待機場所を探していた。待機場所を探す2人の後を追いかけているのが1人いた。

「戦兎……浮気……じゃないよね？」

それはみらいだった。戦兎への愛が強いみらいは戦兎の浮気を疑うのと共に戦兎の近くにいることはに嫉妬していた。みらいが戦兎とことはの後を再び追う為に動こうとした時、何者かに掴まれ数m先まで投げ飛ばされた。

「痛っ……だっ、誰が私を……？」

「俺だよ、俺」

「あなたは……シャドウビルド!？」

「久しぶりだな！朝日奈みらい」

「何しに来たの？」

「お前を消しに来た……！障害となるものは先に消すべきだと思っ  
てなあ!!」

シャドウビルドはそう言いながら、みらいに襲いかかる。みらいは自分の後方に跳び、シャドウビルドの攻撃を避ける。そして服の中から武器を取り出す。

「護身用の武器を戦兎から貰っておいて良かったあ……」

「フン、その”戦兎”とやらは今、別の女といるけどな！」

「うるさいっ!!」

みらいはそう言いながら、剣型の武器を何回も振り下ろしてシャドウビルドを攻撃しようとするが、全て軽く避けられてしまう。

「怒りに身を任せて戦うスタイル……らしくないなあ」

「事情や気持ちを知らない癖に!!」

みらいは最終手段として振り下ろしかけた武器から手を離し、シャドウビルドに向けて武器を投げつける。みらいに予想外の攻撃を仕掛けられたシャドウビルドは避けられず、みらいの投げた武器に当たる。

「フツ、目覚めてきたようだな…！お前の嫉妬の”ホノオ”が!!」  
「しつ、嫉妬なんかしてない！」

「なら、お前の胸元で光るそれは何だ？」

シャドウビルドにそう言われたみらいは自分の胸元を見る。すると自分の胸元には紅く光る何かがあった。

「これは？」

「それこそがお前の心に眠る嫉妬の”ホノオ”。これはお前の嫉妬が溜まる度に力を増していく」

「こんなの…いらぬよ！」

「いらぬと言ってももう遅い…目覚めた以上はその”ホノオ”と向き合うのだ」

「なら、この力であなたを倒す！」

「フン、やってみろ」

みらいは嫉妬の”ホノオ”をリンクルストーンのような感じに具現化させ、自分の胸元に具現化させた嫉妬の”ホノオ”をかざして変身する。

「ハア…ハア…漲る、私の中のホノオが!!」

みらいはキュアマミラクルのルビースタイルに似ている姿に変身したが微妙な違いがあり、髪はロングヘアで瞳は紅くなっている。そして胸元には良くある炎のエンブレムが飾られている。

「少しは楽しませてくれるだろうな…？」

「楽しませる気はない！…ここであなを倒す!!」

みらいはそう言いながら、シャドウビルドに炎を放つ。放たれた炎はダークビルドの四方八方を囲む。シャドウビルドは炎の檻の中に閉じ込められる。

「なるほど…少しはやるじゃないか」

「まだまだ!!」

みらいはそう言うと、炎の檻を縮小させていき、ダークビルドを追い込んでいく。

「これで終わりにする!!」

「フツ、それはどうかな？」

シャドウビルドはブレードモードのダークドリルクラッシュャーに海賊フルボトルを装填し、炎の檻に向けて必殺技を放つ。

『Ready Go!』

『ボルテックブレイク!』

ダークドリルクラッシュャーから放たれた水の刃により、炎の檻は消化されてしまう。

「フフツ…」

「嘘でしょ…!?!」

「どうやら、まだホノオが弱いようだな……しょうがない、俺がもう少しだけホノオを強めるのを手伝ってやんよ」

シャドウビルドはそう言い、みらいの嫉妬を強める為に戦兔がみらい以外の人といった映像をみらいに見せるのだった……

一方、その頃万丈はリコに何か買おうと病院の外に来ていた。すると病院の前には丁度移動販売のドーナツ屋が来ており、万丈はリコにドーナツを買ってく事にした。

「このスタードーナツってやつ2つくれ!」

「普通のスタードーナツもいいけど、このイチゴスタードーナツもいいルン!」

「……ルン?」

ドーナツ屋の店員は話し方に独特な語尾を使いながら万丈にイチゴ味のスタードーナツを推める。

「語尾は気にしないでほしいルン…」

「あつ、ああ…なんかごめんルン……って、俺にもお前の語尾が移ったじゃねーか!!」

「と、とりあえずお客様、何にするルン?」

「イチゴスタードーナツを2個くれ」

「ご注文ありがとうございますルン! ひかる、スタードーナツ2個ルン!」

緑髪ツインテールの店員は移動販売車の厨房にいるピンク髪ショートカットのひかるという人物にそう言う。ひかるという人物は早速、ドーナツを作り始める。

「なあ店員さんよ…好きな人っているか？」

「ルン!?まさか”ナンパ”ルン？」

「ナンパじゃねえよ…ただ聞きたかっただけさ」

「そうルン…私に好きな人はいないけど隣にいるひかるには好きな人いて今、ひかるの”コイ”<sup>恋</sup>っていうのを応援してるルン！」

「へえ…その相手はどんなやつなんだ？」

「リーゼントヘアで不良みたいだけど、宇宙に詳しくて何よりも友情を大切にする良い人ルン」

「なるほどな…」

と、ドーナツが出来上がるのを待っている間に万丈が緑髪ツインテールの店員と喋っていると、どこからか怪しげな足音が近づいてきた。

「ほお…愛する人がいながら他の女に浮気か？万丈龍我よ」

「またお前か…何しに来た？」

「目的は一つ、あなたを倒す事」

突如万丈達の前に現れた椎名龍一はそう言いながら、フォースライザーを腰に装着し、スラッシングドラゴンプログライズキーを起動させる。

『スラッシュュー!』

起動させた後、スラッシングドラゴンプログライズキーをフォースライザーに装填してドライバー後方のレバーを引いて変身する。

『フォースライズ…!』

『スラッシングドラゴン…! Break Down…!』

「…まったく、こんなところで戦うことになるとはな…」

万丈はそう言いながら、腰にドライバーを装着した後、クローズマグナツクルをドライバーに装填し、ドライバーのレバーを回して変身する。

『Are you ready?』

「変身！」

『極熱筋肉!クローズマグマ!』

『アーチャチャチャアチャー!』

クローズマグマに変身した万丈は仮面ライダー星である椎名龍一へ向かっていく。椎名龍一は万丈を攻撃する前に邪魔になるであろうドーナツ屋の移動販売車を襲う。

「ちよ、やめろ!!!」

「フン、人間が2人いなくなったただけだ：地球に害はない：」

襲われた移動販売車は激しい炎に包まれていた。車の中にはまだ人がいるというのに……

「その腐った考え：俺がぶっ潰してやる」

万丈は怒りで体を震わせながら椎名龍一にそう言い、マグマナツクルに力を貯めながら椎名龍一に再び向かっていくのだった……

そしてダークビルドと戦っているみらいは戦兔が魔闇という映像を見せられた。映像を見た瞬間、みらいの身体からはこれまでにないくらいのオーラが溢れ出てくる。そして胸元の炎のエンブレムからは新たな銃型の武器が生成された。

「ハア：ハア：さらに滾る：私のホノオが!!!」

「やつと力に目覚めたようだなあ……」

「あなたを倒す……!」

みらいはそう言いながら、新たな銃型武器のトリガーを三回引いて炎の拡散弾を放つ。放たれた銃弾の速さは凄まじく、シャドウビルドは避けられず全ての銃弾を受けてしまう。更に銃弾が当たった部位が発火し、次々と炎が体の違う部位へと燃え移っていく。

「チツ、これが目覚めた力か……!仕方ない、ここは一時撤退だ」

シャドウビルドはそう言い、どこかへ消え去っていくのだった：シャドウビルドがいなくなるのとともにみらいの変身が解ける。そして変身が解けた瞬間、嫉妬の感情も消えた。

「あれ?なんで私、他の女の子に嫉妬してたんだろう?」

みらいはそう言いながら、戦兔とことはを尾行するのをやめてリコのいる病院へとあるいていくのだった……

## 72. 世界のターニングポイント

椎名龍一が変身している仮面ライダー星の襲撃を受けてドーナツの移動販売車は激しく燃えていて、移動販売車の中にいた2人は移動販売車と共に炎に吞まれてしまったかと思われたが、移動販売車が燃え始めるのと同時に戦兔が2人を助けていた。

「大丈夫か？お二人さん」

「た、助けてくれてありがとうルン……」

「傷一つなく無事でよかった。さあ、安全な場所へ逃げて！」

「あ、あなたは……？」

「俺は天才物理学者の桐生戦兔、仮面ライダービルドだ！」

戦兔は自分について聞いてきた緑髪の女性にそう言い、万丈に加勢していく。

「ララ、胸に手を抑えてるみたいだけど……大丈夫？」

「違うルン。ひかる、何か胸がチクチクするルン」

「なーんだ、そういう事ね！ララも”恋”したんだね」

「恋したって……私は一回助けられただけルン！それだけで好きになるはずが……」

「いや、恋する理由なんて単純なものでも良いんだよ」

「ひかる……」

緑髪の女性の名はララというらしい。ララは自分を助けてくれた戦兔に恋をした。ひかるはララを見てニッコリと優しい笑みを浮かべるのだった。その頃、ことは病院に生えている木の陰から戦兔、万丈と椎名龍一の戦いを見ていた。

「変身した姿が仮面ライダー斬であろうがダーククローズであろうが動きは”同じ”で椎名龍一の動きの”はず”！戦兔、椎名龍一の動きをしっかりと学んできて……！」

ひかる、ララとことはが見守る中、戦兔と万丈は椎名龍一と戦い続けている。戦兔の加勢により、現在は万丈が有利だ。

「2対1か。面白いじゃない……！」

「とつとと終わらせるぞ、戦兔!!」



「もう少しだけ待ってくれ…ヤツの戦闘データをこのビルド Mk—  
I—Iにインプットさせる」

「ビルド Mk—I—Iにはそんな機能があるのかよ…便利すぎるぜ」  
「ビルドをリニューアルさせる際にオマケで付けておいたのさ」

「流石だぜ、戦兔！んじゃ、改めて…行くぞ!!」  
「おう！」

戦兔と万丈はビルド Mk—I—Iに関する話を少ししてからまた椎  
名龍一へと向かっていく。戦兔はビルド Mk—I—Iのウサギのハ  
フボディに自分の全ての力を一時的に集め、跳躍力を増幅させる。

「この跳躍力についてこられるかな？」

「チツ、舐めたマネしやがって…！」

「どうした、攻撃してこないのか？いや、出来ないか」

「どうやら俺の本気を見たいらしいな…なら、見せてやるよ」

戦兔は戦闘データに必要な”攻撃パターン”を記憶する為に椎名  
龍一を煽って自分を”本気”で攻撃するよう誘導する。

「うおお!!」

椎名龍一は仮面ライダー斬アーマーの背中に大きな翼を、手に巨大  
な爪を生やし、戦兔へ向かっていく。

「オラアア!!」

「なるほど、それが”その姿”での本気か…」

「黙りやがれえ!!」

椎名龍一は戦闘データを取られているとも知らずにありとあらゆる  
攻撃方法で戦兔を攻撃する。だが、攻撃は全て避けられていた。

「戦闘データは全て貰った。んじゃ、これで終わらせる」

戦兔はそう言いながらビルド Mk—I—Iの能力で強靱な装甲を着  
た兎と多くの兵器という兵器を備えた戦車を生成する。そして椎名  
龍一を攻撃するよう指示する。

「自分で創り出したものを自由自在に使えるだ?!」

「フン、予想外を考えて戦うのが天才だ…予想外を考えていない時  
点でお前は天才でもないし、負け確定だ」

「ふざけんなあ!!」

「終わりだ!!」

戦兎はそう言いながら指を鳴らす。戦兎が指を鳴らすと共に兎と戦車は椎名龍一に向かって一斉にレーザー砲を放つ。レーザー砲を受けた椎名龍一は変身が解けるのと共にその場に倒れ込む。

「椎名龍一、なぜ俺とリコを戦わせたんだ?」

と、万丈が椎名龍一にリコと自分を戦わせた理由を聞こうとした瞬間、椎名龍一の周りに邪悪なオーラが発生し、何者かが現れる。

「久しぶりだな、万丈龍我…」

「シャドウビルド…! 何しにきた!」

「ただコイツを回収しにきただけだ…今回は何もするつもりはない」

シャドウビルドはそう言い残し、椎名龍一を抱えて邪悪なオーラを纏ってどこかへと消えていった。

「さてと…もう出てきても大丈夫だぞ」

「助けてくれて…あ、あ…ありがとうルン」

「胸に手を抑えてるみたいだけど大丈夫か?」

「こつ、これは何でもないルン! ひ、ひかる!! 早く家に帰るルン!」

戦兎はララが自分の左胸に両手を当てているのを見てそう言う。

ララはそう言われて動揺したのか、左胸に当てていた両手を身体の後ろで組むような感じにする。

「ララ、この人にもう一つ何か言う事があるんじゃないの?」

「えっ…//」

「ほら、早く!」

「えっ…えつと…」

戦兎に何か言うようひかるに諭されたララはその瞬間に身体をモジモジさせ、顔を赤らめながら口を開き何かを言い出す。

「せつ、戦兎さん!」

「ん? 何だ? (この展開、まさか…!」

「あなたの事が好きルン!!!」

t o b e c o m t i n u e d . . . . .

### 73. もう一つの物語を求める者

いきなり告白された戦兎はこの展開を予想はしていたものの目を見開き、えっ…というような感じで驚く。

「俺が…好き…？いやいやいや、俺とあなたは出会って間もないんだぞ?! 出会って間もない人間に好きなんて言っちゃダメだぞ!」

「で、でも…戦兎はさっき私とひかるを助けてくれた…あの時に私の胸がギュッと締め付けられたルン!!」

「……………ここ、病院だから心電図とってもらったらどうだ?」

「シンデレンズ? よく分からないけど、結局、告白はOKかダメかどっちルン?」

「ダメだ。第一、俺にはみらいがいる!」

「……………戦兎にはカノジョがいる…か。でも、私は諦めないルン!! 戦兎、これで(私のあなたに対する恋が)終わったと思うなよ!……………あれ、このセリフどこかの某アニメで言ったセリフに似てる気が…いや、気のせいルン!……………ってひかる!! 今回は帰るルン!」

ララは去り際に某アニメの某キャラを彷彿させる言葉を言いながら、ひかると共に駆け足で自分の家へと帰っていった。

「……………変な子だな。ってかことは、その木の陰にいるんだろ? そろそろ出てこい」

「えっ、なんでここに私がいるって分かったの!?!」

「万丈が何かと戦う時には必ずお前がいるからな」

「あはは…戦兎は随分と細かい所まで見てるんだね…」

「とりあえず、俺たちは帰って椎名龍一の戦闘データを基にダークビルドに対抗する力の研究をするぞ」

「分かったよ」

戦兎はことはにそう言い、ことはと共に朝日奈家へと帰って行くのだった。一方、1人残された万丈は土産の一つも無いままリコの病室へ戻ろうとしていたが、ふと自分のポケットに手を入れると何かが入っていた。白い紙一枚とイチゴ味のスタードーナツ2個だった。白い紙には”リコに渡すんだろ? 持っていけよ”と書かれていた。

紙の最後には戦兎と書かれていてこのメッセージを書いた主が戦兎である事が分かった。

「あいつ…もしもの時の為に予備を買っていてくれたのか…！有り難く貰うぜ、戦兎！」

万丈は二つのイチゴ味のスタードーナツの入った紙袋を持ってリコの病室へと向かうのだった…

その頃、みらいは家への帰り道を歩いていた。…だがどこかおかしい。みらいが帰り道を歩いている途中、たまにサブリミナル効果の様に嫉妬や憎悪、不信という文字があちこちに浮かぶ景色が見えた。

「何…これ…？」

みらいは初めて見る”不安を煽る様な景色”に怯えていた。そんなみらいの元に1人の女の子が現れる。

「お…いや、みらいちゃん、戦兎くんを信じて！彼はあなたを絶対に裏切らない！」

「あなたは…？」

「ただの助言者ですよ！それではまたどこかで」

女の子はみらいを勇気づけた後、どこかへと姿を消していった。女の子に勇気づけられたみらいの目の前にはもう何も不安なものはないかった。

「急に何かから解放感された感じ…！あの子は一体…？」

みらいは自分の前に現れた女の子に既視感や不思議さを感じる。そして遭遇して一っだけ感じたのが”女の子は自分の人間関係でも身近な方に部類される存在”ということ。なぜかは分からないがみらいは女の子を自分の身近な存在だと感じるのだった。

一方、朝日奈家に着き地下の研究部屋に入った戦兎はふとある事について考えだす。

「なあ、ことは。何でこの世界には複数の仮面ライダーやプリキュアがいるんだと思う？」

「それは戦兎がこの世界をクロスワールドに創り変えたからなのでは

？」

「そうだけど……普通、それぞれの物語の設定を持つライダーやプリキュア達が来ると世界は成り立たない。なのにこの世界は何故か成り立っている……」

「……という事はこの世界では何が起きてもおかしくないって事？」

「そうだ。あと、厄介な事も起きかねない」

「厄介な事？」

「」物語の設定の融合」だよ。例えば、ゼロワンのアークの力をビルドである俺が使うとする……そうすれば何が起きてもおかしくないこの世界では俺はアークビルドになる。だが、同時にビルドの設定とアークの設定が交わり、確立していた設定が消え、めちやくちやな設定が生まれる……一度設定が交わってしまえば最後、この世界をまた何もが交わらないような元の世界に戻したい時に戻せなくなってしまう。そう、設定があるから……」

「椎名龍一……」

「……まあこれはまだ仮の話だ。真相は事が実際に起きてからじゃないきや分からない」

戦兎はそう言いながら研究室の車輪付きの椅子に座り、車輪付きの椅子を机に寄せて研究を始めるのだった……

それと同時に、某社長室では全身白色の服を着た男がグレードアップしたビルドドライバーとさらに禍々しさを増したクロードラゴンをまだ目を覚ましていない椎名龍一の近くのテーブルに置いた。それと共にダークビルドがやって来て新たなアイテムを手に取り、それをじっくり見ながらこう言う。

「多くの龍の力とダーククローズの持つ『漆黒』を集めて造られたヒュドラドラゴン……さあ、思う存分暴れるが良い……全ては我が望む物語の為に！」

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 74. 黒龍、ここに極まれり

万丈はリコのいる病室へ来ていた。戦兎から貰った二つのイチゴ味のスタードーナツを袋から取り出し、一つをリコに渡す。

「万丈くん、ありがとう！」

「……元気になってくれて良かった！元気になってなかったら俺は……」

笑顔の半面、浮かない顔をする万丈はそう言う。ベッドに横になっているリコは左手を万丈の右手に重ね、首を軽く横に振りながらこう言う。

「そんなに気負わないでいいのよ。万丈くんがあの時、私を止めてなければ今頃町はどうなっていた事やら……」

リコは昨日と何一つ変わらない街の景色を病室の窓から眺めながら感傷に浸る。

「……こんなことに俺たちを巻き込んだ椎名龍一ともそろそろ決着をつけたいとな」

「そうね……」

2人はそう話しながら互いに顔を紅く煌めく夕陽の方を見る。夕日を見る2人の顔は何かを決意したような顔に見えた。

そして自分の部屋にいる戦兎は部屋に入り、研究机に向かってから数時間をかけてアルテミススクローズ専用の新たな武器を完成させる。

「やっと完成した！ヒント貰った分、早く完成したな」

「ヒント？誰がヒントをくれたの？」

「いづれ分かるさ」

「……というか、この武器の能力は何なの？」

「この武器はアルテミストリガーに宿る暴走の力を利用する。簡単に言うと暴走の力を攻撃力に変えるというものだ」

「そんな事が出来るんだ……！」

ことはは改めて戦兎の天才っぷりに驚く。ことはの驚く顔を見た戦兎はドヤ顔をしていた。

「……で、武器の名前は？」

「ドラゴンソードだ！」

「シンプルすぎ!!!普通、アルテミスカリバーとか少しカッコ良さのある名前を……」

「それだ!!はい、採用!この武器の名前はアルテミスカリバーね」

戦兎は素直に自分の考えた”ドラゴンソード”よりことはの考えた”アルテミスカリバー”の方がカッコいいと思い、新武器の名前を迷うことなく”アルテミスカリバー”にした。

「よし、後は実験するだけ……」

「えっ!?!」

「……いや、やっぱやめだ。ぶっつけ本番で万丈が使いこなす事を祈ろう」

「ええ……」

「さてと、武器も完成した事だし…そろそろ寝るぞ!」

「そうだね、んじやおやすみ!」

ことはは戦兎におやすみと告げ、自分の部屋へと戻っていく。数時間集中し、新武器を開発してとても疲れが溜まっている戦兎はベッドに横になると数分もたたないうちに眠りについてしまった。

翌日の朝、万丈はリコの病室で目を覚ます。しっかりと繋がれた自分の手とリコの手を見て改めて昨日の決意が夢、幻ではないと再認識する。万丈は朝日を浴びる為に病室のカーテンをゆっくりと開けていく。カーテンを開けた先にはいつものように眩い陽の光が町全体に広がって……

「な、なんなんだこれは…!?!」

太陽が放つ眩い光は斑点のように部分的にしか街を照らしておらず、近くでは雷が激しく轟いていた。万丈は町で何かマズい事が起きていると瞬時に思い、病院の外へと出る。するとそこには全身が黒く、黄色い複眼の仮面ライダーがいた。

「万丈………龍我…!!」

「お前は椎名龍一…!?!」

「俺はお前の存在を消して俺が望む”世界線”を創り出す」

「この世界はリコ達との思い出が詰まった最ツ高の世界だ!!お前の望む世界にはさせねえ!」

「そう言うと思った。じゃあ…死のうか」

椎名龍一はそう言いながら邪悪な黒い龍の鱗が刻まれている禍々しい弓を取り出し、弓を構えて万丈に向け、矢を放つ。

「うお!?!いきなり攻撃してくるか…!しょうがねえ…戦うしかないみたいだな」

万丈はそう言いながらビルドドライバーを腰に装着し、専用のフルボトルが挿されたクロースマグマナツクルをドライバーに装填する。そしてドライバーのレバーを回して変身する。

『Are you ready?』

「変身!」

『極熱筋肉!クロースマグマ!』

『アーチャチャチャアチャー!』

クロースマグマに変身した万丈は椎名龍一に近づこうとするが、見えない壁に弾かれ、近づく事が出来ない。

「まじかよ…!?!こういう時、お前戦兔ならどうする?」

同時刻の朝日奈家、戦兔はようやく目を覚ます。目の前にはしかめっ面をしたことはがいた。

「うくん…!?!お前、なんで俺の部屋にいるの!?!」

「時間がないからだよ!!もう病院前に現れるの、奴が!!」

「まじかよ…!?!早くこの武器を万丈に届けなと!」

戦兔は適当な服を着て、新武器を持ってことはと共に万丈達がいる病院へ向かっていく。戦兔が起きてから病院に向けて出発するまではまだ十数分しか経っていなかった。

「ねえ戦兔」

「何だ?」

「もっとスピード出せないの?」

「出せるけど出したら違反だ!」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ!」



「…つたく、分かったよ」

ことはに急かさされた戦兎はスピードを上げ、安全かつ速く目的地へと向かっていく。

その頃、リコは禍々しいオーラを放つ椎名龍一と戦う万丈が心配なのか病室を抜けて病院の外へ出ようとする。だが、傷がまだ完全に癒えてない為、歩くことはあまりできず、歩いたり、倒れたりを繰り返しながら病院の外へ向かう。

「万丈（リコ）さん、その状態で病室を出てはいけません！」

「お願い、私を止めないで!!今、彼の元へ行かないとダメな気がするの」

「万丈（リコ）さん……」

「大丈夫、私は死なないから！」

傷のある場所から走る痛みにも耐えながらもリコは笑顔で自分の歩みを止めようとする医師達に私は大丈夫だと言う。

外では万丈と椎名龍一がみ合っている。万丈は何回も攻撃を仕掛けているが、全て見えない壁に弾かれる。

「何なんだよ……これ」

「これで終わりだ……」

椎名龍一はそう言いながら、ドライバーのレバーを回して必殺技を発動させる。

『Ready go!』

『ボルテックエンド……!』

必殺技を発動させた椎名龍一はその場で高く跳び上がり、多くの邪龍を先に万丈へ向かわせて自分も後から追うようにライダーキックで万丈へ向かっていく。

「ぐあああ!!」

必殺技を受けた万丈は変身が解けた。そしてそのまま地面へと倒れていく。椎名龍一は生身の万丈にトドメを刺そうと万丈の元へゆっくりと歩み出すのだった……

## 75. 龍の戦い〜始〜

椎名龍一は万丈の胸ぐらを掴み、万丈の足がつかなくなるくらい的位置まで持ち上げる。

「フツ…何か言い残す事はあるか？」

「俺は負けねえ…リコがいる限り!!」

「つまらん…消え去れ!!!」

椎名龍一はそう言いながら、禍々しいオーラを放っている気弾を万丈の腹部へ押し込んでいこうとする。

「待て、まだ勝負は終わってないぞ」

椎名龍一は自分と万丈以外の声に反応し、攻撃しようとしていた手を止める。そして声のする方を見る。

「誰だ？」

「通りすがりのてえんさい物理学者だ。覚えておけ」

声の主は戦兔だった。戦兔は某仮面ライダーの言葉を自分流にして椎名龍一に言う。

「私も忘れないで!」

戦兔の後ろにはことはもいた。椎名龍一はいきなり現れた戦兔達に完全に気を取られ、いつの間にか万丈の胸ぐらを離していた。

「お前ら、今更何の用だ？」

「お前に勝ちに来たのさ」

「フツ、今の俺は完璧だ。倒す術などあるはずがない」

「それはどうかな」

戦兔はそう言いながら、アルテミスカリバーを取り出してその場で高く掲げる。

「ほお…そんなおもちゃで俺を倒せると？」

「倒せるさ」

「…随分と俺を舐めているようだな、桐生戦兔」

「万丈が戦えるようになるまでは俺が相手だ」

戦兔はそう言いながら、ビルドドライバーを腰に装着し、メツキカラーのラビットフルボトルとタンクフルボトルをビルドドライバー

に装填する。

『ラビット Mk—II!タンク Mk—II!』

『best match!』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、戦兎はビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『Are you ready?』

「変身!」

レバーを回すと、前方と後方にスナップライドビルダーが現れる。戦兎は変身!という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれて変身する。

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエーイ! ビルド Mk—

II!』

変身した戦兎はアルテミスカリバーで椎名龍一を攻撃している。だが、アルテミスカリバーを横に振ろうとした瞬間、アルテミスカリバーに身体が引っ張られ、逆にアルテミスカリバーに振られてしまう。振り回される戦兎だが、どうにか体勢を持ち直す。

「(やはり、アルテミスカリバーは万丈にしか使えない...)」

「考え事か?ポーツとしてると隙ができるぞ?」

戦兎の一瞬の隙を突いた椎名龍一は戦兎のマスクの右のタンクの複眼辺りを思い切り殴る。殴られた衝撃でタンクの複眼にヒビが入る。

「フン、その程度でヒビが入るとは柔らかすぎる...!」

「チツ、あまり時間を稼げずにコイツにやられるのか!?!」

「この一発で顔面を叩き割ってやるよ...」

椎名龍一はそう言っただけで右手を黒龍のツメの形に変化させ、戦兎に襲いかかる。戦兎は避けられず攻撃を受ける。...はずだったが、戦兎の前に誰かが現れ、黒龍のツメを受け止める。

「朝、部屋にいないし、嫌な予感もしたから来てみたらやつぱりピンチだし」

「みらい...!」

戦兎はキュアミラクルに変身した状態のみらいに間一髪のところ

で助けられる。

「邪魔だ。どけ」

「どかない！私があなたを倒す!!」

そう言った瞬間、みらいの目の前に復讐という文字が無数に浮かび上がり、それと共にみらいは再び、ホノオを宿したあの姿へと変身した。

「……………倒す」

「フン、倒してみろ」

椎名龍一はみらいを煽り、みらいが攻撃してくるのを考えて自身の守りを固めていた。

「はああ!!!」

みらいは強大な炎を右手の拳に纏い、椎名龍一に殴りかかる。だが、椎名龍一には全く効いていなかった。椎名龍一はみらいの右腕を掴み、地面へと叩きつける。

「ぐはあ…!!」

「フン、口ほどにもない」

椎名龍一に地面に強く叩きつけられ、変身が解けてしまうが、みらいはそれでも立ち上がって椎名龍一へ向かっていこうとする。

「わたしは…まだ…やられてなんかいない!!!」

「待て。ここからは俺がやる」

みらいは椎名龍一へ向かって行く途中、誰かに止められた。その誰かは右手にアルテミスカリバー、ドライバーにアルテミストリガーとクローズドラゴンを装填していた。みらいがゆっくり顔を上げて”その誰か”を見ると、それは万丈龍我だった。

「万丈くん…」

「椎名龍一……………ここで決着をつけようぜ」

## 76. 龍の戦い(中)

万丈はドライバーのレバーを回してアルテミスクローズへと変身する。

『ムーンライトレベリング! エビル アルテミス!! dangerous!』

万丈が変身したのは暴走形態のアルテミスクローズであったが、暴走を引き起こす物質がアルテミスカリバーに流れ込んでいるおかげか暴走していない。

「よっしゃあ!今の俺は……負ける気がしねえ!」

「口にだけでなく力でも示してみろ、万丈龍我!!!」

「言われなくてもそのつもりだああ!!」

万丈はそう言いながらアルテミスカリバーを椎名龍一へ何回も振り下ろしていく。だが、全て避けられてしまう。椎名龍一は攻撃を避けた直後、右手に黒龍の力を溜めて万丈の左脇腹を殴る。

「うぐっ…!?!」

「フン、まだ終わらんぞ!!」

椎名龍一は左脇腹に強烈なパンチを決めた後、言葉通りに万丈を攻撃し続ける。

「ぐはあ…!!」

「武器があるうが所詮はこんなものなのか!」

「ナメてんじやねえぞ!!」

万丈は攻撃を受けながらもアルテミスカリバーを椎名龍一に振り下ろし、反撃する。反撃を受けた椎名龍一は少し吹っ飛ばされ、隙をつくってしまう。その隙に万丈はアルテミスカリバーの2つのフルボトル装填スロットにクローズマグマボトルとドラゴンボトルを装填し、必殺技を発動させる。

『クローズマグマ!、ドラゴン!』

『Ready Go!』

「見せてやる…これが俺の力だ!!」

《ドラゴニックバースト!!》

技名があたりに鳴り響くのと共に万丈はアルテミスカリバーを勢いよく振り下ろし、多くの龍を刀身から生み出してそれを椎名龍一に放つ。

「ぐっ、アルテミスカリバー…こんな力を持つていたのか…」

「当たり前だ！戦兔の開発した武器にハズレはねえんだよ!!」

万丈は追い打ちをかけるように椎名龍一を剣先で一突きしてから何回か切り裂いていく。

「これで、終わりだあ!!!」

万丈はアルテミストリガーにアルテミスカリバーをかざして連動させて必殺技を発動させる。

『Ready Go!』

《アルテミススラッシュ!!》

万丈は必殺技を放つ。必殺技は椎名龍一を直撃し、大規模な煙が辺り一面に立ち上る。

「終わった……」

と、万丈がアルテミスカリバーを降ろし、変身を解いて一息つこうとした時、辺りに立ち上る煙と黒い禍々しいオーラが一点に吸われていく。

「フツ、流石にここまで追い込まれては本気を出すしかないなあ…!」

「嘘っ…だろ…?」

「見せてやる、改良されたこのドライバー…いや、この力の真価を!!」

椎名龍一はこの強化によりダーククローズからシュヴァルツクローズへとパワーアップした。

「さてと、まずはこれを受けてもらおうか…」

椎名龍一は無数の闇の剣を召喚し、万丈へと向けて放つ。万丈は闇の剣を避けていくが、闇の剣があまりにも多く、避けきれずに攻撃を受けてしまう。

「っ…強すぎる。勝てる気がしない」

「これで強すぎると言っているようでは俺には勝てないぞ? 万丈龍我」

「チツ…何か打開策はないのかよ!」

万丈はその場に立ち上がり、再びアルテミスカリバーを構える。万丈の今の言葉を聞いた戦兎は万丈にこう言う。

「万丈、アルテミストリガーの最大の力を出す方法はおそらく”月の力”だ！」

「月の力って言ったってどうやって月の力を引き出すんだよ!!？」

「アルテミストリガーはお前とリコの”結び”を意識して創った物：もしかしたら進化のカギはリコが握っているかもしれない！」

「月の力がリコにあるのか：でも、今アイツに無理はさせられない。どうすれば……」

万丈はアルテミストリガーの真の力を引き出す為に傷を負っているリコを利用するのを躊躇うが、パワーアップした椎名龍一に対抗するにはアルテミストリガーの真の力を使うしかない。果たして万丈はどう決断するのか……？

## 77. 龍の戦い〜終〜

アルテミストリガーの真の力を引き出す為に傷を負っているリコを利用しようか迷う万丈は少しの隙を作ってしまった。その隙をついた椎名龍一はシュバルツダークナツクルという名の武器を生成する。見た目はクローズマグマナツクルを黒くした感じだ。椎名龍一はシュバルツダークナツクルで万丈の鳩尾を思い切り殴る。

「ぐはあ……！」

「どうだア？自分の急所に強化されたこの力をぶつけられた気分はア！」

鳩尾を殴られた万丈は目の前がだんだんと暗くなっていくのと共にその場に倒れ込んでいく。万丈が倒れていくのを見た戦兎は”このままでは万丈の命が危ない”と状況を先読みし、傷を負い、変身解除寸前の状態ながらもドリルクラツシャーを右手に持って椎名龍一へと向かっていく。

「うおお!!」

「フン、無駄だア！」

戦兎はドリルクラツシャーを椎名龍一のドライバーに突き刺すがすぐに引っこ抜かれてしまう。そして肘のあたりを掴まれて投げ飛ばされてしまう。

「ぐっ……どうやら成功みたいだなあ……！」

「成功だと？馬鹿馬鹿しい……!!」

椎名龍一は体に異変を感じ、自分の装着しているドライバーを見る。ドライバーの機能が止まり始めていた。

「貴様、何をした？」

「ただ単に機能停止プログラムを起動させただけさ。どうやら、Z A I Aに”自分のドライバーに機能停止プログラム付けたドライバーのデータ”を提供したのは正解だった」

「何っ!?!」

「さてと、俺の役目は終わりだ。万丈、起きろ！お前が椎名龍一コイツとのケリをつける！」



戦兔は倒れている万丈にそう言う。すると万丈はその一言に刺激されたのか、ゆつくりとその場に立ち上がる。

「やってやる!!」

「万丈くん!!」

「リコ!? 怪我は大丈夫なのか?」

「大丈夫よ。それより、私の力をあなたに託すわ! 私と一緒にこの戦いを終わらせましょう!」

「折角、俺が怪我の状態を心配してリコの力を借りずにケリをつけようとしたのに…お前は戦う気満々なのかよ…しょうがねえな。やるぞ、リコ!」

「うん!」

2人は目を瞑り、静かにその場で念じ始めた。すると遠い距離にいたはずの2人がいつの間にか隣同士になっていた。どうやら念じたことにより2人の心と身体が一つになったようだ。それと共に新たなアルテミススクローズの変身音が流れる。

『ムーンライトレベリング! ホープ アルテミス!! s t r o n g ! V e r y s t r o n g ! !』

「リコ、行くぞ!」

「いきましよう!」

万丈とリコは心身一体となった。万丈とリコは息を合わせ、椎名龍一に攻撃をする。

「食らいなさい、私の技を!!」

リコはそう言いながら、ドライバーのレバーを軽く回し、必殺技を発動させる。

《ホープアルテミスアタック!》

必殺技を発動させた後、リコはその場で高く跳び上がる。そして自分の前方斜め下に魔法陣を一つ、椎名龍一の四方八方に魔法陣を設置し、自分の前方斜め下にある魔法陣へ向かってライダーキックの体勢で急降下していく。

「魔法陣を潜ってグルグルしながらライダーキック決めてくなんて聞いてないぞ! 目が回る!!」

「なんとか耐えて!!」

万丈は目が回って今にも嘔吐してしまいそうな勢いだが、リコは止まらない。止まらずに椎名龍一の四方八方に設置された魔法陣をライダーキックをしながらグルグルと潜っていく。

「キュアアップ・ラパパ! すごく大きな氷塊よ、出なさい!!」

ライダーキックを止めて自分の魔法で巨大な氷塊を出し、それを椎名龍一へ向けて投げる。

「はあ…はあ…こんな氷塊如き、砕いてやる!」

そう言う椎名龍一であったが、戦兔が起動させたドライバー機能停止プログラムやリコの必殺技を受けて大幅に体力が削られていたのか氷塊を押し返そうとするも押し返す力が無くそのまま受けてしまった。

「ぐっ…!?…だが、こんな程度で倒れる俺ではない!」

椎名龍一はそう言いながら、ドライバーのレバーを回して必殺技を発動させる。

『Ready Go!』

《ダークドラゴニック・フィニッシュ!》

必殺技を発動させた椎名龍一は万丈達（アルテミススクローズ）に向かって急降下していく。椎名龍一の脚には数体の禍々しい黒龍が纏わりついており、これをまともに受ければタダでは済まないだろう。

「これで終わらせる…行くぞ、リコ!!」

「行きましょう、万丈くん!!」

『マックスアルテミスオン!!』

『オーバーレベリング!!』

万丈達はアルテミストリガーの天面のボタンを押してドライバーのレバーを回し、ハザードトリガーというオーバーフローモードを発動させる。そして更にドライバーのレバーを回して必殺技を発動させる。

《アルテミスフィニッシュ!!》

万丈達は必殺技を発動させた後、椎名龍一にライダーキックの体勢

で勢いよく向かっていく。そして椎名龍一と万丈達、アルテミスローズのキックはぶつかり合う。

「ぐっ……これまでの力を残していたのか!？」

「残していたんじゃないやなくて今、創り出したんだよ。リコと俺のベストマッチの力をな!!」

「ぐっ……!覚え……ておけ……万丈龍我アア!!」

「これで終わりだああ!!」

「うわあああ!!」

万丈達は椎名龍一とのぶつかり合いに勝ち、ライダーキックを決める。万丈達のライダーキックを受けた椎名龍一は地面へ叩きつけられた後、体に稲妻を走らせながら変身が解ける。

「何故だ……何故、俺は負けた?」

「悪魔に魂を売った瞬間からお前はもう負けてるぜ」

「畜生……俺はただ、十六夜に好かれたかっただけなんだ……」

「龍一君、私は今の貴方より前の貴方の方が何倍も好きだったわ……」

「そうか……じゃあ、そろそろ俺は地獄に行つてそこで自分の罪を償うとしよう」

椎名龍一は最後に自分の罪を償うと言つて黒い霧に包まれるのと共に消えていった。椎名龍一が消えた後、万丈達は変身を解いた。同時に合体状態も解除され、アルテミスローズが万丈とリコに分離した。万丈は残された椎名龍一のドライバーを拾い上げる。

「終わったんだな……」

「そうみたいね……」

「リコ、病室まで背負つてやるぞ」

「ふふっ……ありがとう」

万丈はまだ傷が癒えていないリコを背中に背負い、リコの病室まで歩いていくのだった。

「さてと、俺らも帰るぞ。みらい、ことは!」

「戦兎、私もリコみたいに背負われないなあ……」

「しよ、しようがねえな……ことは、魔法で俺のバイクを朝日奈家に転送しておいてくれ!あと、ことはは先に魔法のホウキで帰つてくれ

！」

戦兔はバイクの移動をことはに任せ、みらいを背中に背負って朝日奈家へ帰っていく。

「みらい、一ついいか？」

「何？」

「胸、またデカくなっただろ？」

「ちよっ…／＼／＼なんてこと言うの!？」

「だって…背中当たるんだもん」

「デリカシーのない戦兔は後でお仕置きする!!!」

「それだけはやめてくれ…!!」

2人は相変わらず仲が良い様子。戦兔はこの後、みらいと今までの思い出話をしながら朝日奈家へと帰っていったのだった。

## 78. 月輪の龍（がちりん クローズ）

椎名龍一との激闘から数ヶ月後：退院したリコと万丈はいつもと代わり映えのない朝を過ごしていた。

「なあ：リコ」

「何かしら？」

「お前、太った？」

「そんなわけではないでしょ!!太ってなんかないわよ!」

「じゃあ何だよ、そのお腹は」

万丈はそう言いながら、リコの少し膨らんだお腹を指さす。それに対してリコはモジモジしながらお腹が膨らんでいる理由を話し始める。

「実は……」

「実は？」

「私……」

と、リコが何かを言おうとした瞬間、家のチャイムが鳴った。インターフォンには戦兎とモフルンを抱えたみらいとことはが映っていた。

「今、開けるわよ」

リコが玄関の扉を開けると共に戦兎は手に持っていた遊園地のチケット2枚をリコに手渡す。

「リコ、久しぶりに皆で遊園地でも行かないか？」

「いいけど：絶叫系は乗れないわよ？」

「大丈夫。だから行こうぜ!」

「分かったわ……」

リコは少し悩む様子を見せながらも遊園地へ行くことにする。万丈はリコと戦兎の会話を聞き、楽しそうだと思ったのか、着替えを早く済ませて玄関先に姿を現す。

「：で、遊園地まではどうやって行くんだ？」

「車に決まってるだろ？」

「車って：お前が運転するのか？」

「いや、俺は運転しないぞ」

「じゃあ誰が……」

と、万丈が入った瞬間、万丈の視界の外から寒い時期なのに半袖短パンの格好をした氷室幻徳が現れた。

「俺だよ」

「うお!? 久しぶりのヒゲ! ……じゃなかった、幻さん!」

「俺の車に乗るんだぞ…どこに乗りたい?」

「いや、そんなのどこでもいいんだけど…」

「えっ? 助手席に乗りたい? ……悪いが、助手席はポテト専用だぞ♡」

「気持ち悪っ…お前らホモかよ」

万丈は独身を貫きすぎて少しホモキャラと化した幻徳(万丈の勝手な想像)にドン引きし、思わず戦兎の後ろに隠れた。

「幻さん、この雰囲気ではそれは流石に……」

「すまん、空気を悪くしてしまったな。俺は先に車に乗ってるぞ」

幻徳は皆にそう伝えると、少し俯きながら足早に自分の車へと向かうのだった。幻徳は場を更に盛り上げようとして言っただけのネタが予想とは裏腹に真に受けられてしまい、ドン引きされたので落ちこんでいる様子。

それから少しして準備の出来た万丈達は幻徳のクルマに乗り込む。一番後ろの3人席は戦兎、ことは、みらいが乗り、万丈とリコは真ん中の席へ座る。

「出発するぞ」

幻徳は皆にそう一言伝えてから車を発進させていく。出発してから数十分後に万丈、ことは、みらいは寝てしまった。

「…で、リコちゃん。万丈に伝えたい事、俺は知ってるぜ?」

「知ってたんですか!? 私、この話は誰にもしてないはずなのに…」

「分かるさ。だって……」

幻徳はこの後、万丈に伝えたい事をどうやって知ったのかをリコ本人に言う。それを聞いたリコは幻徳にバレたのであれば万丈に言わずとも近いうちに気づかれてしまうと思っていた。

「一応、サプライズ(?)のつもりなので万丈くんには言わないでくださいね!」

「分かった」

幻徳はリコにある言葉を言いたかったのだが、その一言を言った時に万丈が起きてしまったらマズイと思い、言わずに運転に集中する。

そして運転し始めてから休憩せずに走り続ける事数十分、遊園地に着いた。着くとともに寝ていた人達は起きる。

「…あれ、もう着いたのか?」

「着いたぞ」

「運転ありがとう、幻さん!んじゃ、みらい、行くぞ!」

戦兎は起きて早々、みらいの手を引いて車から降り、入場口へと向かっていく。

「ことはちゃん、俺とポテトと一緒に行くか。美味しい食べ物食べさせてあげる」

「本当!?じゃあ私、ヒゲさん、ポテトさんと行くー!」

幻徳は気を利かせてことはを連れて行き、リコと万丈の2人きりの状態を作る。

「俺らも行くぞ」

「うん!」

戦兎達、幻徳達が入場口に向かってから少し間を置いてリコと万丈も遊園地の入場口へと向かっていく。

「なんか久しぶりだな。こんな平和な中2人で歩くのは」

「そうね。この先もう何事もなく生涯を過ごしたいものだわ」

「少なくとも俺らの身には何も起きない…:はずだ」

万丈とリコは久しぶりに見た平和を象徴するような雲一つない綺麗な青空を見ながら遊園地の中へと入る。遊園地の中へ入った後はゆっくりと決められたコースを進むだけのボートのアトラクションへ行く。

待ち時間はなく、リコと万丈はスムーズにアトラクションに乗ることができた。

「学生の頃にここへ来た時は常に動き回ったりはしゃいだりするイ

メージしかなかったけど、今来てこれに乗っていると”こういうゆったりできる場所”もあるのね…」

「ほんと、久しぶりにリラックスできた感じだ…」

万丈は隣でそう言うリコと自分の元恋人である香澄の姿を重ねてしまうが、すぐに香澄の姿を消した。

「ふふっ…万丈くんは相当疲れていたのね。今、少しの間だけポケッとしてたわよ」

「あ、ああ…ダーククローズとの戦いでだいぶ疲れた!!」

本当はリコに香澄の姿を重ねてしまい、どこか寂しさを感じていただけなのだが今、自分の妻であるリコにはそんな事を言えるはずがないと戦いの疲れと言ってごまかす。

「あ、そろそろ終わりみたいね。降りる準備をしましょうか」

リコはアトラクションの入り口、出口が迫ってきているのを見て万丈にそう言う。ボートから降りて2人がアトラクションの出口から出ようとする時と出口の先にはみらいと戦兔がいた。

「一緒に回ろうぜ!あ、アトラクションじゃないぞ!」

「なら何なんだよ…」

「決まってるんだろ。グルメだよ」

「そ、そうか」

万丈はアトラクションに乗るのに付き合わされると思っていたのでグルメと聞いて少し安心する。そしてその後は遊園地内の様々な飲食店を巡り、気づいたらいつの間にか昼過ぎになっていた。

「食い過ぎだぞ…お前ら」

「すまん、すまん。美味しい食べ物には目がないんだよ俺とみらいは」

「お前らは大食いキャラじゃないだろ……」

「天才だって大食いになりたい日はあるんです!」

「全くだ……んじゃ、食う物食ったし、俺らはまた別で行動するぜ」

万丈はそう言う戦兔とみらいの元を離れる。そして観覧車の方向へ向かう。

「絶叫系主体のこの遊園地じゃリコが乗れるのはさっきのヤツか観覧車しかないよな…」



「観覧車かあ…丁度いいわ。良い事教えてあげる！」

「良い事？」

「うん、聞いて驚くかもね！」

万丈はリコの”良い事”というのが気になり、足早に観覧車に乗り込んだ。万丈とリコは隣同士ではなく、互いに向かい合って座る。

「このお腹の事なんだけど…」

「あ、太っただけだろ？さっきの流れからして察してたぞ」

「馬鹿、そんな訳ないわよ！大体、サプライズなんだし…」

「お腹の事を言うのがサプライズ？じゃあ何でさっきサプライズ(?)を言いかけてたんだよ…」

「それは……………ってとにかく、”サプライズ”聞きたいわよね？」

「聞きたい！」

「教えてあげるわ…！実はね…」

「実は……………」

「このお腹に新しい命が宿りました！」

「えっ……………？えええ!!！」

万丈はリコの言葉を聞いてサプライズが何の事だかをすぐに理解する。驚きのあまりその場に勢いよく立ち上がり自分たちが乗っている観覧車を揺らしてしまう。

「名前は決めたか??」

「これからよ。ゆっくり話し合って決めていきましょう」

「お、おう!!」

リコと力を合わせて月輪の龍として戦った万丈はこの日、今までの辛い出来事が吹き飛ばぶくらい最ツ高なサプライズを受けたのだった

……

月輪の龍

END

Continue to Chapter 3……

## 79. 先の運命は分岐する

78話から一年。戦兎達やリコの両親、姉は万丈とリコの家を集まっていた。お目当ては勿論……

「お前の子供にしては可愛いな……なんて名前なんだ？」

「お前の子供にしてはって何だよ……あ、ちなみにコイツの名前は万丈 符露ふうるてい手院ていんだ！」

「うわっ…最ツ悪だ」

戦兎は万丈から子供の名前を聞いたが、その名前のキラキラ具合が凄すぎて少し引いてしまった。

「そんなわけではないでしょ！この子は怜将れおよ」

「カッコいい名前してんなあ……この名前に込められた意味とかあるのか？」

「ライオンみたいに強くたくましく生きてほしいって意味が込められてるわ！」

「なるほど…レオ||ライオンって事か…って男の子なのね！」

「そうよ」

子供の名前を知った戦兎は密かにこの子供が成長したらライオン型の変身アイテムを作ってあげようと考えていた。

「リコと龍我の子供かあ〜！あれ、戦兎とみらいには子供いないの？」

「はーちゃん!?その話はダメっ!……でも、その内”いる”ようになるかもね」

「そっか!楽しみ〜!!」

みらいはことには急に子供についての話を振られて焦るが、何とか言葉を返して安堵のため息をつく。

「この子は髪の色や目の形と瞳の色がリコと同じだな…」

「そうみたいね…」

皆はこの後、リコと万丈の子供を見続けた。そして時はあつという

まに過ぎ、気が付けば時間帯は夕方になっていた。

「他人ひとの赤ちゃん見てるだけでこんな時間に時間が経つのか…」

「可愛いから見惚れてしまうのよ」

「そうなのか…：んじゃ俺、新武器の製作があるからそろそろ帰る！」

「分かったわ！また来てね、戦兎くん！」

「おう！」

そう言っただけで戦兎は帰っていった。珍しくみらいは戦兎について行かずに万丈とリコの家に残っている。

「あら、みらいは家に帰らないの？」

「うん…」

「戦兎くんと喧嘩でもしたの？」

「いや、そんなんじゃないの！…：最近、戦兎と一緒にいると辺りの風景が変な感じになるの」

「えっと…それはどういふことなのかしら？」

「なんか独占、束縛とかいふ言葉が見えるの…」

みらいは真剣な表情をしながらリコにそう言うが、リコはみらいの言っている事がよく分からず返事に困っている。ちなみに未来が言いたいのはゼロワンの或人がメタルクラスタホッパーの暴走状態の時に見るあの風景の事である。

「と、とにかく戦兎くんに悪い印象を与えないようにね！」

リコは聞いた話の中の”独占、束縛”という言葉の意味をなんとなく理解した上でみらいを出来る限りフォローする。

「じゃあ、私そろそろ帰るね」

「分かったわ！」

みらいはリコにそう言い、リコと万丈の家を後にして自分の家へと帰る。その道中、みらいはあの時の少女に出会う。

「また会ったね、みらいちゃん」

「あなたはあの時の…」

「そう、助言者だよ。今回はみらいちゃんに言う事があってきたの！」

「言う事…？」

「…：未来を変えなければ戦兎くんはみらいちゃんから離れていつて

しまうの」

「戦兔が!? つというか未来を変えるってどう言う事なの……」

「今の世界が歩もうとしているのは様々な物語や人物、設定が融合されて秩序の乱れた世界……」

「様々な物語、様々な人物……まさか、永夢くんやはるかちちゃんの事……?」

「他にもたくさんいる……っていうか増えてきてる。みらいちゃんは知らないと思うけどこの前も羽衣フラや星奈ひかるがいつの間にかこの世界にいた……世界は物語毎にあるはずなのに」

「話の内容が難しくよく分からないけど、結局あなたは私に何を伝えたいの? どうして欲しいの?」

「このままだと戦兔くんが別の人のものになってしまうつて事。この世界を元の一つの設定で作られた世界に戻し、これから先に待ち受ける運命をみらいちゃんに変えてもらいたい」

「……馬鹿馬鹿しい。戦兔は私を見捨てたりはしない……絶対に」

「現に戦兔くんに好意を抱いている女の子もいる。だから馬鹿馬鹿しいとか思わない方がいいよ」

「……私、夕食作りの当番だから帰る。さよなら、二度と私の前に現れないで」

みらいは助言者である女の子を今までにないくらい冷たい目で見ながらそう言い放ち、家へと帰っていく。

「マクリーチェ。いや、運命ターニングポイントの分岐点……彼女を倒せば世界は……!」

少女は独りそう言いながらどこかへと消えて行くのだった。それと共にみらいの耳元でピリツという本のページが破ける音が聞こえてきた。

「何、この音……?」

本のページが破ける音がしたと思っただけならみらいの目の前に突如として破けた一枚の白紙が浮かび上がる。白紙にはほとんど見覚えのある光景が描かれていく。

「これって……私と戦兔が初めて遊園地に行った思い出……」

みらいが戦兔と初めて行った遊園地での思い出が描かれた紙に触

れると紙は炎に包まれて跡形もなく消滅していった。

「えっ!? 私と戦兔の思い出が……!」

みらいはこれを見て先程、女の子が言っていた”戦兔が別の人のものになってしまう”という言葉をなんとなく理解する。

「……未来を変える……か」

みらいは女の子の言っていた言葉の意味を深く考えながら再び自分の家へ向けて歩き出すのだった……

## 80. 消えた思い出のカケラは黒炎を滾らせる

今日は2月14日。そう、バレンタインである。朝日奈家の台所にいるみらいは周りを気にしながらチョコレートを作っている。

「(渡すまでは見られたくないなあ…)」

周りを気にしているのはチョコレートが完成するまでに戦兔がここに来ないかを確認する為のようだ。2人の関係ならチョコを渡す、貰うなんて事は分かりきっているはずなのだが、それでもサプライズ的な感じでチョコレートを渡されると嬉しいものなのだろう。

「戦兔、喜んでくれると良いなあ…」

みらいはそう言いながら、自分からチョコを受け取り喜んでいる戦兔の姿を想像する。

一方、戦兔は補講で大学のキャンパスへ来ていた。いつも隣にみらいがいたのに今日は隣に誰もいなくて何だか寂しい様子である。

「1人ってなんか寂しいよなあ……」

「あ、いたルン！」

戦兔がキャンパス内を歩いていると、前方から見覚えのある緑髪の女の子が自分の元へ駆け寄ってくる。

「やっと見つけたルン……」

「君は……羽衣ララ？」

「そうルン！同じ大学に通ってるって聞いたから探したルン！」

「同じ大学だと!？」

「(この星の年齢の数え方で行くと)私は29歳だけど地球の色々な知識を学びたくて通っているルン！」

「歳は聞いてないんだが……とりあえず、色々な知識を学ぶ為にこの大学へ来ているんだな。で、今日は俺に何の用だ？」

「今日はバレンタインルン！チョコを渡しに来たルン！」

どうやら、ララは戦兔にバレンタインのチョコレートを渡しに来たようだ。前、戦兔にフラれているがまだ諦めていない様子。

「まだ諦めていなかったのか…いいか、俺にはみらいがいるんだ。だから、ララが俺に何回告白しようがララがフラれる運命は変わらない

い」

「ふくん。なら……」

戦兔の言葉を聞いたララは不満げな表情をするのと同時くらいに何かを企むような怪しい笑みを浮かべる。

「私がその”運命”を変えるルン……」

ララはいきなり戦兔に抱きつき、戦兔の耳元でそう呟く。何故か分からないがララのその一言は戦兔の脳内に響いた。

「えっ……」

「度肝を抜かれたような顔をしてどうしたルン?…まさか、今の私の言葉に少しドキドキしたルン?」

「は、はあ?そんなわけないだろ!」

「ふふっ、なんか面白いルン!」

戦兔はララの”ドキドキしたルン?”という一言に少し動揺しながら足早に大学の中へと入っていく。ララは戦兔が自分の言葉で動揺しているのを見て、戦兔との関係を大きく進展させる事が出来たと思っただった。

その頃、みらいはチョコレート作りの仕上げに入っていた。スマホの通知が来るたび、戦兔からの連絡かな?と思いを馳せながら通知を見るがどれもアプリのお知らせで戦兔からの連絡ではなかった。

「戦兔、今は何してるのかな…どこ行くのかを聞いておけばよかったな」

みらいは戦兔が補講で大学に行っている事を知らないようで、戦兔が今何をしているのか気になっている様子。

「チョコレートは大体が作り終えたから、これに加えて今までの思い出の写真を貼ったメッセージカードでも作ろうかな」

みらいはそう言いながらスマホの写真からアルバムを開いて戦兔と撮った写真を見ていく。

「……あれ?私と戦兔が初めて2人で遊園地に行った時の写真がない!!」

なんと、初めて2人で行った遊園地での写真がアルバムの中から消

えていたのだ。自分でも消した覚えはないし、他の人にスマホを触らせた覚えもないのでみらいはあの少女の言うように運命が変わってきているのだと感じた。

「運命が変わるって言ったって誰が戦兔を狙っているの…？」

みらいは不安や恐怖といった感情を抱くと同時に心の奥に潜ませている嫉妬の炎の火力を更に上げていく。

「(みらいからなんか嫌なオーラが出てる…このままだといつか暴走する。その前に私がなんとかしなきゃ！)」

空いた扉の隙間からみらいを見たことはみらいから嫌なオーラを感じ取り、早く何か対策をしなれば！と思うのであった。

「朝日奈みらい…お前には本来とは違う運命を歩んでもらう。その為これからもオレはお前たちの運命を変えようとする者を増やしていくだろう…」

どこかの部屋でモニター越しにみらいを見るシャドウビルドはそう言いながら、モニターの電源を落としてどこかへ向かっていくのだった。



## 81. 多岐する運命

補講が終わり、戦兎は駐輪場へ向かい、マシンビルダーに乗って帰ろうとしたが、駐輪場にマシンビルダーがなかった。

「……えっ？ バイクがなくなってる!？」

盗難に遭ったと思い、警察に連絡しようとした時マシンビルダーの置いてあった場所付近の柱に何かメッセージが書かれた貼り紙があった。

「えつと……」 少しバイク借りるぜ！ 大野壮太より!?!? ……アイツめ、覚えてろよ」

楽に帰る手段を失った戦兎は財布の中身を見ながら、大学の最寄駅へと歩いていく。

大学の最寄駅へ着いた後、今の時刻の数分後に今いる駅を出発する電車を見つけて早速その電車の車両に乗り込んでいく。車両の中はほぼ満員と言っているほど混んでいた。

「(うわあ……よりによって満員電車かよ)」

戦兎がそう思いながらため息を吐いて辺りを見ると、車両の真ん中の扉近くで男に何かさかれていて涙目になっている女の子がいた。

「(あの女の子……もしかして痴漢にでも遭っているのか!?!? とりあえず、助けにいかなくちや!)」

女の子が困っている事に気づいた戦兎は自分の周りにいる人をかき分けて女の子のいる方へ向かう。そして男と女の子の間に入る。

「なんだお前?！」

「良い歳して公共の場で変な事してんじゃねえよ、この変態野郎」

「チツ……覚えとけよ」

戦兎が小声で注意をすると男は舌打ちをして別の車両へ移動していった。女の子は安心したのか安堵のため息を小さく吐く。

「あ、あの……助けていただきありがとうございます」

「津成木には変なヤツ多いからなあ……君みたいな可愛い女の子は狙われやすいから気をつけなよ?！」

「かつ、可愛いだなんて……／＼／」

「んじゃオレはこの駅で降りるから！じゃあな！」

戦兔がそう言うのと同時に電車が朝日奈家最寄りの駅に着く。戦兔は車両の扉が開くのを見て降りようとする。

「待って！何かお礼させてください!!」

女の子は電車から降りようとする戦兔の服の袖を掴んで戦兔にお礼をしたいと言う。

「お礼？」

「はい、お礼したので電車降りないでください！」

「まじか。まあこのままでは気が済まないって顔してるし…分かった、降りずに君についていくよ」

戦兔は心の中に早く帰ってみらいに会いたいという気持ちがありながらもどうしても自分にお礼がしたいという女の子の表情を見て仕方なくついていくのだった。

「…君、名前は？」

「あつ、まだ言ってますでしたね。私は涼村さんごです！」

「さんごちゃんね…俺は桐生戦兔だ」

「戦兔さん…！なんだかカッコいい名前ですね！」

「カッコいい名前なんて初めて言われたよ…ちよつと嬉しい」

話しながら歩いているうちに戦兔とさんごは初対面とは思えないほどに仲を深めていく。

「で、さんごちゃんは学校ではどうなんだ？可愛いんだから男達の注目の的なんじゃないか？」

「また言われた…／／／」

「ん？何て言った？」

「いえ、何でも…私が注目の的になった事なんてありませんよ」

さんごは戦兔からまた“可愛い”と言われ、嬉しさのあまりその気持を声に出してしまった。

「そうなのか…全く、見る目のない男達だなあ」

「戦兔さんは“罪な男性”ですね…！あつ、見えましたよ、あのお店です！」

さんごと話しながら歩いているうちに目的地に着いたようだ。さ

んごの指差す先にはA o z o r a B a k e r yと書かれた移動式のパン屋があった。

「戦兔さんへのお礼はあのお店のお店のいちごクリームパンです!」

「いちごクリームパンだど?!いちごメロンパンといい、いちご系のパンって種類が豊富なのか」

戦兔は近くの席につき、少し待っているときふくろに包まれたいちごクリームパン2つを持ったさんごが戦兔の隣の席へ来た。

「あれ、隣!?向かいの席に座れば?」

「いえ、この方がいいんです: / /」

「そうか?: : : まあいいや」

戦兔とさんごは楽しく会話しながらいちごクリームパンを食べている。その様子を少し離れた木の陰から見ているものがいた。

「あんなニヤニヤしちやって: : : 戦兔さんって”ロリコン”ルン?」

「あの程度では戦兔は惚れたりなんかしないよ」

「だつ: : 誰ルン!」

こっつそりと戦兔達の様子を見てると突如、近くから誰かの声が聞こえてきた。声の方へ顔を向けるとそこにはことはがいた。

「私は花海ことは。突然だけど、あなた戦兔を狙ってるでしょ?」

「当たり前ルン!」

「申し訳ないけど、諦めてもらえるかな?」

「諦める?そんな事するわけないルン!!」

「本来の”運命”が変わるとしても?」

「諦めないルン!」

「そう: : ならしようがない。無理矢理にでも諦めてもらうよ!!」

ことははララから”運命が変わろうが戦兔の事を狙い続ける”と聞いて離すことでは早期解決できないと思い、最終手段である”実力行使”で戦兔からララを離す事にする。

「キュアアップ・ラパパー!エメラルド!」

ことはがそう唱えると、リンクルストーン・エメラルドがリンクルスマホンという変身アイテムに挿し込まれていく。その後、リンクル

スマホンの画面にアルファベットのfを書くとき、Feliceという文字が浮かび上がる。

「フェリーチェ・ファンファン・フラワーレ！」

ことはがそう唱えると、服装や髪型、背丈が変化していく。

「あまねく命に祝福を…キュアフェリーチェ!!」

ことははキュアフェリーチェに変身し、まだ生身のララへ向かっていこうとしている。

「そっちがその気なら私だって…!!」

ララもことはに對抗する為に胸元にあるスターカラーペンダントでキュアミルキーへ変身する。

「スターカラーペンダント！」

「カラーチャージ！」

「きらめく星の力で♪ あこがれのわたしを描くよ♪」

「トウインクル、トウインクル、プリキュア♪」

「長いわ！省略します!!」

スター☆トウインクルプリキュアの変身が長い為、待ちきれないことはがキュアミルキー変身完了後のセリフ直前まで場面を飛ばした。

「天にあまねくミルキーウェイ！キュアミルキー！」

「はあ…やっと変身したのね」

「変身が長いのはしょうがないルン！ってかあなた、変身前よりか口調も身体も大人びてるルン！」

「無駄話はいりません。いきます！」

ことははララへ勢いよく向かっていき、右腕を掴んで投げ飛ばす。投げ飛ばされたララは近くにある木の幹に身体を打ち付けられるが受け身を取っていたのであまりダメージはないようだ。

「あなた、結構やりますね」

「戦兎への想いが私を強くしてるルン…！私の事は誰も止められないルン!!」

ララの戦兔への想いは強いらしい。戦兔の事を話してたり、考えたりにしている間にもその想いは少しずつ強くなるようだ。

「私は戦兔を諦めない……諦めないんだああ!!」

ララの”想い”が力へと変わる。ララの持つしし座のスターカラーペンが光だし、ララの石とは無関係にスターカラーペンダントに装填される。それと共にララはキュアミルキー しし座ドレスへとフォームチェンジする。

「嘘っ…この姿になれたルン!？」

「パワーアップした…!？」

「何でなれたのかは分からないけど、これで私が優勢ルン!!」

ララはそう言いながら、ことには反撃していく。ララのスピードやパワーが先程と比べてだいぶ上がっている為、ことにはララの攻撃を防ぐので精一杯のようだ。

「私の邪魔はさせないルン!私の”運命”は私が決めるルン!!!」

ことにはララの猛攻撃を防いで疲れが溜まってしまい、隙を作ってしまう。ララはこの隙を突いて必殺技を放つ。

「プリキュア・しし座ミルキーショック!」

「ぐっ…避けきれない!」

隙を突かれたことはララの必殺技を避けきれずもろに受けてしまう。ことには大ダメージを負い、その場に倒れ込む。

「私の勝ちルン。今後は私の邪魔をしないで欲しいルン」

ことには立ち上がれず戦いの決着が着く。ララは倒れていることはにそう言い、その場を立ち去ろうとしている。

「ここは確か……ってはーちゃん大丈夫!？」

「みらい!?何故ついてきたのですか?」

「何故って…1人でどこかに向かうはーちゃんの姿が見えたから追ってきたの」

「ならすぐに家へ帰ってください!!ここにはダメです!」

「何で?」

「みらいにとってよくない事が……」

「ことには自分を追いかけてここへやって来たみらいに戦兔とさん

ごが仲良くしている様子を見せないよう、自宅へ帰るように必死に呼びかけるが間に合わなかった。みらいが戦兔がさんごと仲良くいちごクリームパンを食べている様子を見てしまったのだ。

「……………」

みらいは言葉を失い、同時に心の奥からは悲しみや嫉妬、怒りなどの悪いものが込み上げてくる。鬼石はみらいを強制的に嫉妬の”ホノオ”を纏いしキュアミラクルへと変身させる。

「戦兔を奪う人は全員私が殺す…………この何よりも熱く燃える”ホノオ”で」

t o b e c o n t i n u e d . . . . .

## 82. ミラクルは止まらない

キュアミラクル インフェルノスタイルへ変身したみらいは初めにララへ襲いかかる。

「戦兔を……奪うなアア!!!」

「いきなり何するルン!? 乱暴はやめて欲しいルン!」

ララは自分に猛攻撃してくるみらいに必死な表情でそう語りかけるが、暴走状態のみらいは聞く耳を持たず、ララへの攻撃を止めようとはしない。みらいに馬乗りされているララはひたすら顔を殴られたり、引つかかれたりしている。気づけばララの顔は傷だらけになっており、ララの変身状態も解けかかっている。

「やめ……てル……ン」

「……」

みらいは意識が朦朧としたララの胸ぐらを掴み、地面へ思い切り叩きつけた後、左手に宿した巨大な炎を地面に仰向けで倒れているララの腹部に勢いよくぶつけた。

「うわアアアア!!!」

ララは苦しみや痛みのみならず、聞いたことのないような凄まじい叫び声をあげる。それと共に変身が解けた。プリキュアに変身した状態で今の攻撃を受けたので皮膚の火傷は比較的軽いもので済んだが、身に纏っていた服はほぼ全て焼けてしまった。

「ふふっ……これで1人減ったわね……さて、次は」

みらいはそう言いながら、ことの方を見る。みらいに目をつけられたことはみらいのあまりにも狂気的な表情を見て自らの死を悟った。

「やめて……やめてください!! ミラクル! いや、みらい!!」

「や・め・な・い・よ♡」

ことは最後の悪あがきみたいな感じでララと同様にみらいに語りかけてみたが、みらいはニコツと明らかにいつもの笑顔とは違う意味を持つ笑顔を浮かべながら「ことはにそう言う」。

みらいは炎の剣を生成し、その場で高く跳び上がる。そしてうつ伏

せに倒れていることは背中の中心を目掛けて f f 7 のセフィオスの技である獄門みたいな感じにことは背中に炎の剣を突き刺した。「うっ……リコ、たす……けて」

ことははそう言い、変身状態が解けると共に気を失ってしまった。

この頃、さんごといちごクリームパンを食べていた戦兎は辺りの異様な空気の変わり方から何かを察してドライバーを腰に装着する。

「さんごちゃん、俺の後ろにいて！何かが起きるような気がする」

そしてドライバーを装着した戦兎の前に狂気に満ちたみらいがゆっくりと姿を現す。

「みらい!? 何だその姿は……」

「戦兎は私だけのもの……だから邪魔者は私が殺す！」

みらいは右手に持っている炎の剣で戦兎の後ろにいるさんごを刺そうとするが、戦兎が咄嗟に取り出したドリルクラッシャーに阻まれる。

「戦兎オ?なんで邪魔者を守っているの?」

「みらい!!どうしたんだよ!」

「どうもしてないよ。ただ単にその子に殺意が湧いてるだけ」

みらいはそう言いながら、狂気的な笑みを浮かべながらさんごを見つめる。さんごはみらいのその表情を見て身体をビクビクと震わせながら戦兎の右腕にぎゅっと抱きつく。

「……………本当はこんなことしたくなかったが、この状況じゃしようがないよな。みらい、お前を倒す」

「どうしてもその子を守るんだね……なら、2人仲良く地獄に送ってあげる……!」

みらいはそう言った後、直ぐに戦兎とさんごに襲いかかる。戦兎はメッキカラーのラビットフルボトルとタンクフルボトルをビルドドライバーに装填する。

『ラビット Mk—II—タンク Mk—II—!』

『best match!』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、戦兎はビルドドライバーの



レバーを勢いよく回す。

『Are you ready?』

「変身!」

レバーを回すと、前方と後方にスナップライドビルダーが現れる。戦兔は変身!という声を掛けた後、スナップライドビルダーに挟まれて変身する。

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエーイ!ビルド Mk-11!』

変身した戦兔はバスターブレードモードのフルボトルバスターを両手で持ちながらみらいへ向かっていく。

「みらい!!正義のヒーローがそんなじゃダメだろ!」

「どこがダメなの?ちゃんと悪を倒そうとしているのに!」

「お前が何でさんごちゃんを狙うのかは分からないけど、そんな下らない私利私欲の為にヒーローの力を使ってはいけない!!」

戦兔はフルボトルバスターを強く押し込んでみらいの持つ炎の剣との鏝迫り合いを制する。そして鏝迫り合いの反動で隙が出来ているみらいをフルボトルバスターで何回も切り裂く。

「うぐっ……中々やるねエ、戦兔。けど、隙だらけなんだよなア……」

「は?何を言ってる……まさか!?さんご、逃げろ!!」

みらいは戦兔が自分に気を取られて生身のさんごの事を守っていないのに気づき、さんごに向けて炎の剣を投げつける。

「くそっ……このままではさんごが……」

悩む暇もなく戦兔はさんごの元まで猛スピードで駆けていく。結果、さんごに炎の剣が到達するまであと僅かのところで間に合った。身を挺してさんごを守った戦兔の腹部には炎の剣が刺さっていた。

「戦兔さん!」

「さ……んごちゃん……!助け……られてよ……!かった!」

戦兔は腹部の激しい痛みと共に体から力が抜けていくのを感じる。そしてその場に仰向けで倒れ込む。薄れゆく景色の中最後に見たのは傷だらけの自分を見て涙を流すさんごの顔だった。

あれから何時間が経ったのだろうか？戦兔が目を覚ますとそこは病院の個室のベッドの上だった。左腕に何か感触を感じると思い、左腕の方向を見てみるとそこにはさんごがいた。

「戦兔さん！目を覚ましたんですね!!」

「すまないな助けてもらって……ってさんごちゃんよくここまで俺を連れてこれたね!」

「実はあの後、背中に抱っこ紐で赤ちゃんを背負った魔法使いとドラゴンみたいな姿をした方が助けに来てくれたんです」

戦兔は特徴を聞いてすぐに助けに来てくれたのがリコと万丈である事が分かった。それにしてもリコはなぜ、危険な戦闘に自分の子を巻き込んでいるのだろうか？と思ったがそこはツツコんだらダメな気がするのでやめておくことにする。

「二人が助けてくれたのは分かったんだけど、”誰が俺をここまで運んだの?”救急車を呼べないほどあぶない場だったのに」

「私ですよ？」

「ええく!?どうやって運んだの?」

「ここだけの秘密なんですけど、私、プリキュアなんですよ」

「そうなの!」

「はい、キュアコーラルです!」

「この世界にはいろんな”プリキュア”とやらがいるんだなあ…」

戦兔がプリキュアについて少し考え込んでいると、さんごが自分の通学鞆から先程のイチゴクリームパンを2つ取り出してそのうちの一つを戦兔の胸元に置く。

「イチゴクリームパン!!まだ食べてなかったのか!」

「はい!一人で食べるより二人で食べる方がいいと思ひまして」

「色々ありがとうございます。さんご!」

「あつ!今、私のこと呼び捨てで呼んでくれた!」

「えっ、あつ…悪い。つつい…」

「いや、大丈夫ですよ!…というか、呼び捨てで呼んでもらった方が私的にも嬉しいですよ!」

「そうか?なら、今度からは”さんご”って呼ぶね」

「はい、お願いします」

その後、さんごは病室で戦兎と2人きりの一晩を過ごしたのだった  
……

時を戻し、戦兎がさんごに病院へ運んでもらっている間、リコと万丈はみらいと戦っていた。

「やばいわね…力では止められない気がする…」

「リコ、何で怜将をこんな危険な戦いに連れてきてんだ!？」

「この子を家に置いて行ったら見守る人がいないからよ!」

「なら俺に戦いを任せて近くの木陰に隠れるとかしろよ!」

「今のみらいは万丈君1人では勝てない相手なのよ?だから私も戦わなきゃ!!」

「あー!もうっ、誰か助けてくれ!!」

万丈はリコを気にしながら戦っているのでアルテミススクローズの本来の力を出しきれしていない様子。そんなピンチの2人の前にある男が現れる。

「助けを呼んだのは君かね?」

「誰だ?」

「俺は氷室幻徳。またの名を仮面ライダーローグ」

助けに来てくれたのは幻徳だった。幻徳は登場して間もなく、ビルドドライバーを腰に装着し、ワイルドアウトレイジフルボトルをドライバーに装填する。

『ワイルドアウトレイジ!』

ドライバーにワイルドアウトレイジフルボトルを装填した後、ドライバーのレバーを回して変身する。

『ガブツ!ガブツ!ガブツ!ガブツ!ガブツ!』

『Are you ready?』

「変身!」

『威風堂々の髭野郎!!ローグワイルド!!カッケーイ!メチャカッケーイ!!』

「リコ、息子と一緒に少し離れた場所に行け。ここは俺と万丈で何とかする」

「幻徳さん……ありがとうございます!!」

リコは幻徳の指示に従い、怜将と一緒に少し離れた場所に向かっていく。幻徳はみらいの表情を見てヤバイ雰囲気だと察する。

「あれが本当にみらいちゃんなのか?」

「みらいのほかにいねえだろ……」

「明るく元気なみらいちゃんのある狂気的な表情、エボルトより殺気があつて怖いぞ……」

「まあ、とにかくやるしかねえ!」

幻徳と万丈はみらいへと向かっていく。みらいは自分からは動こうとせず、2人を迎え討つつもりだ。

「私の邪魔をするなアア!!」

みらいはそう言いながら炎の剣を何回か振るい、自分に向かってくる2人に炎の衝撃波を飛ばす。2人はそれを上手く避けながらみらいへ近づいていく。

「みらいちゃん、ごめん!」

幻徳はそう言い、左手の装甲に付いている鋭い爪を伸ばしてみらいを何回も引つ掻く。

「避けたはずなのに何で……!?!」

攻撃を避けたはずなのに……と言うみらい。どうやら、暴走している中でもまだ正常時のみらいの意識が残っているようだ。

「避けられたはずか……なるほど、みらいちゃんは自らの暴走を止めるためにわざと俺たちの攻撃を受けて倒されようとしているのか」

「なら、倒してやらねえとな。」いつものみらい”に戻すために」

万丈はアルテミスカリバーを両手で持ち、みらいに渾身の一振りをおくらわせる。その一振りを受けたみらいは今いる位置の数m後方に吹っ飛んでいく。みらいはアルテミスカリバーの斬撃を受けてもなお立ち上がるが、流石にこの一撃は効いたのかフラついていて今にもまた倒れそうな雰囲気だ。

「終わらせる」

幻徳はドライバーのレバーを勢いよく回して必殺技を発動させる。

『ワイルドサイド!』

『アウトレイジサイド!』

『ワイルドアウトレイジサイド!!』

『Ready go!』

『ワイルドアウトレイジフィンッシュ!!』

必殺技を発動した後、幻徳はその場で高く跳びあがり足の裏に鋭利な牙を生やしてから未来に向けて急降下していく。

「はあああ!!」

「ただだ、私はまだ終わらない:!!」

みらいは幻徳の必殺技を両手で受け止めて弾こうとしている。力もまだ残っている様で、このままでは必殺技が不発に終わってしまう。

「まずい、力負けする:~!」

と、幻徳がみらいに力負けすると思っていた時、ライオン型の電撃がみらいの背中に当たった。みらいはライオン型の電撃を受けるのと共にその場に倒れて変身が解ける。

「はあ:~はあ:~。もう:~ダメルン」

みらいの背後にいたのはララだった。ララはみらいの攻撃を受けた後一度は意識を失ったが、何の力が働いたのか分からないが直ぐに意識を取り戻し、上下傷だらけで鉛の様に重い身体を動かしてプリキュアに変身してみらいにトドメの一撃を放った様だ。だが、みらいを倒した後、再び変身が解けてその場に倒れる。ついでに体に負担をかけすぎたせいでララは倒れた直後に吐血していた。

「女の子が倒れてる!? 万丈、みらいの事は任せた! 俺はあの女の子の為に救急車を呼ぶ!」

「分かった!」

万丈は幻徳にそう返事して、リコと共にみらいを朝日奈家へと運んでいくのだった。

「みらいは止まらなかった。まるで前の世界のハザードと同じだ:~」  
「いつか止めてあげないといけないわ。そうしなきゃまたこの街に被

害が…!」

「そうだな。……つてかことはは？」

「今日はおおぞら市の西部に行くつて言つてたけど？」

「ここつて……おおぞら市の西の方じゃねえか!」

「えっ!? だとしたらまだはーちゃんがここにいるの!」

「俺、ことは探してくる!!」

「頼んだわ!」

万丈はリコにみらいの事を頼んで、ことはを探す為に再度、みらいと戦った場所へ向かつていくのだった。

### 83. 近くなる、遠くなる

みらいが暴走した日の翌日、リコは自分の家ではなく、朝日奈家のみらいの部屋にいた。部屋のベッドには昨日から今に至るまで目を覚さないみらいが横になっている。

「はあ……結局はーちゃんは見つからなかったみたいだし、みらいも目を覚さないまま……。私はどうしたらいいんだろう?」

昨日の夜、万丈からことはいなかったとリコに連絡が入った。どこを探しても言葉の姿はないと。だが、万丈の言ったことの中である事がリコの脳内で引っかかる。

「へへことはどこにもいなかった。けど、あの場所から少し離れた場所に誰かの”赤い”血痕があった」

「……でも、あの子の腹部から流れていた血は赤色ではなく緑色。あの子の血痕ではないはず」

リコは一瞬だけその”赤い”血痕がララのものであるという可能性を考えるが、みらいとの戦いの場で見たララの姿を思い出し、それがララのものでないと思った。

「だとすると”赤い”血痕はやっぱり、はーちゃんのもの!」

よく考えた結果、リコは万丈の言っていた”赤い”血痕がことはのものであると断定する。そうと分かれば早速、ことはを探しに……。と思ったが、自分と万丈は子の世話や家事が忙しくてあまり他の事に手がつけられない状態。そこでリコは消去法である2人に捜索してもらおうことにした。

”消去法” ってなんだよ!?”消去法” って!!」

「えっ……いや、そんな事は言っていないんですが……」

「言っただけでも→の文に書いてあんだよ!脇役みたいな扱いはやめてくれよ……ってかヒゲも何とか言えよ!」

一海は自分達が消去法で最後まで残ったまるで脇役の様な扱いをされて不満に思い、幻徳からも何か言うように頼むが幻徳はそんな一海に対して”2枚目気取りの3枚目”というシャツを見せつける。

「……なんか”決まった!”みたいな顔してるけど、そのシャツは全然キマツてないからな。つてかお前、脇役超えてネタキャラのつもりかよ」

「脇役でもネタキャラでも何でもいいだろ。とにかく、今はことはちやんを探してつて頼まれてんだからことはちやん探しに行くぞ」

幻徳は脇役な扱いは気にしておらず、冷静にリコの頼みを受ける。

一海は幻徳のその対応に何か言いたげな顔をしながらも言うのを我慢して幻徳と同様にリコの頼みを受ける。

「んじや、探しに行くか」

一海はそう言ってみらいの部屋から出ていく。幻徳も少しの間を置いてから一海の後をついて行くのだった。

同時刻、戦兎は目を覚ます。戦兎は病室のベッドの隣にある椅子に座つて寝ているさんごの方を優しく揺らして起こそうとするが、中々起きない。まだあまり動く事が出来ない戦兎は寝ているさんごがいつ起きるかを見ていることにした。

「(こう見るとさんごの寝顔は可愛いな……つて何考えてんだ俺!)」

戦兎はさんごの優しい寝顔に惹かれてしまう。ハツと直ぐに我に返つて自分にはみらいがいるというのを思い出すが、それでも何故かさんごの優しい寝顔に惹かれてしまう。

「(寝顔を見て可愛いって思うなんて変だよな……でも、何故だろう? もっと近くで見たい。さんごの寝顔を)」

戦兎はベッドからゆつくり上体を起こし、両足をさんごの方に向けた後、少しだけ自分の顔をさんごの顔に近づける。

「(や、やべえ……何か吸い込まれてく感じがする。これ以上顔を近づけたら……!)」

戦兎とさんごの唇が密着しそうなくらいの時、寝ていたさんごが目を覚ます。

「えっ……うわあ!?せ、せせせ戦兎さん!」

「うお!すすす、すまん!!」

目を覚ましたさんごは戦兎が自分に顔を近づけてきていたので頬



を赤らめるのと同時に驚く。戦兎も顔を近づけている事がさんごにバレてしまい、ひたすら謝る。

「戦兎さん、今…私にキスしようとしてました？」

「いや、そんなつもりはなかったんだ！ただ…さんごの寝顔を近くで見たいなと思つてたら自然と顔を近づけてすぎていたというか…」

「まあ寝ている時の顔が可愛いとは友達によく言われますのであまり気にしないでくださいー！」

「そ、そうか。それよりそろそろ家に帰ったがいいんじゃないか？病院で1泊すると伝えたとはいえ、早めに帰って来ないと両親が心配するぞ？」

「あつ…そうですね…では、家に帰りますね！あつ、最後にこれだけさせてください」

さんごは通学用鞆を持って病室を出る前に戦兎の左頬に軽くキスをする。顔を真っ赤にしながらかう言う。

「戦兎さん、昨日は助けていただき本当にありがとうございます！またお見舞いにきますね!!」

「えつ。あつ、うん……」

さんごは病室から出て行った。さんごが帰った後、戦兎はさんごにキスをされた左頬を触りながら頬を少し赤らめるのだった。

ことはを探しを始めてから数時間、幻徳と一海はあちこちを探し回るがことはは中々見つからない。心身共に疲れてきていたり、他の用事があったりする関係で今日の搜索はここまでにしようかと考えていた時、2人の前に平均よりも背の高い黒いフード付きのローブを着た1人の女性が現れる。女性は杖を左手に、謎の書物を右手に持っていた。

「あなた達はこの人物を探しているのでしょうか？」

女性はそう言いながら、幻徳と一海の目の前にことはの姿を映す。

ことはは見覚えのない真っ白な空間で倒れていた。

「まさか、お前がことはちゃんを!？」

「違うわ。私はただ導いただけ。シャドウビルド様が望む世界を創る

ために……！」

「話の意味が分からねえがシヤドウビルドアイツの望む世界を創るとかいう下らない計画のために人をどこかに連れ去るとかやめた方がいいぜ？」

一海は謎の女性にそう言う。すると、謎の女性は主人であるシヤドウビルドを貶されて憤り、フードを脱いで鬼の形相で一海を睨む。

「へえ……主人様を貶されただけで戦う気満々かよ。それなら俺らも付き合つてやんねえとなあ！ヒゲ!!」

一海はそう言いながら幻徳と共にスクラツシユドライバーを腰に装着する。一海はロボットスクラツシユゼリーを、幻徳はクロコダイルクラックフルボトルをスクラツシユドライバーに装填し、ドライバーのレンチを下に倒して変身する。

『潰れる！流れる！溢れ出る！』

『割れる！壊れる！砕け散る！』

音声と共にビーカーが2人を包み込んでいき、潰したゼリーの液体が2人の入っているビーカーに溜まっていく。そしてビーカーの液体が溜まりきった所でビーカーがなくなり、溜まっていた液体が装甲として2人の身体に纏われていく。

『ロボット イン グリス！ブラア!!』

『クロコダイル イン ローグ！オーラア!!』

変身した2人はマクリーチエへ向かっていく。まず、マクリーチエに攻撃を仕掛けたのは幻徳。幻徳は脚の装甲に鋭い幾つもの歯を纏わせた状態でマクリーチエを何回も蹴り上げようとする。だが、マクリーチエは自分の前に防御壁を張り、幻徳の攻撃を防ぐ。

「シヤドウビルド様は私の希望……いや、全てだ!!」

「そこまでのヤシヤドウビルドツの事を崇めてるのか。気持ち悪いな」

「シヤドウビルド様は私の”孤独”を埋めてくれた……皆が死んでしまいい絶望していた私に手を差し伸べてくださったのだ！」

幻徳は諸悪の根源とされるシヤドウビルドの目的についてを探る為に戦いながらマクリーチエに質問をする。

「シヤドウビルドの目的は何なんだ？」

「この世界線を破壊する事だ」

「何だと!？」

「……創り続けられない限り破壊が続いていく。計画は既にその段階まできている……あとは桐生戦兎が持つオルテガの力を奪うだけ」

このタイミングでマクリーチエは幻徳に槍状の追尾弾を放つ。幻徳はネビュラスチームガンで追尾弾を撃ち落とし、再びマクリーチエに近づく。

「オルテガだと?」

「オルテガは不死の力……いや、正確には不老不死やあらゆる物理法則を無視できるような力だ。オルテガの力を持っている証拠として今、オルテガの力を持つ桐生戦兎は歳をとっていない」

「…!？」

「エンドマトリアルは暴走や人格を改変する作用を持つ。アルテミストリガーに”微量にエンドマトリアルが含まれているから万丈はその影響を受けた”これは分かる。だが、ジエネシスマテリアルを発見した……いや、創った桐生戦兎はジエネシスマテリアルを創った時にエンドマトリアルの影響をもろに受けたはずなのに何事もなかったかのように今を生きている……オルテガの力とは脅威であり、我々の目的を果たす為に必須な物なのだ」

「……………」

何かしらの影響を受けなかったり物理法則を無視できるのも中々だが、1番は歳を取らない事だ。歳を取らないというのは羨ましい事かもしれないが瞬間瞬間を必死に生きる幻徳、一海や他の仮面ライダー達にとっては残酷な事である。マクリーチエの話聞いた2人は何も言えずにその場に立ち尽くす。2人は残酷な状況に置かれた戦兎に今後、どう接してあげればいいのかを考えていた。

「オルテガをこちらに渡せば桐生戦兎はその力から解放される……お前達も私の話で戦意喪失みたいだし、今回はこの私の広い器に免じて見逃してやる。次に会う時までオルテガを渡すかどうかを考えておけ」

マクリーチエはそう言ってどこかへと姿を消していく。2人はマクリーチエが去った後も全体が雲に包まれた黄昏時の空の下で立ち

尽くしていた。マクリーチエから聞いた戦兔の話は幻徳と一海の2  
人がことはを助けるといふ目的を忘れるくらいに強烈なものだった  
……

## 84. 運命の分岐点（ターニングポイント） part

1

ことははイノウという男に鍛えてもらっていた。暴走した友を止められない、何も変えられないといった不甲斐なさを拭うために。

「ハザードレベル4. 0。まだまだ、強くなる為にはもつとハザードレベルを上げなくてはいけない」

「ハザードレベル？」

「ネビュラガスへの耐久力だ」

「ネビュラガス？そんなもの浴びた覚えは…」

「気を失っている間に浴びせておいた」

「なんて事を…！」

「強くなって不甲斐ない自分を変えるんだろ？」

「……………」

イノウはことはにそう言う。ことはは今回の件で前まではあまり気にしていなかった”力”というものに過剰に反応するようになっていた。

「で、ハザードレベルがいくつになるまでこの特訓を続けるんです？」

「……………今はとりあえず5. 0を目指せ。特訓の先の事は5. 0になってから考えろ」

「はあ……………」

ことははイノウの言葉に対し煩わしいという意味を込めたため息をつきながらも変身状態を保ったまま特訓を再開するのだった。

その頃、幻徳と一海は自分の家に帰ろうと帰路に就く。頭の中は戦兎の事でいっぱいだった。

「なあ、戦兎の件…どうする？」

「どうするって言われても不老不死をなんとかするなんて俺たちには無理だ」

まだ戦兔をどうにかして”普通”に戻せる方法を考えている幻徳に対して不老不死という物理法則では理解できないような事をどうかするなんて無理だと諦めている一海、いつもは息の合う2人が今回ばかりは考えが真逆のようだ。

と、賑やかな公園の中でシリアスな空気を放つ2人は自分達の車に乗り込もうとするが、一海が乗り込み、幻徳も乗ろうとした瞬間どこからか声がした。

「おーい！ちよつと待ってくれよー!!」

青年はそう言いながらライドビルダーを幻徳の車の近くに停めて2人の近くに歩み寄る。

「あんた達、戦兔の知り合いだろ？」

「そうだが何か？」

「戦兔が今どこにいるか分からないか？」

「今はワケあつて入院している」

「はあ!?昨日から今日の間でアイツの身に何が起きたんだ？まさか、また怪物騒ぎか!?!」

「……とにかく、戦兔に会いたいならこの近くの病院へ行け」

「分かった。あつ、あとことはに怪我が完治したらどこか遊びに行こうって伝えておいてくれ!」

「生憎だが、今、ことはちゃんはいないぞ」

「いないって……あんた達、今日の早朝にことはを助けてただろ？ここら辺、俺の朝のランニングコースだから見たぞ」

「俺とポテトは助けてない……って事はことはちゃんは誰かに誘拐された!?!」

「ええー!?!」

「ことはちゃんに関する情報をありがとう。おかげで本来の目的を思いだせた」

戦兔の事で頭がいっぱいだつた幻徳だったが、大野壮太から”ことは”というワードとことはの行方に関する情報を聞いて本来の自分の目的を思い出す。幻徳は急いで運転席に乗り、そのまま猛スピードで車を走らせていった。そのあまりのスピード感に大野壮太はつ

いていけずに置いていかれた。大野壮太はフルフェイスヘルメットを被りながら猛スピードで去っていった幻徳達にこう言った。

「……………人助けする前に捕まんじゃねーぞ」

一方、朝日奈家ではみらいが目を覚ました。みらいは暴走時のようなギロつとした目つきはしておらず、リコは”今のみらいは落ち着いた状態である”と判断し、安心する。

「あれ…？私、何で自分のベッドに？」

「ふふっ…やっど起きたのね。みらいが寝坊だなんて久しぶりだわ」

「寝坊…？じゃあ、私が誰かを襲ったりしてたのは…夢？」

「あらあら、最近勉強のし過ぎで変な夢でも見たのかしら？待ってて、みらいの為に何か作ってくるわ！」

リコは今回、みらいが”自身が暴走した事”についてまた色々抱え込まぬよう今回”暴走した事”については夢であると思わせるような言葉を選んでみらいと話す。その後、みらいの為に何か料理を作り、下の階へと降りていく。

「夢でよかったあ…あつ、そういえば戦兎は今どうしてるんだらう？」

電話はかけてみよつと！」

人を襲ったというのが夢だとわかったみらいは安堵する。みらいはいつものように戦兎に電話をかける。

……

……………

おかけになった電話をお呼びしましたがお出になりません

「あれ、電話に出ない。いつもなら出てくれるのに…さては、スマホの電源オフにしてるな？」

みらいは電話に出ない戦兎に少し不安を感じながらも再びベッドに横になった。と、ここで背中に痛みを感じた。何かと思いながら背中を触ってみると3本の直線状の傷があった。恐らく引っ掻き傷で

あろう。この傷があると分かったみらいは先程の夢だと思っていた事が全て”実際に起きた出来事”であるという可能性を考えてしま

う。

「まっ、まさかね！そんなわけない…よね…？」

可能性を考えれば考える程みらいは不安になっていく。いつもは持ち前の明るさでやり過ぎすみらいだが、最近の精神的な状態のせいかやり過ぎす事ができないようだ。

「みらい〜！今日はマカロニグラタンよく冷めちやうから早く降りてきてよね！」

「分かったよ！リコ、ありがとう！」

リコの”料理が出来た”という一言によってみらいは一時的に”さっきの事”についてを忘れる事が出来た。いつまで忘れた状態が続くかは分からないが、そのうちまた思い出すのだろう。

そして病院のベッドで横になっている戦兎は昨日から今日まで病室のベッドにいて気づいた事があった。それは自分の傷が約1日ではほぼ完治していることだ。

「ありえない…こんなにも早く傷が治るなんて……」

戦兎は自分の傷の治り具合に驚くと同時にみらいの事が心配で外泊の許可を取って朝日奈家へ帰ろうとする。病院の入り口から出ようとした時、さんがが病院の入り口前にいたのが見えた。

「戦兎さん!? 傷が深いんですからまだ出歩くのはダメですよ！」

「それがね、不思議なことに治ったんだよ。この1日で」

「ええ!? じゃあ、もう退院…?」

「いや、念のためもう少しだけ入院する。けど、今日は外泊の許可を取ったから家に帰るつもりだ」

「そうなんですか…あつ、なら私の家に来てください！」

「何でだ？」

「お礼がしたいんです！」

「お礼なら昨日…」

「いいから早く！」



俺はさんごの勢いに流されるまま涼村家へと向かっていくのだった。病院から少し歩いて涼村家に着いた。玄関の扉を開けるとそこにはさんごの母親がいた。

「おかえりなさい……ってさんご、この方は？」

「私を変な人から助けてくれた恩人さんだよ！」

「あら、そうなの！」

さんごの母親はさんごから戦兔がさんごを助けたと聞き、そのお礼をする為に戦兔を家へ上げる。

「お、お邪魔しま〜す……」

「戦兔さん！私の部屋に来てください！」

戦兔は頭の中で今頃、みらいはどうしているのかな……と考えながら涼村家へ上がる。家へ上がると早速、さんごの部屋に招かれた。

「ささ、入ってください！」

「え、えつと……入っていいの？」

みらいという可愛い彼女がいるにも関わらず他の女の子の部屋に入るのにはや裏切り行為だと感じ、中々部屋の中への一步を踏み出せない。さんごは困惑している戦兔の右腕を引っ張り戦兔を無理やり自分の部屋の中へと入れる。

「戦兔さんって女の子部屋入った事ないんですか？」

「ふつ、普通は入らんだろ!!……まあ、みらいの部屋には入るが」

「なるほど……みらいさんって昨日、暴れていたあの狂気じみた魔法使いですよね？」

「そうだな。普段はあんな感じじゃないんだがな」

「みらいさんは嫉妬でああなっている可能性が高いですね。大事な戦兔さんと一緒にいた私を邪魔者扱いしてましたし」

「みらいが暴走する原因は俺が他の女の子と一緒にいるからか……なら、もつとみらいと一緒にいてあげないと……！」

「……一緒にいてはダメです」

「何で……？」

「みらいさんが戦兔さんに執着してしまい、今度は私ではなく戦兔さんの命が危なくなるからです」

「執着…!?それってもう…」

「ヤンデレですね。ヤンデレになったら戦兔さんが見知らぬ女の子とすれ違うだけでも昨日みたいな暴走状態になってしまおうでしょう…」  
「そうか…狂愛<sup>ヤンデレ</sup>か。確かに愛が重ければ重いほど嫉妬も比例して増してくもんな…じゃあ、少しの間だけみらいに会わないようにしてみるか」

「そこでなんですが、よかったら少しの間だけ私の家に泊まりませんか…?」

戦兔がみらいに悪影響を及ぼさないよう敢えてみらいとの距離を取る決断をした瞬間、さんごが少しの間だけ自分の家に泊まらないか?と提案してくる。

「まさか、俺を泊まらせる為にこの話を?」

「半分はそうかもしれないですが、もう半分は話した通りみらいさんに悪影響を及ぼさない様にです!」

「半分はそう考えてたと認めるのね。…まあ、泊まらせてもらうのも悪くはないな」

「よし、そうと決まれば早速、お風呂に入りましょう!!」

「何故、そうなる!?!」

「時間的にも今が入る頃だと思って…」

「いや、昨日会ったばかりの奴と入るなんておかしいぞ!!?」

「いいじゃないですか!…それともダメ…?」

さんごはそう言いながらうるとした目つきで戦兔を見る。戦兔はさんごの可愛い顔に負け、一緒にお風呂に入る事にした。

「…入るけども、お風呂入る時は全身にタオルを巻けよ?」

「分かってます!」

「んじゃ、入ってるから少ししたら入って来いよ」

「はい!」

戦兔はさんごにそう言い、自分も腰にタオルを巻いてお風呂へ入っていく。戦兔が入ってから数分後にさんごもお風呂へと入ってくる。

「戦兔さん、背中流しましょうか?」

「いや、結構だ。自分で洗える」

戦兎はギリギリの理性を保ちながら体を洗い、湯船へと浸かる。湯船に浸かり、横を見るとそこには自分の髪を洗うさんがいる。戦兎の視線がさんごの少し膨らんだ胸元にいくがすぐに目を瞑り、瞑想する。

「もうっ…戦兎さんのえっち…／＼／」

「理性、理性理性理性!!」

色っぽい声を出してイジってくるさんごに対し戦兎は理性を保つ為に理性という単語を連呼していた。

「(抑えろ…抑えるんだ俺!)」

理性がピンチな戦兎…戦兎は風呂以外にもあるであろう色仕掛けを乗り越え、無事に一夜を過ごす事が出来るのだろうか…!?

85. 運命の分岐点（ターニングポイント） part 2

戦兔がさんごの色仕掛けを乗り越えて今夜を無事に過ごさないと戦兔とみらいの運命が変わってしまう。まさに今が運命の分岐点だ。ターニングポイント

「では、私も入りますね…」

「おっ、おう…」

身体や髪を洗い終えたさんごは戦兔が入っていて既に狭くなっている湯船に浸かる。戦兔とさんごはほぼ密着状態だ。

「なあ…わざとらしく自分の胸を俺の腕に当てるのやめてくれないか？」

「わざとじゃないですよ！お風呂が狭いから当たっちゃうんですよ」

「まあいい。俺はもう出るぞ」

「まだ出ないでください!!？」

さんごはそう言いながら、戦兔の片腕に抱きつく。それと同時に何かが水面に当たる音がした。恐らくこの音はさんごの巻いていたタオルが落ちた音だろう。証拠に戦兔の腕には胸の突起のようなものが直に当たっている。

「もう少しだけ…戦兔さんと湯船に浸かっていたいです」

「…俺に大事な人がいなかったらもう少しだけお前と風呂に入っていたかもな」

戦兔はこんな危機的状況でも自分の隣にはみらいがいる事を忘れておらず、今回もさんごではなくみらいを選ぶのだった。

戦兔はさんごの手を振り払って風呂場から出て行く。風呂場から出て行く戦兔の背中を見ているさんごはとても悲しげな顔をしていた。

そして部屋に着いた戦兔はみらいに連絡する為に自身のスマホをズボンのポケットから出すのだが”ここにいる理由”を思い出し、出

したスマホをズボンのポケットへしまおう。

「……嫉妬か。嫉妬するのはみらいだけが原因じゃないはずだよな……多分、俺にも原因がある。さんごはみらいと一緒にいると危ないと言うがそれは間違ってる。本当は一緒にいてあげた方がいいのかもしれない」

戦兎の脳裏に浮かぶのはいつでもどんな時でも笑顔で自分を見ているみらいの姿。ここで戦兎は今夜だけ泊まり、明日、津成木町の外れにある静かな丘の上でみらいと2人きりで過ごすと決める。そうと決まれば早速、ズボンのポケットにしまったスマホを再び取り出してみらいに連絡をする。

出ない……

いつものみらいなら2コールしないうちに出るのだが、今回は何コールしても出る気配がない。文面で伝えるよりも口で伝えた方が良かったのだが、みらいが電話に出てくれないので戦兎は仕方なくラインでメッセージを送る事にした。

みらいにメッセージを送った戦兎はさんごの部屋へと向かう。

さんごの部屋に入ると、部屋の中には黄緑色のうさぎのぬいぐるみを抱きながら窓の外に広がる星の無い夜空を眺めるさんごがいた。

「…戦兎さんって本当にみらいさんを愛しているんですね？」

「ああ、愛してるさ」

「じゃあ、なぜみらいさんは嫉妬を抑えきれずに暴走してしまうんですか？」

「分らない…みらいの隣を歩く時に顔を見るが、みらいはいつもの時も笑顔なんだ」

「そう…ですか。愛してるのに気付かないんですね」

「どういう意味だ？」

さんごは戦兎の答えを聞いて少しガツカリしたのか軽くため息を

つく。そして部屋のカーテンを閉めて戦兔の方へ歩いてくる。

「戦兔さんのみらいさんに対する愛は自分的には“厚い”のかもしれない。けど、実際は“薄い”ですよ」

「そんな訳ないだろ!!?」

「だったら!!?...だったら何でみらいさんの心の状態に気づいてあげられないんですか!!?...みらいさんは今、戦兔さんが思う以上に心に不安や悲しみを背負ってます。...だから、ちゃんとみらいさんと向き合ってあげてください。そうすればきつとみらいさんは暴走しなくなります」

「.....」

戦兔は自分がちゃんとみらいと向き合えていないんだとここでもうやく自覚する。

「戦兔さん、明日私と一緒にみらいさんの元へ行きましょう」

「...分かった」

戦兔は何かを決心したかのような表情でさんごの言葉に返事をする。そしてその後、部屋の床に敷かれた敷布団に入り、眠りにつくのだった...

そして次の日、みらいから”10時に津成木町外れの丘に集合しよう”というメッセージが送られてきていた。現在は午前9時ピツタリだ。今出れば余裕もって目的地に着くだろう。

「俺とみらいの手助けなんかして良かったのか?」

「良かったですよ。...私の戦兔さんに対する気持ちは変わりませんが、戦兔さんとみらいさんの関係が少し悪くなっているその際を突いて戦兔さんを盗ってしまうのは良くないと思ったんです」

「なるほど.....」

「まあ、あまり時間ないですし、そろそろ行きましようか」

「そうだな」

そして戦兎とさんごは集合場所へ向けて歩き出した……

## 86. 俺と私の未来

さんごの家からしばらく歩いて集合場所である”津成木町外れの丘”に着いた。現在は9時48分、みらいはまだいない。

数分後、みらいが戦兎達とは反対の方から歩いてくる。俺の横にさんごがいるのを見たみらいは驚くような顔をしていた。明日は二人きりで過ごそうと戦兎から聞いていたので驚くのも無理はない。

「戦兎……」

みらいは悲しげな表情を浮かべている。だが、その瞳には”哀愁”というのではなく鬼が宿っていた。そして数秒間下を向くみらい。次に顔を上げた時には悲しげな表情が鬼の形相へと変わっていた。

みらいの怒りや憎しみに反応した鬼石がみらいを真つ赤な炎で包んでいき、キュアマミラクル インフェルノスタイルへと変身させる。

「みらい、今までお前とちゃんと向き合ってやれてなくてごめん」

「今の私に謝っても無駄だよオ？」

「今のお前に謝らなきゃいけないんだ。だって、その暴走した姿はみらいの心の内に隠れた本当の気持ち表に現れた姿なんだから」

「はア？」

「表ではいつも明るいから分かってやれなかった、気付いてやれなかった…だからこそみらいとちゃんと向き合う、その証明を今からする」

戦兎はそう言いながら、タカフルボトルとガトリングフルボトルを取り出し、上下に軽く振ってキャップの位置を合わせてからドライバーに2つのフルボトルを装填する。

『タカ！ガトリング！』

『best match!』

ドライバーからの音声が鳴り響いた後、戦兎はビルドドライバーのレバーを勢いよく回す。

『Are you ready?』

「変身！」



レバーを回すと、前方と後方にスナッププライドビルダーが現れる。戦兎は変身！という声を掛けた後、スナッププライドビルダーに挟まれて変身する。

『天空の暴れん坊ー！ホークガトリング！イエーイ！』

戦兎はホークガトリングガンを片手に持ち、みらいへと向かっている。みらいは巨大な炎の剣を生成し、両手に持って向かってくる戦兎を迎えうつ。

戦兎はみらいに近づくが、攻撃をせずにみらいの周りを高速で飛び回り、竜巻を創り出してみらいを高い場所まで吹き飛ばす。

「何のつもり!?？」

「みらい…俺と初めて出会った時の事を覚えてるか？みらいが腹へつた俺にいちごメロンパンくれたよな！」

「グツ…そんなことは知らない」

「味の感想言えてなかったから今言わせてくれ。すげー美味しかった!!?？」

「…!?？」

戦兎は空中で攻撃を受け止めながらみらいに語りかける。みらいは戦兎の言葉を聞いて少し動揺する。

「あと、初めて二人で遊園地に行った日のことは覚えてるか？」

戦兎はそう言いながらみらいの腕を掴んで地面へ向けて投げ飛ばす。投げ飛ばした後、みらいが地面に叩きつけられるよりも先にみらいの下へ行き、みらいを受け止める。

「みらいがジェットコースターから投げ飛ばされた時、こうやって助けたんだぞ？あの日は今までの中で1、2を争うくらい最高の日だったなあ…」

「…うう…!!?？」

みらいはだんだんと正気を取り戻してきている様子だ。それを見

た戦兎はもう一押しだと思った。タカフルボトルとガトリングフルボトルを外し、ラビットフルボトルとタンクフルボトルをベルトに装填する。

『ラビット！タンク！』

『best match!』

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

ラビットタンクフォームにフォームチェンジした戦兎はドライバーのレバーを回して必殺技を発動させる。

『Ready go!』

『ボルテックフィニッシュ！イエーイ！』

必殺技を発動させた戦兎はその場で高く跳び上がり、みらいへ向けて急降下していくが、ライダーキックの威力を弱めるためにみらいの周囲をぐるりと何周か回り、距離を稼いでからみらいの腹部にライダーキックを決める。

戦兎がライダーキックを弱めたおかげかみらいは吹っ飛ばされることなくその場に片膝をつくくらいのダメージで済む。

「そんな法則破りの必殺技で……私を……倒すことなんて出来ない!!」

「みらいを倒すつもりはない。俺はみらいに愛を伝えるつもりで必殺技を放ったんだ……愛を伝えるのに法則なんてない」

「……うぐつ……なつ、なんなの!??私の変身が!!?」

身体にはあまりダメージを受けずとも蝕まれた精神には大ダメージだったようで見らいは段々と元のキュアマミラクルへと戻っていく。証拠に右の瞳だけ紅色から紫色に変わっている。

「……これで終わりだ」

戦兎はそう言いながらドライバーから2本のフルボトルを抜いて変身を解き、みらいの元へ歩いていく。

そして充分にみらいとの距離を詰めた所で左手でみらいの後頭部に触れてその左手を自分の顔に引き寄せる。戦兎はみらいの唇に自分の唇を当てた。みらいが引き剥がさないように後頭部にある左手に力を入れる。

最初の1、2秒あたりくらいは抵抗していたみらいだったがそれ以降は自我を取り戻したのか戦兎の背中に両腕を回し、戦兎からのキスを受け入れる。

「戦兎、ありがとう……！」

戦兎との数秒間のキスを交わした後、みらいはその場にゆっくりと背中から倒れるが、地面に身体全体を打つ寸前の所で戦兎がみらいを抱き抱える。

そして戦兎はみらいを抱き抱えたままさんごの方を向いてさんごへこう言った。

「……世話になったな」

「良かったですね……みらいさんと仲直り出来て」

「……そうだな」

さんごは何もないような顔でそう戦兎に言うが表情には複雑な気持ちを感じさせるような“何か”があった。戦兎はさんごにみらいとの関係の修復・進展についての感謝も伝えるつもりだったが“何か”を察して敢えて言わずにこの場を去るのだった。

戦兎は朝日奈家に帰る前に津成木町を一望できるスポットへ行つて遅めの朝日に照らされた津成木町を見ながらこう言う。

「俺達の未来はきつと輝かしいものになる」

これにて2人のこの章での物語は終わりを告げるのだった……

一方の一海と幻徳はこの日もことはの搜索をしていた。半ば諦めかけている2人だったが、そんな2人の元に驚きの知らせが入る。

「リコから電話だ」

「リコ、いきなり電話かけてきてどうした？」

「2人とも早く魔法界へ向かってちょうだい！」

「なっ、何だ？何でそんなに慌ててるんだ!!？」

「魔法界の街の広場に謎の穴が出現したのよ!!？」

「…その穴をくぐればことはがいる場所に行けるかもって事だろ？一か八かだけど行ってやるよ」

「ありがとう!!？それじゃ私は育児に戻るわ！」

一海は電話を切ったあと、リコと話した内容を幻徳に伝える。それを聞いた幻徳は車をフルスピードで津成木市へ向けて走らせていくのだった……

## 87. ことはが手にした力 part 1

車を走らせる事数十分、津成木町の駅に着いた幻徳と一海は特殊なパスを使って魔法界行きの駅に行つてカタツムリニアに乗車し、魔法界へと向かう。

その頃、イノウに鍛えられていることはは遂にイノウが示した目標のハザードレベル5・0に到達していた。

「ハザードレベル5・0：やはり神の体を持つ者は成長具合が他のものとは違うようだなあ」

「はあ：はあ：ハザードレベルが何だか分かりませんがもう目標に到達したのなら終わりにしてここから出してくれませんか？」

「無理だ。と言いたいところだが俺もお前に付き合い過ぎてこの結界に穴ができてしまうくらいまで疲労が溜まっているようだ…」

「何故、初対面の私にここまで付き合うの？」

「：なんとなくだ」

「なんとなく：？」

「おっと、何かがこちらへ近づいてくるみたいだ：何やら面倒な気配がするから俺はここらで退散させてもらおうとしよう…」

イノウは何者かがことはに近づいてきている事だけを言つて結界を解くのと共にどこかへ去っていった。結界が解けて言葉が辺りを見回してみるとそこは魔法界の広場だった。

何かが近づいている：イノウはそう言っていた。イノウのその言葉が気になったことはあたりを見回す。自分の正面斜め上辺りにマクリーチエがいた。

「あなたは：：？」

「私はマクリーチエ。あなたではなくあなたのお仲間<sup>①</sup>に用があつてここに来た」

「用つて：？」

「それはあなたには教えられない…」

ことはがマクリーチエの言葉の意味を考えるとマクリーチエの言う“あなたのお仲間”がやって来た。

「ことはちゃん!!?」

「一海さん、幻徳さん!?!?何故ここへ?」

「ことはちゃんを助けに来たんだよ!…ってかまたお前か」

一海はそう言いながらマクリーチェに対して嫌な眼差しを向ける。

一海は戦兎についての話をマクリーチェからされてからマクリーチェに精神面での苦手意識を持っている。

「おい、ここで奴を倒すぞ」

「…いや、それはちよつと」

「何だど?いつものお前らしくない」

幻徳が一海と共にマクリーチェと戦おうと誘うが一海はあまり戦う気になれないらしい。

「…まあいいひとまず目的は果たせた…帰るか」

幻徳はことはの手を取り自分の方へ引つ張ってから持っていたトランスチームガンを使って自分達の正面に煙を起こして2人と共に立ち去っていく。

「…逃げてもタイムリミットは刻々と終わりへ近づいていく」

マクリーチェは3人が去った後にそう言い、自身も姿を粒子へと変えてどこかへと消えていく。

「おい、何故戦おうとしなかった?倒したらまずい敵か?」

「いや、倒して問題はない…けどな…ヤツの顔を見ると前に聞いた話を思い出しちまう、それでこう思っちまう…」オルテガの力を渡せば戦兎は不老不死なんかから解放される」と

「確かに俺もそうは思う…けど、戦兎がこの残酷な運命から逃れる方法は他にもきつとあるはずだ」

「……わかった。そこまで言うなら俺も少しは抗う…けどな、方法がいつになっても見つからないようだったらその時は素直に”オルテガの力”を手渡そう。どんなにアイツらに<sup>戦兎達</sup>反対されようが」

「……分かった」

2人はオルテガの件についてはそう決める。話を終えて2人はことはの元へ駆け寄る。

「ことはちゃん!無事だったか?」

「う…うん、私は無事だよ」

「よかった…：そんじや皆、心配してることだし帰るぞ」

3人はまた厄介な事が起きても困ると思いい、急ぎ足でナシマホウ界へと帰って行く。

ナシマホウ界へ帰った後はことはを朝日奈家の前まで何事もなく無事に送り届けた。

「はーちゃん!?？大丈夫なの？怪我は!?？」

「大丈夫だよ！…：ほら、この通りに傷一つないよ！」

「嘘っ…：少しもない間に一体何が…？」

血痕を頼りにことはを探し、見つけて救出するまでに至ったので短期間いなかったとはいえ、ことはの身体に傷一つもないのはおかしいと感じるリコだが、何かこれ以上は聞いたらまずいと思いい、敢えて深くは聞かないことにした。

「ただいま！」

「ことは！怪我はないか!?？」

「大丈夫、この通り無傷だよ！」

「そっ…：そうか。なら、よかった…：…」

戦兔はことはの体のどこにも傷がないのを確認し、安心するのだが同時に何故、ことはは怪我をしていないのだろうか？という疑問が浮かぶ。確かにあの時、戦兔は横目で倒れていることはを見た。

「なあ、誰に助けてもらったんだ？」

「えつと…：???つて人に助けてもらったんだよ！」

「ん…：？」

今、ことはが自分を助けてくれた人の名前を言う一瞬だけ目の瞳が赤く染まり、その名前もぼかされた感じがしてよく聞き取れなかった。

「…：まあ、いいか」

「どうしたの？」

「いや、何でもない！それより、先に風呂入っていいぞ！」

「分かった！」

戦兎はことはを風呂場へと向かわせた後、地下の自分の部屋へ戻って椅子に座りことはの身に起きている事態について考えるのであった。

「いてっー!」

一方、風呂場へと向かったことはは廊下に落ちていた画鋏に気づかずそれを踏んでしまう。

「痛いよ………ってあれ?」

ことはは痛みに耐えながらも画鋏を抜く。足裏の画鋏を抜いた箇所からは血が流れている……が、少しすると血が止まり傷口も塞がった。

「えっ……なんで!? 私の身体、どうかしちゃったの?」

ことはは自分の体の変化に気づく。焦ることはは風呂に入るのをやめて戦兎の元へと向かっていくのだった……

傷が癒えるスピードが速い点がオルテガと似ているが果たしてことはの身に変化を起こしているのは何なのだろうか……?